太宰府市の文化財第90集

大宰府条坊跡32

―般若寺跡周辺の調査―

84SK014上層出土瓦

平成19年

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財第90集

大宰府条坊跡32

―大宰府条坊跡第63・84・96・110・231次調査―
―般若寺跡第4-2次調査　他―

平成19年

太宰府市教育委員会

本報告調査区周辺の空中写真（合成写真　上が北）

大宰府条坊跡第84次調査出土　軒瓦

序

本書は、大宰府条坊跡の中でも中央東寄りに位置する古代寺院般若寺跡に関する埋蔵文化財発掘調査報告書です。

聖徳太子の事績を記す『上宮聖徳法王帝説』という古文書の裏書には、蘇我日向が筑紫大宰帥の時、時の孝徳天皇のために般若寺を建てたことが記されています。今回報告する地点でも般若寺という小字名と、塔跡の存在が古くから知られており、蘇我日向が建てた般若寺と関連が深いと考えられています。

本報告書は般若寺寺域内と推定される一帯で、これまで当市教育委員会が行った発掘調査等をまとめたものです。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成19年３月

太宰府市教育委員会

教育長　關 敏治

例言

1. 太宰府市朱雀２丁目にて実施した、大宰府条坊跡第63・84・96・110・231次調査、また般若寺塔跡周辺において工事立会の際の調査（般若寺跡第4-2次調査、他）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査経緯等については、各報告冒頭に記す。
3. 調査は、第63次調査は山本信夫（現、山本文化財研究所）、狭川真一（現、（財）元興寺文化財研究所）・緒方俊輔（現、高千穂町教育委員会）が、第84次調査は狭川・緒方が、第96次および第110次調査は城戸康利が、第231次調査は井上信正が、般若寺跡第4-2次調査は狭川が担当した。
4. 測量は、第63・84次調査を狭川・中島恒次郎が、第96次調査を城戸が、第110次調査を城戸・中島が、第231次を井上・森若知子が、般若寺跡第4-2次調査は狭川が行った。
5. 遺構実測図および遺構配置図は、全て国土調査法第II座標系（旧日本座標系）を基準としている。したがって、図中に記載される方位は、特に注記のない限り座標北（G.N.）を指している。
6. 遺構実測図作成および個別写真撮影は、以下の者が行った。
7. 空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表　檀睦夫）が行った。
8. 整理は、第63次は中島・下高大輔が、第84次調査は中島が、第96次および第110次調査は下高大輔が、第231次他は井上が担当した。
9. 遺物実測は、森部順子、久家春美、木戸雅美、福井円、久味木理恵、下高大輔、狭川、井上が行った。
10. 浄書は、森部、久家、福井、下高が行った。また一部の図版についてはIllustrator（Adobe社）を使用してデジタルトレースを行った。これについては、井上、森若、中島、久味木が行った。
11. 全ての遺構全体図についてはAutoCAD（Autodesk社）を使用してスキャニングした原図を1/1に引き延ばし、デジタルトレースした。また般若寺跡第２・３・４次調査の遺構全体図についても、調査を行った九州歴史資料館より実測原図を借用し、同様にデジタルトレースした。各座標・方位計測はこれを元にCAD上で行った。これらの作業を井上が行った。
12. 遺構写真撮影は、各担当者が行った。遺物の写真撮影は、（有）文化財写真工房（代表　岡紀久夫）が行った。
13. 巻頭の空中写真の合成は、（有）空中写真企画（代表　檀　睦夫）が行った。また般若寺跡の古写真（昭和33年６月22日撮影）掲載にあたっては撮影者の小田富士雄氏に快諾いただいた。記して感謝いたします。
14. 本書に使用した分類は、基本的に以下のものによっている。

    土器　『大宰府条坊跡II』太宰府市の文化財第７集　太宰府市教育委員会　1983年
    『宮ノ本遺跡II―窯跡編―』　太宰府市の文化財第10集　太宰府市教育委員会　1992年
    陶磁器　『大宰府条坊跡XV―陶磁器分類編―』太宰府市の文化財第49集
    太宰府市教育委員会　2000年
    瓦　『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館　2000年
15. 出土した金属製品の応急処置は、第63・84次を狭川麻子が、第231次を下川可容子が担当した。
16. 第110次調査の自然科学分析は、（株）京都フィッション・トラックが行った。尚、本書の体裁に整えるため、内容を損なわないよう一部編集した。
17. 第231次調査においては、小田富士雄氏（福岡大学名誉教授）、渡辺正気氏（元福岡県教委）、高倉洋彰氏（西南学院大学教授）の各氏に、現地にてご指導・ご教示をいただいた。また第84次調査出

土瓦の整理においては、小田富士雄氏、狭川真一氏（(財）元興寺文化財研究所)、伊藤敬太郎氏（(株）国際航業）にご指導・ご教示をいただいた。

18. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお報告の中では、内容が明らかなものについて、その遺跡名・調査次数を略するものもある。

条　63　ST　001

遺跡名　調査次数　遺構種別　遺構番号

条　……　大宰府条坊跡
般　……　般若寺跡

19. 本書の執筆担当については、目次および各報告末尾に記す。尚、編集は井上信正が行った。

20. 出土遺物および図面、写真、デジタルデータ等の記録類は、太宰府市教育委員会が保管している。

目次

Ⅰ．地理・歴史的環境および調査歴
……(中島恒次郎）2

Ⅱ．調査組織　……(井上信正）4

Ⅲ．各調査の概要

Ⅲ-1．第63次調査
本文　……(遺物執筆：下高大輔、他執筆：中島恒次郎）9
付表　……19

Ⅲ-2．第84次調査
本文　……(中島恒次郎）25
付表　……68

Ⅲ-3．第96次調査
本文　……(下高大輔）79
付表　……84

Ⅲ-4．第110次調査
本文　……(分析：(株)京都フィッション･トラック、他執筆：下高大輔）85
付表　……91

Ⅲ-5．第231次調査
本文 ……（井上信正） 97
付表 ……119

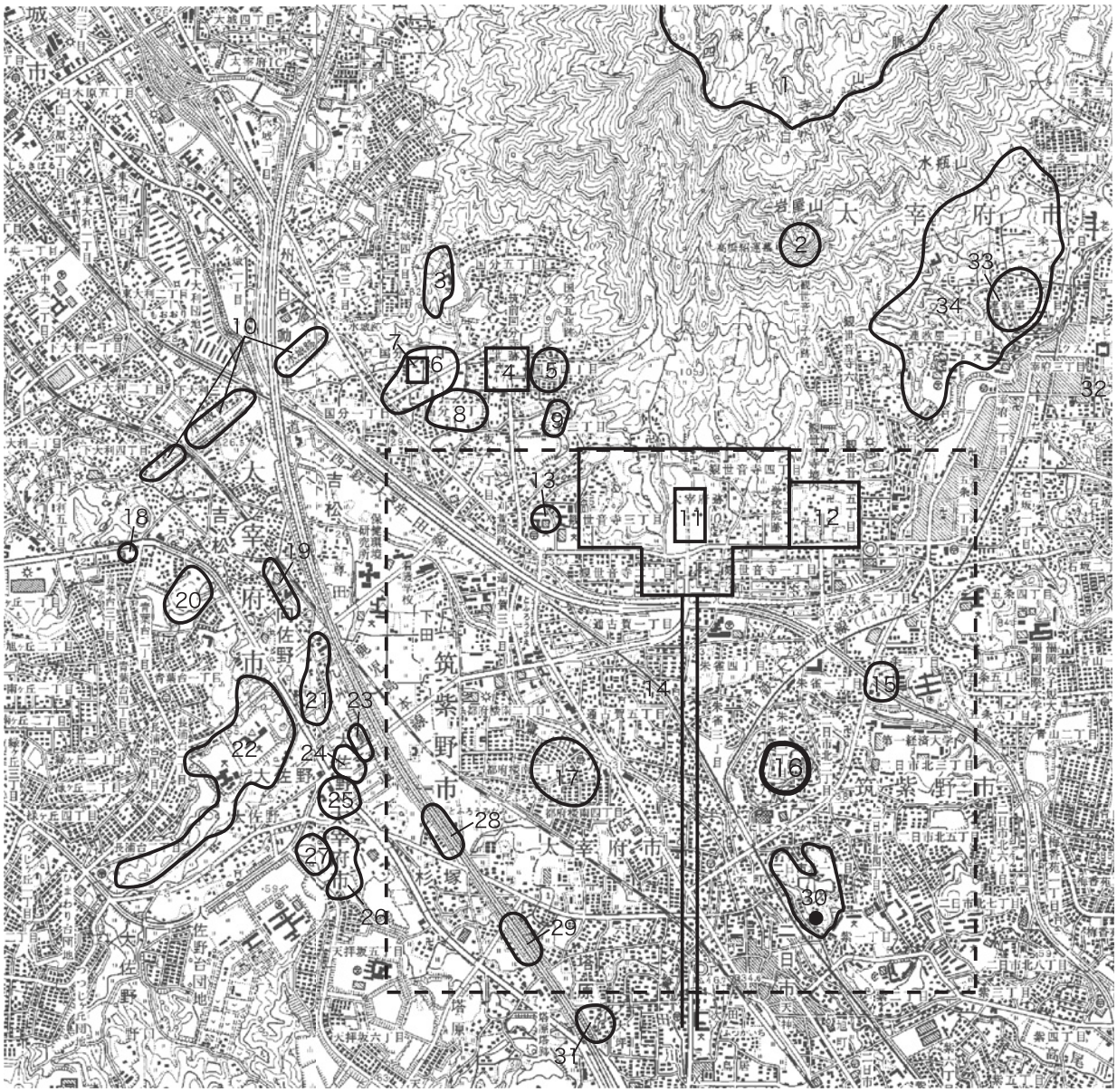
Ⅲ-6．般若寺跡第4-2次調査 ……（井上信正） 123

Ⅲ-7．塔基壇西南出土の遺物 ……（井上信正） 125

Ⅳ．まとめ

（1）遺構の変遷 ……（井上信正） 127
（2）大宰府条坊跡第84次調査出土瓦の分析 ……（中島恒次郎） 136

写真図版
Pla. 1 ～12
CD-ROM
遺構・遺物写真（pdfデータ）
各表（Excelデータ）



1．大野城跡
2．岩屋城跡
3．陣ノ尾遺跡
4．筑前国分寺跡
5．辻遺跡
6．国分松本遺跡
7．筑前国分尼寺跡
8．国分千足町遺跡
9．御笠団印出土地
10．水城跡
11．大宰府政庁跡
12．観世音寺
13．遠賀団印出土地
14．大宰府条坊跡(破線内)
15．君畑遺跡
16．**般若寺跡（報告地点）**
17．市ノ上遺跡
18．神ノ前窯跡
19．原口遺跡
20．篠振遺跡
21．前田遺跡
22．宮ノ本遺跡
23．雛川遺跡
24．フケ遺跡
25．尾崎遺跡
26．脇道遺跡
27．殿城戸遺跡
28．剣塚遺跡
29．唐人塚遺跡
30．峯・峯畑遺跡（●は峯火葬墓）
31．桶田山遺跡
32．太宰府天満宮(安楽寺跡)
33．浦城跡
34．原遺跡

図１　太宰府市とその周辺の遺跡（1/30,000）

Ⅰ．地理・歴史的環境および調査歴

今回報告する大宰府条坊跡第63次調査他５調査地点は、太宰府市のほぼ中央東寄りにあり、太宰府市街地を取り囲む東側丘陵端部、通称般若寺丘陵上部に所在している。現在丘陵東部において、国道３号線ほかの諸開発によって分断され、独立丘陵的な景観を呈しているが、従来は高尾山など現太宰府天満宮東にある丘陵からの延伸部として捉えることが妥当である。地質環境上は、早良型花崗岩上にのる阿蘇４火砕流堆積物の上に遺跡が形成されており、やや粘質で火山ガラスを含む赤色系の土壌が分布している（太宰府市、2001）。地形上は、太宰府内に東より張り出すように延びた丘陵で、標高50ｍ前後を測り、丘陵南側との比高差は約20ｍほどを測る。この頂部に立つと条坊南部および西部が眺望でき、換言するならば、条坊南部ならびに西部からよく見える地ということができる。当該地は、鏡山猛氏推定条坊案による左郭12～14条４・５坊にあり、中央大路からは最も眺望できる位置に所在している。隣接地には筑紫野市二日市所在の峯畑遺跡、峰遺跡など旧石器から弥生期の遺跡が所在している（筑紫野市、2001）。特筆すべきものとしては、般若寺丘陵の南東部、峰遺跡が所在する地にて不時発見ながら、奈良期の火葬墓が確認できている。この地は推定ではあるが鏡山条坊案の郭内にあり、喪葬令第九条皇都条の「法令」違反事例として重要である。今回報告する調査地は、字般若寺および「塔心礎」とされる礎石の残存から、『上宮聖徳法王帝説』裏書にある蘇我臣日向が孝徳天皇のために建立した「般若寺」として知られてきた。古くは江戸期から記録をとどめており、その後明治期に至って丘陵上には二つの土壇があったことが、この時まとめられた『福岡縣地理全誌』に記載されている（貝原、1709。加藤、1806。青柳、1835。福岡縣、1881）。内容は、「一ツハ。高三尺。廣十三歩、一ツハ。高一間。廣十七歩」と記されており、後者の方には「柱穴」のある「柱石」として報告されていることから、現存する「塔心礎」と考えられる。その後記録が途絶え、昭和23年の米軍航空写真ならびに昭和33年に小田富士雄氏によって景観写真が撮影されている（PL.１）[1)]。小田氏撮影の「塔心礎」は、傾きを有しているが、昭和54年度の調査では水平を保持していることから、その後「復原」された可能性がある。昭和36年の国土地理院撮影の航空写真では、宅地造成の風景が写し出されており、この時「復原」されたことが想像できる。現存する「塔心礎」は、九州歴史資料館によって般若寺跡第２次および４次調査として調査がなされ、基壇規模約8.8ｍ「四方」の瓦積基壇として推定され、現存する「塔心礎」は下位に旧表土が確認されるとともに、基壇北辺から導き出される中心点からズレが観察されることから、原位置を保持していないことが明らかとなった。また「塔」跡周辺の調査も実施され、「塔」跡東より５間×□間の掘立柱建物が確認されており、昭和36年頃に行われた般若寺丘陵造成工事によって欠失したと考えられていた遺構の存在が期待できることとなった。なお九州歴史資料館が実施した第４次調査の北側を太宰府市教委が補足調査(第4-2次調査)として実施し、般若寺4SB010の東西規模を確定するに至っている。九州歴史資料館で実施された般若寺跡第２～４次調査において検出された諸遺構の時期については、奈良後期のものが多く、わずかに般若寺第３次調査SK014のみが奈良前期のものと考えられる（九州歴史資料館、1980・1988）。その後の時期のものとしては、平安中期の土坑が確認されているのみで、時空間軸上、広範な人々の活動を裏付ける資料は確認されず、丘陵下位にある空間とはやや異質な土地利用状況がうかがえる。これが単に「般若寺」の存在のみで処理できるものか、『福岡縣地理全誌』に記載される地場の人々が「畏れる」地としての意識が遠因として受け継がれてきたものかは明らかにし難い（福岡縣、1881）。なお報告する６調査区の東には、鎌倉期建立と考えられる七重の石塔がある。昭和51年度に国庫補助事業として解体修理した際に、下位より付帯施設が確認できず、伝聞によると現在地内において数度移動がなされていると伝えられており、現在地での歴史的位置を問うことは困難で

条○次・・・ 大宰府条坊跡第○次調査（太宰府市教委 調査分）
史○次・・・ 大宰府史跡第○次調査（九州歴史資料館 調査分）
南○次・・・ 御笠川南バイパス第○次調査（福岡県教委 調査分）

図２　報告調査地と周辺調査（1/5,000）

	北　緯	東　経
大宰府条坊跡第69次調査	33°30′17″	130°31′8″
大宰府条坊跡第84次調査	33°30′17″	130°31′11″
大宰府条坊跡第96次調査	33°30′17″	130°31′9″
大宰府条坊跡第110次調査	33°30′18″	130°31′9″
大宰府条坊跡第231次調査	33°30′15″	130°31′10″
大宰府条坊跡第249次調査	33°30′13″	130°31′9″
般若寺跡第4-2次調査	33°30′16″	130°31′11″

表１　調査区関係経緯度（世界測地系）

ある可能性がある（太宰府町教委、1977．太宰府市、1998）。

般若寺丘陵での調査歴は、先に記述してきた九州歴史資料館による継続的な調査のほかに、地元在住の森岡兼雄氏によって瓦窯の分布が確認されている（九州歴史資料館、1980）。丘陵南斜面にあったとされ、その一部が、平成17年度に実施した大宰府条坊跡第249次調査において窯跡を確認している。この窯跡は、瓦焼成窯であると断定するには、状況証拠に乏しいが、出土した遺物から想定される操業時期は、平安前期初頭（大宰府編年VIA期頃）と考えられ、般若寺創建期よりはやや下降する。また同調査区からは、金属生産を行っていたと考えられる小規模な炉や、３間×３間の総柱建物、東西道路の確認など、今回報告する６調査区が所在している丘陵上位で希薄であった遺構群が良く残っており、大きな成果を得ることができた。詳細は調査報告書を参照いただきたい。窯跡は、当該地以外に二箇所、森岡氏によって語られているが、詳細は不明である。

各調査区の経緯度（世界測地系）は、表１に記載。

【註】

1）小田富士雄氏のご好意により、当時の写真を掲載することに対し許諾いただいた。記して深甚の謝意を表します。

【引用文献】

九州歴史資料館(1980)『般若寺跡』

九州歴史資料館(1988)『般若寺跡　II』

太宰府町教育委員会(1977)『重要文化財　七重塔修理工事報告書』

太宰府市(1998)『太宰府市史　建築・美術工芸資料編』

太宰府市(2001)『太宰府市史　環境資料編』

貝原益軒（1709）『筑前国続風土記』

加藤一純（1806）『筑前国続風土記附録』

青柳種信（1835）『筑前国続風土記拾遺』

福岡縣（1881）『福岡縣地理全誌』（後に、福岡県(1993)『福岡県史　近代資料編』に再録）

（中島恒次郎）

II．調査組織

主だった調査・整理・報告実施年度の調査組織は、以下のとおりである。

昭和61／1986年度……第63次調査実施

総括	教　育　長	藤　寿人
庶務	社会教育課長	花田勝彦
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主　　事	岡部大治
調査	技　　師	山本信夫
		狭川真一（調査担当）
		緒方俊輔

昭和62／1987年度……般若寺跡第4-2次調査実施

総括	教　育　長	藤　寿人
庶務	社会教育課長	花田勝彦
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主　　事	岡部大治
		白水伸司

調査	技　　師	山本信夫
		狭川真一
		緒方俊輔
	技師（嘱託）	山村信榮（62年９月１日～）

平成元／1989年度……第84次調査実施

総括	教　育　長	藤　壽人（～元年６月30日）
		長野治己（元年８月８日～）
庶務	教 育 部 長	西山義則
	社会教育課長	関岡　勉
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主　　事	岡部大治
		白水伸司
調査	技　　師	山本信夫
		狭川真一（調査担当）
		城戸康利
		緒方俊輔（調査担当）
		山村信榮
	技師（嘱託）	中島恒次郎
		狭川麻子（２年１月５日～）

平成２／1990年度……第96次調査実施

総括	教　育　長	長野治己
庶務	教 育 部 長	西山義則
	社会教育課長	関岡　勉
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主 任 主 事	岡部大治
	主　　事	白水伸司
調査	主 任 技 師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利（２年７月１日～）（調査担当）
	技　　師	城戸康利（～２年６月30日）
		緒方俊輔
		山村信榮
	技師（嘱託）	中島恒次郎
		狭川麻子

平成３／1991年度……第110次調査実施

総括	教　育　長	長野治己
庶務	教 育 部 長	中川シゲ子

	文 化 課 長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	富田　譲
	文化振興係長	大田重信
	主 任 主 事	岡部大治
		川谷　豊
調査	主 任 技 師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利（調査担当）
		緒方俊輔
	技　　師	山村信榮
		中島恒次郎
		塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子（３年10月１日～）

平成15／2003年度……第231次調査実施

総括	教　育　長	關　敏治
庶務	教 育 部 長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信（～６月30日）
		久保山元信（７月１日～）
	保護活用係長	久保山元信（10月１日～）
	文化財調査係長	神原　稔（～９月30日）
	調 査 係 長	永尾彰朗（10月１日～）
	事 務 主 査	藤井泰人
	主 任 主 事	大石敬介
調査	主 任 主 査	城戸康利
	技 術 主 査	山村信榮
		中島恒次郎
	主 任 技 師	井上信正（調査担当）
		髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子
		柳　智子
		渡邊　仁

平成17／2005年度……整理

総括	教　育　長	關　敏治
庶務	教 育 部 長	松永栄人
	文化財課長	木村和美（～６月30日）

		齋藤廣之（7月1日～）
	保護活用係長	久保山元信
	調 査 係 長	永尾彰朗
	主 任 主 査	齋藤実貴男
	事 務 主 査	大石敬介
調査	主 任 主 査	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
	技 術 主 査	井上信正（整理担当）
	主 任 技 師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		柳　智子
		長　直信
		松浦　智

平成18／2006年度……整理報告

総括	教　育　長	關　敏治
庶務	教 育 部 長	松永栄人
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信
	調 査 係 長	永尾彰朗
	主 任 主 査	吉原慎一（7月1日～）
		齋藤実貴男
	事 務 主 査	大石敬介（～6月30日）
調査	主 任 主 査	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎（整理担当）
	技 術 主 査	井上信正（報告担当）
	主 任 技 師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	柳　智子
		下高大輔（整理担当）

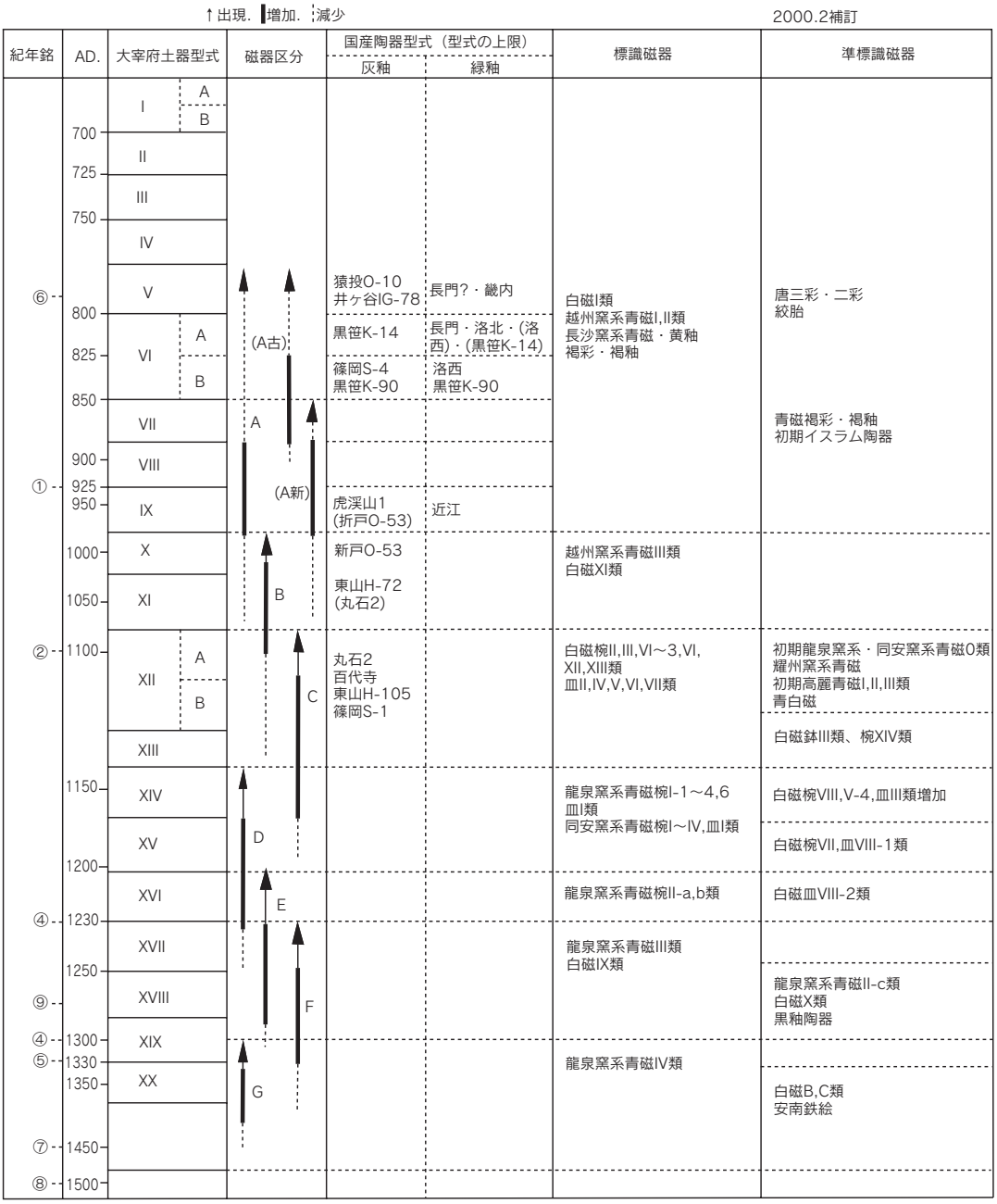


図３　大宰府土器形式と国産陶器・貿易陶磁器編年

紀年銘資料
①A.D.927　延長5年,大宰府74次SD205A溝
②A.D.1091 寛治5年,平安京左京4条1坊SE8井戸
③A.D.1224 貞応3年,大宰府33次SD605溝
④A.D.1304 嘉元2年,大宰府109.111次SD3200溝
⑤A.D.1330 元徳2年,大宰府45次SX1200池
⑥A.D.784　延暦3年,長岡京102次SD10201溝
⑦A.D.1459・1465 長禄3・寛正5年,福岡市井相田CII・SG16池
⑧A.D.1501 文亀元年,大宰府70次SD1805溝
⑨A.D.1265 文永2年,博多62次713土壙

文献
①九州歴史資料館　「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
②田辺昭三・吉川義彦　「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
⑦福岡市教育委員会「井相田C遺跡II」「福岡市埋蔵文化財調査報告書179」1988
⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
⑨福岡市教育委員会「博多48」「福岡市埋蔵文化財調査報告書397」1995

Ⅲ．各調査の概要

Ⅲ-1．第63次調査

１．調査に至る経緯

太宰府市朱雀２丁目（旧大字南字般若寺）19外１筆において、共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財取扱いの有無に関する問合せが、昭和62年１月に本市教育委員会へなされた。当該地は周知の遺跡である大宰府条坊跡に包括され、特に字名が語る般若寺跡の寺域内に位置していることから、確認調査の必要性ならびに埋蔵文化財の確認を前提として記録保存のための発掘調査を実施する必要があることを説明した。確認調査の結果、地表下約0.5ｍほどで埋蔵文化財が確認され、記録保存のための発掘調査を原因者負担金により実施することで建築計画者と合意し、昭和62年３月４日から同年３月31日を調査期間とした。開発対象面積400㎡、調査面積160㎡を測る。調査は、狭川真一が担当した。

２．層位等

地表面から下約0.5ｍほどに遺構面が確認され、その間には暗茶褐色土および表層の真砂土等が堆積していた。遺構形成面の基盤層は、明茶褐色土である。

３．遺構

柵（板塀）

63SA025（fig.63-1・3）

調査区南部に東西方向で確認されたもので、12基の柱穴を検出した。調査区を拡張し、遺構の広がりを確認したが、開発区域を東西に横断しており、調査区外へ延伸することが分かった。柱間が1.40ｍ(約５尺)から2.04ｍ(約７尺)と幅があり、かつ規則性が見えない。柱痕跡も明確ではなく、25c・25fなどを参考にすると0.15～0.2ｍほどを測ると考えられる。25a～25lまでの想定柱痕跡中点間を結んだ直線の方向は、N87°36′50″Eを測り、南北両側に検出した溝63SD010・SD020とほぼ同一方向をとる。なお南に確認した溝63SD020は調査区南東部で欠失し、空閑地を形成していることから、南に展開する空間への侵入路を想定させ得るものの、柵列63SA025の柱bならびにcが、溝欠失部に存在し、進入路を遮蔽する形になっている。このことから、この溝63SD020の欠失箇所は、遺構の残存度合いの悪さに起因している可能性が生じる。

墓

63ST001（fig.63-4）

調査区北東部に検出したもので、鉄製釘が一定の空間を保ちつつ分布していることから、木棺墓と考えられる。墓壙主軸を東に対してやや南よりに８度ほど振れるもので、長軸長2.08ｍ、短軸長0.84ｍ、残存する深さ0.23ｍを測る長方形を呈している。棺材に打ち込まれていたと考えられる鉄釘の位置から想定される木棺の大きさは、長軸長1.5ｍ前後、短軸長0.5ｍ前後が考えられる。また墓壙内において棺埋置位置がやや南東に偏在しているように観察できる。墓壙内における南北軸方向の土層観察では、棺を据え置いた後に埋め込まれた土と考えられる３～５層と、棺材崩壊時のものと考えられる２層、棺蓋材の崩壊に伴って棺上位からの流入土と考えられる１層がある。想定される棺材位置と土器の出土位置、さらには先述した墓壙内堆積土の状況から、墓壙内で出土した土師器椀c2および坏aは、供献土器と考

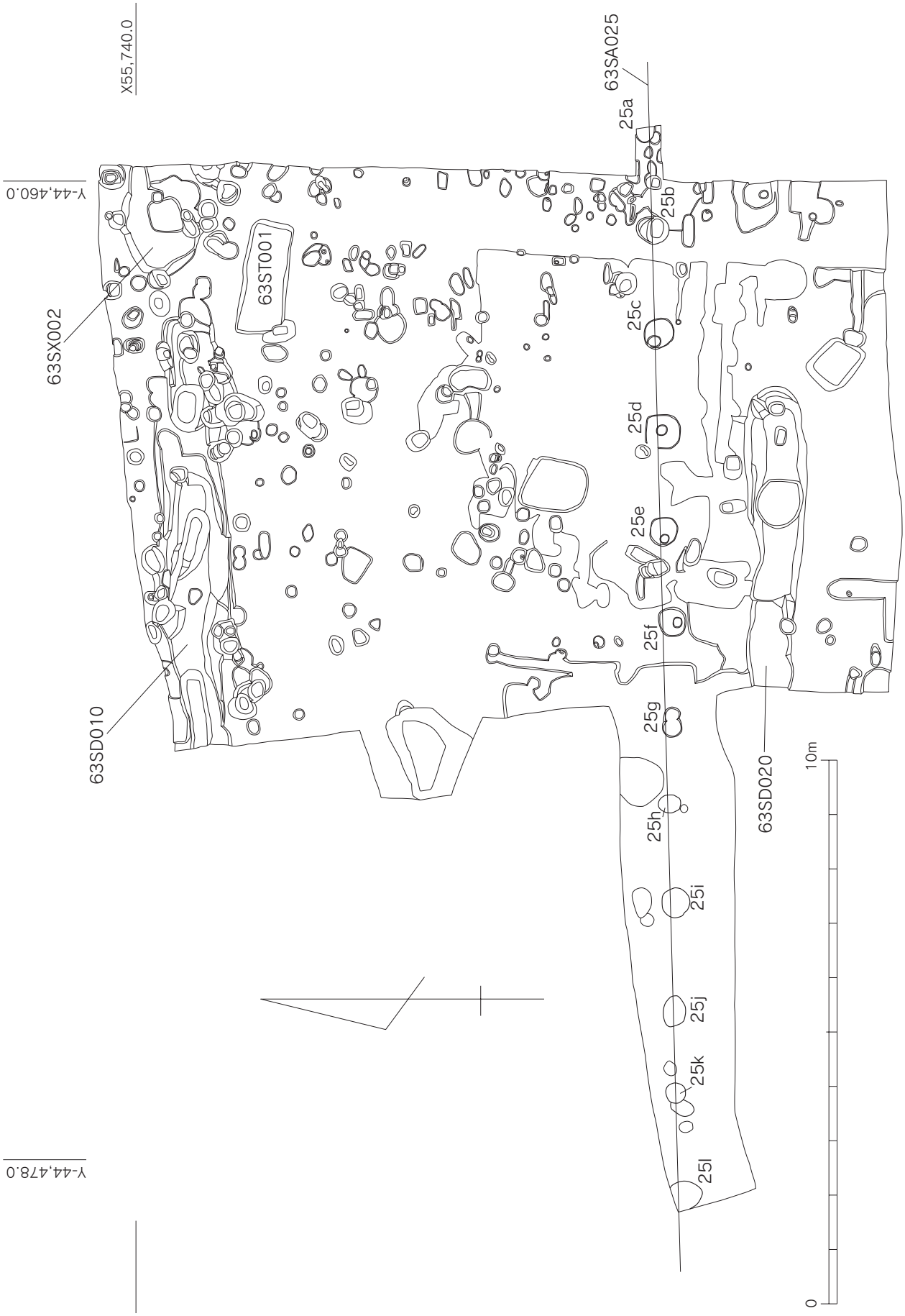


fig.63-1　大宰府条坊跡第63次調査　遺構全体図（1/100）

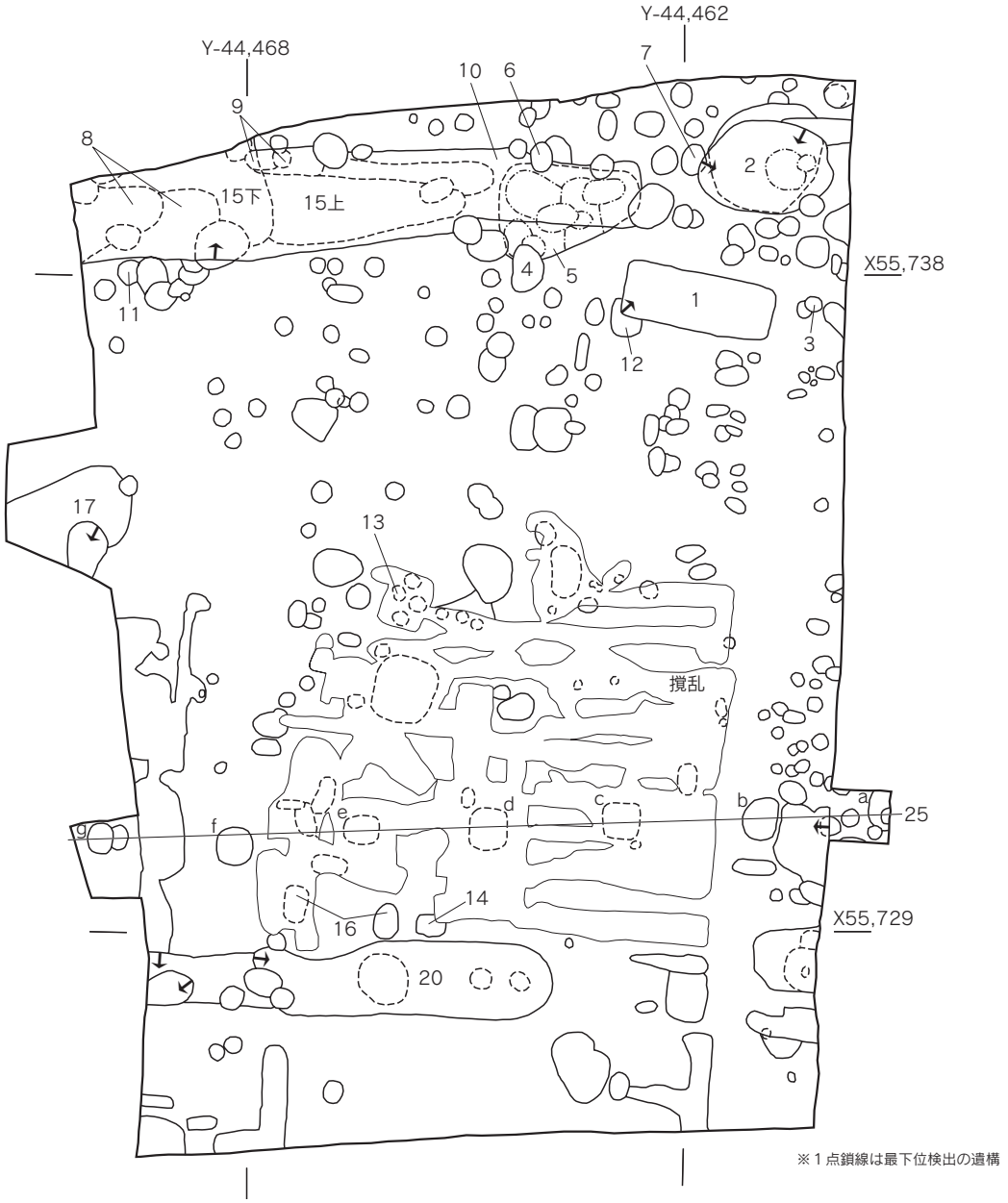


fig.63-2　大宰府条坊跡第63次調査　遺構配置図（1/100）

えられる。墓壙内からは、他に縄叩の平瓦の破片が出土しており、これは墓壙掘削時の周辺からの混入と考えられる。博多遺跡群などの人骨出土例からは、供献土器埋置方向に頭位を向ける例が多く、当該遺構における頭位は、供献土器が東部分に偏在していることから、東頭位と想定できる。供献土器の様態としては、棺材崩壊時の破壊とも考えられるが、全て破砕され個々を重ねることなく正位置のものならびに伏せているものの二者で埋置されている。出土した供献土器の様相から大宰府編年Ⅸ期(10世紀中葉)に位置付けることができると考えられる。

溝

63SD010

調査区北部にて検出した溝で、溝幅約1.3m、検出長7.85m、残存する深さ0.34mを測る。調査時は、下位をS-15として記録を行ったが、その後上下の関係であることが明らかとなったことから、63SD010として統合した。検出された溝の東西任意中点の座標から導き出される溝の方向は、N88°46′33″Eで、東進するほどに北へ上がる傾向を有している。出土遺物は少なく、須恵器蓋３、縄叩平瓦、老司系格子叩平瓦から、かろうじて奈良期埋没が想定される。

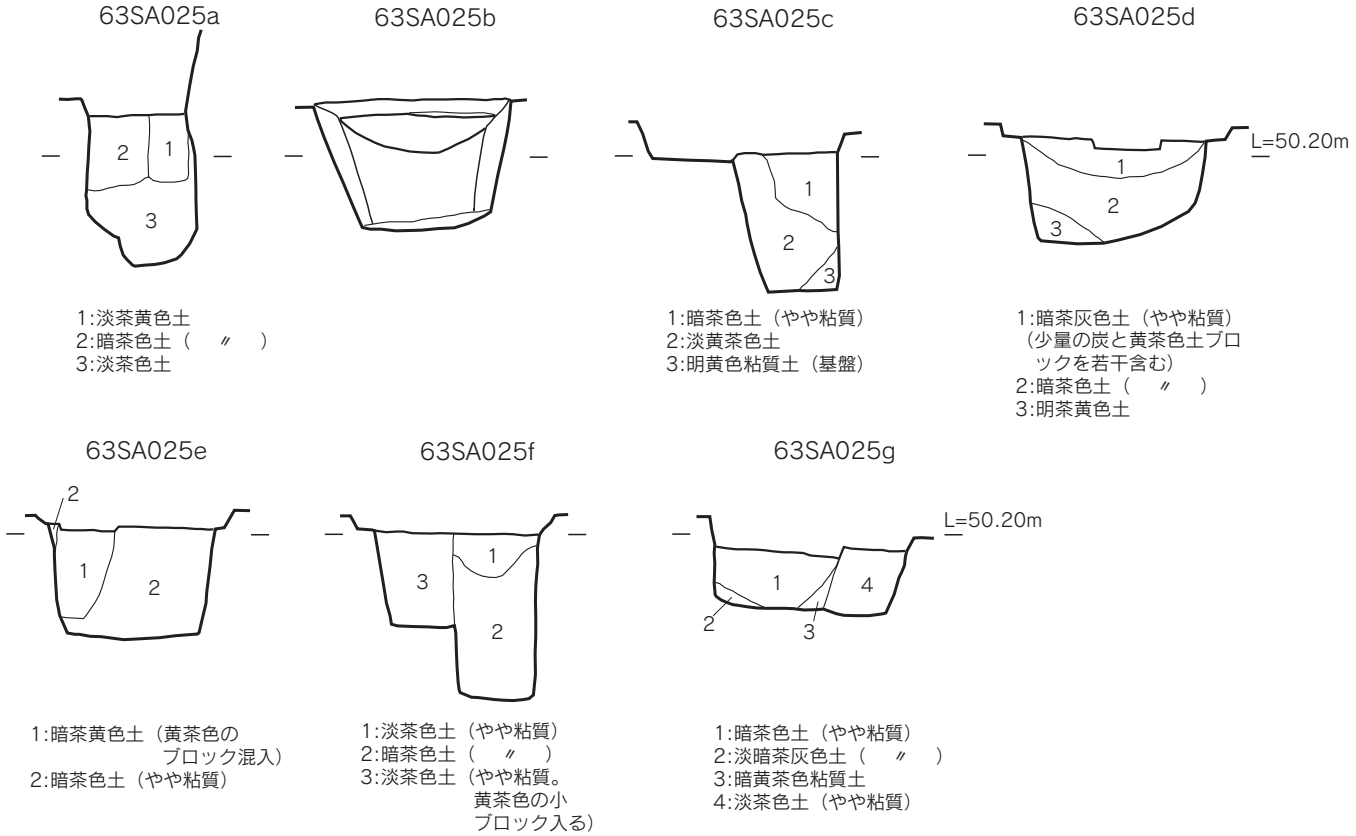


fig.63-3　63SA025土層図（1/20）

63SD020

調査区南部、柵列63SA035の南に近接して確認した東西方向を向く溝で、溝幅1.18m～0.76m、検出長5.5m、残存する深さ0.12m前後を測る。検出された溝の東西任意中点の座標から導き出される溝の方向は、N91°28′8″Eで、東進するほど南へ下がる傾向を有している。出土遺物は少なく、近世以降と考えられる国産陶器が混入品とすれば、他はすべて奈良期に帰属するものばかりであり、埋没時期は奈良期の範囲内で捉えることができる。

その他の遺構

63SX002

調査区北東部、先述した63SD010の東延長部にて検出しており、土坑という解釈よりは、溝の延長部分と捉えた方が蓋然性は高いものと考えられる。長軸長1.7m、短軸長1.5mを測り、残存する深さは0.22mを残している。

（中島恒次郎）

4．遺物

柵出土遺物

63SA025出土遺物（fig.63-5）

須恵器

高坏（1）　脚部の破片である。残存高1.7cmを計る。0.5～1.0mm程度の白色粒子を含み、焼成・還元ともに良好。色調は、内外面ともに灰白色を呈す。

溝出土遺物

63SD015出土遺物（fig.63-5）

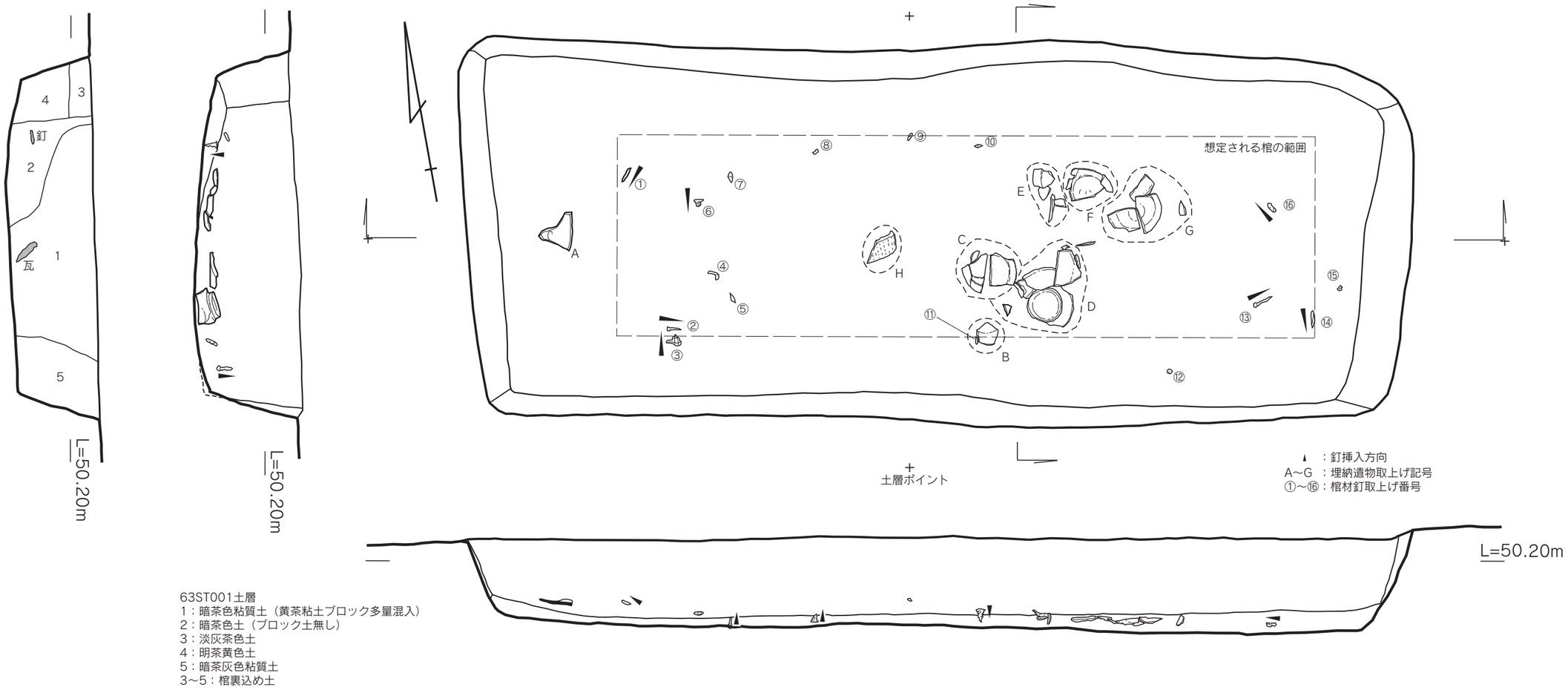


fig.63-4　63ST001遺構実測図（S=1/20）

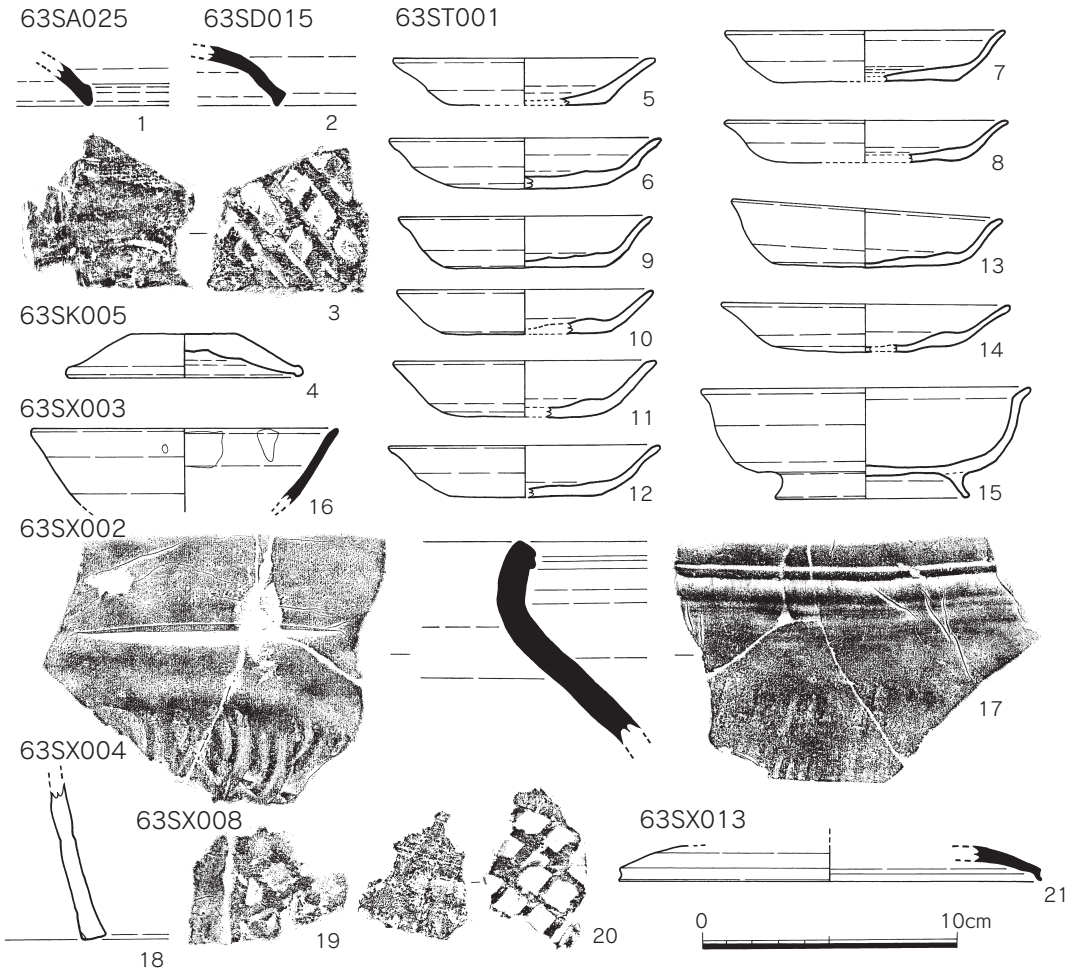


fig.63-5　大宰府条坊跡第63次調査　出土遺物実測図（1/3）

須恵器

蓋３（2）　口縁部の破片である。残存高2.3cmを計る。体部内外面ともに回転ナデの痕跡が若干残る。0.1～1.0mm程度の白色粒子を多く含み、焼成・還元はともに良好。色調は、外面が淡灰色を基本に口縁端部のみ青灰色を呈し、表面全体に褐色の付着物あり。内面は灰色を呈す。

瓦

平瓦（3）　厚さ1.9cmを計る破片である。凸面は格子目叩き。色調は、凹凸面ともに淡黄色を呈し、焼成については良好とはいえない。

土坑出土遺物

63SK005出土遺物（fig.63-5）

土師器

蓋（4）　口縁部の2/3が欠損しているが残存率は高い。復元口径9.4cm、器高1.7cmを計る。体部中央付近から下方にかけてと内面については、横ナデにより調整。内面中心部には、工具使用によるものと思われる二重の強めのナデ痕跡が確認できる。白雲母を少量含む。色調は、内面が茶褐色、外面が茶褐色～褐色を呈す。

木棺墓出土遺物

63ST001出土遺物（fig.63-5～7）

土師器（fig.63-5）

坏a（５～14）　いずれも口縁から底部にかけての破片であり、色調は５～８については淡黄白色～淡白色。９・11～14については明茶灰色～茶灰色。10は全体的に灰色であるが、外面底部のみ暗灰色を呈す。５は、復元口径10.4cm、残存高1.8cm、復元底径、6.3cmを計る。底部切り離しは不明。６は、復元口径10.8cm、器高2.0cm、復元底径6.4cmを計る。内底にナデが確認でき、底部切り離しについては不明。７は、復元口径11.1cm、残存高2.0cm、復元底径7.4cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。８は、復元口径11.2cm、残存高1.7cm、復元底径7.0cmを計る。内底にナデ、外面底部に指押さえ痕跡が確認できる。底部切り離しについては不明。９は、復元口径9.9cm、器高2.05cm、底径6.1cmを計る。内底にナデ、底部切り離しはヘラ切り。10は、復元口径9.9cm、器高1.75cm、復元底径6.8cmを計る。内底にナデ、底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕が確認できる。11は、復元口径10.4cm、残存高2.2cm、復元底径6.6cmを計る。内底にナデ、底部切り離しはヘラ切り。12は、口径10.6cm、器高2.0cm、底径6.0cmを計る。内底にナデが確認できるが、底部切り離しについては不明。13は、口径10.6cm、器高2.3cm、底径7.4cmを計る。内底にナデ、底部切り離しはヘラ切り。14は、口径11.25cm、器高1.95cm、底径7.3cmを計る。内底にナデ、底部切り離しはヘラ切りで板状圧痕あり。

中椀c2（15）　欠損している部分もあるが、比較的残りのいい資料である。復元口径12.8cm、器高4.35cm、高台径7.5cmを計る。内底にナデ、底部切り離しはヘラ切りと思われるが、明瞭な痕跡ではない。色調は、明茶灰色を呈す。（下高大輔）

金属製品（fig.63-6・7）

鉄釘（fig.63-6-1～3・fig.63-7-1～16）

棺材として確認できたものは16点、調査途上において出土したもの３点を含め、19点の釘材が確認できている。多くに木質が付着しており、木棺固定材として使用されていたことがうかがえる。すべて断面方形ないし長方形を呈し、打点箇所を折り曲げによって作り上げている。多くのものは一方向に木質繊維が観察できるが、fig.63-7-6のみは釘材中央部分で木質繊維が直交している箇所が観察できた。取り上げ番号⑮であり、蓋材ないしは底材と側材を止める釘であったことが想像できる。掲載番号と取り上げ番号の関係は、tab.63-1に記載。（中島恒次郎）

その他の遺構出土遺物

63SX003出土遺物（fig.63-5）

須恵器

坏（16）　口縁から体部にかけての破片である。復元口径12.2cm、残存高2.8cmを計る。内外面ともに回転ナデ調整。0.5～1.0mm程度の白色粒子を微量に含む。色調は、内外面ともに白灰色であるが、口縁端部内面部分のみ灰色を呈す。焼成・還元ともに良好。口縁端部と体部内面上方の部分的に黒色の付着物あり。

63SX002出土遺物（fig.63-5）

須恵器

大甕（17）　口縁から体部上位にかけての破片である。内外面ともに回転ナデによって調整。体部外面は平行叩き目痕、内面にはあて具痕が確認できる。0.1～1.0mm程度の白色粒子を比較的多く含む。色調は、内外面ともに淡灰色を呈し、焼

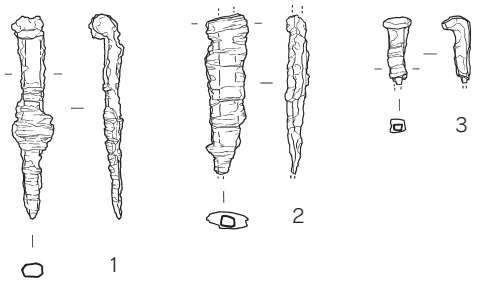


fig.63-6　63ST001埋土出土釘実測図（1/2）

成・還元はやや軟質気味ではあるが良好。

63SX004出土遺物（fig.63-5）

土師器

器台（18）　残存高6.2cmの脚部破片。内外面ともに劣化が激しいが、ナデ調整痕が確認できる。内面下方付近は指頭痕も確認できる。色調は、基本的に内外面ともに褐色を呈す。

63SX008出土遺物（fig.63-5）

瓦

平瓦（19・20）　19は厚さ1.7cm、20は厚さ2.0cm程度の小片である。いずれも凸面は格子目叩き。色調は、19が凹凸面ともに淡黄色を呈し、焼成については良好とはいえない。20は、凹凸面ともに淡灰色を呈し、焼成については比較的良好といえる。

63SX013出土遺物（fig.63-5）

須恵器

蓋３（21）　口縁から体部下方にかけての破片である。復元口径16.6cm、残存高1.4cmを計る。内外面とも回転ナデ調整。色調は全体的に黄灰色を呈し、焼成・還元は良好。

（下高大輔）

図版番号	取上番号	図版番号	取上番号
1	⑬	9	⑦
2	⑩	10	④
3	⑧	11	③
4	⑥	12	⑨
5	⑤	13	⑪
6	⑮	14	①
7	⑫	15	②
8	⑯	16	⑭

tab.63-1　63ST001出土釘材取上番号-図版番号対照表

５．小結

a.墓

報告文で記してきたように、造墓時期は大宰府編年Ⅸ期（10世紀中葉）に位置し、条坊内への墓侵入が観察できる時期にあたる。既に先学が明らかにしているように、平安前期末から先祖供養、死穢を背負う僧の姿が描かれており、般若寺に近接した位置に造墓される点は、平安期の死穢に関する観念を考慮したとき、寺との関係が考慮されることになる。しかし、平安中期まで般若寺が存続していたという

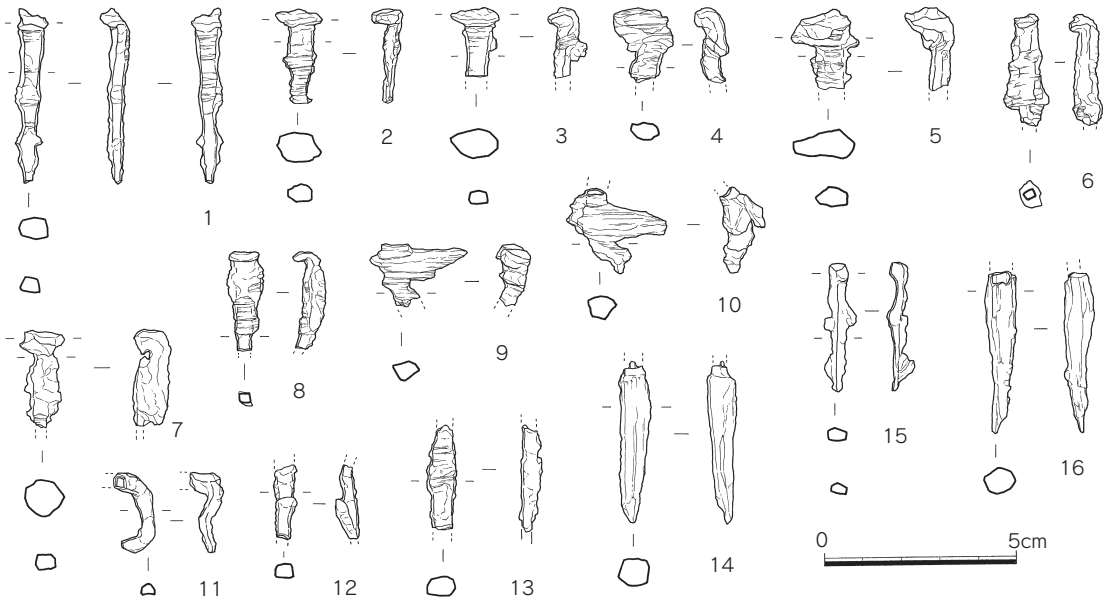


fig.63-7　63ST001出土釘実測図（1/2）

確証は得られておらず、後述する第84次調査所見から考えると、当該時期には既に廃絶していた可能性が高い。したがって、条坊内いわば居住域への造墓ということを考慮すべきことになり、般若寺の北東部に所在する君畑遺跡と同じ理解をすべきものと考える。

君畑遺跡では、平安前期後葉～平安後期まで造墓活動が確認でき、本調査地から北東側、鏡山猛氏推定条坊案における左郭十条八坊に所在している。確認されているもので、25基で地形に制約されるように、等高線にほぼ平行に造墓されている。25基中、４基を除き他は全て供献遺物ないしは副葬遺物が仮器化された状態であった。

第63次調査で検出した63ST001の位置づけは、供献土器からみる「階層」は土師器のみを供献するものであり、供献土器が仮器化されたように破砕されているなど、君畑遺跡での状況に近似している。通称般若寺丘陵上で確認された墓は、当該墓のみであり、単独墓の様相を呈している。しかし未調査空間が広く、はたして単独墓であるのか否かについては今後の課題である。

b.溝と塀

当該調査区では、北から溝63SD010、柵（板塀）63SA025、溝63SD020と東西方向を指向する遺構が３種平行している。柵（板塀）63SA025は、近接する条坊跡第84・96次でも確認できており、遮蔽施設として認識できるものである。ただし、これら三現場の諸遺構の内、柵（板塀）から導き出せる直線方向は、塔基壇とされる般若寺跡第２次調査SB001基壇方向とは直交せず、わずかに斜交している。これに対し、柵（板塀）北側に確認されている東西溝では、直交しており周辺調査所見が増加することにより、互いに直交する可能性は残している。これら三種の遺構は、旧地形図から判断すると、通称般若寺丘陵上に展開する平坦面の北側の落ち部分にほぼ平行しており、これら三種の遺構群が般若寺北外郭施設ということであれば、丘陵頂部平坦面が寺域として利用されていたことが分かる。

般若寺丘陵上の旧状については、古くは江戸期の文書類に七重石塔とともに記載がある。特筆すべき点としては、「塚二ツ」ありという点にあり、一つは「其側に石あり。」という記載がある。今一つは所在ならびに形状などが判然としない（貝原、1709。加藤、1806。青柳、1835）。なお法量に関しては、明治13年に刊行された『福岡縣地理全誌』（福岡県、1881）に高さ、「廣さ(面積)」が記載されており、おおよその点を掴むことができる。残念なことにその位置関係までの記載がないことから、伽藍配置に関わる情報として生かすことができない。

（中島恒次郎）

【引用文献】
貝原益軒（1709）『筑前国続風土記』
加藤一純（1806）『筑前国続風土記附録』
青柳種信（1835）『筑前国続風土記拾遺』
福岡県（1881）『福岡縣地理全誌』

tab.63-2　大宰府条坊跡第63次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別	備　　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
1	63ST001	木棺墓				IX期（10c中葉）	E2
2	63SX002	凹み	丘陵北辺の北側東西溝に関連するか			奈良	EF1・2
3	63SX003	小穴				奈良	E1
4	63SX004	小穴				弥生	E3
5	63SK005	土坑			5→10	奈良	E2・3
6	63SX006	小穴				奈良	E3
7	63SX007	小穴				古代	E2
8	63SX008	凹み				古代	E4
9	63SX009	小穴群			15下→9	奈良	E4
10	63SD010	溝	丘陵北辺の北側東西溝			奈良	Eライン
11	63SX011	小穴				奈良	E4
12	63SX012	小穴			12→1	奈良	E2
13	63SX013	小穴				奈良	C3
14	63SX014	小穴				奈良	B3
15	63SD015	溝				奈良	Eライン
16	63SX016	小穴群				不明	B3
17	63SK017	土坑				奈良	D5
20	63SD020	溝	丘陵北辺の南側東西溝			奈良	Bライン
25	63SA025	柵列	丘陵北辺の柵列			奈良	Bライン

tab.63-3　大宰府条坊跡第63次調査　土器計測表

※A；内底のナデ、B；は板状圧痕
※計測値の（　）は復元値。+は残存値。
※遺物番号は、遺物実測番号

S-1

器　別	器　種		fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土　師　器	坏a	ヘラ	63-5-13	R-001	10.6	2.3	7.4	○	○?	
土　師　器	坏a	―	63-5-12	R-002	10.6	2.0	6.0	○	―	
土　師　器	中椀C2	ヘラ?	63-5-15	R-003	(12.8)	4.35	7.5(8.6)	○	×	
土　師　器	坏a	ヘラ	63-5-9	R-004	(9.9)	2.05	6.1	○	×	
土　師　器	坏a	ヘラ	63-5-14	R-005	11.25	1.95	7.3	○	○	
土　師　器	坏a	ヘラ	63-5-10	R-006	(9.9)	1.75	(6.8)	○	○	
土　師　器	坏a	ヘラ	63-5-11	R-001	(10.4)	2.2+	(6.6)	○	×	1/4残存。E2地区出土

S-1埋土

器　別	器　種		fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土　師　器	坏a	―	63-5-6	R-001	(10.8)	2.0	(6.4)	○	―	1/3残存。E2地区出土
土　師　器	坏a	ヘラ	63-5-7	R-002	(11.1)	2.0+	(7.4)	○	○	E2地区出土
土　師　器	坏a	―	63-5-5	R-003	(10.4)	1.8+	(6.3)	―	―	1/5残存。E2地区出土
土　師　器	坏a	―	63-5-8	R-004	(11.2)	1.7+	(7.0)	○	―	1/5残存。E2地区出土

S-2下層

器　別	器　種		fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
須　恵　器	大甕		63-5-17	R-001		8.0+				口縁部片

S-3

器　別	器　種		fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
須　恵　器	坏	―	63-5-16	R-001	(12.2)	2.8+	―	―	―	破片。E1地区出土

S-4

器　別	器　種	fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
弥生土器	器台（脚部）	63-5-18	R-001		6.2+				

S-5

器　別	器　種	fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土　師　器	小蓋a3	63-5-4	R-001	(9.4)	1.7				

S-13

器　別	器　種	fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
須　恵　器	蓋3	63-5-21	R-001	(16.6)	1.4+	(12.4)			破片

S-15上

器　別	器　種	fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
須　恵　器	蓋3	63-5-2	R-001		2.3+				破片

S-25f

器　別	器　種	fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
須　恵　器	器台（脚部）	63-5-1	R-001		1.7+				破片

tab.63-4　大宰府条坊跡第63次調査　出土遺物一覧表

S-1埋土　IX期

須恵器	壺
土師器	蓋、坏a（ヘラ）
瓦類	平瓦（縄）

S-1　IX期

土師器	坏a（ヘラ）、中椀c2
瓦類	平瓦（縄）

S-2上層　奈良

須恵器	甕
土師器	甕a（在地）
瓦類	平瓦（縄）

S-2下層　奈良後半

須恵器	大甕

S-3　奈良

土師器	坏
瓦類	丸瓦

S-4　弥生

弥生土器	器台

S-5　奈良

土師器	小蓋a3
瓦類	平瓦（縄）

S-6　奈良

瓦類	破片

S-7　古代

土師器	破片
瓦類	破片（縄）

S-8　古代

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄・格子）

S-9　奈良

瓦類	平瓦（縄）

S-10　奈良

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦

S-11　奈良

瓦類	平瓦（縄）

S-12　奈良

瓦類	平瓦（縄）、丸瓦（縄）

S-13　奈良

須恵器	蓋3
瓦類	平瓦（縄）

S-14　奈良

瓦類	平瓦（縄）、丸瓦

S-15上　奈良

須恵器	蓋3
瓦類	平瓦（縄・格子）

S-16　不明

土師器	破片

S-17　奈良

瓦類	破片（縄）

S-20　奈良

土師器	甕a
国産陶器	破片（混入）
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦（縄）

S-25d　古代

土師器	甕a

S-25f　奈良

須恵器	甕、高坏

S-25g　不明

土師器	破片

S-25k　不明

土師器	破片

fig.84-1　大宰府条坊跡第84次調査　全体遺構図（1/200）

fig.84-2　大宰府条坊跡第84次調査　遺構配置図（S=1/150）

Ⅲ-2．第84次調査

１．調査に至る経緯

太宰府市朱雀２丁目（旧大字南字般若寺）9-5外1筆において、共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財取扱いの有無に関する問合せが、昭和63年６月に本市教育委員会へなされた。当該地は周知の遺跡である大宰府条坊跡に包括され、特に字名が語る般若寺跡の寺域内に位置していることから、確認調査の必要性ならびに埋蔵文化財の確認を前提として記録保存のための発掘調査を実施する必要があることを説明した。確認調査の結果、地表下約0.5～0.1ｍほどで埋蔵文化財が確認され、記録保存のための発掘調査を原因者負担金により実施することで建築計画者と合意し、平成元年９月20日から同年11月２日を調査期間とした。開発対象面積1,600㎡、調査面積1,104㎡を測る。調査は、狭川真一ならびに緒方俊輔が担当した。

２．層位等

地表面から下約0.5～0.1ｍほどに遺構面が確認され、その間には暗茶褐色土および表層のマサ土等が堆積していた。遺構直上の土層は茶色土である。遺構形成面の基盤層は明茶褐色土である。

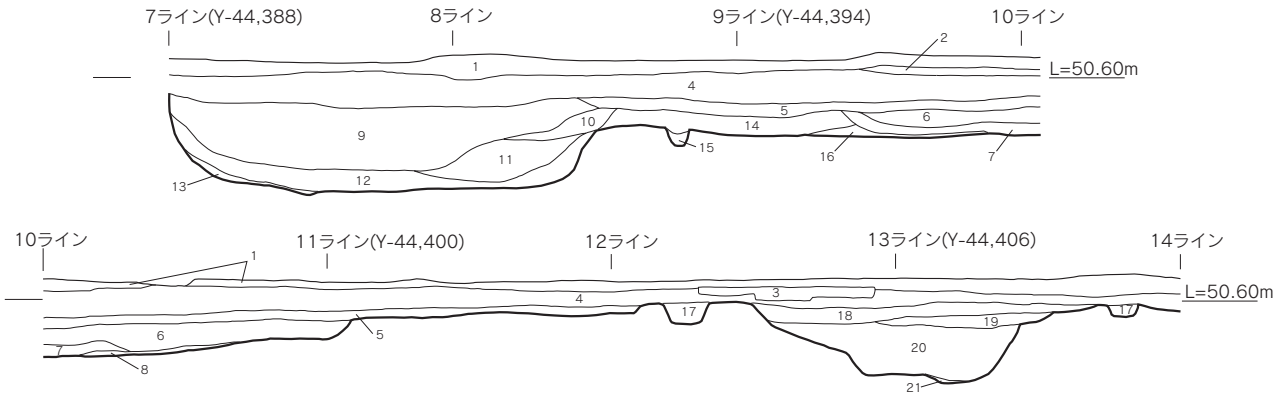
３．遺構（fig.84-1）

鉄筋コンクリート建物ならびに削平事業がなされていたこともあり、遺構の残存状況は極めて悪い状況であった。多くは撹乱坑で、その中に後述する各種遺構が残存していた。

柵列

84SA020（fig.84-1・4）

調査区北側で検出した柱穴群で、東西方向を有しかつ南北に展開しないことを考慮すると、遮蔽遺構としての柵ないし塀として理解できる。柱間は、1.77～1.80ｍを測り、約６小尺で設計されていると判断される。



＜土層名＞
1:青灰色砂利層
2:茶色土
3:コンクリート
4:暗茶褐色粘質土
5:明茶褐色土（遺物包含）
6:淡黄茶色土
7:濃黄茶色土
8:明茶色土
9:明茶色土
10:暗茶灰色土
11:暗茶色土（明黄茶色粘土ブロック混入）
12:暗茶色土
13:明赤茶色土（基盤層より砂質）
14:明茶色土
15:暗茶色土
16:淡明茶色土
17:暗茶色土
18:濃茶褐色土
19:明茶灰色土
20:暗茶色粘質土
21:黒色土（炭化物混入）

5～16層：84SK031・044・049
18～21層：84SK014

fig.84-3　大宰府条坊跡第84次調査　調査区南壁基本土層図（1/100）

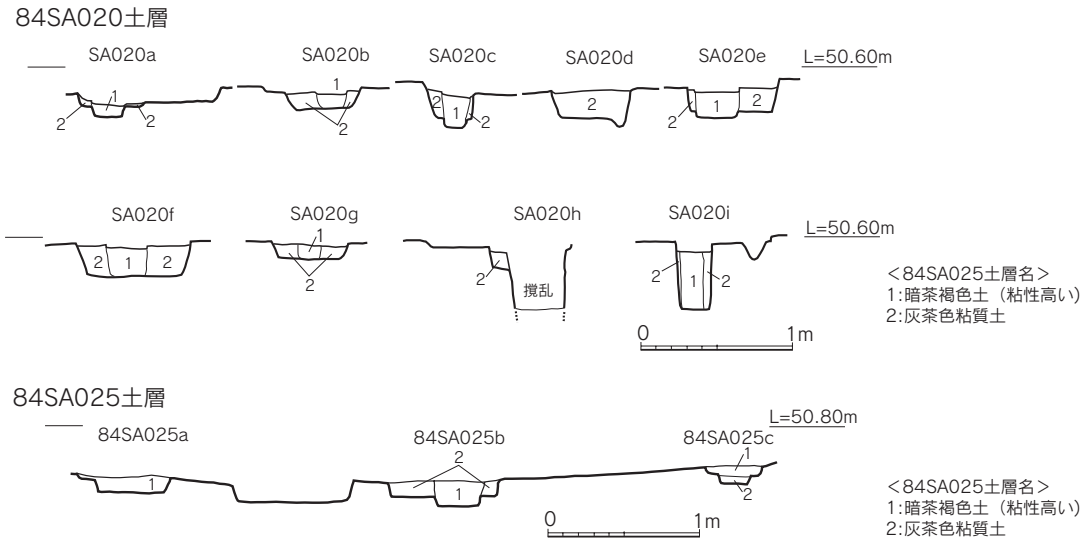


fig.84-4　84SA020・025土層実測図（1/50）

84SA025（fig.84-1・4）

調査区北側で検出した柱穴群で、東西方向を有しているものの、３基の穴のみの確認で、遮蔽遺構であるのか、建物遺構として理解できるものかは明らかにし難い。

溝

84SD081

調査区北西部にて検出した溝で、やや北を向いて東に振る南北溝と考えられる。しかし、調査全域にわたって検出できておらず、現代の建物によって破壊されたと考えられる部分にて屈折している可能性が残る。残存する深さは、約0.2mを測る。

土坑

84SK001

調査区南西部にて確認した土坑で、現在の建物基礎から別遺構として取り扱ったものの、隣接する84SK021と同一遺構と考えられる。加えて、84SK014と接していたと考えられるが、撹乱坑にて分断されているため切り合い関係は不明。84SK001は、その多くを撹乱坑・建物基礎によって破壊され、全形を推定することは困難である。堆積土は茶黒色土で、遺構内から散在するように瓦破片が多く出土した。検出深度は、0.3mを測る。

84SK014

調査区南西部にて検出した土坑で、先述したように、撹乱坑を介して84SK021と接している。切り合い関係については不明。堆積土は84SK001と近似した黒色炭層の上に暗茶色粘質土が堆積していた。検出深度は、0.9mを測る。この土坑からは、瓦が多量に出土している。

84SK021

調査区南西部にて検出した土坑で、残念なことに撹乱坑を介して84SK014と接している。撹乱状況が著しく、他の遺構同様に遺構全形を伺い知ることが困難である。

84SK031

調査区南辺にて検出した不整形土坑で、茶褐色土が堆積している。当該土坑下位から小穴（S-31・33・37・44）が検出されているが、土坑底の凹凸と理解され、同一遺構として考えることができる。検出深度は、0.9mを測る。

その他の遺構

84SX032

調査区南端にて検出した小穴で、84SX014下位から検出している。84SK005、84SK010同様に84SK014と同一遺構として理解できる。

４．遺物

柵列出土遺物

84SA020出土遺物（fig.84-5）

須恵器

蓋１（１）　口縁部の破片で、返り高が口縁部工よりもわずかに高いため、返り部分が接地している。内外面ともに回転ナデ調整によって仕上げられており、観察できる範囲では、
天井部外面の回転ヘラ削りの有無は不明である。焼成・還元ともに良好。

溝

84SD081出土遺物（fig.84-5）

土師器

坏×皿（２）　焼成不良で成形・調整痕跡は不明。また口縁部の小破片であることから、器種特定が困難であった。色調は白色系のものであることから、平安前期中頃以降のものである可能性が高い。

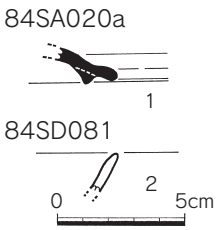


fig.84-5　柵・溝出土遺物
実測図（1/3）

土坑出土遺物

84SK001出土遺物（fig.84-6～10）

土師器

坏a（１～４）　いずれも直線的に立ち上がる体部形態を有するもので、口縁端部に煤状炭化物が付着している。口径は11.6cm～13.0cmを測り、底部外面の切り離しは回転ヘラ切りである。色調は褐色系の色合いを有し、底部と体部の境界部分が緩やかであることから、大宰府編年Ⅵ B期に位置づけられると考えられる。

須恵器

壺（５）　底部平底で、直立気味に立ち上がる体部形態を有し、上部で丸みを帯びつつ頸部へ至るものと考えられる。肩部の張りは強くない。底部外面は、回転台からの切り離し後に、やや丁寧な不定方向のナデによって仕上げられていることから、切り離し処理については観察できなかった。体部外面下位にヘラ挿入痕と考えられる、ヘラ削りようの痕跡が観察できることから、回転ヘラ切りであると推定できる。外面は焼きムラと考えられる色調差（黒灰色～灰色）が観察できる。

瓦

いずれも破片化した状態で出土しており、瓦破損後に片付け行為の結果として土坑が形成されたことが想定できる。丸瓦・平瓦および各々の軒瓦が出土している。なお各部成形・調整処理については、大脇潔氏による分類を用いている（大脇、1991）。

丸瓦（１～10）　玉縁丸瓦と行基丸瓦の二者があり、前者が多くを占めている。凹面の叩きは、縄叩きのみで構成され、側面処理はヘラ切り未調整のもの（【a0】１・２）、ヘラ切り後凹面側を面取りするもの（【a1】３）、ヘラ切り後丁寧に調整するもの（【c0】４～10）の三種があるが、ヘラ切り後丁寧に調整するものが多くを占めている。玉縁丸瓦成形方法は、丸瓦に玉縁を貼付するもの【B】と、丸瓦と玉縁を一体的に成形し粘土を凹面側に貼付するもの【C1】の二者があるが、図化できる資料では後者のみ

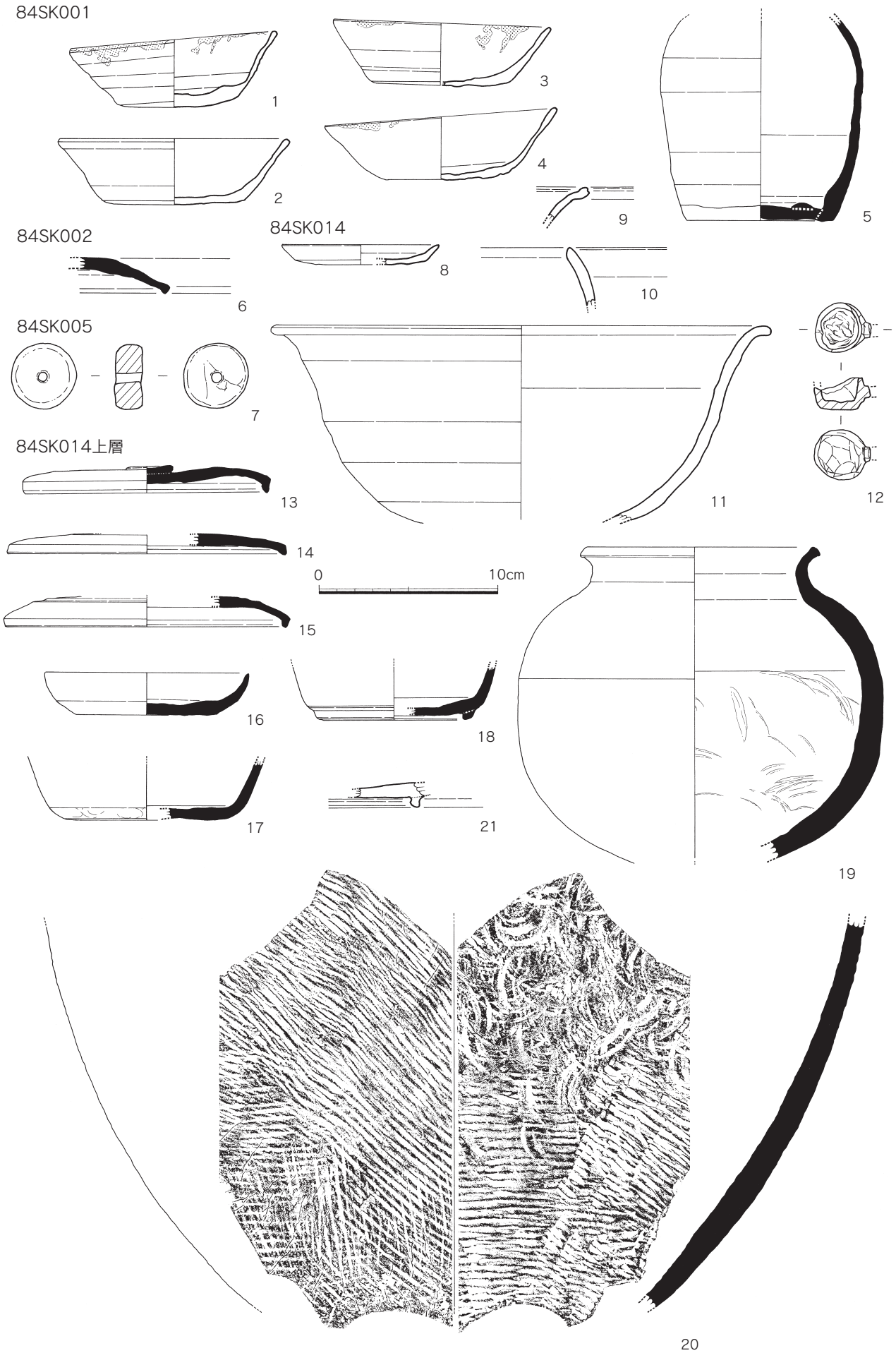


fig.84-6　土坑出土遺物実測図その1（84SK001・002・005・014・014上層。1/3）

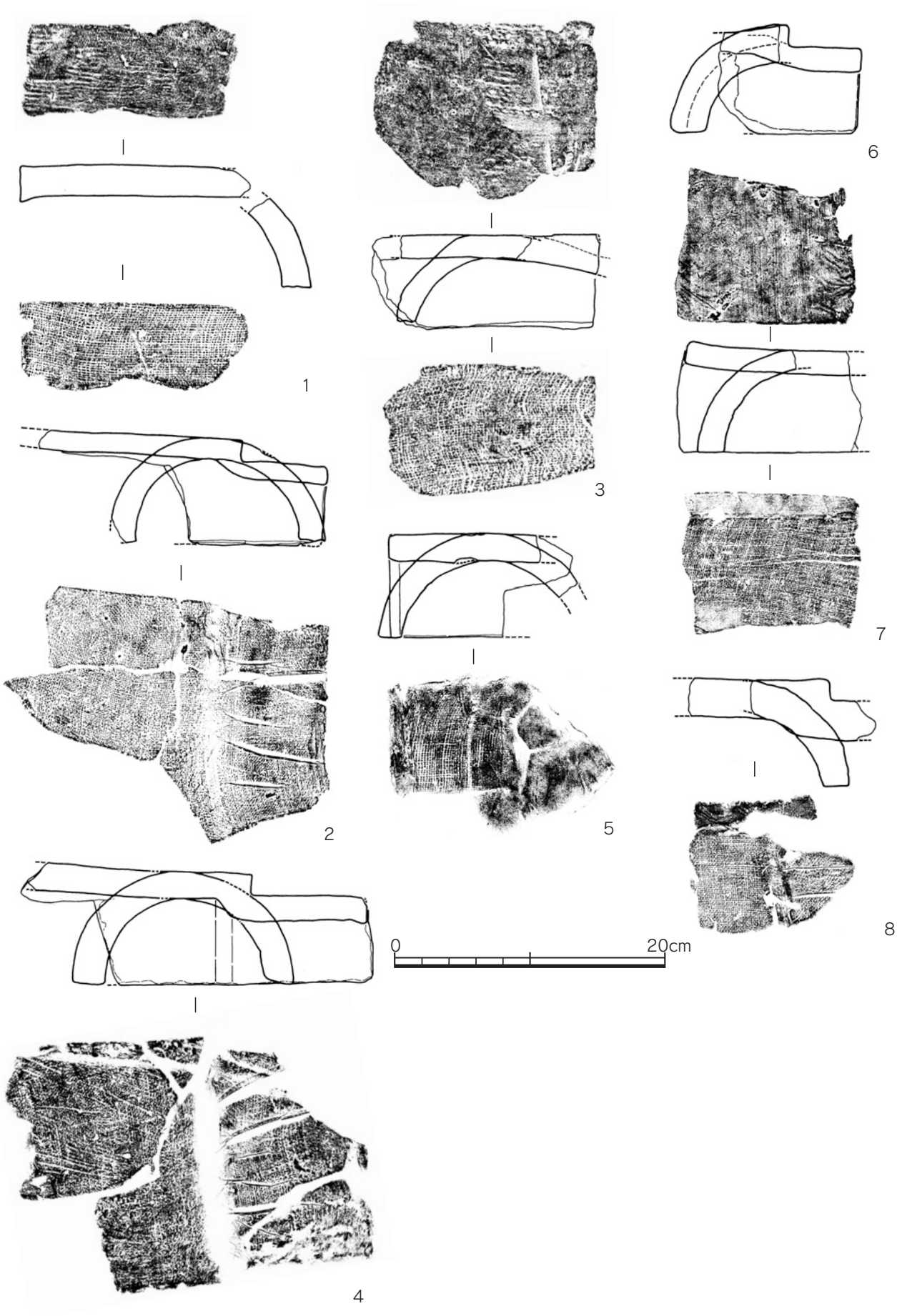


fig.84-7　84SK001出土瓦実測図（1）

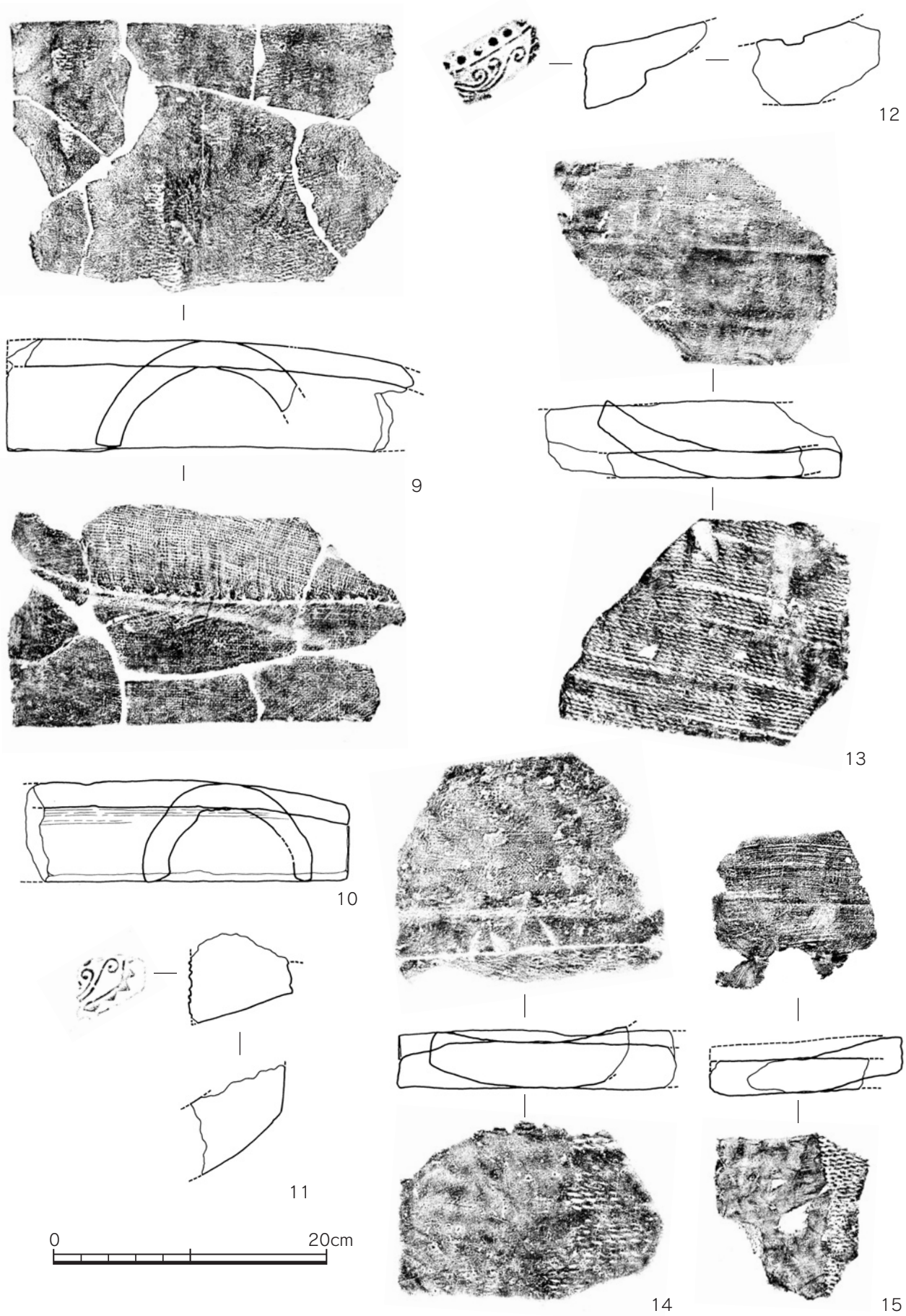


fig.84-8　84SK001出土瓦実測図（2）

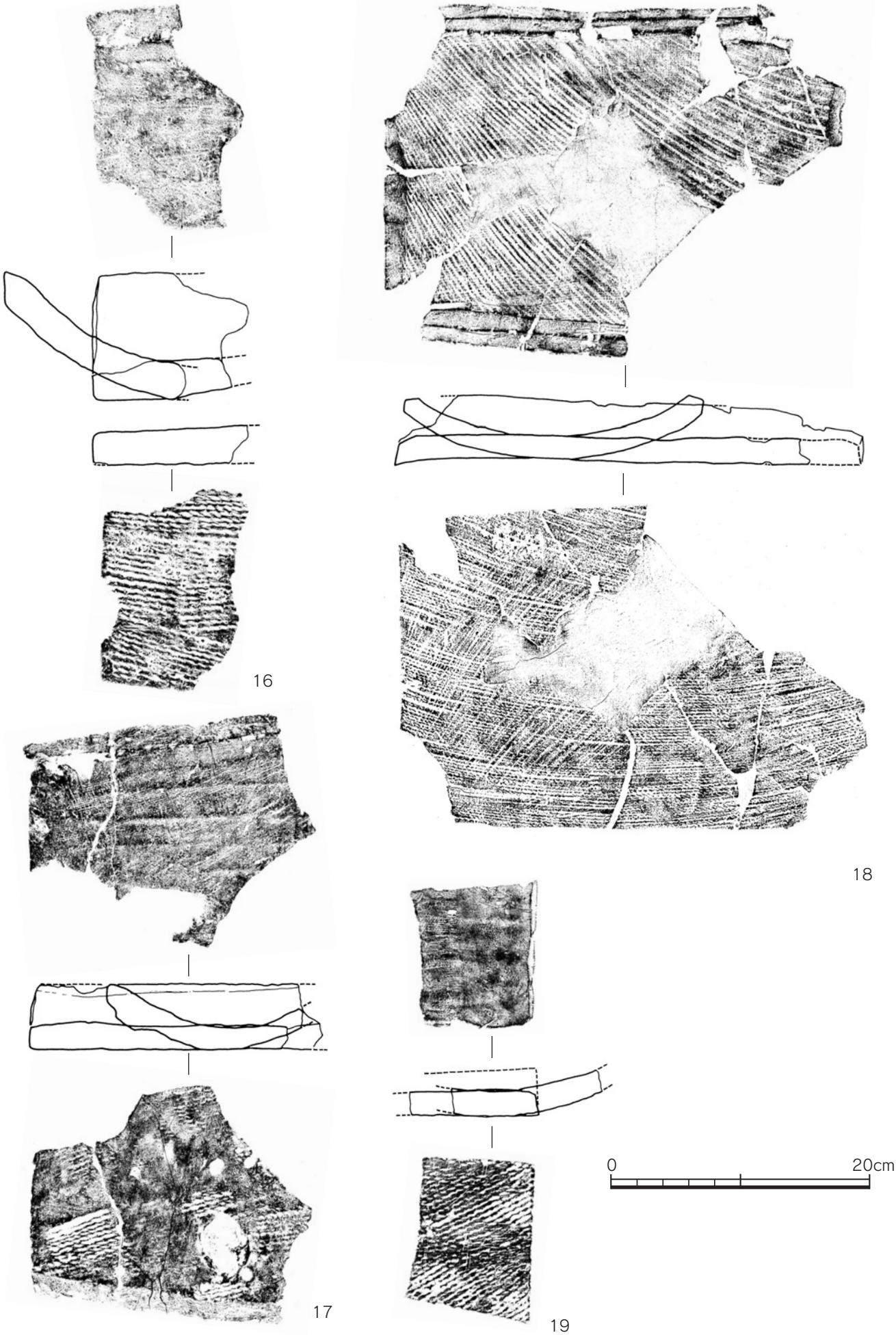


fig.84-9　84SK001出土瓦実測図（3）

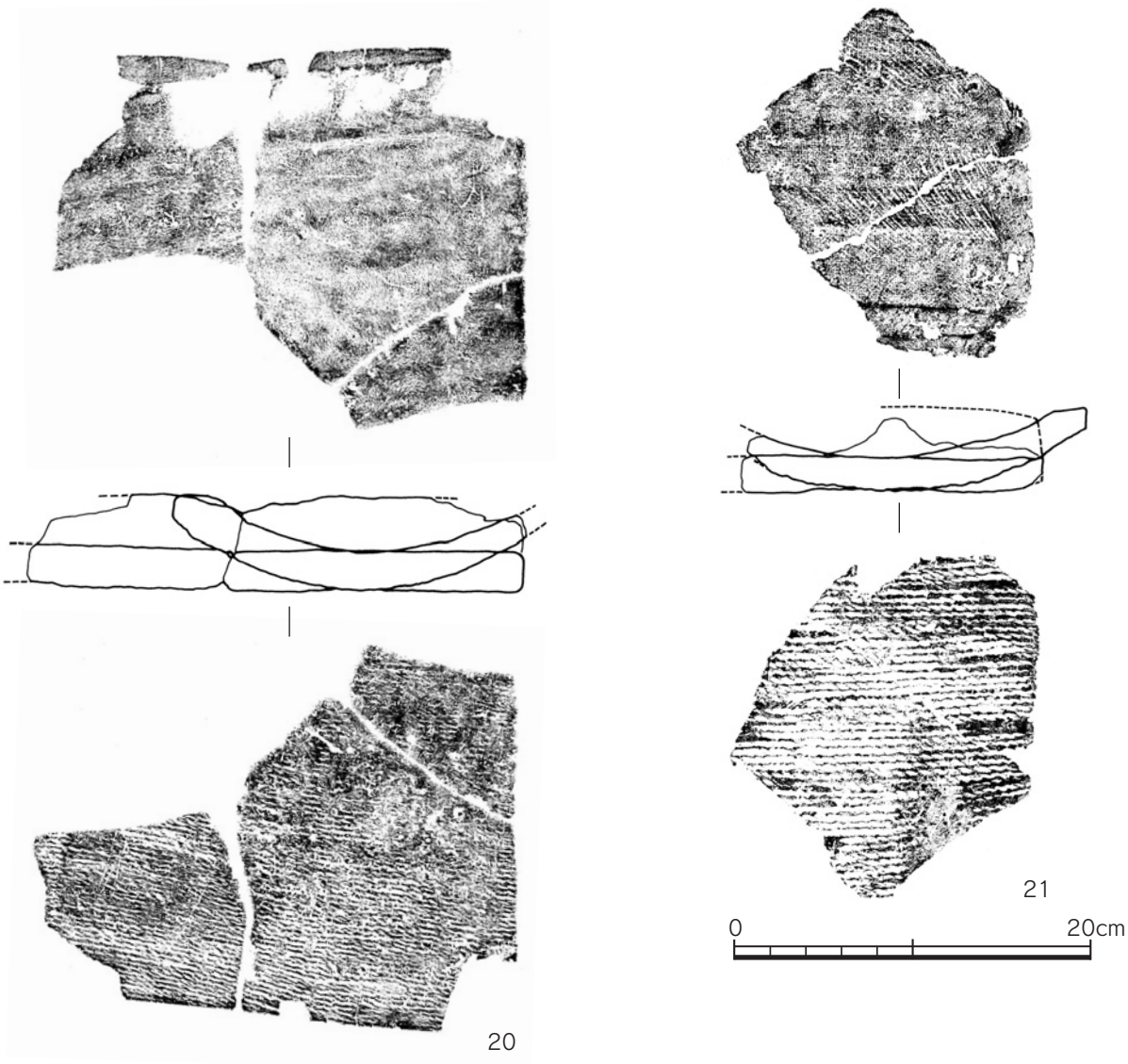


fig.84-10　84SK001出土瓦実測図（4）

を図化している。玉縁部凸面箇所に横方向のナデ痕跡様のものが観察でき、玉縁部屈曲箇所が鋭角に屈曲することから、「カタビキ」の可能性がある。丸瓦凸面部分は、その多くが横ナデにて最終調整されており、下地の縄叩き痕が観察できない場合が多い、しかし少数ながら凸面処理叩き痕跡が観察できるものがあり、残存している痕跡からは10条/3cmのものが多い。粗い叩き条線のものでは７条/3cmのもの（3）、細かいものでは12条/3cmのもの（9）もある。

平瓦（11～21）　軒平瓦が小破片ながら出土している（11・12）。偏行唐草文および鋸歯文、連珠文が観察でき、560型式の範疇で捉えられるものと考えられる。凸面叩きは、格子叩きおよび縄叩きの二者で構成され、後者が多い。側面処理は、図化したものに側縁傾斜角度が円弧中心へ向かうA処理（13）が少なく、垂直に切り落とされるB処理（14～21）のものが多いという報告をしているが、破片数量法による計測では前者が69％程度を占める結果を得ている。側面調整方法に関しては、ヘラ切りのみのものは無く、丁寧な再処理を行うもののみで、凹面側を面取りするもの（【B3a】16～21）が多い。縄叩きの精粗については粗いものが多い傾向にある。

84SK002出土遺物（fig.84-6）

須恵器

蓋３（6）　天井部から口縁部に関する破片資料で、つまみの有無については観察できなかった。天井部外面処理は回転ヘラ切り未調整で、口縁部成形工程については資料限界から観察できなかった。焼成はやや良好、還元度合いは良好であった。

84SK005出土遺物（fig.84-6）

土製品

紡錘車（7）　完形品で中心部分が黒色化している以外は、茶色系の色調を呈している。前面ナデによって調整されているようで、直径3.7cm、厚さ1.5cm、重量25.7gをはかる。

84SK014出土遺物

最上層出土遺物（84SK014）、上層出土遺物（84SK014上層）、下層出土遺物（84SK014下層）の三つに区分される。最上層は土坑に伴うものではなく、土坑堆積土の沈下によって生じた窪みを含めて上位に堆積した包含層の取り残しと判断される。したがって、土坑埋没時期を決定するには、最上層出土遺物は適当でないことになる。

84SK014最上層出土遺物（84SK014 fig.84-6・11～14）

土師器

小皿a1（8）　復原口径8.8cm、器高1.1cm、復原底径7.4cmを測り、底部外面の処理は、回転ヘラ切りである。底部がやや押し出されるような形状をとる。

鉢（9・11）　両者とも精製のものであるが、9がより精製のものになる。9は口縁端部を上方へ立ち上げるもので内面は器面磨耗のため調整不明確であるが、外面は丁寧な回転ナデによって仕上げられている。11は、内外面ともに回転ナデによる成形調整痕跡が残り、外方へ口縁部を外反させる。

黒色土器A類

鉢（10）　口縁部のみの破片資料のため、全形は不明であるが、口縁部形状から「鉄鉢」形を取るものと考えられる。内面および口縁部外面を黒色化しているが、器面磨耗のため調整痕跡は定かではない。

石製品

用途不明製品（12）　小形の柄杓状を呈するもので、削りによって成形されている。材質は滑石で灰色系の色調を有している。

瓦

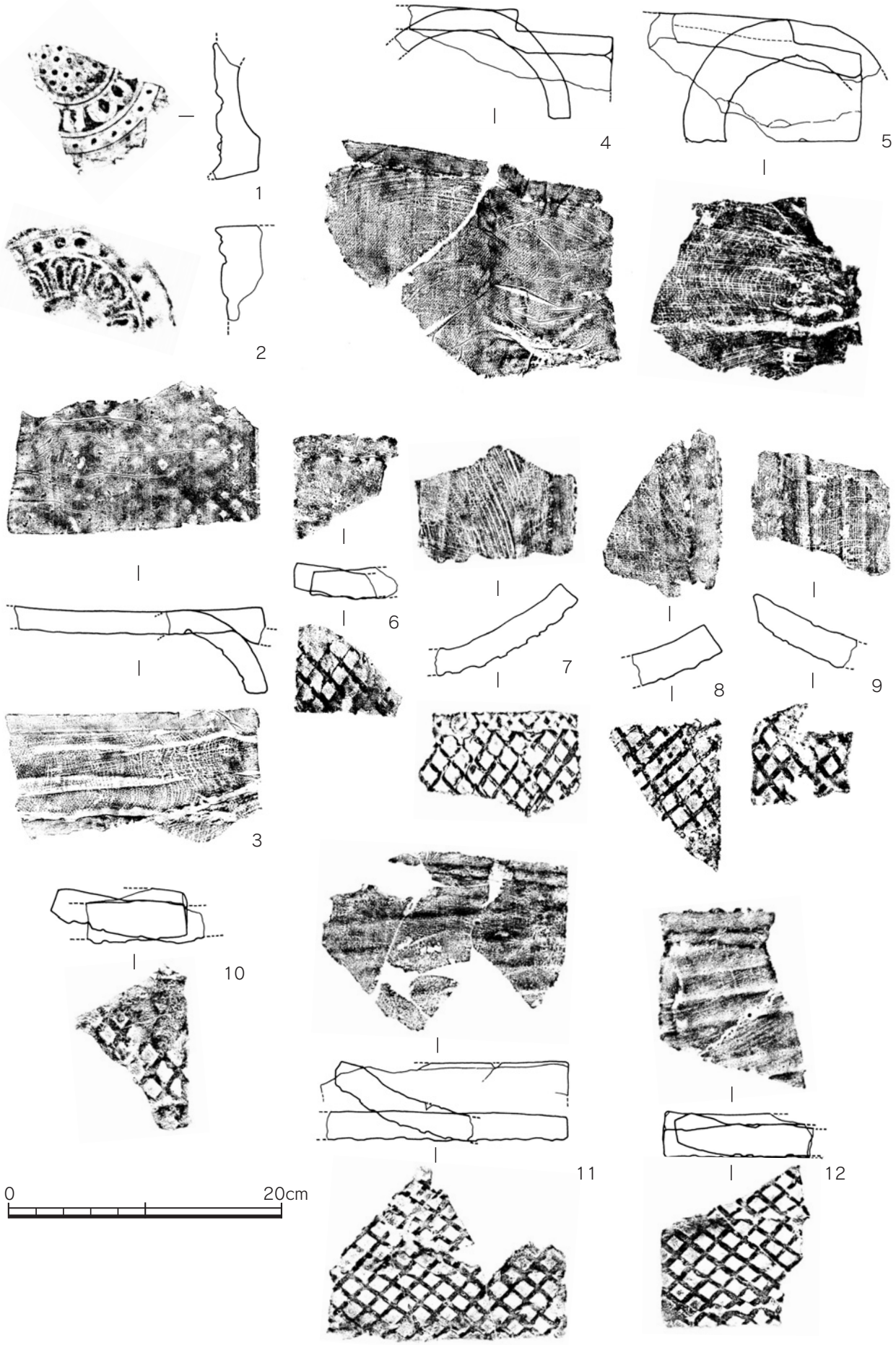


fig.84-11　84SK014出土瓦実測図（1）

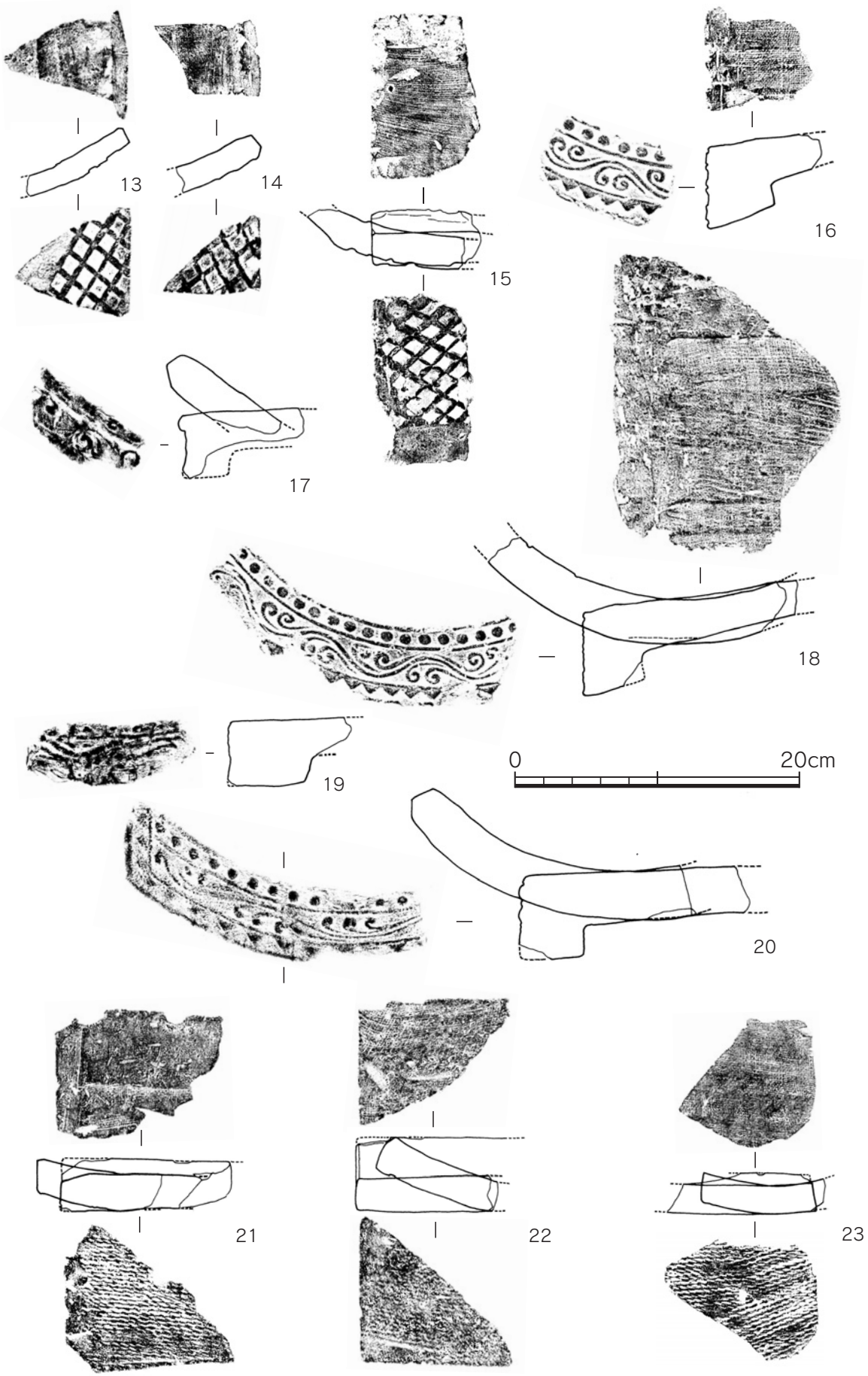


fig.84-12　84SK014出土瓦実測図（2）

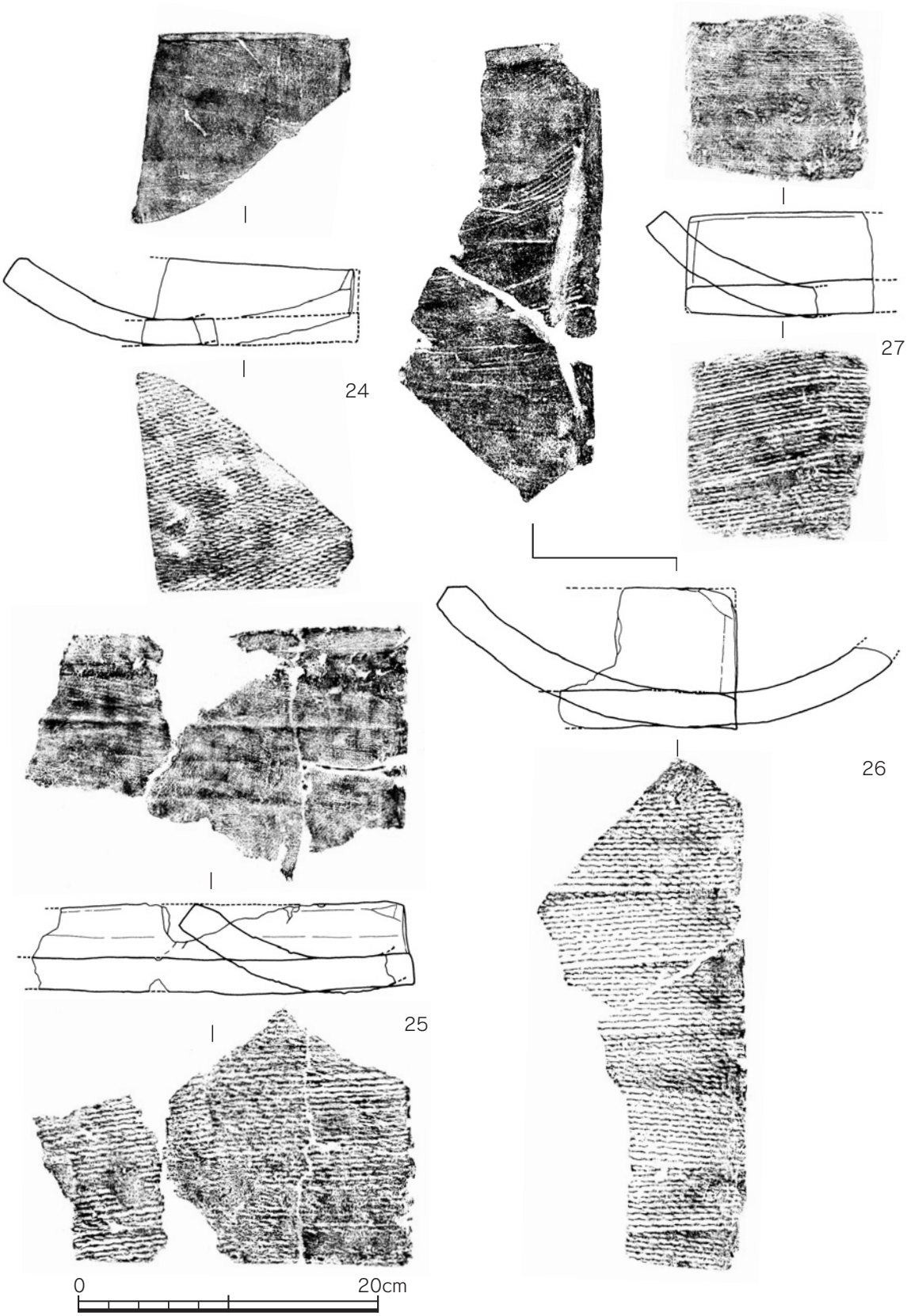


fig.84-13　84SK014出土瓦実測図（3）

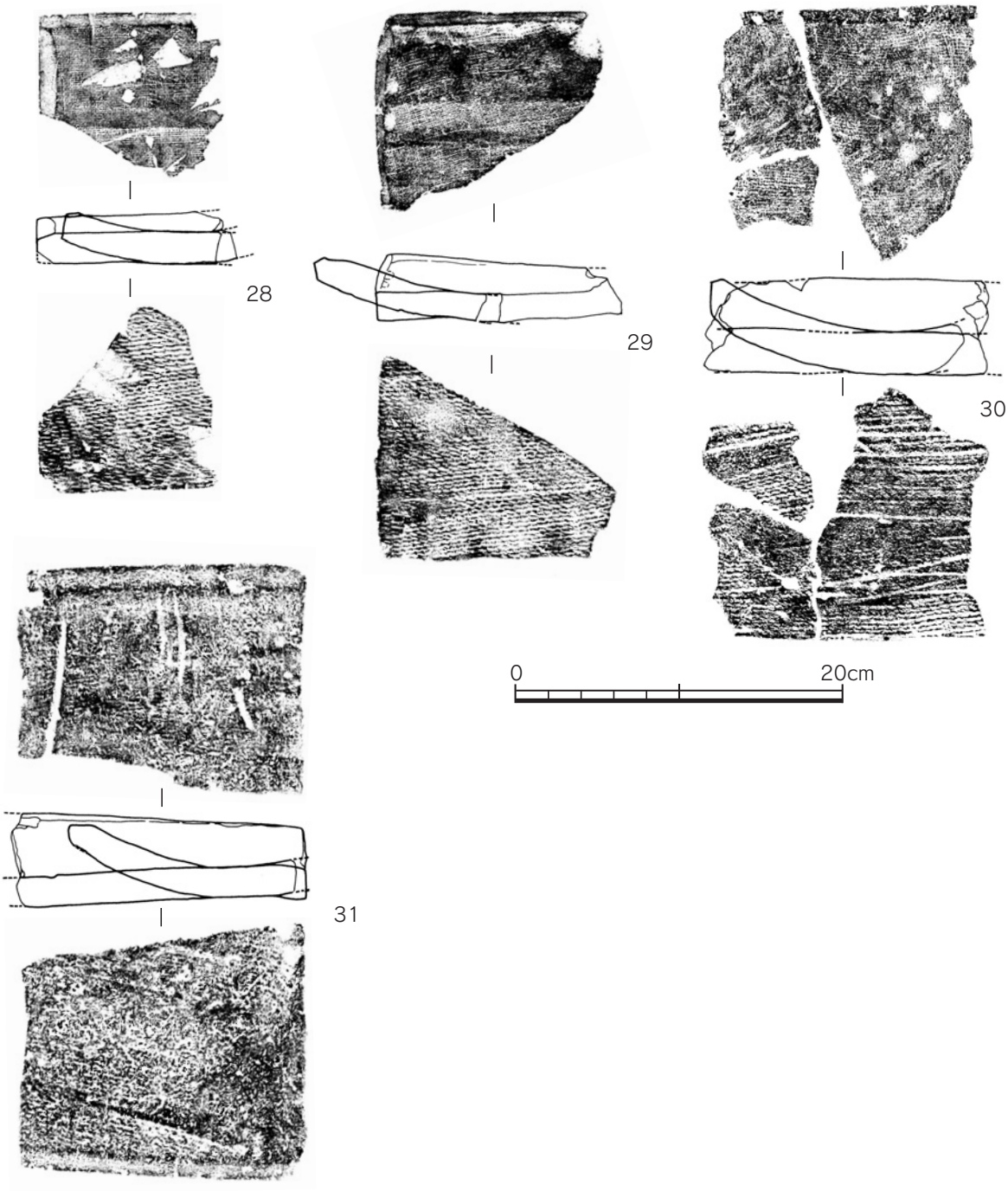


fig.84-14　84SK014出土瓦実測図（4）

丸瓦（１～５）　丸瓦は平瓦に比して極めて少ない状況である。当該土層の取扱い自体が、84SK014上面の窪みに堆積した包含層の取り残しと判断していることから、瓦種別の傾向把握にどれほど役に立つのかは些か心許ない。軒丸瓦は、破片資料ながら１および２があり、１は外縁を内向鋸歯文で構成される292型式に、２は残存率が悪いため、型式認定が困難である。３～５は、凸面を磨り消しによって叩き痕跡が観察し難いものの、３は格子叩き痕跡が僅かに残る。側面処理は３・４は、ヘラ切り後丁寧に処理するもの（【c0】３・４）、ヘラ切り後に凹面側を面取りするもの（【c1】５）がある。玉縁成形が観察できるもので技法が確認できるものでは、丸瓦へ肥厚するように粘土を貼付するもの（【C1】３）のみがある。

平瓦（６～31）　平瓦には、凸面を格子叩きで調整するもの（６～15）、縄叩きで調整するもの（21～31）の二者があり、後者が多い。軒平瓦では老司式とされる560型式のものが多く（16・18）があり、鴻臚館式とされる635型式（17）、また唐草文が3条描かれているもので大宰府型式では未分類と判断されるもの（20）がある。19については破片状態であることから、型式認定はできなかった。側面処理は、側縁の傾斜角度が円弧の中心へ向かうもので、平面的にきれいに削り調整し、面取りしないもの（【A2a】６～８、21～23、27）、平面的にきれいに削り調整し凹面側を面取りするもの（【A2b】24～28）側縁の傾斜がなく垂直に切り落とされるもので、平面的にきれいに削り調整し、面取りしないもの（【B2a】９、10）、凹面側を面取りするもの（【B2b】29、30）平面的にきれいに削り調整し凹面側を幅広に削り、面取りしないもの（【B3a】31）、凹面側を面取りするもの（【B3b】11・12）がある。残存状況が悪くBのみ判別できるもの（13）、不明なもの（14）。縄叩きの精粗については、資料等級から判断して数量化していないが、印象として粗いもの（５～８条/3cm）が多い。

84SK014上層出土遺物（fig.84-6・15～19）

須恵器

蓋（13～15）　つまみまでを残す蓋c3は（13）のみで、あとは口縁部のみの破片資料である。口縁端部はいずれも３工程によって調整され、天井部外面は回転ヘラ削りによって調整される。つまみ形状は扁平なもので、つまみ成形のための上部からの外圧によって、天井部は下方へ窪んでいる。

小皿a（16）　口径11.3cm、器高2.4cm、底径7.8cmを測り、底部外面の処理は回転ヘラ切りによって処理する。内外面ともに回転ナデにより仕上げられており、外面に灰茶色と暗茶灰色の焼き斑が観察できる。還元はやや不良。

坏a（17）　口縁部を欠損する個体で、底部から体部への移行形状に丸みを有し、底部外面は回転ヘラ切り痕跡を残す。焼成はやや不良、還元度はやや良好であった。底部から体部への移行箇所に指頭圧痕跡をとどめている。

坏c（18）　先の坏aに高台を貼付したもので、内端を接地する。底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

壺（19）　底部を欠損しする個体で、器高が判然としないが、推定口径13.4cm、残存高17.4cmを測る。体部外面上位は、回転ナデにより調整しているが、体部外面下位は叩き痕跡をとどめている。同様に内面下位に当て具痕が観察できる。

甕（20）　体部下位の破片資料で、外面は平行叩き痕跡、内面は下位が平行当て具痕、上位には同心円当て具痕が観察できる。

土師器

坏c×皿c（21）　底部のみの破片資料のため、器種特定には至らない。外端を接地する高台形状を有しており、調整痕跡に関しては器面磨耗のため不明。

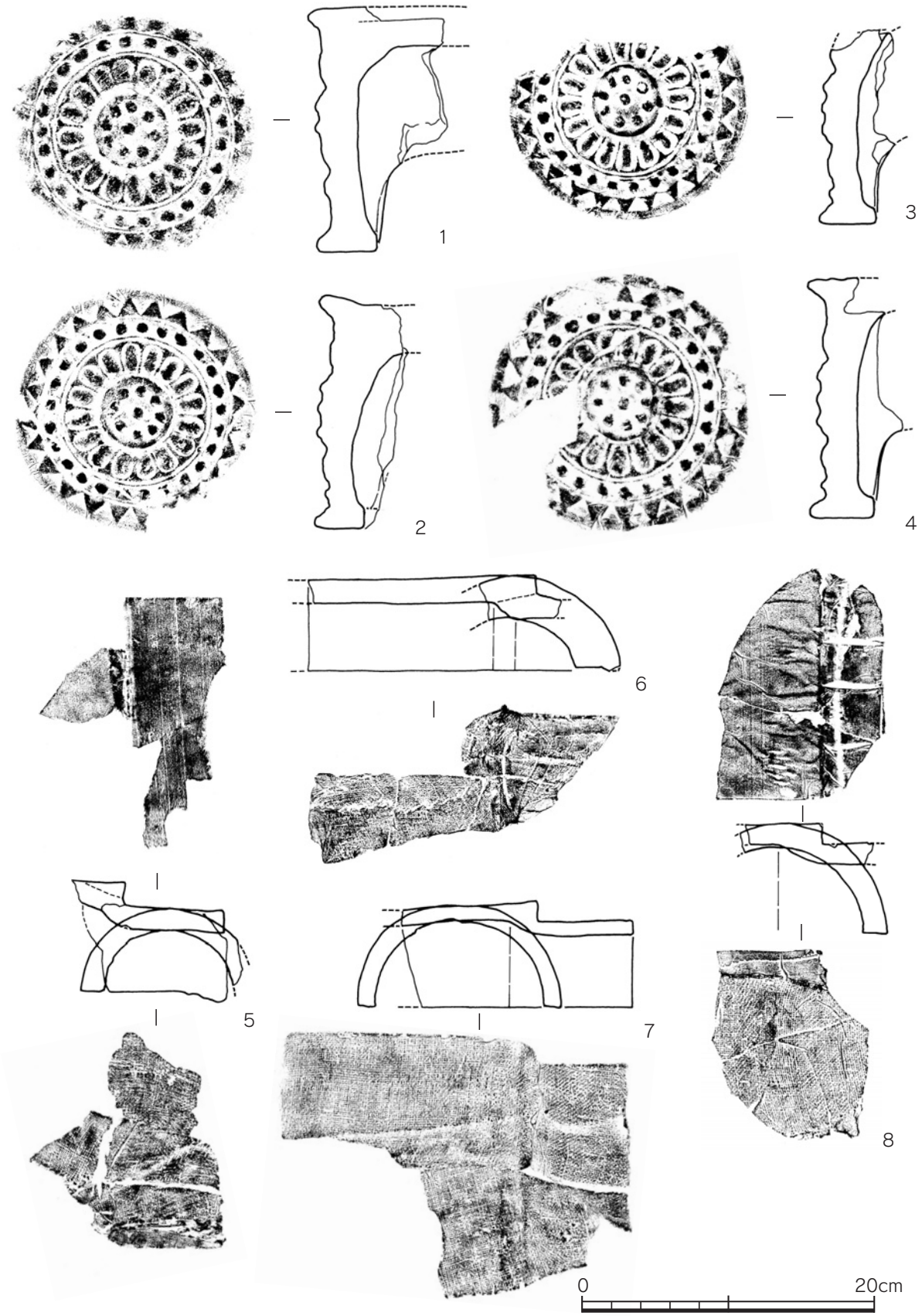


fig.84-15　84SK014上層出土瓦実測図（1）

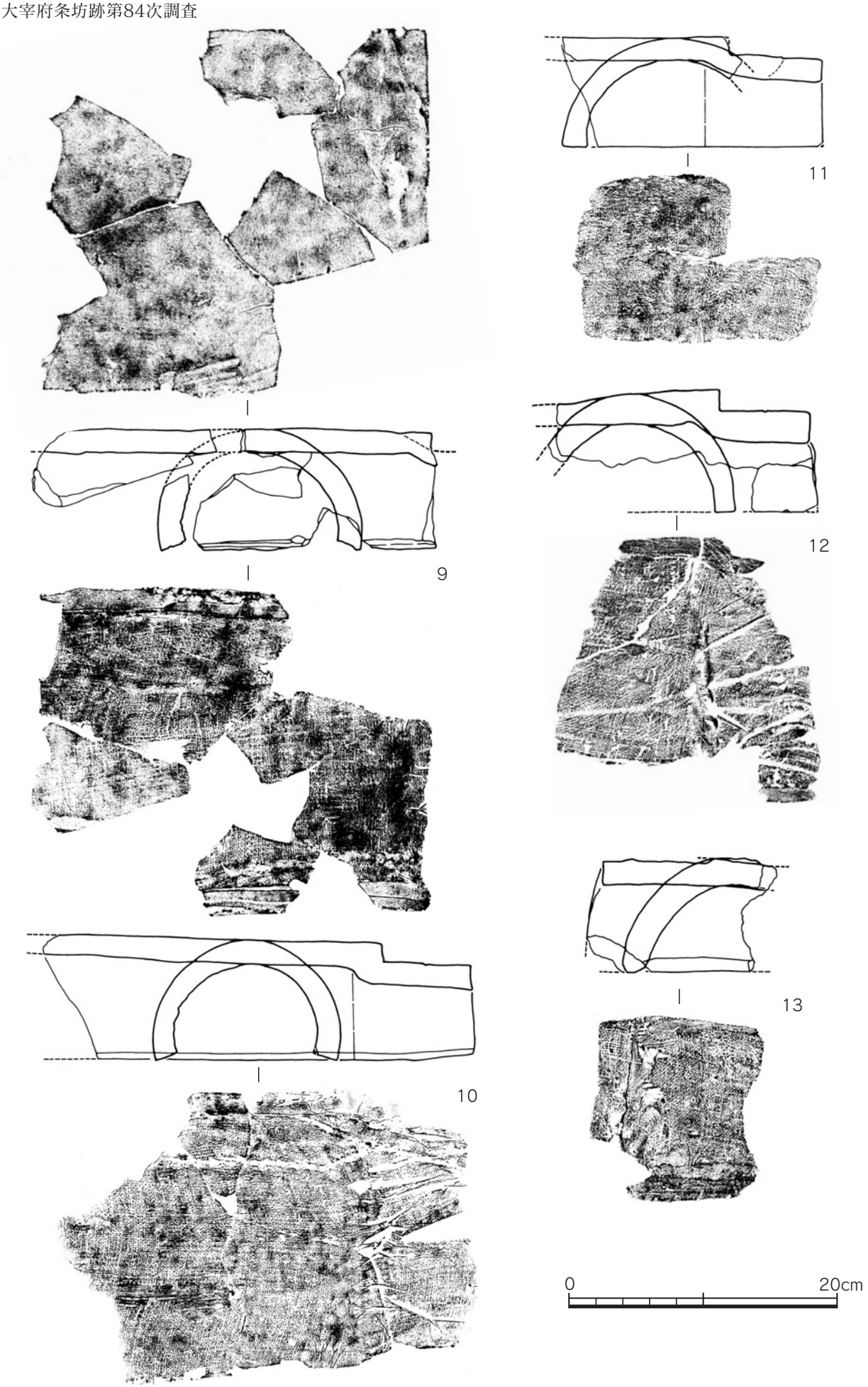


fig.84-16　84SK014上層出土瓦実測図（2）

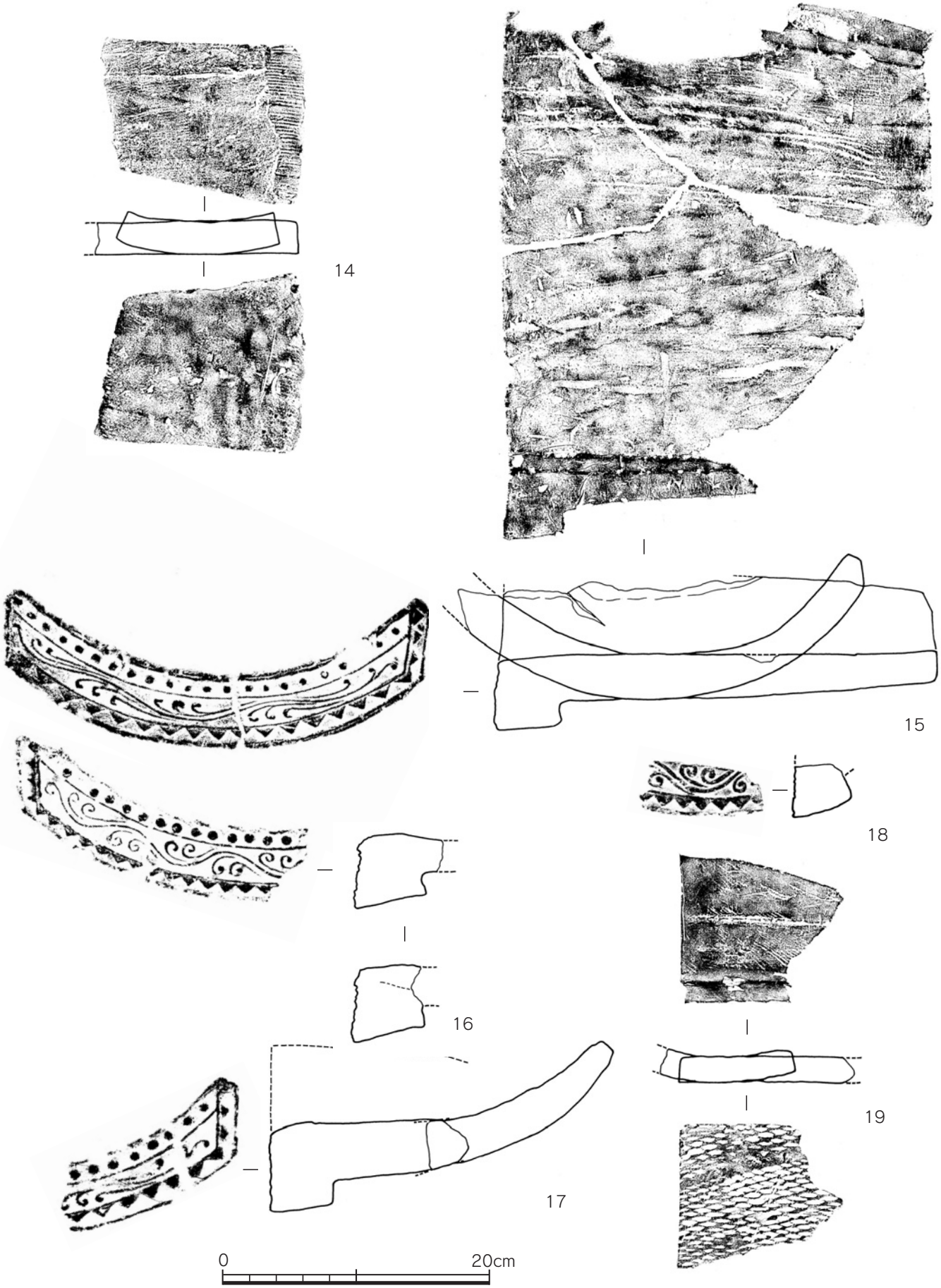


fig.84-17　84SK014上層出土瓦実測図（3）

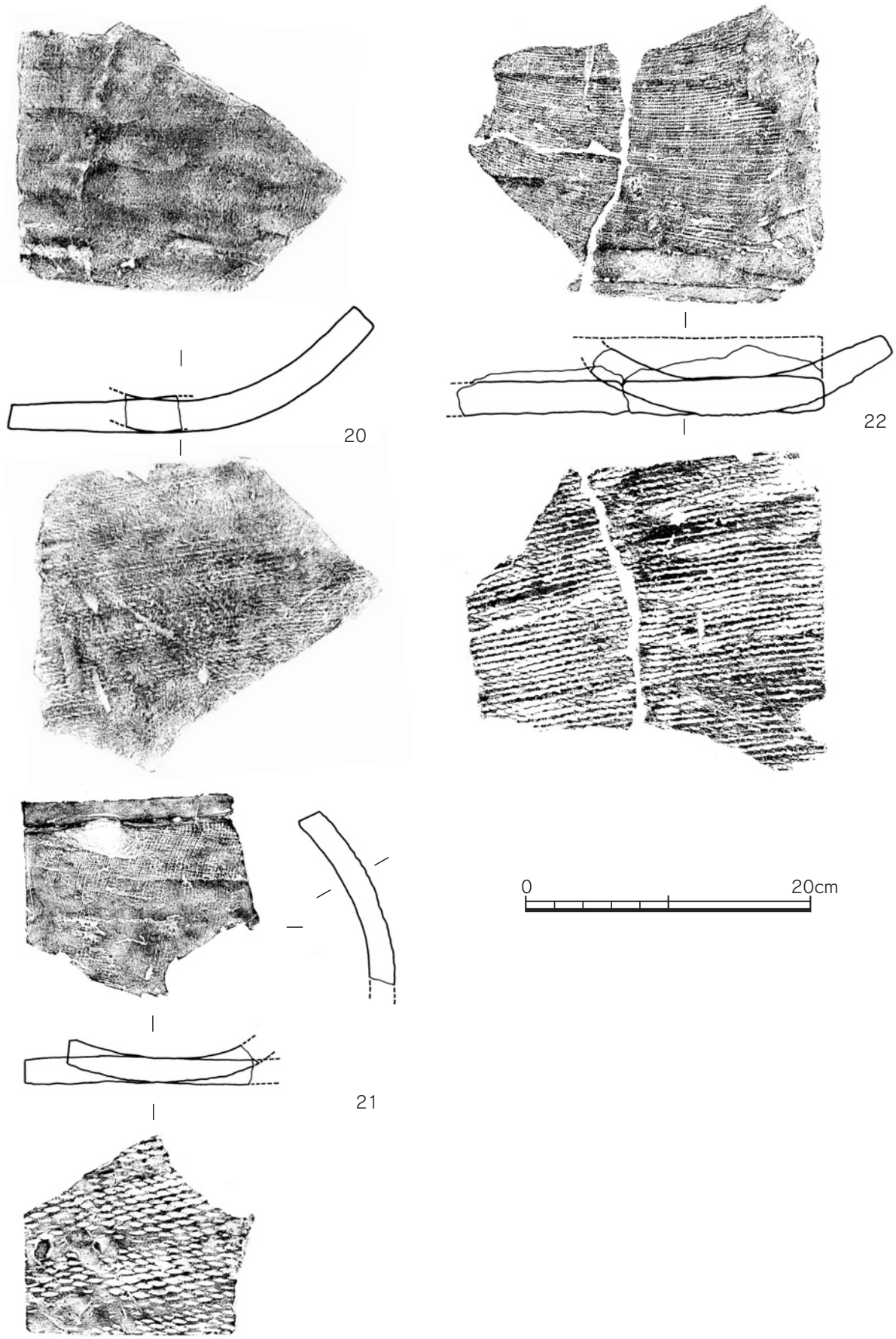


fig.84-18　84SK014上層出土瓦実測図（4）

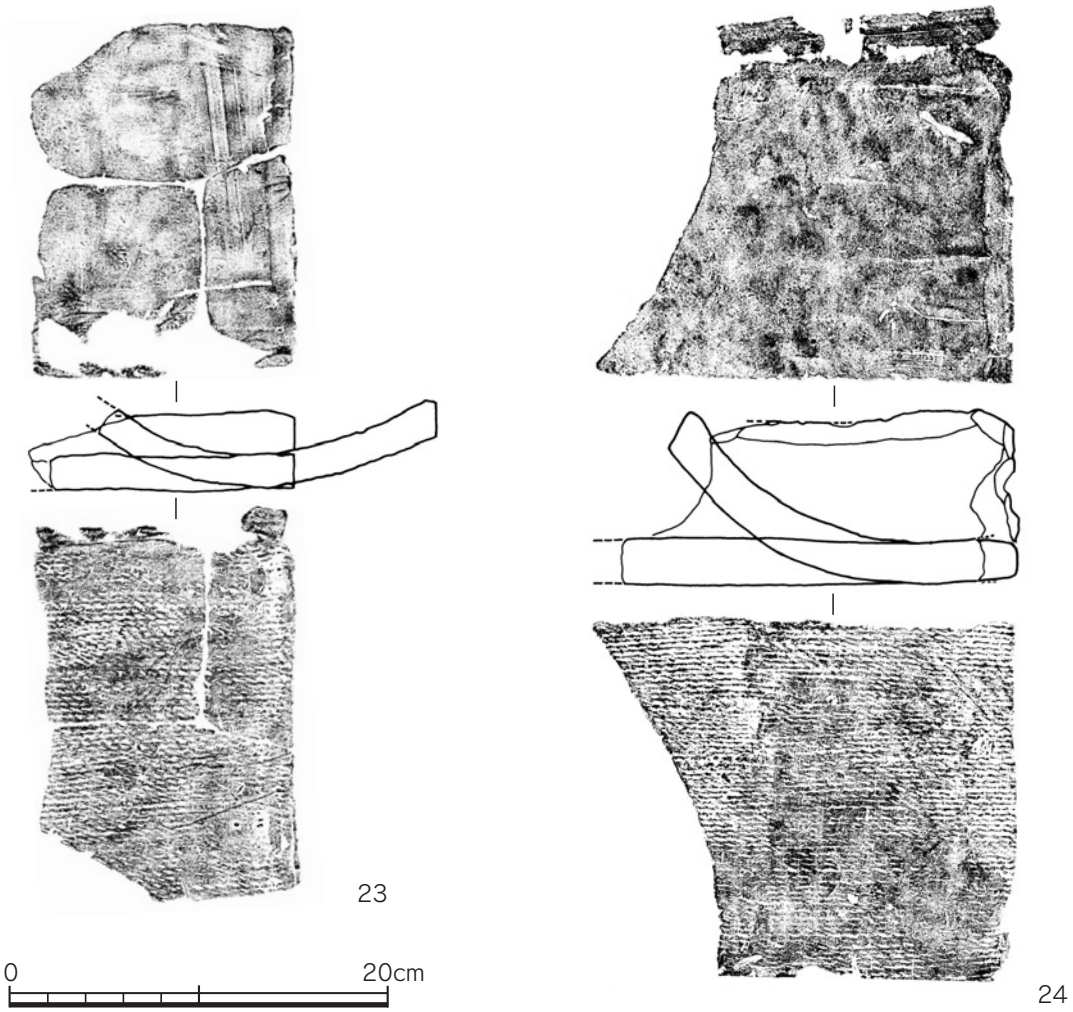


fig.84-19　84SK014上層出土瓦実測図（5）

瓦

丸瓦（１～13）　図示した軒丸瓦は、すべて大宰府型式291型式と考えられる個体群で、瓦当形状は全て同じである。他の丸瓦は、側面処理がヘラ切り未処理のもの（【a0】５～７、９）、ヘラ切り後丁寧に調整するもの（【c0】８、10～12）、ヘラ切り後に凹面・凸面両方を面取りするもの（【c3】13）の三種がある。玉縁成形法が観察できるものでは、玉縁部を丸瓦へ貼付するもの（【B】６）、丸瓦へ粘土を肥厚させるもの（【C1】５、９）の二種がある。凸面の叩き痕跡は、多くの個体で回転ナデによって消されているが、僅かに観察できる個体では縄叩き痕跡が観察できる。図示できていないが、破片資料中に僅かに格子叩きが観察できる個体が出土している。

平瓦（14～24）　図示した軒平瓦は、老司式とされる560型式のもの（16、18）、唐草文が３条描かれ大宰府分類にはないもの（未分類：15、17）の二種がある。なお17は左脇区が欠損している。平瓦成形法では、側縁の傾斜角度が円弧の中心へ向かうもので、平面的にきれいに削り調整し、面取りしないもの（【A2a】14、20）、平面的にきれいに削り調整し凹面側を面取りするもの（【A2b】19、22、23）側縁の傾斜がなく垂直に切り落とされるもので、凹面側を面取りするもの（【B2b】15、23、24）などがある。縄叩きの精粗については、粗いもの（【５～８条/3cm】73%）、細かいもの（【９～12条/3cm】27%）で粗いものが多い。15は外区が欠損しているが、平瓦部分も含めて打ちかきによる欠損と考えられ、屋根へ葺く際の「現場合わせ」の痕跡と考えられる。

84SK014下層出土遺物（84SK014下層　fig.84-20～30）

須恵器

蓋（１～３）　全形が分かるもの（１）、天井部のみのもの（２）、口縁部のみのもの（３）を図化した。つまみ形状は全て扁平なもののみで構成され、口縁部も断面三角形を呈している。口縁端部成形工程が観察できる個体は、全て三工程と考えられる。天井部外面は回転ヘラ削り処理をするもののみ。

坏（４～６）　いずれも体部下位から高台までの破片資料で、外方へ跳ね上げる形状をとるもの（４）、断面台形ないしは正方形を呈するもの（５・６）がある。底部から体部への立ち上がりは強く屈曲するもので、奈良期前期に位置する型式と考えられる。

甕（７）　体部より外方へ強く開く口縁部形態を有し、体部内面の当て具痕跡は、ナデによって丁寧に消している。体部外面の叩き痕跡は、自然釉の付着によって明らかにし難い。

土師器

坏c×皿c（８）　高台部分の破片資料で、全形が分からないため器種特定には至らない。加えて焼成不良のため、高台貼付のための回転ナデ調整は観察できるものの、その他の調整については観察し難い。

甕（９）　甕Ⅱ類に該当するもので、体部から「く」字形に屈曲する個体である。体部内面はヘラ削りによって仕上げている。

瓦

丸瓦（１～23）　図示できる軒丸瓦は３点で大宰府分類の290B型式（１）と291型式（２）の二者である。丸瓦の成形状況が分かる１では、側面処理がヘラ切り後に丁寧にヘラ削りし、面取りを行わないもの【c0】であったが、残存箇所によって、ヘラ切り未処理な部位もあり、分類の認定に疑問を感じた個体であった。丸瓦のみのものは、側面処理がヘラ切り未処理なもの（【a0】４～11）、ヘラ切り後に丁寧にヘラ削りするもの（【c0】12～18、21、23）、ヘラ切り後に丁寧にヘラ削りしかつ凹面側を面取りするもの（【c1】22）、先の１で記載したような部分混在と考えられる個体（【a0×c0】19）がある。また玉縁成形については、形成技法が観察できるもので、丸瓦へ玉縁を貼付するもの（【B】12～17、22）、丸瓦を肥厚するように粘土を貼付するもの（【C1】９～11、20、21）の二者がある。

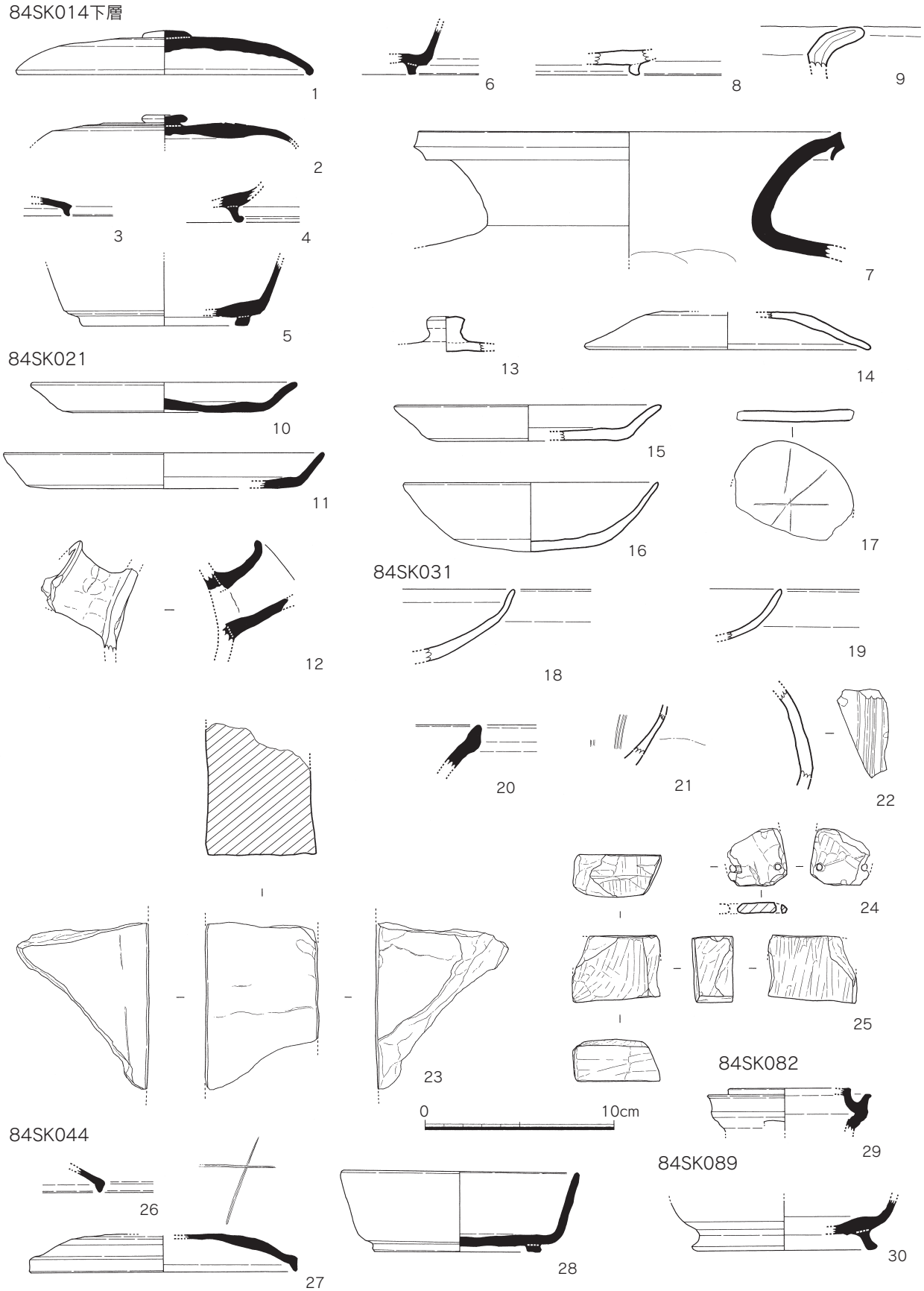


fig.84-20　土坑出土遺物実測図その２（84SK014下層・021・031・044・082・089。1/3）

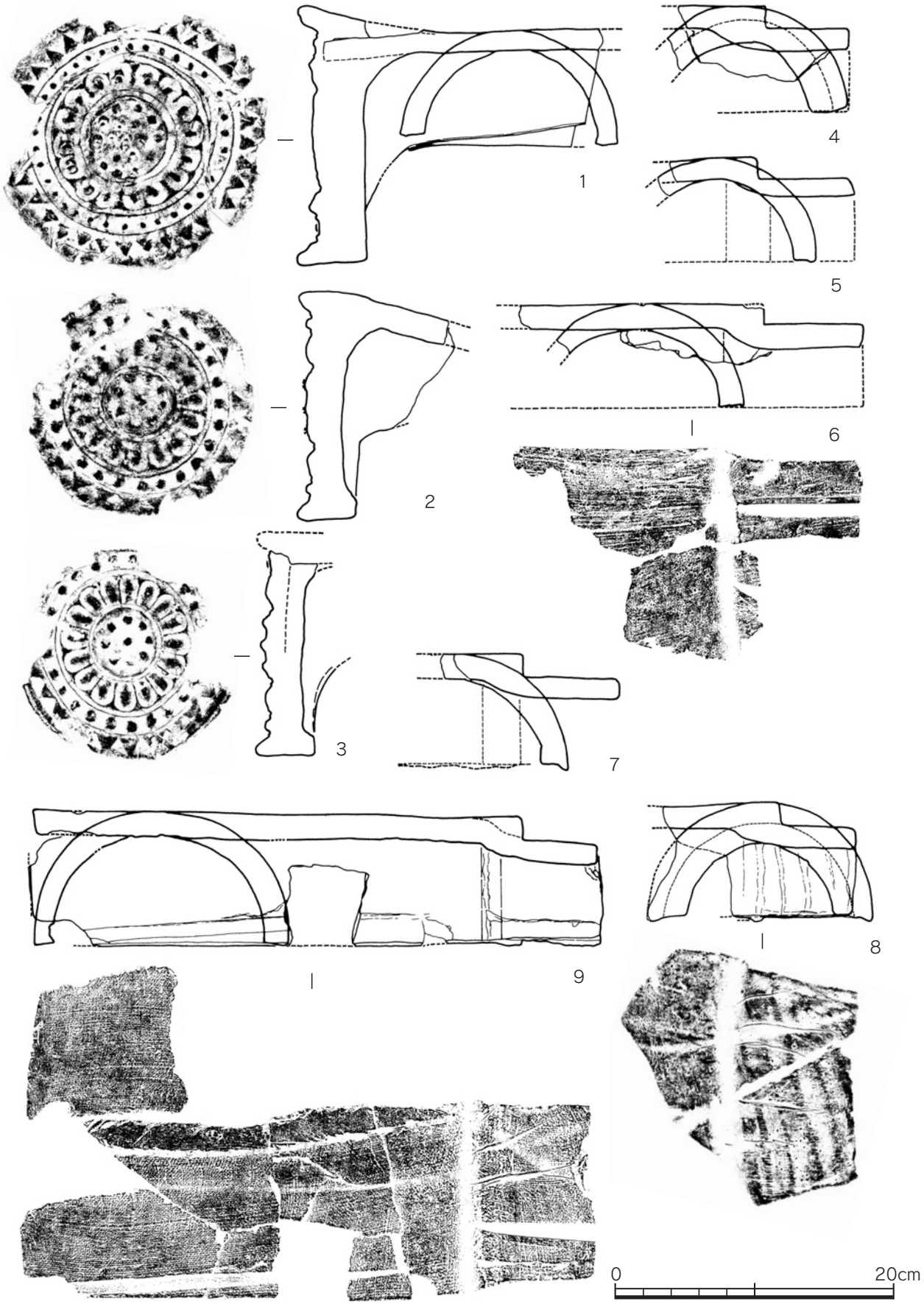


fig.84-21　84SK014下層出土瓦実測図（1）

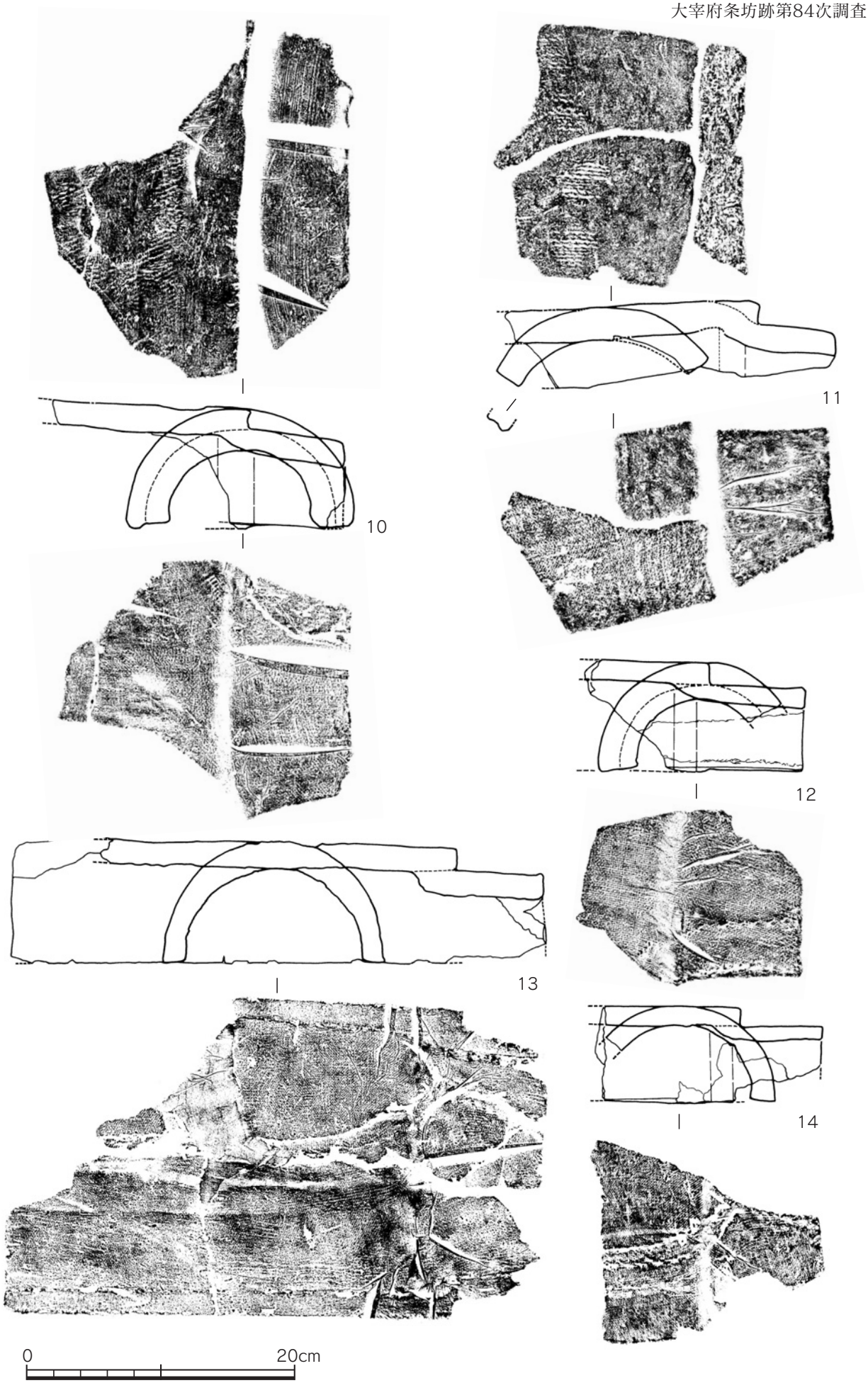


fig.84-22　84SK014下層出土瓦実測図（2）

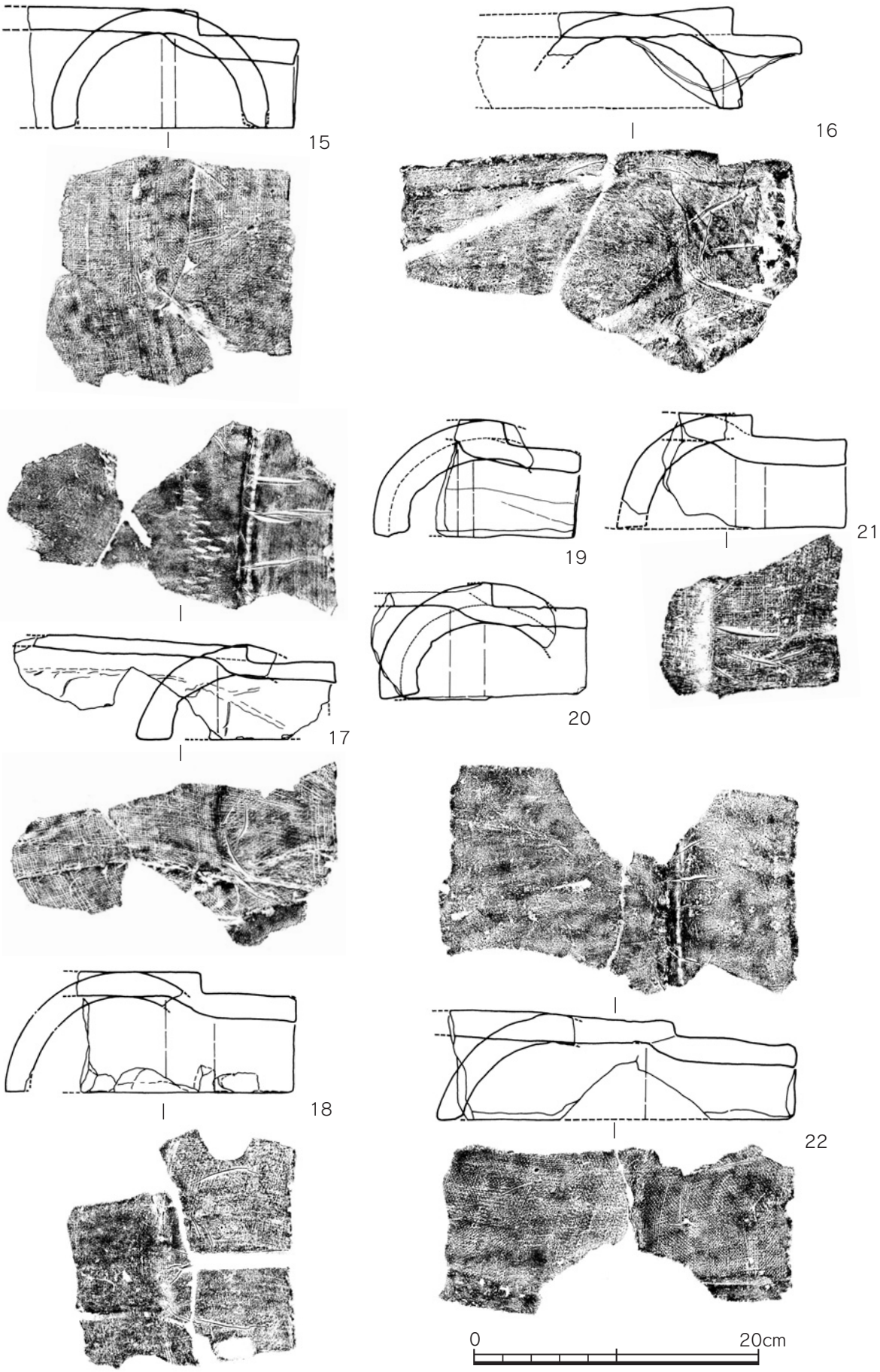


fig.84-23　84SK014下層出土瓦実測図（3）

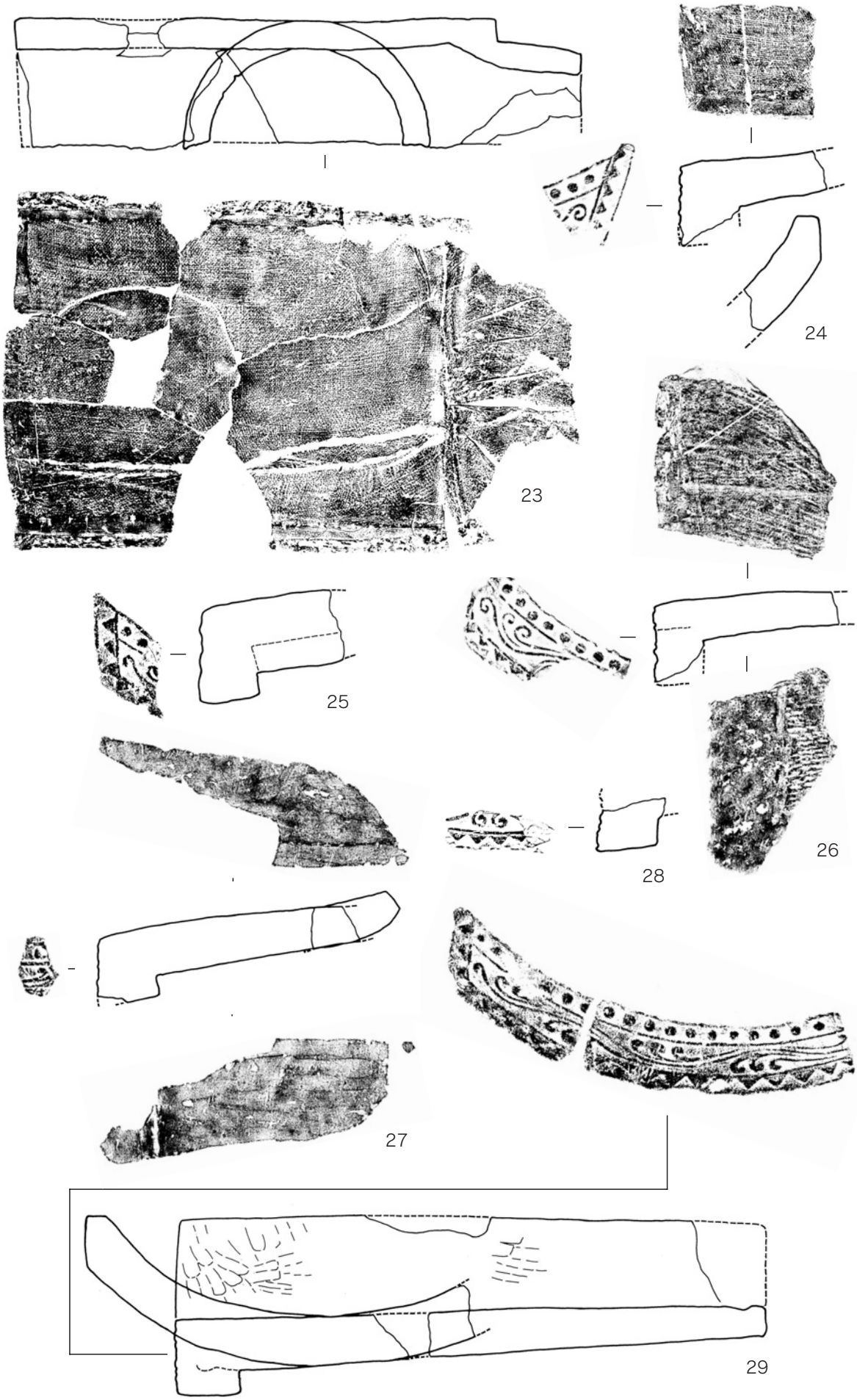


fig.84-24　84SK014下層出土瓦実測図（4）

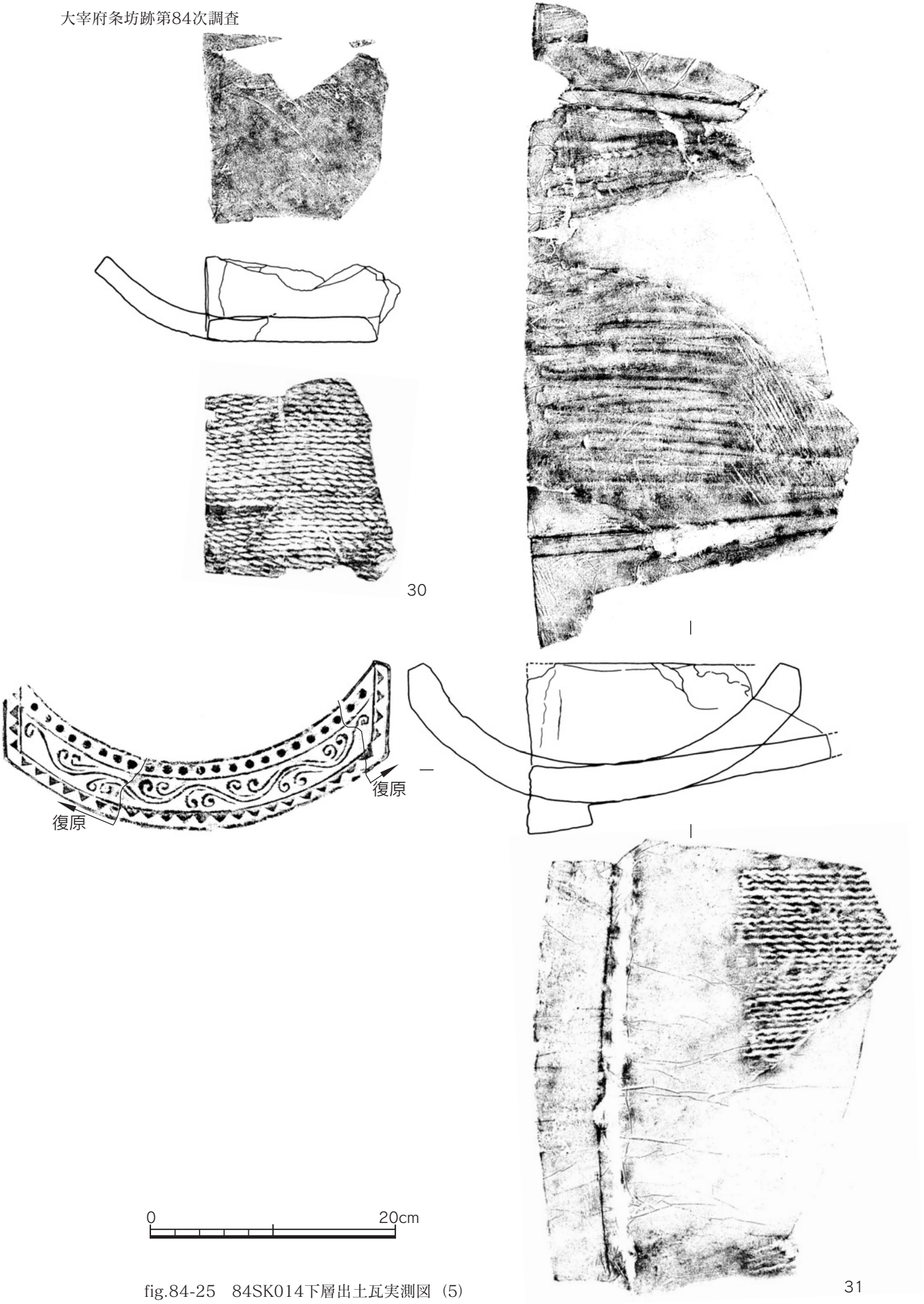


fig.84-25　84SK014下層出土瓦実測図（5）

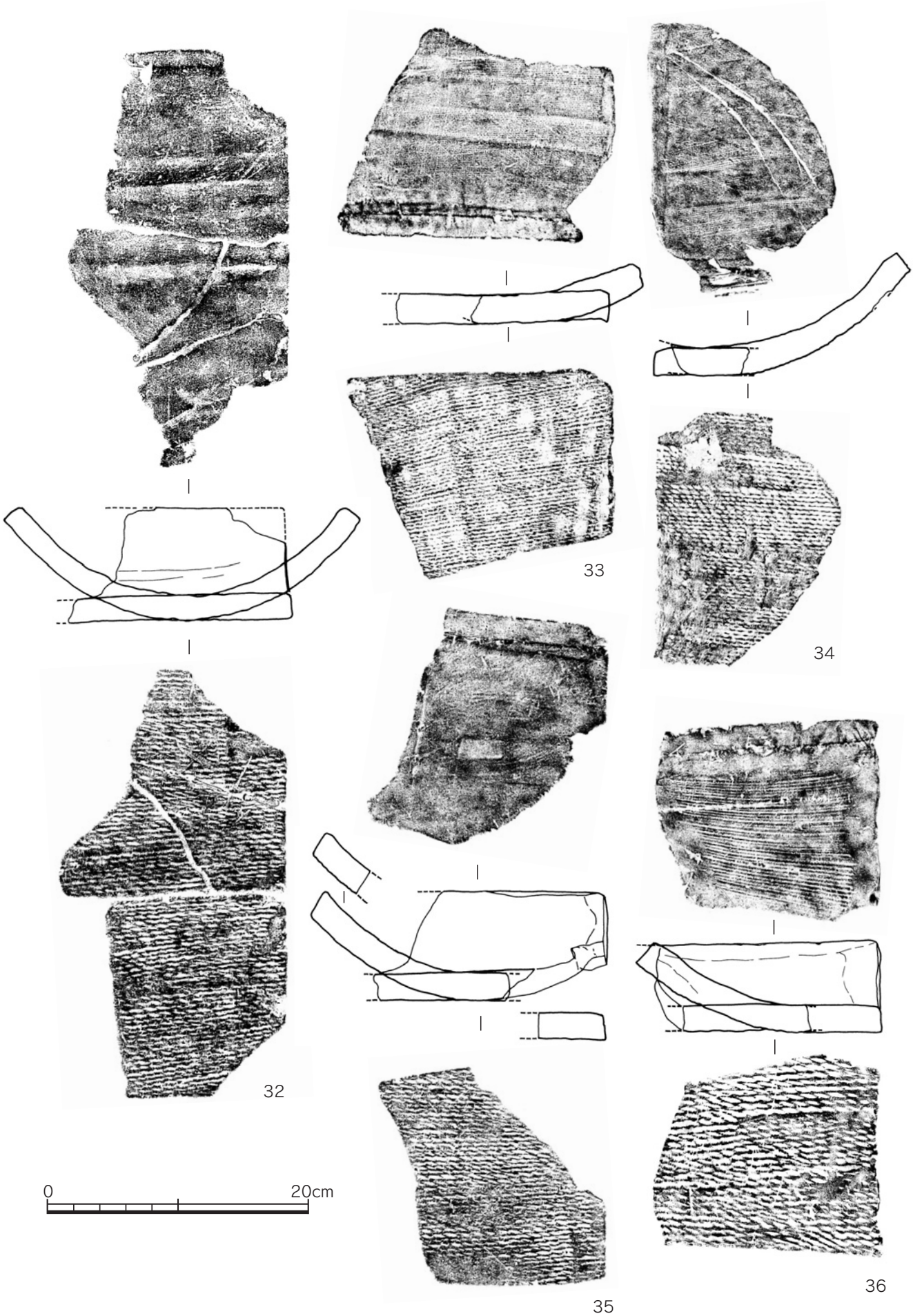


fig.84-26　84SK014下層出土瓦実測図（6）

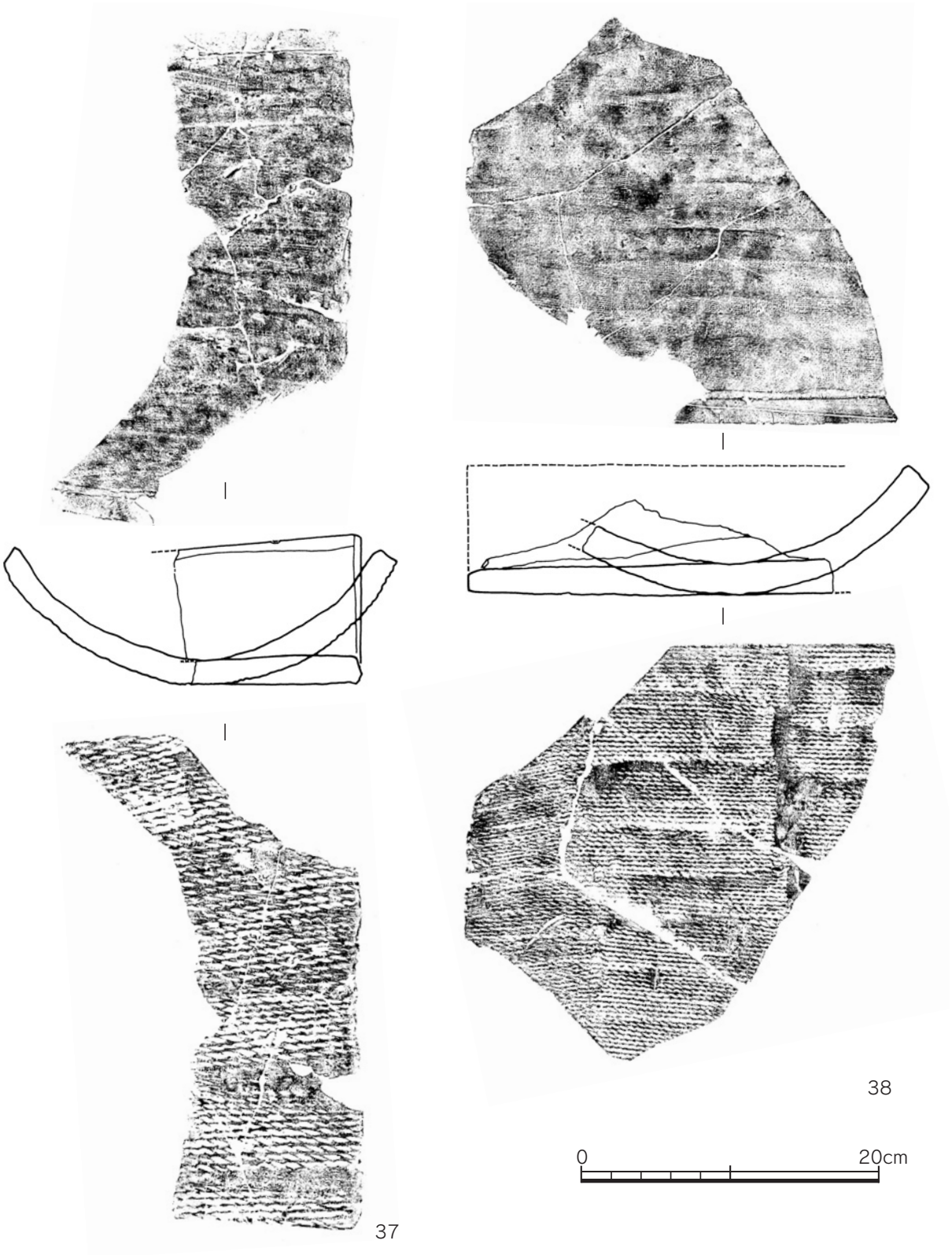


fig.84-27　84SK014下層出土瓦実測図（7）

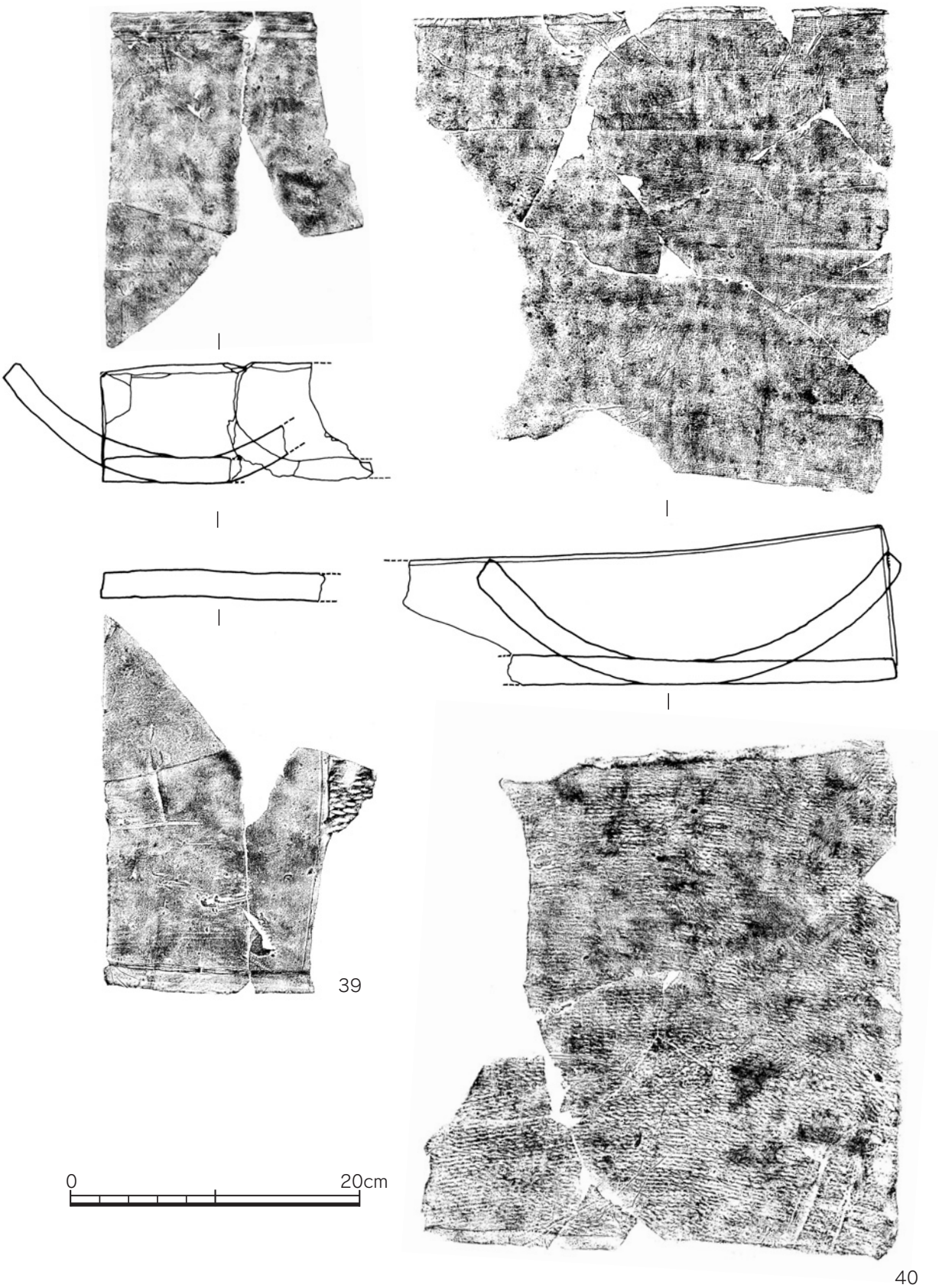


fig.84-28　84SK014下層出土瓦実測図（8）

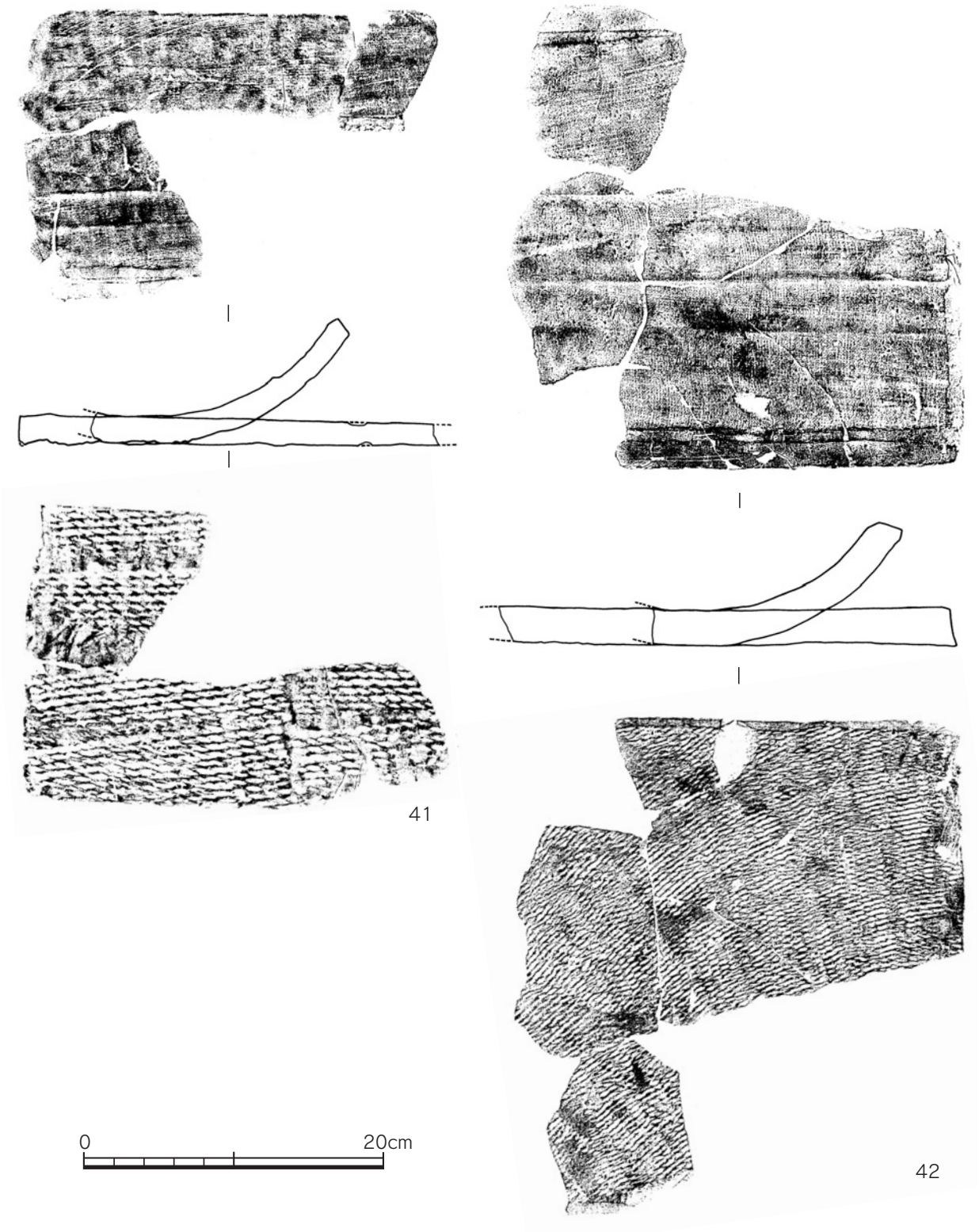


fig.84-29　84SK014下層出土瓦実測図（9）

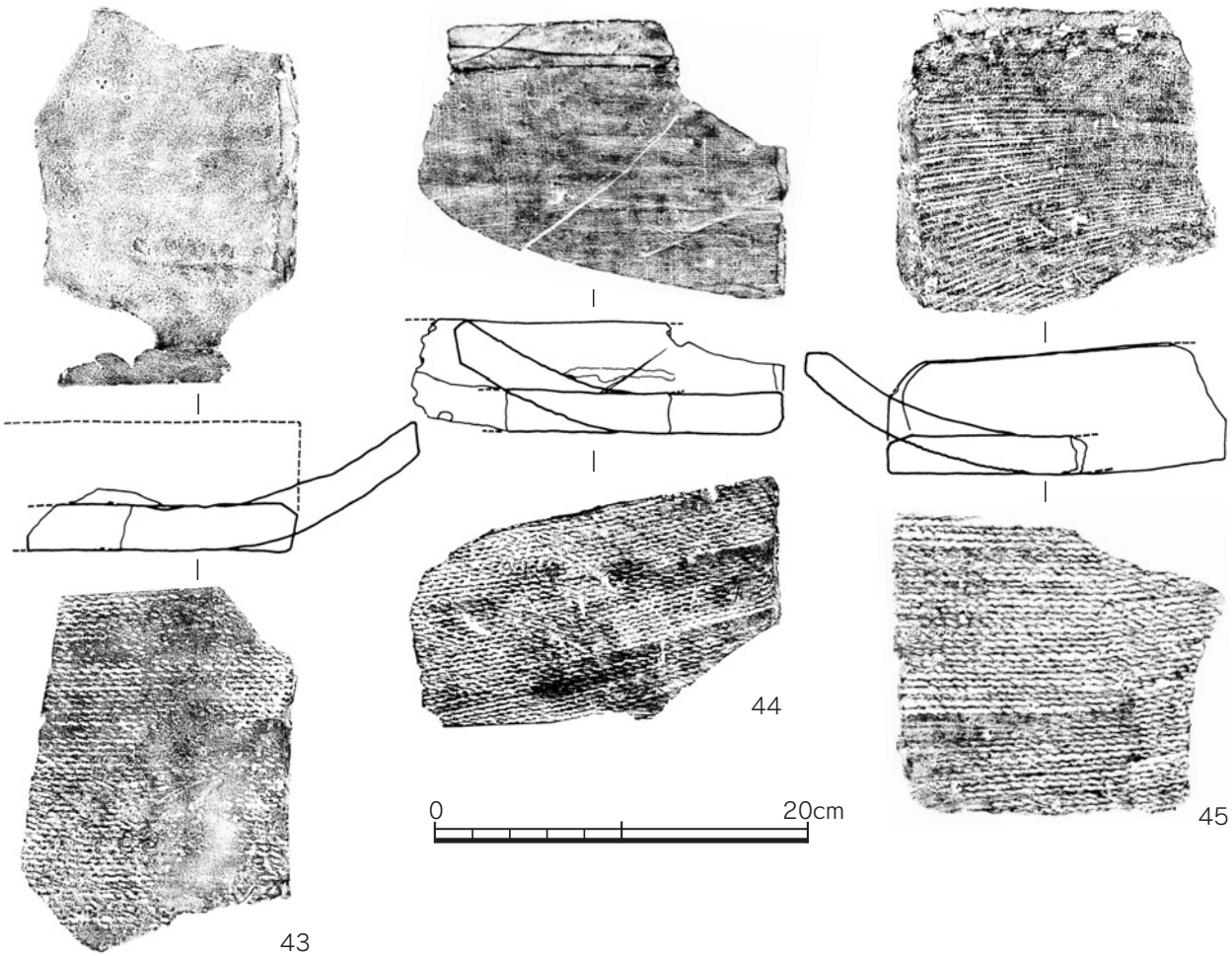


fig.84-30　84SK014下層出土瓦実測図（10）

平瓦（24～45）　図示できる軒平瓦は７点で、大宰府分類の560型式（25、26、31）で、唐草文が三条あり未分類なもの（29）、小破片故に不明なもの（27）がある。平瓦の成形については、側縁の傾斜角度が円弧の中心へ向かうもので、平面的にきれいに削り調整し、面取りしないもの（【A2a】30、32）、平面的にきれいに削り調整し凹面側を面取りするもの（【A2b】33～39、41）、平面的にきれいに削り調整し、凸面側を面取りするもの（【A2c】27）、平面的に丁寧に削り調整し凸面凹面両方を面取りするもの（【A2d】40、42）、側縁の傾斜がなく垂直に切り落とされるもので、面取りをしないもの（【B2a】43）、凹面側を面取りするもの（【B2b】24、44）、凹面側を幅広に削り面取りしないもの（【B3a】29、45）、同様に凹面側を幅広に削り、かつ凹面外側ならびに凸面側の面取りするもの（【B3c】31）などがある。縄叩きの精粗については、粗いもの（【５～８条/3cm】62%）、細かいもの（【９～12条/3cm】38%）で粗いものが多い。29は、平瓦部分に打ちかき痕跡が観察できる。

84SK021出土遺物（fig.84-20・31～33）

須恵器

皿a（10・11）　器高が低い皿で、底部外面の処理は回転ヘラ切り後、粗いナデ調整。

多口瓶（12）　口縁部のみの個体であるが、体部との接合痕跡、個体の傾き具合から多口瓶と判断した。全体の成形は回転ナデ調整によって行われているが、体部との接合付近外面には、指頭圧痕跡が観察できる。

土師器

蓋（13・14）　つまみの破片資料（13）と天井部から口縁部までの破片資料（14）を図示した。つまみ資料はボタン状のもので、焼成不良のため器面調整は不明。天井部から口縁部までの破片資料では、口縁端部を丸く仕上げるもので、蓋４に分類される。口縁端部付近が黒褐色に変色している。天井部外面は器面磨耗のため調整技法に関しては観察できない。

皿a（15）　平底の底部から直線的に外方へ開く体部形状をとる。焼成不良のため成形・調整痕跡は観察できない。胎土中に白雲母細片を多く混入している。

坏d（16）　やや丸底の底部から外方へ大きく開くもので、焼成不良のため成形・調整痕跡が観察できない。形状から坏dと判断した。口縁端部に黒色変色箇所がある。

供膳具（17）　底部のみの破片資料で、胎土特徴から供膳具と判断した。底部外面と考えられる側にヘラを使った直線による記号が描かれている。

瓦

丸瓦（１～４）　図示できた軒丸瓦は２点でる。小破片のため型式認定には至っていない。また丸瓦の側面処理は、ヘラ切り後に調整しないもの（【a0】３・４）のみを図示しているが、他にヘラ切り後に粗く調整するもの【b0】や丁寧に調整するもの【c0】も出土している。凸面叩き痕跡は、縄叩きが観察できる個体はあるものの、単位計測は困難であった。

平瓦（５～17）　図示できる軒平瓦は、老司系と鴻臚館系の二種で破片資料であることから詳細は不明だが、大宰府型式の560A形式（５）、635型式（６）に該当すると考えられる。平瓦の成形については、側縁の傾斜角度が円弧の中心へ向かうもので、平面的にきれいに削り調整し凹面側を面取りするもの（【A2b】８、11、12）、側縁の傾斜がなく垂直に切り落とされるもので、面取りをしないもの（【B2a】13）、凹面側を面取りするもの（【B2b】14）、凹面側を幅広に削り面取りしないもの（【B3a】15、16）などがある。なお７は側縁の傾斜がなく垂直に切り落とされるところからBに分類できるが、凹面凸面両面側を面取りするなど、大脇氏の分類にないものも存在している。凸面の叩きは、縄叩きと格子叩きがある。縄叩きの精粗については、粗いもの（【５～８条/3cm】82.5%）、細かいもの（【９～12条

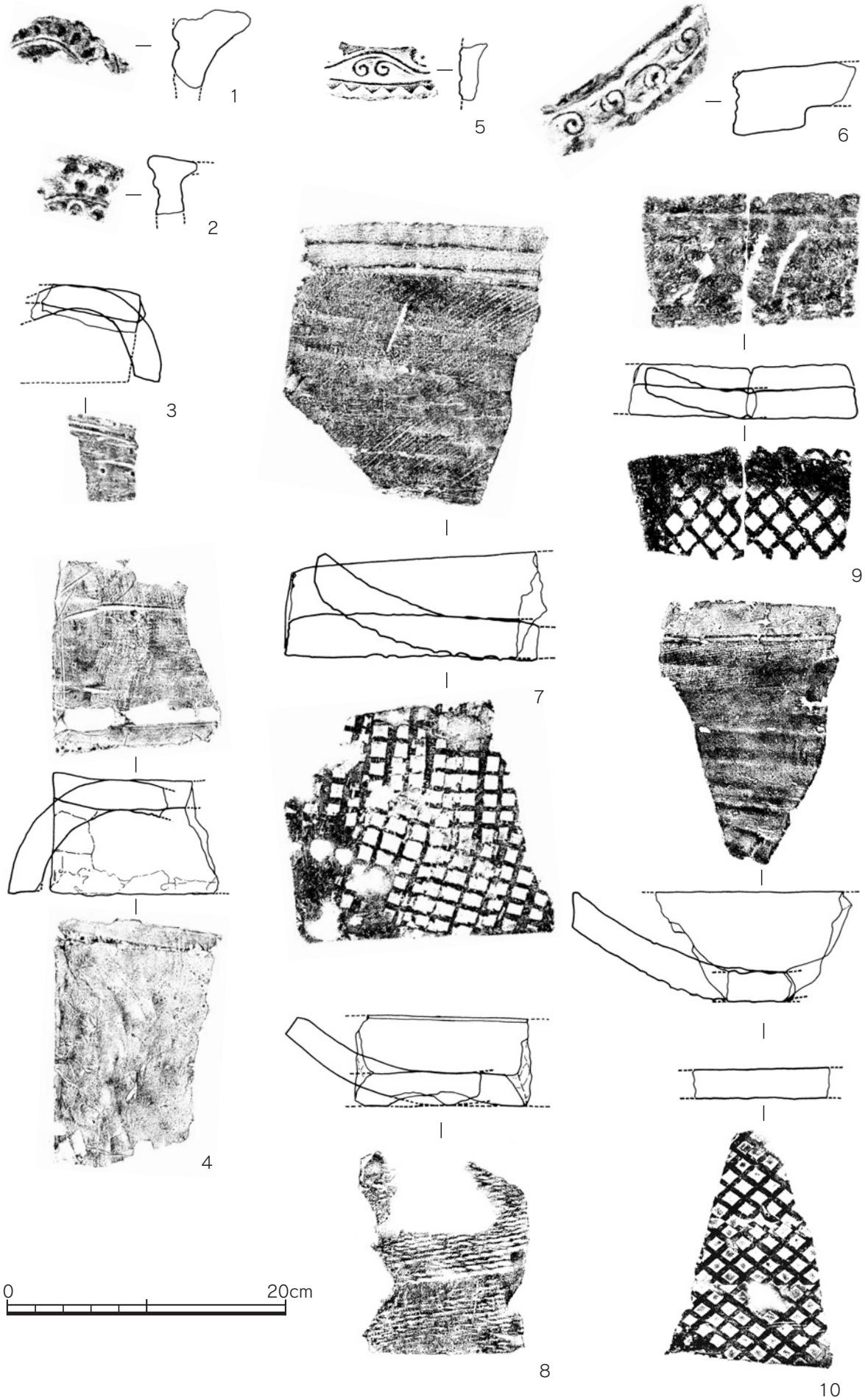


fig.84-31　84SK021出土瓦実測図（1）

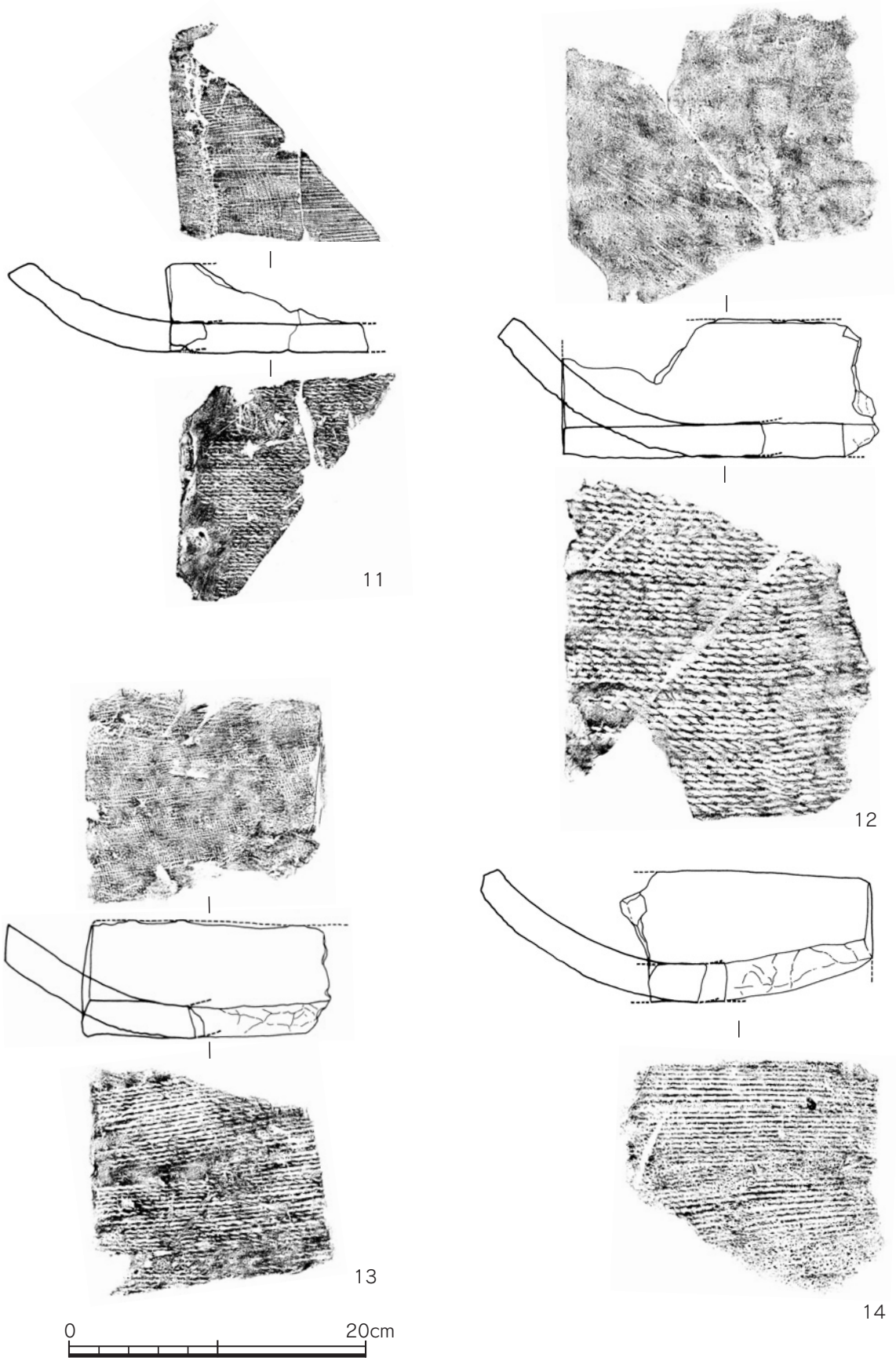


fig.84-32　84SK021出土瓦実測図（2）

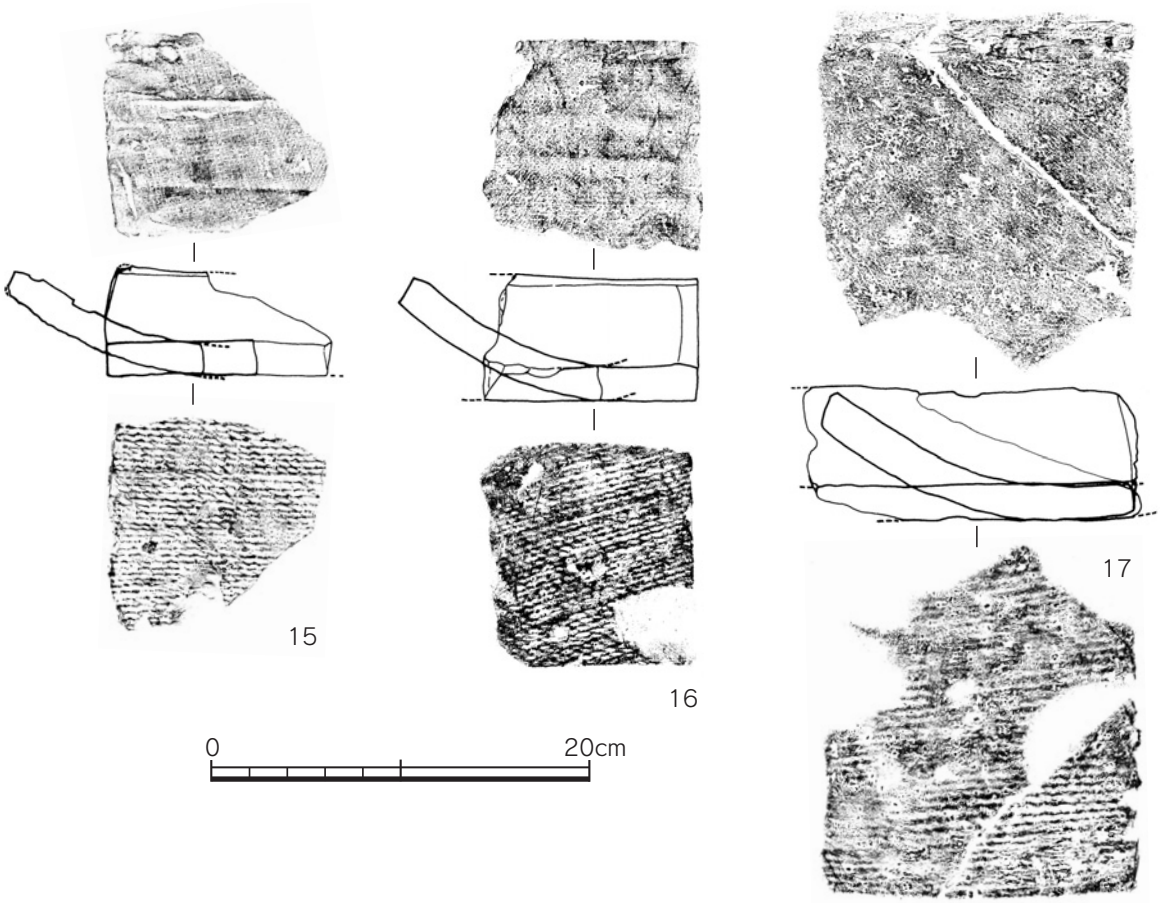


fig.84-33　84SK021出土瓦実測図（3）

/3cm】17.5%）で粗いものが多い。

84SK031出土遺物（fig.84-20・34）

土師器

丸底坏a（18・19）　両者とも底部から口縁部の破片資料で、全形復原まで至らない。焼成不良のため成形・調整痕跡は観察できない。

須恵質土器

こね鉢（20）　口縁部の破片資料で、上方へ立ち上げる口縁部形状を呈する。口縁端部外面を黒灰色に変色する。焼成・還元ともに良好で、東播磨系こね鉢と考えられる。

白磁

椀（21）　体部のみの破片資料で全形を明らかにし難いが、内面に３条の沈線による施文が観察でき、外面に化粧土が確認でき、内面および外面上位に施釉される。大宰府分類の中で該当するものがなく、未分類資料として図示する。

青磁

水注（22）　体部の破片資料で、縦方向の沈線による分割施文が観察でき、外面のみに施釉される。龍泉窯系青磁の範疇に入るものと考えられる。

土製品

塼（23）　直方体の形状をとるものと推定され、塼として報告する。瓦質の焼きを呈する。

石製品

用途不明製品（24・25）　滑石を原材とし、削りによって器面調整をしている。破片資料のため用途・器種については特定できない。

瓦

丸瓦（１）　軒丸瓦１点のみを図化している。小破片のため詳細は不明。他に丸瓦は、側面処理ヘラ切り後に未調整なもの【a0】、粗い再調整をするもの【b0】、丁寧に再調整するもの【c0】の三種が観察でき、凸面叩きも縄叩きのみが観察できた。

平瓦（２～４）　図化できた軒平瓦は、老司系軒瓦で大宰府型式560B1型式に該当するものと考えられる。また側面処理が観察できものでは、側縁の傾斜角度が円弧の中心へ向かうもので、平面的にきれいに削り調整し、面取りしないもの（【A2a】４）、側縁の傾斜がなく垂直に切り落とされるもので、面取りをしないもの（【B2a】３）が出土している。凸面叩きは、縄叩きのほか、細かい格子叩きがある。縄叩きの精粗に関しては、粗いもの（【５～８条/3cm】46%）、細かいもの（【９～12条/3cm】54%）で分析資料限界を考慮すると、さほど差がないといえる。

84SK031下層出土遺物（fig.84-34）

瓦

丸瓦（５）　側面処理がヘラ切り後に丁寧な再処理を行うもの（【c0】５）のみを図化しているが、ヘラ切り未処理のもの【a0】も出土している。

平瓦（６・７）　いずれも縄叩きで側面処理は、側縁の傾斜角度が円弧の中心へ向かうもので、平面的にきれいに削り調整し、面取りしないもの（【A2a】７）、側縁の傾斜がなく垂直に切り落とされるもので、凹面側を面取りするもの（【B2b】６）を図化している。

84SK044出土遺物（fig.84-20）

須恵器

蓋（26・27）　つまみの有無が資料限界故に明らかにし難い。口縁部形状は断面三角形を呈するもので、

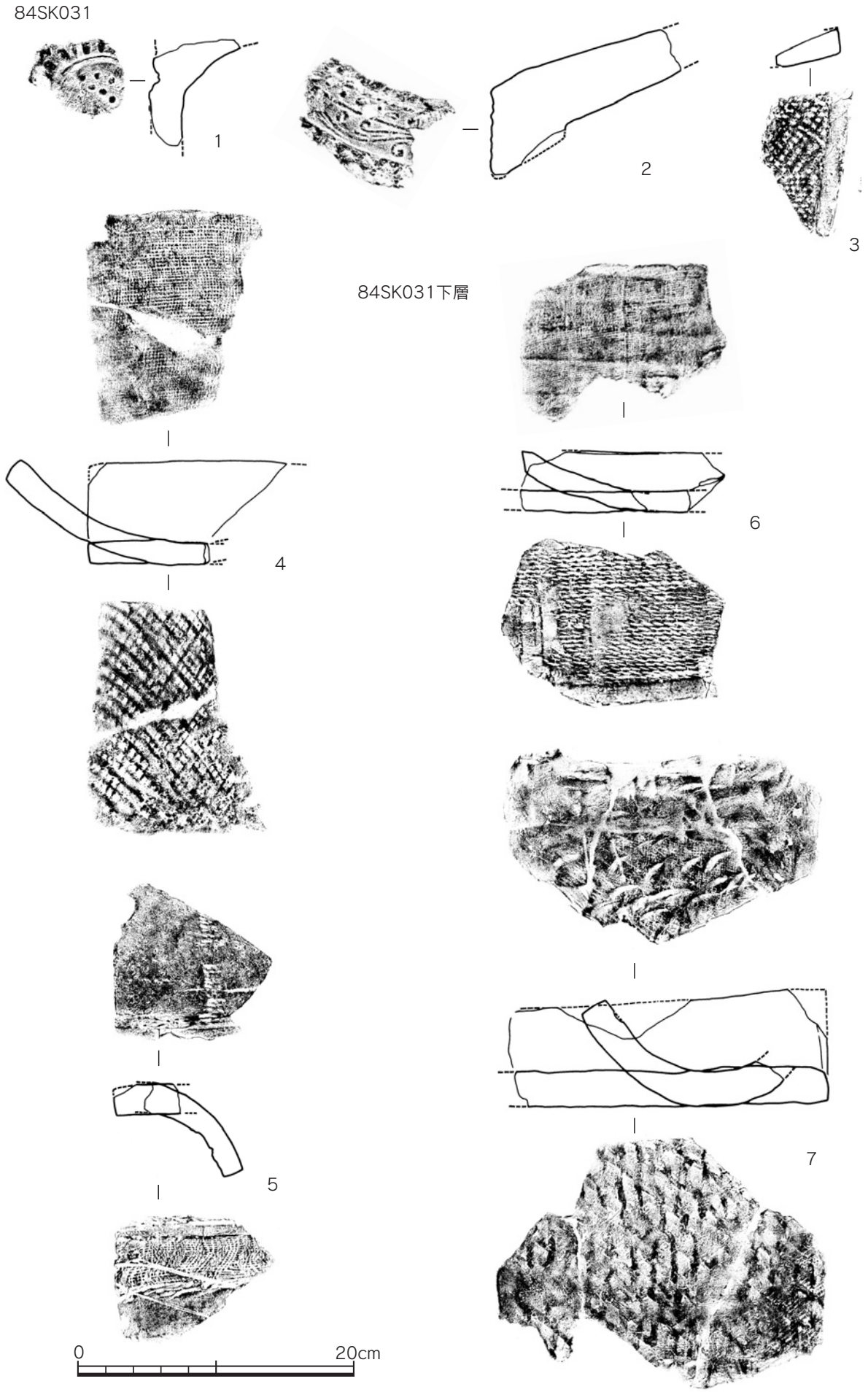


fig.84-34　84SK031・031下層出土瓦実測図

成形工程３工程が観察できる。天井部が残存する27は、天井部外面を回転ヘラ削りにより仕上げている。また天井部外面に、ヘラによる直線が「×」字状に描かれている。

坏c（28）　図上完形になるもので、底部から強く屈曲し上方へ立ち上がる体部形状をとり、高台は、坏部へ貼付した後に畳付部分を回転ナデにより成形したものである。底部外面は回転ヘラ切り後に雑なナデによって仕上げられている。

84SK082出土遺物（fig.84-20）

須恵器

硯（29）　陸部と考えられる箇所が欠損し、かつ小破片であることから器種特定には難しい点があったが、脚部と考えられる箇所に透かしが観察できることから硯として報告した。形状から円面硯と考えられる。海部に墨痕は観察できず、使用されたかどうかは判然としない。

84SK089出土遺物（fig.84-20）

須恵器

坏c（30）　やや高めの高台で、外方へ跳ね上げる形状をとる。底部から体部への移行は、丸みを有しており、飛鳥期の特徴をとっている。

その他の遺構出土遺物

84SX006出土遺物（fig.84-35）

土師器

丸底坏a（1）　口縁部から体部上位の破片で、内面にミガキb痕跡が観察できる。他については器面磨耗のため明らかにし難い。

84SX032出土遺物（fig.84-36・37）

瓦

平瓦（1）凸面叩きは縄叩き、側縁の傾斜角度が円弧の中心へ向かうもので、平面的にきれいに削り調整し凹面側を面取りするもの【A2b】である。

鬼瓦（1）鬼面文鬼瓦の眼の部分の破片で、眉・眼の部分のみが残存している。厚さ5.6cmを測り、裏面には丁寧なナデ調整により仕上げられている。

84SX034出土遺物（fig.84-35）

黒色土器A類

椀c1（2）　高台を欠損し、底部までの破片で、体部下位形状から直線的に上位へ立ち上がるものと推定できる。内面にはミガキcが観察できる。

84SX036出土遺物（fig.84-35・36）

土師器

丸底坏a（3）　焼成不良なため成形・調整痕跡は不明。

瓦

丸瓦（2）　瓦当のみの破片で、文様構成から大宰府型式の239型式に該当するものと考えられる。

84SX039出土遺物（fig.84-35）

土師質土器

用途不明製品（4）　土師質の焼き物であるが、破片資料のため全形を復原し難く、器種特定に至っていない。内外面ともに回転ナデ調整。

84SX041出土遺物（fig.84-35）

須恵器

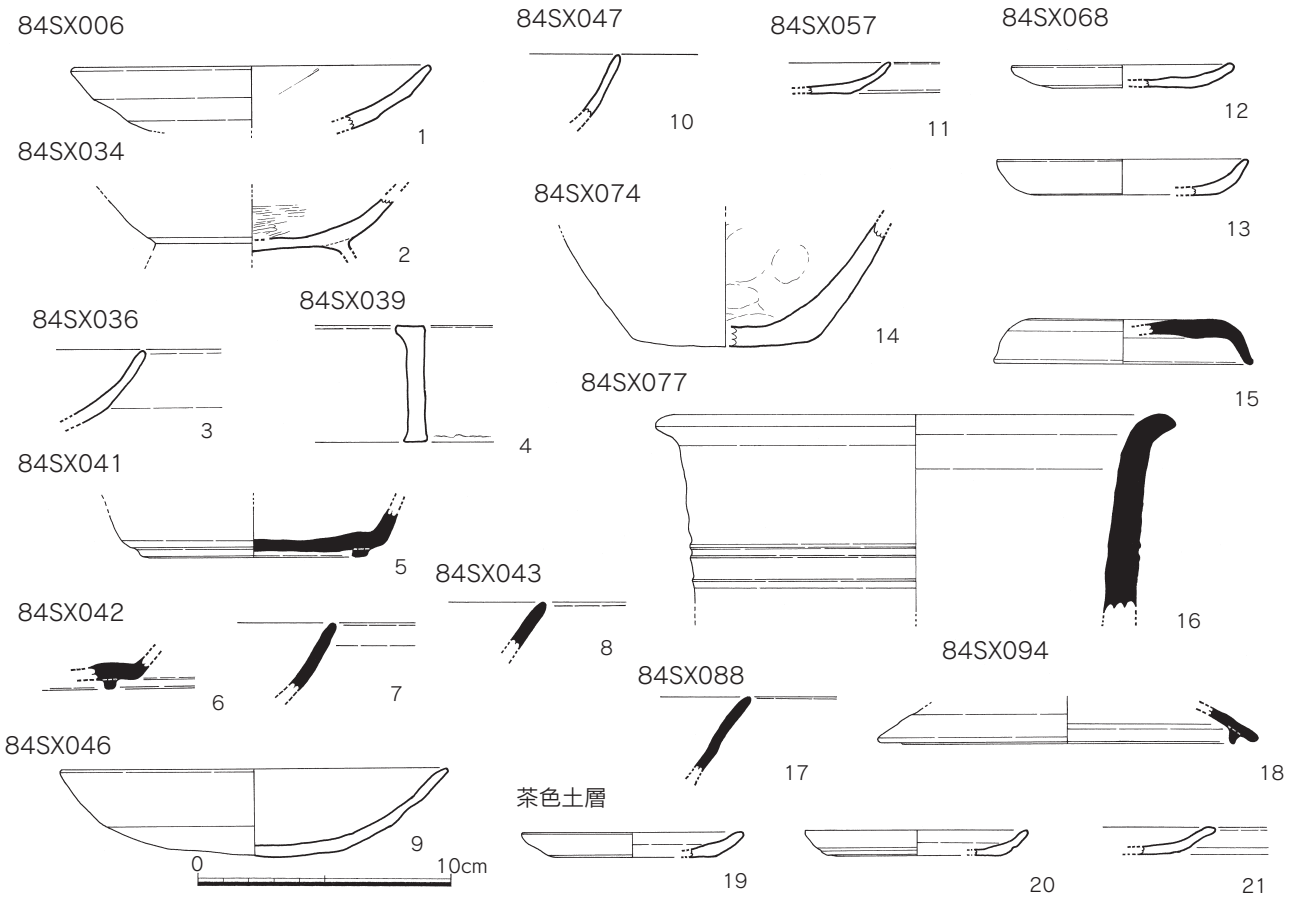


fig.84-35　その他の遺構・土層出土遺物実測図（1/3）

坏c（5）　底部の破片資料で、断面台形の高台形状を呈し、底部から丸みを有しつつ体部へと移行する。底部から体部への屈曲が強く、奈良期前半の特徴を有しているといえる。

84SX042出土遺物（fig.84-35）

須恵器

坏c（6）　底部の破片資料で、断面正方形の高台形状を有し、底部から底部へは屈曲気味に外方へ開く。奈良期後半の特徴を有している。

坏×皿（7）　口縁部の破片資料であり、器種特定に至っていない。内外面ともに回転ナデ調整。

84SX043出土遺物（fig.84-35）

須恵器

坏×皿（8）　口縁部の破片資料であり、器種特定に至っていない。内外面ともに回転ナデ調整。

84SX046出土遺物（fig.84-35）

土師器

丸底坏a（9）　器面磨耗が著しく、形状属性のみを観察できるだけである。

84SX047出土遺物（fig.84-35）

土師器

坏×皿（10）　口縁部の破片資料であり、器種特定に至っていない。内外面ともに回転ナデ調整。

84SX057出土遺物（fig.84-35）

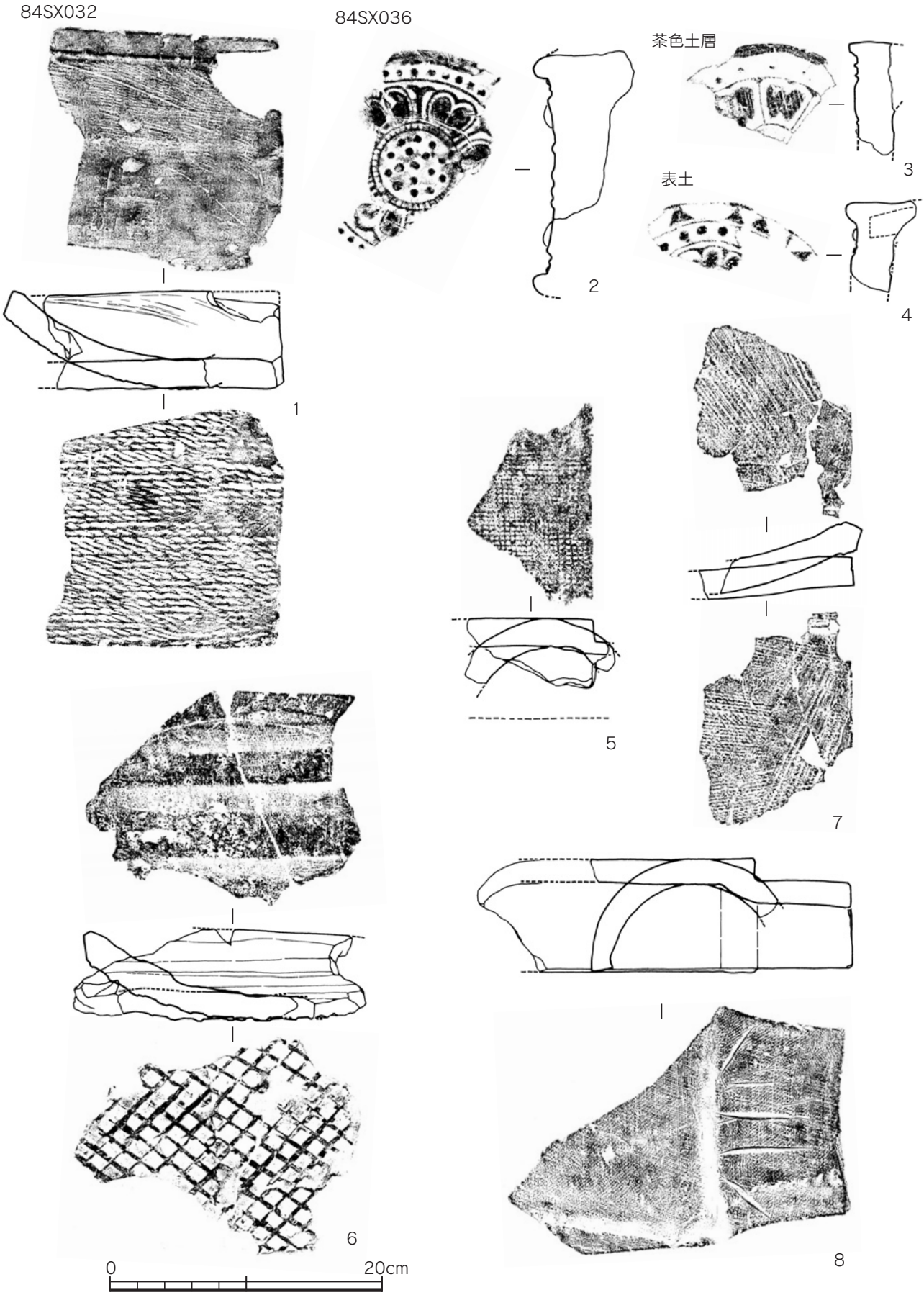


fig.84-36　その他の遺構・土層出土瓦実測図

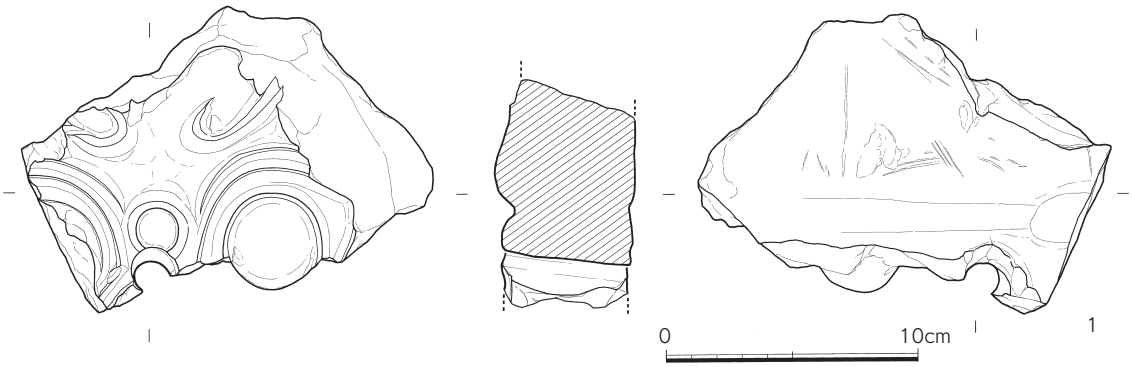


fig.84-37　84SX032出土鬼瓦実測図（1/3）

土師器

小皿a1（11）　口縁部を丸く仕上げるもので、焼成不良のため成形・調整技法は明らかにし難い。

84SX068（fig.84-35）

土師器

小皿a1（12・13）口縁部を丸く仕上げるもので、焼成不良のため成形・調整技法は明らかにし難い。

84SX074出土遺物（fig.84-35）

弥生土器

甕（14）　底部の破片資料で、内外面に指頭圧痕をとどめる。

84SX077出土遺物（fig.84-35）

須恵器

壺蓋（15）　天井部外面を回転ヘラ切りの後、丁寧にナデ調整していることから、皿ではなく壺蓋と判断した。内外面ともに回転ナデ。

鉢（16）　推定口径20.4cmを測り、体部上位外面に二条の沈線を描く、口縁部がやや外方へ外反し器厚が厚いこともあり鉢とした。内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

84SX088出土遺物（fig.84-35）

須恵器

坏（17）　内外面を回転ナデによって仕上げ、口縁部外面が茶灰色に変色している。

84SX094出土遺物（fig.84-35）

須恵器

蓋１（18）　口縁部よりもかえり部分が接地するもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。資料限界故、天井部の調整については明らかにし難い。

各層出土遺物

茶色土層出土遺物（fig.84-35・36）

土師器

小皿a1（19～21）　口縁部を丸く仕上げるもので、焼成不良のため成形・調整技法は明らかにし難い。

瓦

丸瓦（３）　瓦当のみの破片のため詳細は把握し難いが、文様構成に合致する分類がなく、未分類として報告する。同型式のものが、大宰府条坊跡168次SE435茶灰色粘土層（11c後半）より出土している（太宰府市教委、2004）。

表土出土遺物（fig.84-36）

瓦

丸瓦（４・５・８）　４は瓦当破片で型式認定は不明。玉縁成形が観察できる５は、丸瓦に粘土を貼付して形づくるC1に、また側面処理が観察できる８は、ヘラ切り未処理な箇所と丁寧に処理する箇所が同一個体中に混在しているもの【a0×c0】にあたる。

平瓦（６・７）　６は格子叩きで、側面処理は、垂直に切り落とされ凹面側を幅広に削り、かつ凸面側上位を面取りするもの【B3b】で、７は６同様に垂直に切り落とされるが、単に凹面側を面取りするもの【B2b】にあたる。

【引用文献】
太宰府市教育委員会（2004）『大宰府条坊跡22』太宰府市の文化財第69集

５．小結

A. 柵（板塀　84SA020）の検討

a. 時期

出土遺物が極めて少なく、かろうじて図化できた遺物からみると、飛鳥期に位置している。創建時期に対する議論に強く接触しているだけに、慎重にならざるを得ない（小田、1967・2001。高倉、1980・1988）。口縁部のみの破片ではあるが、推定される器高からみて、さほど高いものとは想定できない。またかえりと口縁部の高さが拮抗しており、７世紀後半に存続幅を有するものと考えられる（中島、1997）。この遺物をもって、柵（板塀）建築時期とするのは、検討課題が多すぎる。今回の報告で検討できるものとして、この遺構の延長にある他調査区での成果を検討しておく必要がある。関連する遺構として、63SA025、96SA010がある。

63SA025

出土遺物一覧ならびに図化した遺物を参照いただきたいが、時期判別が可能なものは図化した遺物のみであった。この遺物自体も須恵器「高杯」として報告しているが、小破片のため明らかにし難いものである。したがって、当該遺構の出土遺物からは、建築時期を確定することは困難といわざるを得ない。

96SA010

先の63SA025同様に出土遺物一覧を参照いただきたい。加えて図として提示したかったが、図化に耐え得る資料ではなかった。しかし縄叩きを有するものであり、その存続幅の中で考えるしか術はない。概略奈良期と考えておくのが妥当であろう。

ついで調査区内ならびに周辺域での飛鳥期の遺構の存否であるが、塔周辺で建物跡が検出され、塔の南に位置する第231次調査区では溝、建物が報告されている。96SD001のように飛鳥期の遺物を包含する遺構もあり、これ飛鳥期造営遺構からの遺物の混入も否定できない。この点から考えると問題は多く、柵（板塀）の建築時期を飛鳥期まで遡上させるには現状では勇気がいることである。今後の調査から、遺構の先互関係をもって観察できることを待つしかない。

b. 空間的位置

直線で結んだ時、関係する遺構は、先述した63SA025・96SA010が該当する。尺度や方向に関する知見については、本報告最終章にて記述されるため、ここで詳述することは控える。

今次調査所見のみを述べると、塔から当該遺構までの土地利用状況として、報告にも記載してきたように、瓦廃棄土坑以外は何もないといってよい。いわば空閑地としての利用のみが言える状況である。調査区北端にて当該遺構を検出しており、内部に建物や井戸など寺に関わる建物、生活に関わる遺構が

確認できていないことになる。未だ未調査空間が多く、解決すべき課題は多く、今後の情報収集に努めていくしか術はないようである。

B. 瓦廃棄土坑の埋没時期

報告にて記載してきた各遺構の中で、一括性の高いものは、84SK014のみである。なお後述するように84SK014についても、取り上げ遺物の中で「S-14」としたものは、土坑上位の包含層残存層と考えられ、当該遺物の一括性はない。厳密に述べるならば、「S-14上層」および「S-14下層」の二資料のみということになる。

84SK001：瓦のほかに土師器・須恵器が出土しており、時期決定遺物としては、土師器坏a、須恵器壺がある。土師器坏aは底部形状ならびに口径（11.6cm～13.0cm）を測り、大宰府編年ⅥA期～Ⅶ期に帰属する型式である。須恵器壺は、肩部の張りが欠如し底径が広く「寸胴」型を呈していることから平安前期中頃として考えることができる。結果として大宰府編年ⅥB期＞Ⅶ期に埋没時期が考えられる。

84SK014：取り上げ状況から、「S-14、S-14上層、S-14下層」の三者に分けて記述する。「S-14」は、瓦のほかに土師器・須恵器・近世陶磁器・白磁・滑石製容器が出土している。近世陶磁器については調査時の混入として排除することができるが、白磁ならびに土師器小皿a1については、「S-14」帰属時期を決定する上で重要な遺物にあたる。具体的な時期は、白磁は平安後期に位置するものと考えられ、大宰府編年Ⅻ期～ⅩⅣ期に帰属し、土師器小皿a1については口径が8.8cmで底部切り離し処理がヘラ切りであることを考えると、ⅩⅢ期～ⅩⅣ期に属するものと考えられる。ついで「S-14上層」では、瓦のほかに土師器・須恵器のみが出土しており、土師器は回転台成形のもであり、かつ須恵器を構成している各型式から大宰府編年Ⅱ・Ⅲ期に帰属するもので構成されている。したがって、「S-14上層」は奈良期前半に埋没したものと考えられる。最後に「S-14下層」も上層同様に、奈良期前半に埋没したものと考えられ、S-14そのものの埋没時期は、「上層・下層」の埋没時期から奈良期前半に求めることができ、土坑上面の窪みに堆積した最上層のみが平安後期として考えることができる。

84SK021：当該遺構からは、瓦のほかに土師器・須恵器のみが出土しており、埋没時期を考える上で指標となる資料には、土師器坏aならびに蓋４が出土しており、特に土師器蓋４の存在から平安前期前半（大宰府編年ⅥB期）に位置づけることが可能と考える。

84SK031：当該遺構からは、多種の遺物が出土しており、他三遺構とは帰属時期にズレがある。特に平安後期に顕著になる華南系・広東系白磁類、東播磨産須恵器こね鉢が出土するなど、平安後期に埋没時期を考えるのが蓋然性は高いものと考える。この点は土師器丸底坏、小皿a1などが出土していることからも裏付けることができる。

上記の点から、最も古期のものはS-14であり、その後S-21、S-1で最も新規に埋没したものはS-31ということになる。以上を整理すると下記のようになる。

84SK014【奈良期前半】→84SK021【平安前期前半】→84SK001【平安前期中頃】→84SK031【平安後期】

（中島恒次郎）

【引用文献】
小田富士雄（1967）「第７　塔原廃寺をめぐる諸問題」『塔原廃寺』福岡県教育委員会
九州歴史資料館（1980）『般若寺跡　－大宰府史跡　昭和54年度発掘調査概報別冊－』
高倉洋彰（1980）「Ⅵ般若寺をめぐる諸問題」『般若寺跡』九州歴史資料館
高倉洋彰（1988）「Ⅴ調査の成果」『般若寺跡Ⅱ』九州歴史資料館
大脇潔（1991）「研究ノート　丸瓦の製作技法」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所学報第49冊
中島恒次郎（1997）「七世紀の食器」『古代の土器研究　７世紀の土器』古代の土器研究会
狭川真一（1998）「B.68SE020出土の瓦について　－大宰府における平瓦一枚作りの普及－」『大宰府条坊跡Ⅹ』
小田富士雄（2001）「五　塔ノ原廃寺と般若寺問題」『筑紫野市史　資料編（上）考古資料』筑紫野市

tab.84-1　大宰府条坊跡第84次調査　遺構番号台帳（1）

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時　期	地区番号
1	84SX001	凹み				VIB＞VII (9c中頃)	D14
2		土坑				奈良後半	E15
3		小穴群				古代	E14
4		小穴群				奈良	C15
5		土坑			5・10→14	不明	C14
6		小穴				平安後期	C15
7		小穴				奈良	C15
8		土坑				古代	C15
9		小穴群				古代	B15
10		土坑			10→14	古代	B14
11		小穴				奈良	B15
12		小穴群			12→1	古代	D15
13		小穴			13→1	平安後期	D15
14	84SX001	凹み		褐茶色粘質土		平安後期 (分層後は 奈良前期)	C14
15		貯蔵穴				不明	D9
16		小穴				平安	C12
17		小穴群				平安後期	C12
18		小穴群		現代の撹乱		奈良	B12～14
19		小穴				奈良	B14
20	84SA020	柵列	丘陵北辺の柵列			古代	北トレ
21	84SX001	凹み				平安	D14
22		溝		灰茶色土	14→22	近世	C13
23		小穴群			23→21	奈良	E14
24		小穴群			24→21	奈良後半	E14
25	84SA025	柵列				不明	北トレ
26		凹み				奈良	C13
27		小穴群		現代の撹乱　灰黒色砂	31→27	古代	B9・B11
28		溝			31→28	古代後期	B9
29		凹み		褐色土・黄色土の混合土	31→29	古代	B10
30		貯蔵穴		明茶灰色土		不明	G2
31		凹み		褐茶色粘質土	49→44→31	陶磁器F期	B10
32		土坑			32→31	古代	B12
33		小穴群			33→31	古代	B11
34		小穴			34→31	平安 前期末～中期	B11
35		欠番					—
36		小穴				奈良	B11
37		小穴群			37→31	古代	C8～9
38		凹み				古代	C8
39		撹乱				現代	C5
40		欠番					—
41		小穴				奈良前期	C7
42		小穴群				古代	C11
43		小穴				奈良後期	B6
44		土坑			44→31	奈良	B7
45		欠番					—
46		小穴				平安後期	C11
47		小穴群			47→31	平安中期	B11
48		土坑				原始	C8
49		凹み				不明	B10
50		欠番					—
51		土坑				奈良	B7

tab.84-1　大宰府条坊跡第84次調査　遺構番号台帳（2）

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況 （古→新）	遺構間切合 （古→新）	時　期	地区番号
52		小穴				不明	B6
53		小穴				近代以降	C4
54		小穴				奈良	C3
55		欠番					—
56		小穴群		黒茶色土		奈良	E13
57		小穴		黒茶色土		中世前期	E13
58		小穴		褐茶色粘質土		古代	E13
59		小穴		褐茶色粘質土		古代	F2
60		欠番					—
61		小穴群		褐茶色粘質土 （炭・焼土混入）		古代	I3
62		小穴		褐茶色粘質土 （炭・焼土混入）		古代	F5
63		小穴		褐茶色粘質土 （炭・焼土混入）		中世前期	F6
64		凹み		褐茶色粘質土 （炭・焼土混入）		古代	C4
65		欠番					—
66		小穴				中世前期	B5
67		小穴				奈良	F13
68		小穴群				中世	F12～13
69		小穴				不明	F4
70		欠番					—
71		小穴				不明	H2
72		土坑				不明	E5
73		土坑				不明	D11
74		小穴				古墳前期	E8
75		欠番					—
76		小穴				古代	D12
77		小穴				古代	E12
78		小穴				古代	B15
79		小穴				古代	C15
80		欠番					—
81		溝				古代	北トレ
82		土坑				古代	北トレ
83		小穴				不明	北トレ
84		小穴				古代	C6
85		欠番					—
86		小穴				不明	G7
87		小穴				古代	E10
88		小穴				奈良	E11
89		土坑				飛鳥～奈良	E12
90		欠番					—
91		小穴				古代	不明
92		小穴				古代	不明
93		小穴				古代	J15
94		小穴				古代	不明
茶色土	茶色土層	人工層位					

tab.84-2　大宰府条坊跡第84次調査　土器計測表

※A；内底のナデ、B；は板状圧痕
※計測値の（　）は復元値。+は残存値。
※遺物番号は、遺物実測番号

S-1

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏a　ヘラ	84-6-2	R-001	(13.0)	3.7	8.0	−	−	
土師器	坏a　ヘラ	84-6-3	R-002	(12.2)	3.5	7.8	−	○	
土師器	坏a　ヘラ	84-6-1	R-003	11.6	3.7	6.7	○	○	
土師器	坏a　−	84-6-4	R-004	(13.0)	3.55	7.2	−	−	

S-2

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	蓋3	84-6-6	R-001	−	2.0+α	−			

S-6

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	丸底坏	84-35-1	R-001	(14.2)	2.5+α	−			

S-14

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1　ヘラ	84-6-8	R-005	(8.8)	1.1	(7.4)	−	−	

S-14（上層）

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	坏a　ヘラ	84-6-17	R-001	−	3.2+α	(9.2)	○	−	
須恵器	坏c　ヘラ	84-6-18	R-002	−	3.0+α	(8.5)	○	−	
須恵器	蓋c3　−	84-6-13	R-003	13.5	1.4		○	−	
須恵器	蓋3　−	84-6-14	R-004	(15.5)	1.1+α		○	−	
須恵器	小皿a　ヘラ	84-6-16	R-006	11.3	2.4	7.8	○	○	
土師器	坏c×皿c	84-6-21	R-007	−	1.4+α	−	−	−	
土師器	甕	84-6-20	R-009	−	21.4+α	−			

S-14（下層）

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	中甕a	84-20-7	R-001	(22.8)	6.7+α	−			
須恵器	蓋c　ヘラ	84-20-2	R-002	−	1.5+α	−			
須恵器	蓋3	84-20-3	R-003	−	1.0+α	−			
土師器	坏c×皿c	84-20-8	R-004	−	1.4+α	−	○	−	
須恵器	坏c　ヘラ	84-20-5	R-005	−	3.5+α	(8.8)	○	−	
須恵器	坏c	84-20-6	R-006	−	2.5+α	−			
須恵器	坏c	84-20-4	R-007	−	1.9+α	−			
須恵器	蓋c3	84-20-1	R-008	15.7	2.3	−			
須恵器	甕	84-20-9	R-009	−	2.2+α	−			

S-20

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	蓋1	84-5-1	R-001	−	1.4+α	−			

S-21

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	皿a	84-20-11	R-001	(17.0)	1.9	(14.6)	○	○	
土師器	皿a	84-20-15	R-002	(14.0)	1.9	(10.6)	−	−	
須恵器	皿a	84-20-10	R-003	(14.2)	1.6	(10.6)	○	−	
土師器	蓋4　−	84-20-14	R-004	(15.2)	2.1	−	−	−	
土師器	坏a	84-20-16	R-005	(13.6)	3.7	−			
須恵器	蓋	84-20-13	R-007	−	1.9+α	−			

S-31

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵質土器	鉢（東播系）	84-20-20	R-001	−	2.3+α	−			
白磁	椀（未分類）	84-20-21	R-004		2.7+α				
土師器	丸底坏a	84-20-19	R-005	−	2.7+α	−			
土師器	丸底坏a	84-20-18	R-006	−	3.9+α	−			

S-34

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
黒色土器A	椀c2　ヘラ	84-35-2	R-001	−	2.2+α	−	−	−	

S-36

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	丸底坏　−	84-35-3	R-001	−	2.8+α	−	−	−	

S-41

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	坏c　ヘラ	84-35-5	R-001	−	2.0+α	(8.9)	○	×	

S-42

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	坏c	84-35-6	R-001	−	1.5+α	−	○		
須恵器	坏×皿	84-35-7	R-002	−	2.7+α	−	○		

S-43

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	坏	84-35-8	R-001	−	1.8+α	−			

S-44

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	蓋3　ヘラ	84-20-27	R-001	(14.2)	2.0+α	−	○	×	
須恵器	坏c　ヘラ	84-20-28	R-002	12.6	4.2	8.9	○	×	
須恵器	蓋3	84-20-26	R-003	−	1.3+α	−			

S-46

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	丸底坏a　ヘラ	84-35-9	R-001	(15.3)	3.4	(11.4)	○	○	

S-47

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏	84-35-10	R-001	−	2.5+α	−			

S-57

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	84-35-11	R-001	−	1.1+α	−	−	−	

S-68

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1　−	84-35-12	R-001	(8.8)	0.9	(6.8)	−	−	
土師器	小皿a1　−	84-35-13	R-002	(9.9)	1.4	(7.6)	−	−	

S-74

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
弥生土器	甕	84-35-14	R-001	−	4.9+α	(7.3)			

S-81

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏×皿	84-5-2	R-001	−	1.4+α	−			

S-88

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	坏	84-35-17	R-001	−	3.0+α	−			

S-89

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	坏c　−	84-20-30	R-001	−	2.6+α	(9.8)	○	−	

S-94

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	蓋1	84-35-18	R-001	(15.0)	1.4+α	−			

茶色土

器別	器種	fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	小皿a　−	84-35-20	R-002	(8.8)	1.15	(7.1)	−	−	
土師器	小皿a　−	84-35-19	R-003	(8.8)	1.0	(6.6)	−	−	
土師器	小皿a　−	−	R-004	(8.2)	1.0	(6.2)	−	−	
土師器	小皿a　−	84-35-21	R-005	−	1.1+α	−	−	−	

tab.84-3　大宰府条坊跡第84次調査　瓦計測表（1）

S-1

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅	
	R-006	丸 ㊥	格子																
	R-007	丸 ㊥	格子																
	R-008	丸 ㊥	格子																
	R-009	丸 ㊥	格子																
	R-010	丸 ㊥	格子																
	R-011	丸 ㊥	格子																
	R-012	丸 ㊥	格子																
	R-013	丸 ㊥	縄目																
	R-014	丸 ㊥	縄目																
	R-015	丸 ㊥	縄目																
84-9-18	R-016	丸 ㊥	縄目	B3a		36.4	－	－	1.5	－	1.9								
84-7-7	R-017	丸 平		A2a					－	1.6	2.0	13.8+α	－	13.8+α	－	－	－	8.4+α	
84-8-15	R-018	丸 ㊥	縄目	B2a		13.5+α	7.3+α	－	－	2.5	2.7								
84-7-8	R-019	丸 平		C0					－	2.2	2.2	13.8+α	－	10.5+α	－	－	5.6+α	－	
	R-020	丸 ㊥	不明			10.3+α	－	－	－	－	3.2								軒平瓦
84-8-14	R-021	丸 ㊥	縄目	B2a		20.6+α	16.0+α	－	3.0	3.3	3.5								
84-8-12	R-022	丸 ㊥	560Aa´			9.1+α	－	－	4.4	4.4	4.1+α								軒平瓦
	R-023	丸 ㊥	縄目																
	R-024	丸 ㊥	縄目																
	R-025	丸 ㊥	縄目																
	R-026	丸 ㊥	縄目																
	R-027	丸 平	縄目																
	R-028	丸 平	縄目																
84-7-3	R-029	丸 平	縄目	a1					1.4	1.7	－	16.7+α	－	16.7+α	13.8	－	10.0+α	－	
84-7-1	R-030	丸 平	縄目	a0					－	－	2.1	17.2+α	－	17.2+α	－	－	－	－	
84-7-6	R-031	丸 平	縄目	C0	C1				2.7	－	－	10.6+α	5.4	5.2+α	16.0	12.4	12.8	－	
84-7-2	R-032	丸 平	無文(カタビキ)	a0	？				－	1.6	1.9	23.8+α	6.3	17.5+α	15.4	12.4	12.6	－	
84-8-9	R-033	丸 平	縄目	C0×C3					1.8	1.9	－	29.6+α	－	－	－	－	－	14.0+α	
84-7-4	R-034	丸 平	縄目(カタビキ)	C0	C1				2.5	2.0	2.2	27.0+α	9.2	17.8+α	16.2	12.6	13.2	－	
84-8-10	R-035	丸 平	縄目？	C0					1.2～1.5	1.8	1.3～2.0	23.8+α	－	－	－	8.5（～11.0）	－	－	行基丸瓦
84-8-11	R-036	丸 ㊥	560			8.5+α	9.1+α	－											軒平瓦
84-9-16	R-037	丸 ㊥	縄目	B3a		12.2+α	13.9+α	－	2.5	2.9	－								
84-9-19	R-038	丸 ㊥	縄目			9.9+α	－	－	1.9	2.0	1.7								
84-8-13	R-039	丸 ㊥	縄目	A2a		21.7+α	－	15.4+α	2.0	2.0	－								
84-10-21	R-040	丸 ㊥	縄目	B3a		17.0+α	－	19.1+α	1.8	1.8	1.8								
84-9-17	R-041	丸 ㊥	縄目	B3a		20.1+α	8.9+α	－	2.3	1.9	－								
84-10-20	R-042	丸 ㊥	縄目	B3a？		28.1+α	－	20.0+α	2.5	2.2	－								
	R-043	丸 ㊥	格子																
	R-044	丸 ㊥	格子																
	R-045	丸 ㊥	格子																
	R-046	丸 ㊥	格子																
	R-047	丸 ㊥	格子																
	R-048	丸 ㊥	格子																
	R-049	丸 ㊥	格子																
	R-050	丸 ㊥	格子																
	R-051	丸 ㊥	格子																
	R-052	丸 ㊥	格子																
	R-053	丸 ㊥	格子																
84-7-5	R-054	丸 平	縄目						1.7	2.0	－	11.2+α	－	11.2+α	15.1+α	－	－	－	
	R-055	丸 ㊥	格子目																

tab.84-3　大宰府条坊跡第84次調査　瓦計測表（2）

S-14

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							瓦当径	備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅		
	R-006	丸 (平)	格子																	
84-11-3	R-007	(丸) 平		C0	C1				—	1.7	1.6	18.1+α	—	—		7.5+α	—	—		
84-11-12	R-008	丸 (平)	格子	B3b		10.5+α	10.2+α	—	2.4	—	—									
84-11-11	R-009	丸 (平)	格子	B3b		18.2+α	—	11.1	2.1	—	—									
84-12-13	R-010	丸 (平)	格子	B		7.7+α	7.1+α	—	—	—	1.3									
84-12-14	R-011	丸 (平)	格子	?		5.8+α	5.9+α	—	—	—	1.8									
84-11-9	R-012	丸 (平)	格子	B2a		9.5+α	7.4+α	—	1.9	—	—									
84-11-8	R-013	丸 (平)	格子	A2a		12.5+α	6.6+α	—	—	—	2.4									
84-11-6	R-014	丸 (平)	格子	A2a		6.3+α	5.2+α	—	2.4	—	—									
84-11-7	R-015	丸 (平)	格子	A2a		8.8+α	10.5+α	—	—	—	1.9									
84-13-27	R-016	丸 (平)	縄目	A2a		12.4+α	—	—	1.8	2.1	—									
84-12-16	R-017	丸 (平)	560A			7.7+α	—	9.2+α	—	2.8	—									軒平瓦
84-11-10	R-018	丸 (平)	格子	B2a		8.9+α	—	—	2.3	—	—									
84-12-20	R-019	丸 (平)	未分類	B3a		17.4+α	—	—	3.1	3.4	—									軒平瓦
84-12-18	R-020	丸 (平)	560Aa			18.9+α	—	22.1+α	—	3.1	—									軒平瓦
	R-021	丸 (平)	格子																	
84-11-1	R-022	(丸) 平	292									3.4+α	—	—	—	—	—	—	9.8+α	軒丸瓦
84-12-15	R-023	丸 (平)	格子	B2		7.8+α	10.8+α	—	2.3	—	—									
	R-024	丸 (平)	格子																	
	R-025	丸 (平)	格子																	細かい格子
	R-026	丸 (平)																		
84-12-22	R-027	丸 (平)	縄目	A2a		11.0+α	10.3+α	—	—	—	2.6									
84-12-23	R-028	丸 (平)	縄目	A2a		10.7+α	—	8.7+α	—	—	2.0									
84-14-28	R-029	丸 (平)	縄目	A2b		10.7+α	—	11.2+α	1.85	—	—									
84-13-24	R-030	丸 (平)	縄目	A2b		3.8+α	—	13.5+α	—	—	2.2									
84-12-21	R-031	丸 (平)	縄目	A2a		12.0+α	—	10.2+α	2.2	—	—									
84-14-29	R-032	丸 (平)	縄目	B2b		15.1+α	11.4+α	—	1.9	—	—									
84-14-31	R-033	丸 (平)	縄目	B3a		17.8+α	—	14.0+α	1.7	2.0+α	—									
84-14-30	R-034	丸 (平)	縄目	B2b		17.4+α	—	—	左×右2.4	2.7+α	—									
84-13-25	R-035	丸 (平)	縄目	A2b		25.7+α	—	15.8+α	2.3	—	—									
84-13-26	R-036	丸 (平)	縄目	A2b		13.7+α	—	35.0+α	2.3	2.3	—									
84-11-5	R-037	(丸) 平		?								15.6+α	5.0	10.6+α	14.4+α	6.8+α	11.6+α	—		
84-12-17	R-038	丸 (平)	635			8.6+α	—	8.3+α	—	—	—								4.2+α	軒平瓦
84-12-19	R-039	丸 (平)	560			8.9+α	—	11.8+α	—	—	—								4.5+α	軒平瓦
84-11-2	R-040	(丸) 平	239									3.3+α	—	—	—	—	—	—		軒丸瓦
84-11-4	R-041	(丸) 平	カタビキ	C0	?							15.1+α	7.0	8.1+α	13.1+α	10.8+α	11.2+α	—		
	R-042	丸 (平)	格子																	
	R-043	丸 (平)	格子																	
	R-044	丸 (平)	格子																	
	R-045	丸 (平)	格子																	
	R-046	丸 (平)	格子																	
	R-047	丸 (平)	格子																	
	R-048	丸 (平)	格子																	
	R-049	丸 (平)	格子																	
	R-050	丸 (平)	格子																	
	R-051	丸 (平)	格子																	
	R-052	丸 (平)	格子																	
	R-053	丸 (平)	格子																	
	R-054	丸 (平)	格子																	
	R-055	丸 (平)	格子																	
	R-056	丸 (平)	格子																	
	R-057	丸 (平)	格子																	
	R-058	丸 (平)	格子																	
	R-059	丸 (平)	格子																	
	R-060	丸 (平)	格子																	
	R-061	丸 (平)	格子																	
	R-062	丸 (平)	格子																	
	R-063	丸 (平)	格子																	
	R-064	丸 (平)	格子																	
	R-065	丸 (平)	格子																	

tab.84-3　大宰府条坊跡第84次調査　瓦計測表（3）

S-14上層

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							瓦当径	備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅		
84-17-15	R-010	丸 ㊥	未分類			33.1	—	31.2+α	3.6	3.4	2.65									軒平瓦
84-17-16	R-011	丸 ㊥	560A			6.7+α	—	22.8+α	5.3	—	6.7									軒平瓦
84-15-1	R-012	㊤ 平	291						—	—	1.5	9.3+α	—	—	—	—	—	—	16.5~16.8	軒丸瓦
84-15-2	R-013	㊤ 平	291						—	—	—	5.9+α	—	—	—	—	—	—	15.8	軒丸瓦
84-15-4	R-014	㊤ 平	291						—	—	—	6.2+α	—	—	—	—	—	—	16.4	軒丸瓦
84-15-3	R-015	㊤ 平	291						—	—	—	4.8+α	—	—	—	—	—	—	15.4	軒丸瓦
84-18-21	R-016	丸 ㊥	縄目	A2b		16.1+α	12.3+α	—	1.8	—	—									
84-17-19	R-017	丸 ㊥	縄目	A2b		13.0+α	9.2+α	—	—	—	1.9									
84-16-9	R-018	㊤ 平		a0	C1				1.9	1.7	1.7	30.0+α	—	30.0+α	9.9+α	—	—	—		
84-15-8	R-019	㊤ 平		C0	?				—	1.65	1.7	8.2+α	3.0+α	5.2+α	11.5+α	—	9.5+α	—		
84-15-5	R-020	㊤ 平		a0	C1				1.6	1.5	—	10.5+α	6.8+α	3.7+α	—	—	7.0	—		
84-16-13	R-021	㊤ 平		C3					2.0	2.0	1.9	14.1+α	—	14.1+α	—	—	—	12.8+α		
84-19-23	R-022	丸 ㊥	縄目	B2b		14.2+α	—	18.0+α	1.5	1.8	1.7									
84-17-17	R-023	丸 ㊥	未分類			15.1+α		14.0+α	—	3.7	2.1									軒平瓦
84-15-7	R-024	㊤ 平		a0	?				1.3	1.1	1.2	29.5+α	6.6	—	13.6+α	11.0+α	—	—		
84-15-6	R-025	㊤ 平		a0	B				3.1	2.9	—	17.3+α	5.7	—	—	—	—	—		
84-16-11	R-026	㊤ 平		C0					—	1.8	1.7	19.0+α	6.8	—	—	7.7	—	—		
84-16-10	R-027	㊤ 平		C0	?				1.6	1.8	1.8	32.2+α	7.4	—	14.1	11.6	—	—		
84-17-14	R-028	丸 ㊥	縄目	A2a		15.7+α	—	—	2.4	2.5	2.4									
84-17-18	R-029	丸 ㊥	560			43+α	—	9.4+α	—	—	—									軒平瓦
84-18-20	R-030	丸 ㊥	縄目	A2a		24.6+α	—	—	—	2.3	2.2									
84-19-24	R-031	丸 ㊥	縄目	B2b		21.2+α	—	17.9+α	—	2.2	2.3									
84-16-12	R-032	㊤ 平		C0	?				1.9	1.2	1.7	19.7+α	6.8	19.7+α	12.0+α	—	—	—		
84-18-22	R-033	丸 ㊥	縄目	A2b		25.7+α	—	21.1+α	2.4	2.7	2.1									
	R-034	丸 ㊥	縄目																	
	R-035	㊤ 平	すり消し																	

S-14下層

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							瓦当径	備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅		
84-21-1	R-010	㊤ 平	290B	C0					1.7	2.0	1.6	22.0+α	—	—	—	—	—	—	18.7	軒丸瓦
84-24-29	R-011	丸 ㊥	未分類	B3a		42.6		30.0+α	—	3.5	3.3									軒平瓦
84-23-15	R-012	㊤ 平		C0	B				1.7	1.7	1.8	18.6+α	7.0	11.6+α	15.0	12.6	11.8	—		
84-23-22	R-013	㊤ 平		C1	B				1.7	2.0	—	24.6+α	8.8	15.8+α	—	9.4+α	—	—		
84-23-17	R-014	㊤ 平		C0	B				2.4	2.1	—	22.6+α	6.2	16.4+α	9.9+α	—	8.7+α	—		
84-26-36	R-015	丸 ㊥		A2a		17.2+α	—	13.4+α	2.2	2.1	—									
84-26-35	R-016	丸 ㊥		B2b		18.0+α	—	4.8+α	2.1	2.2	—									
84-26-32	R-017	丸 ㊥		A2a		17.3+α	—		1.7	2.0	1.8									
84-24-25	R-018	丸 ㊥	560F			10.4+α	—	6.4+α	—	—	—									軒平瓦
84-24-27	R-019	丸 ㊥	不明	A2c		18.9+α	—	21.6+α	—	—	2.7									軒平瓦
84-25-31	R-020	丸 ㊥	560Ba	A3c		24.9+α	—	29.6+α	2.9	3.0	3.2									軒平瓦
84-24-24	R-021	丸 ㊥	未分類			10.3+α		7.1+α	—	—	3.0									軒平瓦
84-21-3	R-022	㊤ 平	291						—	—	—	5.5+α	—	—	—	—	—	—	14.8+α	軒丸瓦
84-24-26	R-023	丸 ㊥	560Aa			13.2+α	—	—	—	2.9	—									軒平瓦
84-24-28	R-024	丸 ㊥	560Aa			4.9+α	—	—	—	—	—									軒平瓦
84-21-2	R-025	㊤ 平	291						—	1.8	—	11.0+α	—	—	—	—	—	—	16.4	軒丸瓦
84-26-34	R-026	丸 ㊥	縄目			14.6+α	—	—		2.1	1.9									
84-30-45	R-027	丸 ㊥	縄目	B3a		17.5+α	14.7+α	—	1.9	2.0	—									
	R-028	丸 ㊥	縄目			15.4+α				2.2	2.3									
84-27-37	R-029	丸 ㊥	縄目	A2b		12.7+α	—	20.0+α	1.8	1.6	1.7									
84-28-40	R-030	丸 ㊥	縄目	A2d		33.4+α	—	29.4	2.0	1.7	1.7									
84-23-21	R-031	㊤ 平	縄目カタビキ	C0					2.0	—	—	13.0+α	6.6	6.4+α	16.0	12.0	13.0	—		
84-22-12	R-032	㊤ 平	無文カタビキ	C0	B				1.6	1.6	—	16.5+α	7.2	9.3+α	16.2	12.6	12.9	—		
84-21-7	R-033	㊤ 平	縄目？	a0					—	1.85	1.95	18.0+α	6.8	11.2+α	16.0+α	12.4	12.6	—		
84-22-14	R-034	㊤ 平	無文カタビキ	C0	B				—	1.5	1.8	16.9+α	6.1	10.8+α	14.4	11.0	11.2	—		
84-21-5	R-035	㊤ 平	不明カタビキ？	a0					—	1.5	1.6	15.3+α	7.0	8.3+α	15.2	12.0	12.0	—		
84-21-4	R-036	㊤ 平	無文カタビキ	a0					—	1.6	—	12.3+α	6.0	6.3+α	13.0+α	11.8	12.0	—		
84-21-8	R-037	㊤ 平	縄目	a0					—	1.7	1.6	17.5+α	5.5	12.5+α	16.2	12.2	13.5	—		
84-23-20	R-038	㊤ 平	無文カタビキ	C0	C1				1.4	—	—	15.2+α	6.5	8.7+α	16.3	12.0	12.8	—		

tab.84-3　大宰府条坊跡第84次調査　瓦計測表（4）

S-14下層

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							瓦当径	備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅		
84-22-11	R-039	丸 平	縄目	a0	C1				2.1	2.5	—	24.8+α	5.9	19.7+α	16.0	9.8	12.3	—		
84-22-13	R-040	丸 平	縄目	C0	B				1.7	2.0	1.5	39.8	6.5	33.3	15.5	11.9+α	13.6	43+α		
84-29-42	R-041	丸 平	縄目	A2d		31.2+α		+α		2.4	2.2									
84-29-41	R-042	丸 平	縄目			28.2+α				1.8	1.4									
	R-043	丸 平	縄目	B2b		26.4+α		29.2	2.0	2.1	2.1									
84-24-23	R-044	丸 平		C0					1.9	2.0	2.1	40.6	6.0	34.5	16.8	11.1+α	17.6	18.8+α		
84-23-16	R-045	丸 平		C0					1.6	1.9	1.9	27.5+α	4.9	18.3+α	15.4	6.75+α	12.5+α	5.3+α		
84-30-44	R-046	丸 平		B2b		20.1+α	—	12.6+α	2.1	2.1	—									
84-26-33	R-047	丸 平		A2b		16.5+α	—	13.6+α	—	2.25	2.2									
84-25-30	R-048	丸 平		A2a		15.1+α	16.0+α	—	1.5	1.9	—									
84-30-43	R-049	丸 平		B2a		14.2+α	—	—	2.3	2.4	1.8									
84-28-39	R-050	丸 平		A2b		19.0+α	22.2+α	—	1.9	1.8	—									
84-27-38	R-051	丸 平		A2b		28.7+α	—	—	—	2.1	2.2									
84-23-19	R-052	丸 平	縄目	C0	C1				1.5+α	1.5+α	—	9.7+α	5.1	4.6+α	16.6	12.2	13.2	—		
84-23-18	R-053	丸 平	無文カタビキ	C0	C1				1.8+α	1.8	—	15.5+α	6.6	8.9+α	17.0	13.4	13.8	—		
84-21-6	R-054	丸 平	不明	a0	?				—	1.9	1.8	24.7+α	7.1	17.6+α	15.0	12.0	12.0	—		
84-22-10	R-055	丸 平	縄目	a0	C1				—	1.85	1.8	21.6+α	6.9	14.7+α	16.7	13.0	14.0	—		
84-21-9	R-056	丸 平	縄目？	a0	C1				1.4	1.9	1.75	41.3	5.3～5.7	35.5	19.0	15.0	15.4	20.0		

S-21

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							瓦当径	備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅		
84-31-4	R-009	丸 平		a0					2.2	2.2	—	12.1+α	—	12.1+α	—	—	—	11.0+α		
84-32-11	R-010	丸 平	縄目	A2b		14.5+α	13.3+α	—	1.5	1.6	—									
84-31-3	R-011	丸 平	行基	a0					—	1.8	2.1	10.0+α	10.0+α	—	—	10.8+α	—	—		
84-33-17	R-012	丸 平	縄目			17.8+α	—	—	2.0	1.9	—									
84-32-12	R-013	丸 平	縄目	A2b		21.8+α	—	—	2.0	2.2	—									
84-31-8	R-014	丸 平	縄目	A2b		11.5+α	—	—	1.9	2.1	—									
84-33-15	R-015	丸 平	縄目	B3a		11.6+α	—	—	1.6	1.7	—									
84-33-16	R-016	丸 平	縄目	B3a		11.8+α	—	—	1.9	1.8	—									
84-32-14	R-017	丸 平	縄目	B2b		17.4+α	—	—	2.0	2.6	—									
84-32-13	R-018	丸 平	縄目	B2a		16.4+α	—	—	2.2	2.2	—									
84-31-1	R-019	丸 平	?									5.5+α	—	—	—	—	—	—	7.5+α	軒丸瓦
84-31-6	R-020	丸 平	635			8.7+α	—	—	—	—	—									軒平瓦
84-31-5	R-021	丸 平	560			2.1+α	—	—	—	—	—									軒平瓦
84-31-2	R-022	丸 平	?									3.6+α	—	—	—	—	—	—		軒丸瓦
84-31-10	R-023	丸 平	格子	B2b		14.2+α	—	—	2.1	2.2	2.1									
84-31-7	R-024	丸 平	格子	?		18.9+α	9.0+α	—	2.8	3.0	—									
84-31-9	R-025	丸 平	格子			16.5+α	—	8.3+α	2.0	1.9	—									
	R-026	丸 平																		
	R-027	丸 平																		
	R-028	丸 平																		
	R-029	丸 平																		
	R-030	丸 平																		
	R-031	丸 平	格子																	
	R-032	丸 平	格子																	
	R-033	丸 平	格子																	

S-31

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅	
84-34-3	R-008	丸 平	格子	B2a		11.5+α	—	—	—	—	—								
84-34-1	R-009	丸 平	?						—	—	—	6.6+α	—	—	—	—	—	—	軒丸瓦
84-34-2	R-010	丸 平	560Ba′			14.2+α	—	11.9+α	—	—	—								軒平瓦
84-34-4	R-011	丸 平	格子	A2a		13.9+α	—	—	—	1.6	2.0								
	R-012	丸 平	格子																
	R-013	丸 平	格子																
	R-014	丸 平	格子																
	R-015	丸 平	格子																
	R-016	丸 平	縄目																

tab.84-3　大宰府条坊跡第84次調査　瓦計測表（5）

S-31

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅	
	R-017	丸 (平)	格子																
	R-018	丸 (平)	格子																
	R-019	丸 (平)	格子																
	R-020	丸 (平)	格子																
	R-021	丸 (平)	格子																
	R-022	丸 (平)	格子																
	R-023	丸 (平)	格子																

S-31下層

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅	
84-34-7	R-001	丸 (平)	格子	A2a		23.6+α	－	－	2.2	2.6	－								
84-34-5	R-002	(丸) 平		C0						2.2	1.6	12.0+α	－	－	－	－	－	－	
84-34-6	R-003	丸 (平)	縄目	B2b		17.2+α	－	－	1.6	1.8	－								
	R-004	丸 (平)	縄目																
	R-005	丸 (平)	縄目																
	R-006	丸 (平)	縄目																
	R-007	丸 (平)	縄目																
	R-008	丸 (平)	縄目																
	R-009	丸 (平)	縄目																
	R-010	丸 (平)	縄目																

S-32

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅	
84-36-1	R-001	丸 (平)	縄目	A2b		17.4+α	－	15.1+α	2.0	2.2	－								
	R-002	鬼瓦				10.7+α	－	16.1+α		5.6									

S-36

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							瓦当径	備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅		
84-36-2	R-002	(丸) 平	?									7.3+α							17.6	軒丸瓦

S-44

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅	
	R-004	丸 (平)	格子																

S-67

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅	
	R-001	丸 (平)	格子																

茶色土

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅	
84-36-3	R-001	(丸) 平	未分類									3.4+α	－	－	－	－	－	－	軒丸瓦

表土

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅	
84-36-4	R-001	(丸) 平	連華文									5.1+α							軒丸瓦
84-36-5	R-002	(丸) 平	正格子	?	C1							10.4+α	0.7+α	9.7+α	14.6	－	－	－	
84-36-7	R-003	丸 (平)	縄目	B2b		11.4+α	－	15.3+α	2.1	－	－								
84-36-6	R-004	丸 (平)	格子	B3b		21.3+α	－	－	2.3	2.0	－								
	R-005	(丸) 平																	軒丸瓦
	R-006	(丸) 平																	軒丸瓦
	R-007	(丸) 平																	軒丸瓦

Z

図版番号	R-番号	器種	凸面技法	側面処理	玉縁成形	平瓦						丸瓦							備考
						全長	狭端部弦長	広端部弦長	左厚	中央厚	右厚	全長	玉縁長	本体長	末端幅	玉縁端部幅	玉縁付根幅	先端幅	
84-36-8	R-001	(丸) 平	無文(カタビキ)									27.7+α	7.1	20.7+α	15.0	12.1	12.1	－	

tab.84-4　大宰府条坊跡第84次調査　出土遺物一覧表（1）

S-1　VIB>VII９c中頃

須恵器	坏a、皿a、甕、壺
土師器	坏a(ヘラ)、坏d
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦

S-2　奈良後半

須恵器	蓋3、坏a
土師器	坏d
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦

S-3　古代

土師器	供膳具
瓦類	破片

S-4　奈良

土師器	破片
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦（縄）

S-5

土師器	坏、甕
石製品	剥片（黒曜石）
金属製品	紡錘車

S-6

須恵器	供膳具
土師器	丸底坏、煮沸具
瓦類	平瓦（格子）、丸瓦(格子）、破片（縄）

S-7　奈良

土師器	坏
瓦類	平瓦（縄）

S-8　古代

瓦類	丸瓦

S-9　古代

土師器	椀c
瓦類	平瓦(縄)

S-10　古代

土師器	煮沸具
瓦類	破片

S-11　古代

瓦類	平瓦（縄）

S-12

須恵器	坏×皿
土師器	坏c
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦

S-13　中世前期

須恵器	坏c
土師器	丸底坏、供膳具
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦

S-14　平安前期

須恵器	蓋1、蓋3、蓋c、坏a、坏c、鉢b、甕、壺
土師器	坏a（VIB型）、坏c、小皿ａ1、甕、鉢、鉢（在地・角閃石）
瓦類	軒平瓦、破片（縄）
石製品	小型容器（滑石）
肥前系陶磁器	染付（混入）
白磁	椀：破片（広東）（1）

S-14上層　奈良前期

須恵器	蓋1、蓋3、坏a、坏c、坏身、皿a、甕、甑
土師器	坏c、甕
瓦類	破片

S-14下層　奈良前期

須恵器	蓋1、蓋3、坏c、甕、壺
土師器	坏a、甕
瓦類	破片

S-16　平安

土師器	破片
瓦類	平瓦（磨消）

S-17　中世前期

須恵器	坏a×皿a、坏×皿
土師器	丸底坏、煮沸具
瓦類	破片（格子・縄）

S-18　奈良

須恵器	坏
土師器	破片
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦（縄）

S-19　奈良

土師器	供膳具
瓦類	丸瓦（縄）、破片（縄）

S-20a

須恵器	蓋1

S-20b　古代

土師器	煮沸具（角閃石）

S-21　奈良後半

須恵器	蓋3、坏a、皿a、甕、多口瓶
土師器	蓋c、蓋4、坏a、坏c、坏×皿（ヘラ記号）、椀c、皿a、把手
瓦類	丸瓦（縄）、破片（縄）

S-22　近世

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	破片（格子・縄）
国産磁器	染付破片

S-23　奈良

須恵器	供膳具
土師器	供膳具
瓦類	丸瓦（磨消）、破片（縄）

S-24　奈良後半

須恵器	坏a
土師器	坏d

S-26　奈良

土師器	破片
瓦類	丸瓦（磨消）、破片（縄）
国産陶器	破片（混入）

S-27　古代

土師器	坏c、煮沸具
瓦類	丸瓦

tab.84-4　大宰府条坊跡第84次調査　出土遺物一覧表（2）

S-28　古代後期

黒色土器A	破片（角閃石）
瓦類	破片（縄）

S-29　古代以降

瓦類	破片

S-31　F期

須恵器	蓋c、蓋1、蓋3、坏蓋（古墳）、坏d、坏c、皿a、甕、壺
土師器	丸底坏a（ヘラ）、小皿ａ1、椀c、煮沸具
龍泉窯系青磁	椀：IIb（1）、II（1）
	水注（1）
瓦類	塼、破片
石製品	剥片（黒曜石）、用途不明製品（滑石）
須恵質土器	捏鉢（東播）
白磁	椀：II1（2）、II5（6）、II（8）、IV（1）、V1（1）、V（1）、VIII（1）
	破片：広東（7）、華南（9）、IX（1）
中国陶器	C群（1）
須恵質（輸入）	朝鮮系無釉陶器　壺×甕
金属製品	鉄滓

S-31下層　平安

須恵器	蓋、坏a、坏c、皿a、高坏、甕
土師器	坏d、皿a、椀c(平安)、供膳具
瓦類	破片
石製品	石斧（玄武岩）

S-32

土師器	甕a
瓦類	平瓦（縄）、軒平瓦（縄）、鬼瓦
肥前系陶磁器	染付椀
白磁椀	VIII－2（1）

S-33　古代

瓦類	丸瓦、破片（縄）
その他	焼土塊

S-34　平安前期末～中期

黒色土器A	椀c2

S-36　奈良

須恵器	供膳具、破片
土師器	丸底坏
瓦類	平瓦（縄）、軒丸瓦

S-37　古代

瓦類	平瓦（縄）

S-38　古代

瓦類	破片
白磁	破片：広東系（1）

S-39

龍泉窯系青磁	坏III1
土師質土器	火鉢？

S-41　奈良前期

須恵器	坏c

S-42

須恵器	坏c、甕
土師器	供膳具
瓦類	破片

S-43　奈良後期

須恵器	坏
瓦類	破片

S-44

須恵器	蓋1、蓋3、坏c、甕
土師器	煮沸具
瓦類	平瓦（縄・格子）、丸瓦（縄）
石製品	剥片（黒曜石）
その他	古式土師器：壺

S-46　平安後期

須恵器	供膳具
土師器	丸底坏a
瓦類	破片（縄）

S-47　平安中期

須恵器	甕
土師器	坏
黒色土器B	破片
瓦類	破片（縄）

S-48

石製品	剥片（サヌカイト）

S-51　奈良

須恵器	甕
土師器	高坏、供膳具
瓦類	平瓦（縄）

S-52

須恵器	皿a
瓦類	平瓦（縄）

S-53　近代以降

国産陶器	染付

S-54　奈良

須恵器	坏×皿
土師器	供膳具

S-56　奈良

須恵器	坏、甕
土師器	坏
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦

S-57　中世前期

土師器	小皿ａ1、小皿1
瓦類	破片

S-58　古代

瓦類	破片
その他	軽石

S-59

土師器	甕a

S-61　古代

瓦類	破片

S-62　古代

須恵器	蓋3
土師器	煮沸具（角閃石）、破片
瓦類	破片

tab.84-4　大宰府条坊跡第84次調査　出土遺物一覧表（3）

S-63　中世前期

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	破片
白磁	破片：広東（1）、華南（1）

S-64　古代

瓦類	破片

S-66　中世前期

須恵器	破片
土師器	小皿a
瓦類	平瓦（縄）

S-67　奈良

瓦類	平瓦（縄・格子）

S-68

土師器	小皿a1
瓦類	破片（格子）

S-69

須恵器	破片

S-71　不明

石製品	剥片（黒曜石）

S-72

土師器	破片

S-76　古代

土師器	破片
瓦類	破片

S-77　古代

須恵器	小皿a×壺蓋、甕、鉢
土師器	破片
瓦類	丸瓦

S-74　古墳前期

石製品	剥片（サヌカイト）
その他	古式土師器：甕

S-78　古代

瓦類	平瓦（縄）

S-79　古代

土師器	破片
瓦類	破片（格子）

S-81　古代

須恵器	供膳具
土師器	甕、供膳具
瓦類	平瓦（縄）

S-82　古代

須恵器	坏身、甕、供膳具
土師器	破片（角閃石）
瓦類	破片

S-83　不明

土製品	焼土塊

S-84　古代

土師器	破片
瓦類	平瓦（縄）

S-84　原始

石製品	剥片（黒曜石）

S-86　不明

土師器	破片

S-88　奈良

須恵器	坏
土師器	供膳具
瓦類	平瓦（縄）

S-87　古代

瓦類	破片

S-89　飛鳥～奈良

須恵器	蓋1、坏c、甕
瓦類	平瓦（縄）
国産陶器	染付（混入か？）
金属製品	鉱滓

S-91　古代

瓦類	平瓦（縄）

S-92　古代

須恵器	壺
土師器	供膳具
瓦類	破片

S-93　古代

土師器	煮沸具（角閃石・在地）
瓦類	平瓦（縄）

S-94

須恵器	蓋1

茶色土　中世前期

須恵器	坏、甕
土師器	椀c、丸底坏a、小皿a1
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	破片（1）
龍泉窯系青磁	椀：IIb（2）
	盤（1）
瓦類	平瓦（縄・格子）、丸瓦
石製品	剥片（黒曜石）
肥前系陶磁器	白磁（混入）

Z

須恵器	坏a
土師器	甕
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦
白磁	椀：IV（1）
その他	焼土塊

撹乱

須恵器	坏、皿、甕
土師器	坏、丸底坏
瓦類	平瓦（縄・格子）、丸瓦（縄）

表土

須恵器	蓋3、坏a、坏c、皿a、甕、壺
土師器	坏c、甕
瓦類	破片（縄）

Ⅲ-3．第96次調査

１．調査に至る経緯

太宰府市朱雀２丁目（旧大字南字般若寺）9-22で、共同住宅建築に伴い調査を実施した。当地は、般若寺の北限を示す可能性のある遺構群が検出された大宰府条坊跡第63・84次調査地点に挟まれて位置しており、各調査において検出された63SA025と84SA020の柵の間が検出されることを想定して行った。調査期間は、平成２（1990）年６月12日から７月７日。調査対象面積は215㎡、調査面積は132㎡を測る。調査は城戸康利が行った。

２．層位（fig.96-1）

現耕作面より下位約0.5ｍの箇所に遺構面を検出した。なお、遺構再検出時は人工層位処理として黄褐色土で遺物を取り上げている。

３．遺構

調査の結果、柵２条、溝１条、土坑、小穴群を検出した。柵・溝については、いずれも東西方向に並列しており、第63次調査時検出の63SA025と第84次調査時検出の84SA020との関わりが指摘できる遺構である。

柵

96SA010（fig.96-2）

N-86°40′-Eの東西方向で６間分検出した。柱穴掘方は0.4ｍ以下で、柱間は約1.8ｍ前後である。それぞれの柱穴埋土は、掘方・柱痕ともにほぼ同色・同質を呈す。周囲に同様の柱穴が散在するが、いずれも柱間が不揃いであることから東西方向の柵と判断した。また、第63次調査時検出のN-87°30′-Eの東西方向の63SA025と第84次調査時検出の84SA020に方向と位置関係が近似する。よって、これらは東西方向の一連の柵と考えられる。なお、明確な時期決定に至る遺物は出土していないが、奈良時代と考えら

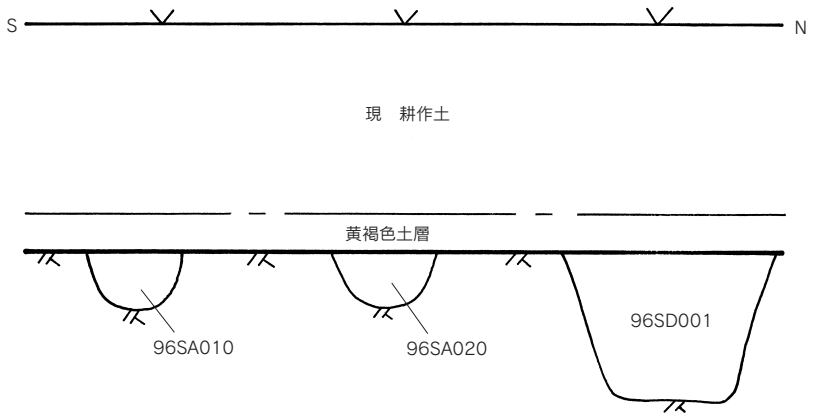


fig.96-1　大宰府条坊跡第96次調査　土層模式図

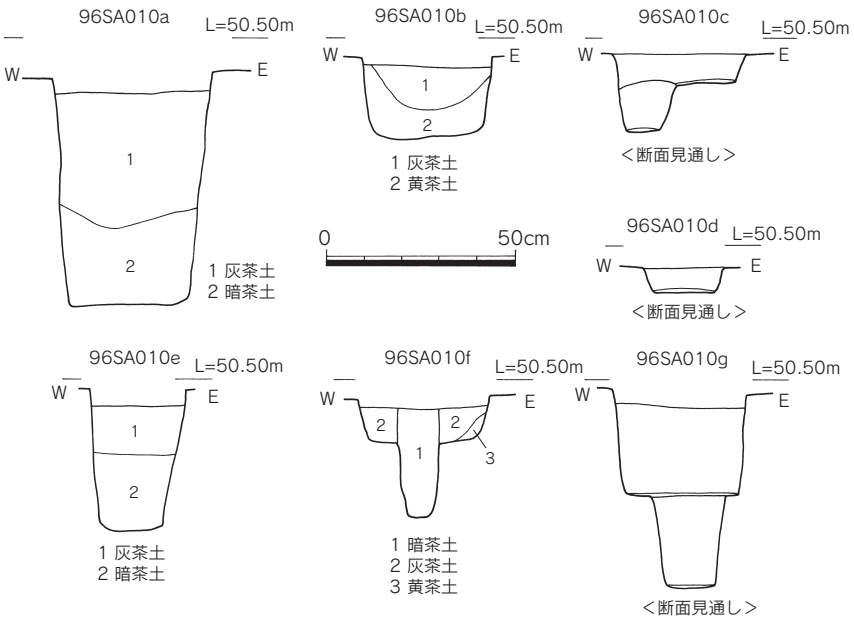


fig.96-2　96SA010土層図（1/20）

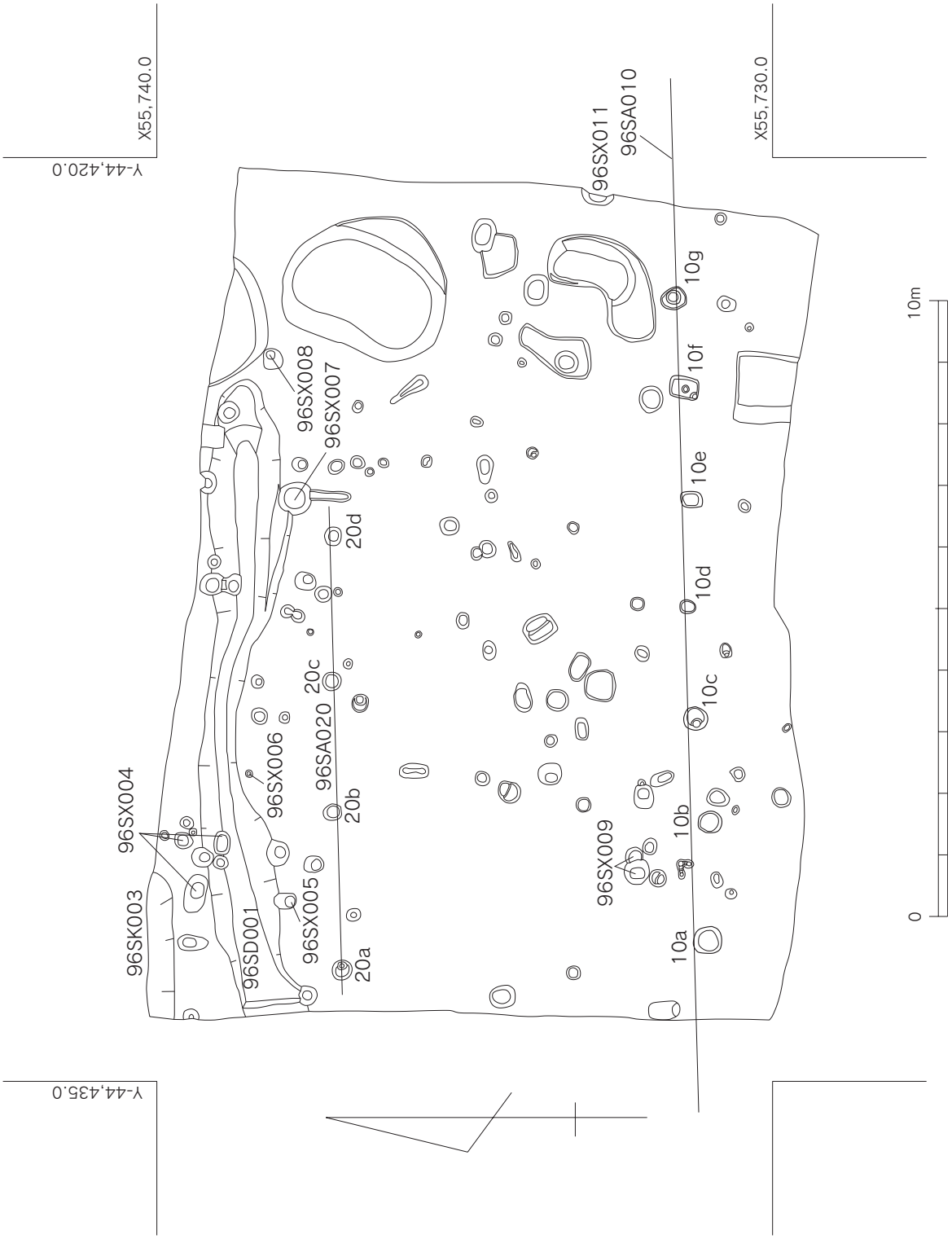


fig.96-3　大宰府条坊跡第96次調査　遺構全体図（1/100）

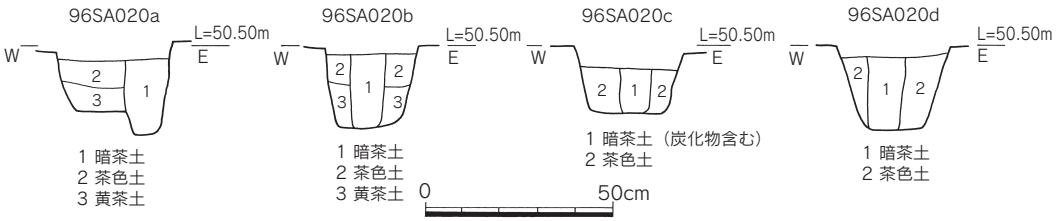


fig.96-4　96SA020土層図（1/20）

れる瓦破片が出土している。

96SA020（fig.96-4）

N-88°-Eの東西方向で３間分検出した。柱穴掘方は0.4m以下で、柱間は２～2.5mとややばらつきはあるが東西方向で96SA010と並列関係にある。それぞれの柱穴埋土は、掘方・柱痕ともにほぼ同色・同質を呈す。周囲に同様の柱穴が散在するが、いずれも柱間が不揃いであることから東西方向の柵と判断した。96SA010に対して北側約６mの位置にあり、何らかの関係があった可能性がある。なお、遺物は出土していない。

溝

96SD001（fig.96-5）

N-87°30′-Eの東西方向で、96SA010から北に約７mの位置にあり、幅0.5～1.3mで約10m分検出した。溝内埋土は土色からほぼ均等に３層に分かれるが、土質は極めて酷似しておりいずれも粘質土である。溝の方向と位置関係から第63次調査時検出の63SD010と関係する遺構とみられる。なお、溝埋没年代は、出土遺物から８世紀後半と考えられる。

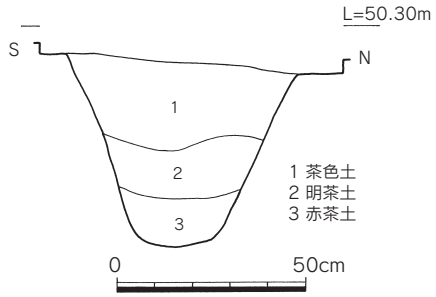


fig.96-5　96SD001土層図（1/20）

土坑

96SK003

調査区の北西隅で一部を検出した。本報告上では土坑としているが、すべてを検出したわけではないので、遺構の性格は溝の可能性もある。なお、本遺構からは奈良時代と考えられる瓦などが出土しているが、明確な時期決定に至る遺物は出土していない。

その他の遺構

96SX004・005・006・007・008・009・011

いずれも掘方が0.4m前後で、埋土も酷似する小穴である。出土遺物は極めて少なく年代決定の根拠となり得る遺物はない。しかし、96SX004・005・007が96SD001を切っていることと、96SX004・006・007・008・009から奈良時代と考えられる遺物が出土していることから、小穴の存続時期は８世紀後半といえる。なお、小穴は調査区全域に散在しているが、ここで報告する遺構のみ遺物が出土している。

４．遺物（fig.96-6）

溝出土遺物

96SD001出土遺物

須恵器

蓋１（１・２）　いずれも口縁部分の破片である。１は、残存高1.5cmを計る。内外面ともに回転ナデ調整。胎土はきめ細かく、0.1～0.8mmの白色粒子を含み、硬く焼きしまる。色調は、内面が明青灰色

～暗青灰色、外面黒灰色で口縁部が灰色を呈す。２は、復元口径14.5cm、残存高2.2cmを計る。内外面ともに回転ナデ調整。後に内面のみ不定方向にナデ調整。胎土はきめ細かく、0.1～2.0mmの白色粒子を含み、硬く焼きしまる。色調は、内面が暗青灰色、外面が灰色～黒灰色を呈し、外面には自然釉がかかる。

蓋c3（3）　残存率50％の資料である。つまみが付いていた痕跡も窺える。復元口径12.6cm、残存高1.8cmを計る。胎土はきめ細かく、0.1～1.5mm程度の白色粒子を含み、硬質。色調は、内面が明青灰色～暗青灰色、外面が青灰色～黒灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。

坏c（4・5）　いずれも底部と高台の破片である。４は、残存高1.6cmを計る。全体的に摩耗しており、調整は不明。0.1～1.0mmの白色粒子と炭化物質を微量に含む。内外面ともに黄白灰色を呈し、焼成・還元ともに不良。５は、残存高2.1cm、復元高台径8.8cmを計る。態度はきめ細かく0.1～1.5mmの白色粒子を含み、硬く焼きしまる。色調は、内面が淡青灰色、外面が青灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。

壺（6）　底部高台付近の破片。残存高4.1cm、復元高台径14.2cmを計る。内外面ともに明青灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。

壺蓋（7）　口縁端部の破片である。残存高2.6cmを計る。内外面ともに回転ナデ調整。胎土はきめ細かく、0.1～0.5mmの白色粒子を含み、硬質。色調は、内面が暗茶灰色、外面が茶灰色～暗茶灰色を呈

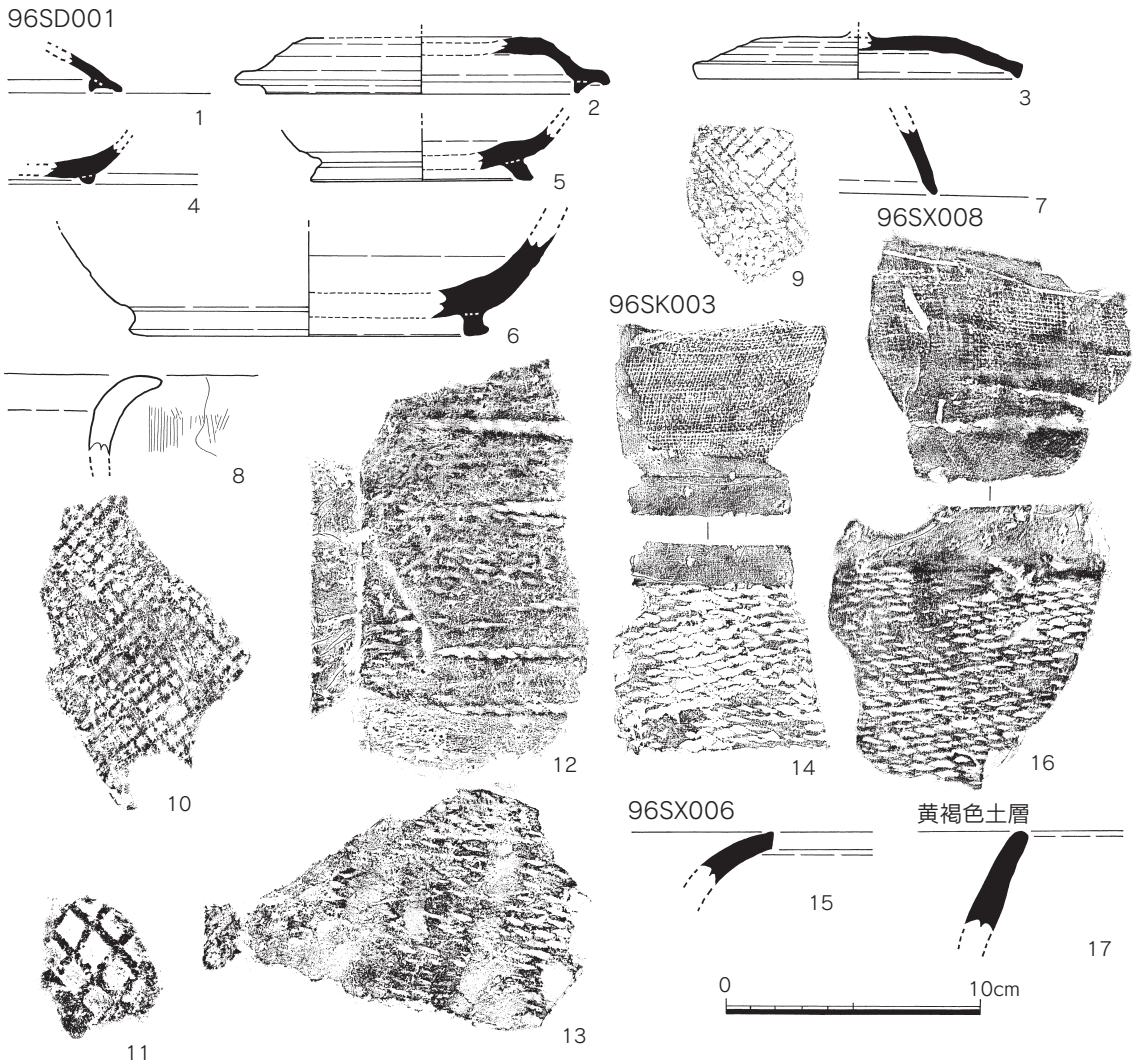


fig.96-6　大宰府条坊跡第96次調査　出土遺物実測図（1/3）

し、焼成・還元ともに良好。

土師器

甕a（8）　口縁端部の破片で、残存高は3.1cmを計る。体部外面刷毛目調整。色調は、基本的に内外面ともに赤橙色を呈すが、口縁端部外面に一部黒色を呈す。胎土は粗く、0.1～3.0mm程度の白色粒子を多く含む。

瓦

平瓦（9～12）　9は、厚さ2.2cmを計る破片である。凸面は格子目叩き。色調は淡白灰色を呈し、焼成は良好。10は、厚さ2.3cmを計る破片である。凸面は格子目叩き。色調は、白黄色を呈し、焼成は良好とはいえない。11は、厚さ2.5cmを計る破片である。凸面は格子目叩き。色調は白黄色を呈し、焼成は良好とはいえない。12は、厚さ2.3cmを計る破片である。凸面は縄目叩き。色調は黄灰色を呈し、焼成は良好とはいえない。

平瓦×丸瓦（13）　厚さ1.9cmを計る破片である。凸面は縄目叩き。色調は灰白色を呈し、焼成は良好。

土坑出土遺物

96SK003出土遺物

瓦

平瓦（14）　厚さ1.7cmを計る破片である。凸面は縄目叩き。色調は灰～白灰色を呈し、焼成は良好。

その他の遺構出土遺物

96SX006出土遺物

須恵器

甕（15）　口縁端部の破片である。残存高2.1cmを計る。内外面ともに回転ナデ調整。胎土は0.1～0.8mmの白色粒子を含み、気泡も含む。色調は、内面が黄褐灰色、外面が灰色～黒灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。

96SX008出土遺物

瓦

平瓦（16）　厚さ2.3cmを計る破片である。凸面は縄目叩き。色調は、凸面が灰色、凹面が白灰色を呈し、焼成は良好。

各層出土遺物

黄褐色土層出土遺物

須恵器

鉢b（17）　口縁端部の小片である。残存高3.7cmを計る。内外面ともに回転ナデ調整。胎土は、0.1～1.5mmの白色粒子を含む。色調は、内面が赤茶灰色、外面が暗青灰色を呈す。焼成は良好で還元は不良。

５．小結

今回の調査成果は、以下の通りである。

・第63・84次調査で検出された63SA025と84SA020の柵につながる柵96SA010を検出。

・96SA010の北方約６mに同方向の柵96SA020を、同じく北方約７mに同方向の溝を検出。

・柵96SA010との関係が指摘できる63SA025・84SA020の柵は、出土遺物がほとんどなかったために時期比定が困難であった。しかし、今回検出した柵は、方向と位置関係から同時期の可能性がある溝96SD001より若干ではあるが時期比定ができる遺物が出土しているため、柵のある程度の時期比定を指摘することが可能となった。

今回の調査地は、周辺の調査である大宰府条坊跡第63・84次調査から般若寺の北限に相当する場所であると推定されている。これらの調査所見と今回の調査所見を合わせると、般若寺北辺は台地の北側傾斜変換部あたりに柵を建設し、それを２条の溝で挟み込む形をとっている。現状では長さ約93ｍ分を確認していることになるが、南辺および東西辺は未確認であり寺域全体の規模を把握するまでには至っていない。しかし、今回の調査で検出された柵96SA010を寺域境界塀としてとらえた場合、この地点の南側になんらかの施設が存在していることを窺わせるものといえよう。

tab.96-1　大宰府条坊跡第96次調査　遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
1	96SD001	溝	東西走行 丘陵北辺の北側東西溝	赤茶土→明茶土→茶色土	1→4	奈良	Eライン
2	96SD001	溝	東西走行	赤茶土→明茶土→茶色土	1→4	奈良後半	Eライン
3	96SK003	土坑				奈良	E5
4	96SX004	小穴群			1→4	奈良	E4
5	96SX005	小穴				不明	D5
6	96SX006	小穴				奈良	E4
7	96SX007	小穴				奈良	D2
8	96SX008	小穴				奈良	E2
9	96SX009	小穴群				奈良	C4
10	96SA010	柵列	東西に6間分検出。 丘陵北辺の柵列			奈良	Bライン
11	96SX011	小穴				古代	C1
20	96SA020	柵列	東西に3間			不明	Dライン
黄褐色土	黄褐色土層	堆積層	現耕作土				調査区全体

tab.96-2　大宰府条坊跡第96次調査　土器計測表

※A；内底のナデ、B；は板状圧痕
※計測値の（　）は復元値。+は残存値。
※遺物番号は、遺物実測番号及び計測番号

S-1

器　別	器　種		fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
須　恵　器	蓋1		96-6-2	R-001	(14.5)	2.2+	―			1/6残存
須　恵　器	蓋1		96-6-1	R-002	―	1.5+	―			口縁部片
須　恵　器	坏c		96-6-5	R-003	―	2.1+	(8.8)			高台部1/10残存
須　恵　器	壺		96-6-6	R-004	―	4.1+	14.2			高台部1/9残存
須　恵　器	坏c		96-6-4	R-005	―	1.6+	―			高台部片
土　師　器	甕a		96-6-8	R-006	―	3.1+	―			口縁部片

S-2

器　別	器　種		fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
須　恵　器	蓋c3		96-6-3	R-001	(12.6)	1.8+				1/2残存
須　恵　器	壺蓋		96-6-7	R-002	―	2.6+				口縁部片

S-6

器　別	器　種		fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
須　恵　器	甕		96-6-15	R-001	―	2.1+	―			口縁部片

黄褐土

器　別	器　種		fig番号	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
須　恵　器	鉢b		96-6-17	R-001	―	3.7+	―			口縁部片

tab.96-3　大宰府条坊跡第96次調査　出土遺物一覧表

S-1　奈良

須　恵　器	蓋1、壺、坏c、高坏
土　師　器	甕a、破片
瓦　類	平瓦（縄・格子）、丸瓦

S-2　奈良後半

須　恵　器	蓋3、高坏、鉢
瓦　類	平瓦（縄・格子）、丸瓦

S-3　奈良

須　恵　器	甕
瓦　類	平瓦（縄）

S-4　奈良

土　師　器	破片
瓦　類	平瓦（縄）、丸瓦

S-5　不明

瓦　類	破片

S-6　奈良

須　恵　器	甕
瓦　類	丸瓦

S-7　奈良

瓦　類	平瓦（縄）

S-8　奈良

須　恵　器	甕、供膳具
瓦　類	平瓦（縄）

S-9　奈良

土　師　器	破片
瓦　類	平瓦（縄）

S-10a　奈良

瓦　類	破片（縄）

S-11　古代

須　恵　器	破片
瓦　類	破片

黄褐土層　奈良

須　恵　器	鉢、破片
土　師　器	甕a、供膳具、破片
瓦　類	平瓦（縄）、丸瓦（縄）

Ⅲ-4．第110次調査

１．調査に至る経緯

調査地は、太宰府市大字南字般若寺28-2で、共同住宅建築に伴い調査を実施した。当地は、西鉄二日市駅の北側に所在する標高約50ｍの独立丘陵の北斜面で、頂上よりわずかに降った場所である。調査地南隣においては、大宰府条坊跡第63・84・96次としてそれぞれ調査が行われており、丘陵頂部を寺域と推定される般若寺の北限とされている。今次調査地は、般若寺北限の外側に位置しているため、寺域隣接部分の施設の確認などを目的として行った。調査期間は、平成３（1991）年５月13日から６月８日。調査対象面積は450㎡、調査面積は139㎡を測る。調査は城戸康利が行った。

２．層位（fig.110-1）

調査地の本来の地形は、南側が高く北側に向いて緩やかに下るものと推定される。この地形を近現代に至って大きく削平することによって平坦面を形成する。

調査地内で確認した堆積土層は、上から順に現地表面を形成する厚さ30cm程度の客土、厚さ15cm程度の暗黄褐色土層、厚さ45cm程度の黄褐色土層、さらにその下には白褐色土層、白褐粘土層、明朱色粘土層と続く。黄褐色土層以下は、基本的にローム地盤であり(後掲の土壌中火山灰抽出分析結果参照)、黄褐色土層の直上に存在した暗黄褐色土層も黄褐色土層と土色が異なるのみで土質は基本的には同様のものと考えられる。したがって、本調査地は、ローム地盤層の上に客土によって盛土された状態であった。

なお、客土除去時に検出したローム層上面を遺構面と認識して調査し、遺構検出時の人工層位処理で暗茶色土層として遺物を取り上げている。

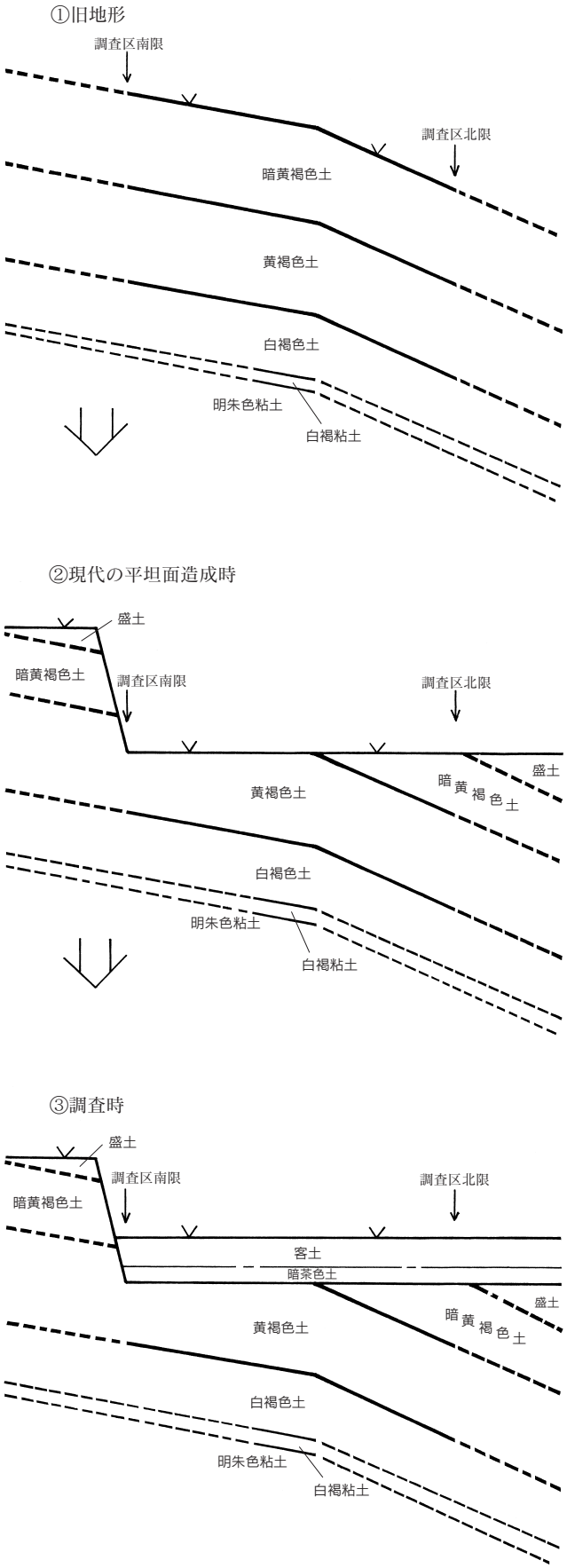


fig.110-1　大宰府条坊跡第110次調査　地形変遷と土層模式図

fig.110-2　大宰府条坊跡第110次調査　遺構全体図（1/100）

３．遺構（fig.110-2）

調査の結果、調査区全域にわたって散在した配置でピットと土坑を検出した。これらの遺構群と遺構検出時の暗茶色土層からは、現代の遺物から古代に遡る瓦などの遺物が出土している。これらのことから、調査区の平坦地は、現代に造成され、検出遺構群は造成後に掘削されたものと思われる。なお、現代の平坦面造成の際の旧斜面の掘削規模は、調査区周辺の地表面観察から、およそ１ｍ程度に及ぶものと考えられる。

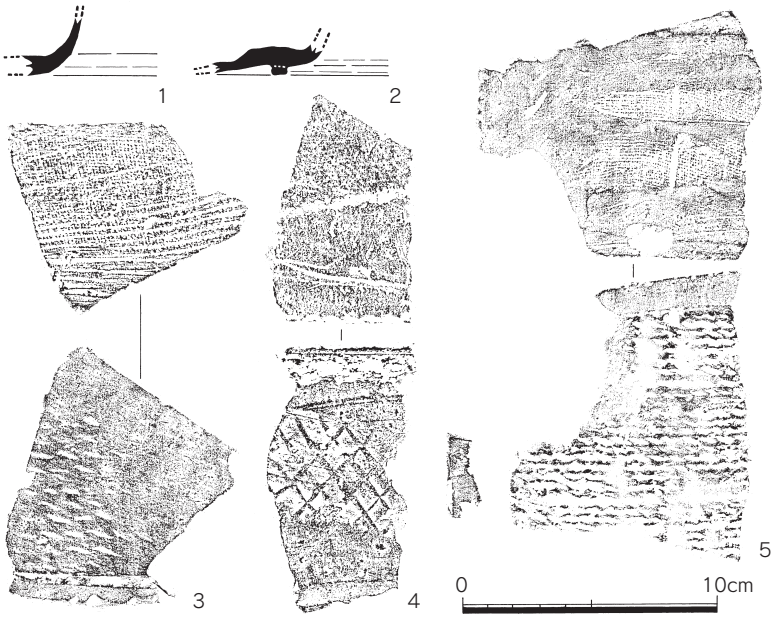


fig.110-3　大宰府条坊跡第110次調査　出土遺物実測図（1/3）

一方、調査区北側1/3からは暗黄褐色土層が検出された。この層からは旧石器時代の遺物が出土する可能性があったため、調査区の一部を二箇所約３ｍ幅で南北方向に掘り下げたが、遺構・遺物ともに発見されなかった。

４．遺物

暗茶色土層出土遺物（fig.110-3）

須恵器

坏（１）　残存高2.2cmを計る体部下方の破片である。内底はナデ、外面下方は回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整。1.0mm程度の白色粒子を多く含む。全体的に内外面ともに青灰色で、外面一部が淡青灰色を呈す。焼成・還元ともに良好。

坏c（２）　底部と高台の一部の破片である。残存高1.2cmを計る。内底にナデ、底部切り離しはヘラ切り。2.0mm程度の白色粒子を多く含む。内外面ともに青灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。

瓦

平瓦×丸瓦（３）　厚さ1.2cm程度の破片である。凸面は縄目叩き痕が確認できる。色調は淡白灰色を呈し、焼成は良好。

平瓦（４・５）　４は、厚さ1.6cm程度の破片である。凸面は格子目叩き痕が確認できる。色調は灰色を呈し、焼成は良好。５は、厚さ2.1cm程度の破片である。凸面は縄目叩き痕が確認できる。色調は淡灰黄色を呈し、焼成は良好。　（下高大輔）

５．自然科学分析：土壌中火山灰抽出分析

A. 目的

調査区北側1/3から検出された暗黄褐色土層は、太宰府市内では検出例が少ないローム層の可能性があった。そこで、土壌中から火山灰が抽出されることによってローム層であるか否かを判断することを目的として、土壌中火山灰抽出分析を行った。なお、分析は株式会社京都フィッション・トラックが行い、その分析方法と結果を以下に報告する。

B. 分析

a. 試料

分析試料は、大宰府条坊跡第110次調査における①明朱色粘土、②白褐粘土、③白褐色土、④黄褐色土の４層準(tab.110-3、fig.110-1)より各１個ずつ採取された４個の土壌試料である。各試料は分析室内で、さらに20gずつ無作為に採取し、以下の分析に供した。

b. 分析方法

試料の分析は、(fig.110-4)のフローチャートに従って行った。以下に各処理工程について説明を加える。

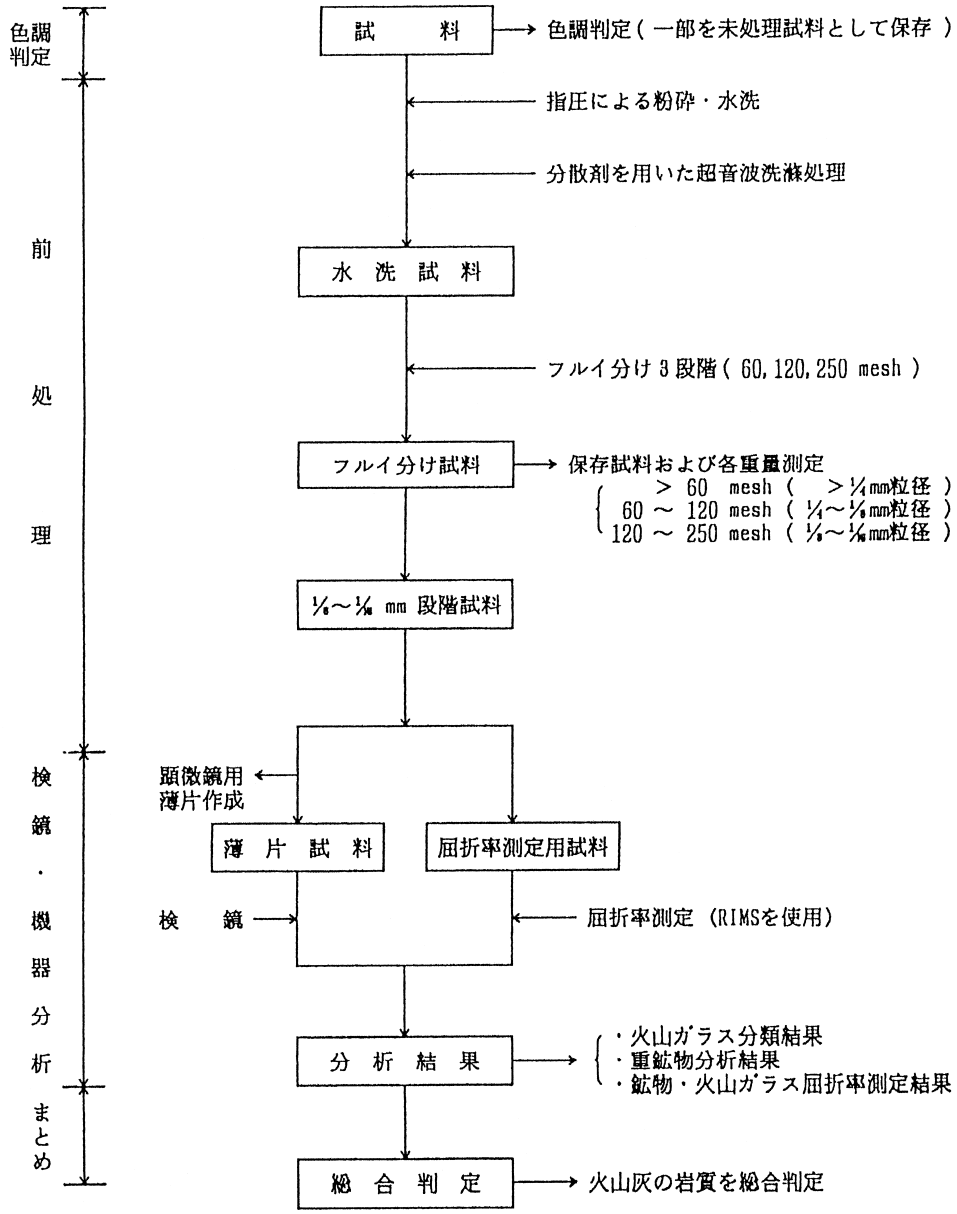


fig.110-4　一般的な火山灰分析処理順序

(1) 前処理

(tab.110 - 4)

まず、未処理試料50～100gを白紙上にとり、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修，1970）により判定表示する。

次に、半湿潤状態の生試料を適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、２？ビーカー中で数回水替えをしながら水洗し、そののち超音波洗滌を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度１～２％程度となるように適宜加え、懸濁がなくなるまで洗滌水の交換を繰返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、３段階の篩別(60,120,250mesh)を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250 mesh(1/8～1/16mm)粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤（Nd=1.54）を用いて岩石用薄片を作成した。

(2) 火山ガラス含有率測定（CD-ROM写真在中）

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目につ

いて測定・チェックを行った。

①火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物（土粒子やアモルファス粒子を含む）を識別し、各含有率を測定した。

②火山ガラス型

吉川1976（註１）の分類に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求めて表示した。なお、吉川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

③プラントオパール含有

鏡下でしばしばプラント・オパールが識別されるため、その有無と、比較的多い場合には全粒子に対するプラント・オパール含有率を半定量的に示した。

④色付ガラスの有無

淡褐～淡紫色を呈する色付ガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付ガラスの有無を示した。なお、ここでいう色付ガラスには、スコリア（塩基性火山砕屑物）中にしばしば含まれる赤褐、褐、黄、緑色などのガラスは含まれない。

(3) 重鉱物分析（tab.110-5）

主要重鉱物（カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・アパタイト・ジルコン・イディングサイト等）を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有が少ないものは結果的に総数200個に満たない。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理により重鉱物を凝集することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

(4) 火山ガラスの屈折率測定（tab.110-6）

前処理により調整された　120～250mesh(1/8～1/16mm)粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS）（註２・３）を用いて火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては精度を高めるため、原則として１試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

具体的な測定データはデータシート（tab.110-7）としてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず、最上位に試料名(Series およびSample Name)が印刷され、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。火山ガラスの屈折率ndの式は、浸液温度から対応する屈折率を換算するもの、ndは屈折率、tは温度を示す。

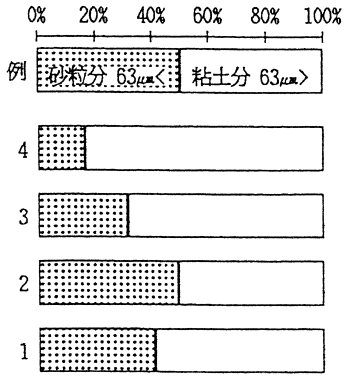


fig.110-5　粘土・砂粒度組成

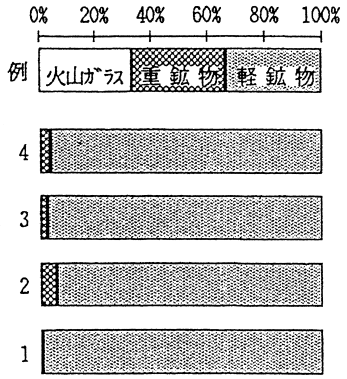


fig.110-6　#120～250粒度試料中の火山ガラス・重鉱物・軽鉱物組成

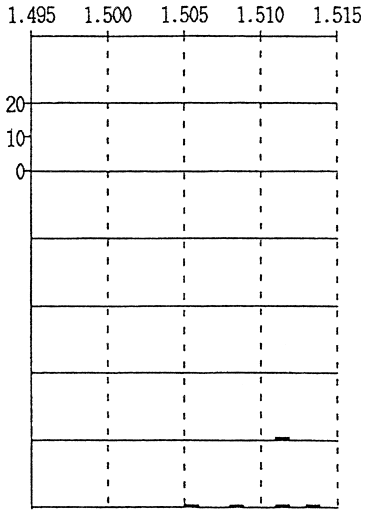


fig.110-7　ガラスの屈折率頻度分布図

温度変化型屈折率測定法（註４）は、火山ガラスと侵液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた侵液温度と屈折率の換算式から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法

である。(As.＋De.)/2は液温制御の際の上昇時(Ascent)と下降時（Descent）の平均値を意味する。繁雑さを避けるため、ここでは測定温度を表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみを表示した。

測定された屈折率は、最終的にTotalの頁にまとめられる。count,min,max,range,mean,st.dev,skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は、縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。＊一つが1個の火山ガラス片の測定結果を示す。

C. 分析結果と考察（tab.110-8・fig.110-5～7）

今回の分析は、各層ごとに１個ずつ離散的に採取されたスポット試料を対象にしており、連続試料分析で可能な系統的検討が困難な点がある。さらに結果として、含有（あるいは残存）火山ガラスが極めて少ない点も、検討を困難にする要素となっている。しかし、いくつかの重要な知見も得られたので、以下に箇条書きにしてコメントを付す。なお、しばしばテフラという語を用いるが、これは現在の地質学・考古学分野で広く用いられるに至った学術用語であり、砕屑性の火山噴出物の総称で、火山灰や火砕流堆積物（軽石流もこの中に属する）はすべてテフラと呼ばれる。

今回の分析結果を考察した結果は以下の３点である。

ⅰ）　試料①，②は非常に風化が進行しているが、ほぼテフラ純層と判断される。

ⅱ）　試料①，②は阿蘇４(Aso-4)テフラの可能性が高い。

ⅲ）　試料③，④はテフラ起源物質の含有が少なく、いわゆるローム層と呼ばれる土壌層とみなされる。

ⅳ）　本分析では、その他の起源テフラについては特に検出されない。

このうちⅱ）については、さらに詳しく説明を加える。

試料①，②は風化が進み、大部分の火山ガラスは変質し、消失したものと考えられる。しかし、極微量だが両試料に火山ガラスが含まれ、その屈折率はn=1.505-1.512程度を示す。また、粗粒で伸長性に富む特徴的な普通緑色角閃石(GHo)を含む。この２つの特徴は、地層の年代をおよそ13万年より若いと限定すれば、阿蘇４(Aso-4)テフラに固有である。もっとも、テフラの正確な同定には、さらに多くの火山ガラスの屈折率および成分測定や、斜方輝石(Opx)や普通緑色角閃石(GHo)といった鉱物の屈折率測定が必要であるが、今回のデータからほぼ阿蘇４(Aso-4)テフラに対比されるといってよいと判断される。さらに、阿蘇４テフラは多数の噴出ユニットに分けられるが、このうち八女軽石流（一般に八女粘土層と呼ばれる）と鳥栖黄色軽石流は大きな噴出堆積をもち、試料①，②はこれらの軽石流（火砕流堆積物層）に対比されるものと考えられる。

阿蘇４テフラは阿蘇カルデラから噴出し、その噴出年代は現在より７～９万年前と考えられている。従来はより若い７万年程度とされてきたが、精度の高い年代測定や層序学的研究の進歩により、最近は古めの8.5～９万年に噴出年代が修正されつつある（町田・新井1992、註５）。

（(株）京都フィッション・トラック）

註

1）吉川周作「大阪層群の火山灰層について」『地質学雑誌』82 (8)　p479-515、1976年。
2）横山卓雄・檀原徹・山下透「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』25(1)　p21-30、1986年。
3）Danhara T.,Yamashita T.,Iwano H.and Kasuya M.「An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method」『Quaternary International』13/14　p89-91、1992年。
4）檀原徹「温度変化型屈折率測定法」日本第四紀学会編『第四紀試料分析法　２．研究対象別分析法』p149-157　東京大学出版会、1993年。
5）町田洋・新井房夫『火山灰アトラス―日本列島とその周辺―』東京大学出版会、1992年。

６．小結

調査地は、現代の造成により１ｍ程度削平されていることがわかった。そのため、調査当初の目的であった般若寺の寺域北辺隣接地の施設の有無などを確認することはできなかった。しかし、暗茶色土からの奈良時代の瓦などの出土は、少なくとも本調査地の周辺に般若寺関連の施設があった可能性を髣髴させる。

また一方で、この一帯で太宰府市内では珍しい旧石器時代の遺物を包含すると考えられるローム層を検出した。このことは、太宰府市における旧地形・古環境を考える上での貴重な資料が得られたということであり、今次調査における成果といえる。

（下高大輔）

tab.110-1　大宰府条坊跡第110次調査　土器計測表

※Ａ；内底のナデ、Ｂ；は板状圧痕
※計測値の（　）は復元値。＋は残存値。
※遺物番号は、遺物実測番号

暗茶土

器　別	器　種		fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備　　考
須　恵　器	坏c	ヘラ	110-3-2	R-001	―	1.2＋	―	○		底部片
須　恵　器	坏c	―	110-3-1	R-002	―	2.2＋	―	○		体部片

tab.110-2　大宰府条坊跡第110次調査　出土遺物一覧表

暗茶土　　奈良

須　恵　器	坏、坏ｃ、甕
土　師　器	破片
瓦　類	平瓦（縄・格子）、丸瓦（縄）
国　産　陶　器	破片（混入）

tab.110-3　第110次調査　分析試料数量一覧表

（単位：個数）

試料数	土層名	土壌中火山灰抽出分析一式
上位④	黄褐土	1
③	白褐土	1
②	白褐粘土	1
下位①	明朱色粘土	1
合　計	4層準	4試料

tab.110-4　保存用試料一覧表

No.	試料名	処理生試料乾燥重量（g）	篩別試料重量（g）			色調判定	備　考
			＞ 1/4 ㎜	1/4 ～ 1/8 ㎜	1/8 ～ 1/16 ㎜		
1	条坊跡110次④試料	17.69	2.17	0.42	0.31		
2	条坊跡110次③試料	19.46	4.78	0.75	0.54		
3	条坊跡111次②試料	16.55	6.51	0.90	0.70		
4	条坊跡111次①試料	11.07	2.86	0.99	0.66		

注．1）表中の数字は保存試料の重量を示す
2）1/8 ～ 1/16 段階の保存試料は、一部岩石薄片作成に使用したため実際よりわずかに少なくなっている。
3）色調判定は、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修，1970）による。

tab.110-5　重鉱物分析結果一覧表

No.	試料名	重鉱物組成※（1）											
		01	Pyroxene		Amphibole		Opq	Id	Zr	Bi	Ap	total	備　考
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
1	条坊跡110次④試料	—	4	2	—	—	120	—	7	10	—	143	
		0.0	2.8	1.4	0.0	0.0	83.9	0.0	4.9	7.0	0.0	100.0	
2	条坊跡110次③試料	—	1	2	—	1	80	—	2	10	—	96	
		0.0	1.0	2.1	0.0	1.0	83.4	0.0	2.1	10.4	0.0	100.0	
3	条坊跡110次②試料	—	7	2	2	23	139	—	—	27	—	200	伸長性に富む粗粒GHoが特徴的。
		0.0	3.5	1.0	1.0	11.5	69.5	0.0	0.0	13.5	0.0	100.0	
4	条坊跡110次①試料	—	63	1	—	14	92	—	—	1	—	171	
		0.0	36.8	0.6	0.0	8.2	53.8	0.0	0.0	0.6	0.0	100.0	

注．※（1）上段　計測粒子数　下段　%
なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。
01：カンラン石，Opx：斜方輝石，Cpx:単斜輝石，BHo:褐色普通角閃石，
GHo：緑色普通角閃石，Opq：不透明（鉄）鉱物，Id：イディングサイト，Zr：ジルコン
Bi:黒雲母，Ap：アパタイト，Gar:ザクロ石，VG：火山ガラス

tab.110-6　火山ガラスの屈折率測定結果一覧表

No.	試料名 (sample name)	屈折率範囲 (range)		屈折率平均値 (mean)	測定個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	条坊跡110次④試料	—	—	—	0	—≦Nd＜—	火山ガラス検出せず
2	条坊跡110次③試料	—	—	—	0	—≦Nd＜—	火山ガラス検出せず
3	条坊跡110次②試料	—	—	1.5118	1	—≦Nd＜—	H型
4	条坊跡110次①試料	1.505	1.513	1.5095	4	—≦Nd＜—	H型

*全火山ガラスに対するmode範囲中にある火山ガラスの含有を示す。

H：扁平型
C：中間型
T：多孔質型

tab.110-7　火山ガラス屈折率測定オリジナルデータシート（1）（2）

```
***  Original Data Sheet  ***                                  96/03/22
                                                               10:45:28

Series Name  : ﾀﾞｻﾞｲﾌｼ
Sample Name  :   ｼﾞｮｳ110ｼﾞｻﾝﾌﾟﾙ(1)
Analist      : Yamashita
Material     : VG
Immersion Oil: No.3.8  (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

  1.5052  1.5111  1.5084  1.5131

                  count   min.    max.    range   mean    st.dev. skew.
Total     :         4     1.5052  1.5131  0.0079  1.5095  0.0034  -0.1542

*** Histogram ***     * =  1
                      0         10        20        30        40        50        60
----------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
 1.490 =<Nd< 1.491   0|
 1.491 =<Nd< 1.492   0|
 1.492 =<Nd< 1.493   0|
 1.493 =<Nd< 1.494   0|
 1.494 =<Nd< 1.495   0|
 1.495 =<Nd< 1.496   0|
 1.496 =<Nd< 1.497   0|
 1.497 =<Nd< 1.498   0|
 1.498 =<Nd< 1.499   0|
 1.499 =<Nd< 1.500   0|
 1.500 =<Nd< 1.501   0|
 1.501 =<Nd< 1.502   0|
 1.502 =<Nd< 1.503   0|
 1.503 =<Nd< 1.504   0|
 1.504 =<Nd< 1.505   0|
 1.505 =<Nd< 1.506   1|*
 1.506 =<Nd< 1.507   0|
 1.507 =<Nd< 1.508   0|
 1.508 =<Nd< 1.509   1|*
 1.509 =<Nd< 1.510   0|
 1.510 =<Nd< 1.511   0|
 1.511 =<Nd< 1.512   1|*
 1.512 =<Nd< 1.513   0|
 1.513 =<Nd< 1.514   1|*
 1.514 =<Nd< 1.515   0|
 1.515 =<Nd< 1.516   0|
 1.516 =<Nd< 1.517   0|
 1.517 =<Nd< 1.518   0|
 1.518 =<Nd< 1.519   0|
 1.519 =<Nd< 1.520   0|
 1.520 =<Nd< 1.521   0|
 1.521 =<Nd< 1.522   0|
 1.522 =<Nd< 1.523   0|
 1.523 =<Nd< 1.524   0|
 1.524 =<Nd< 1.525   0|
 1.525 =<Nd< 1.526   0|
 1.526 =<Nd< 1.527   0|
 1.527 =<Nd< 1.528   0|
 1.528 =<Nd< 1.529   0|
 1.529 =<Nd< 1.530   0|
----------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

```
***  Original Data Sheet  ***                                  96/03/22
                                                               10:48:26

Series Name  : ﾀﾞｻﾞｲﾌｼ
Sample Name  :   ｼﾞｮｳ110ｼﾞｻﾝﾌﾟﾙ(2)
Analist      : Yamashita
Material     : VG
Immersion Oil: No.3.8  (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

  1.5118

                  count   min.    max.    range   mean    st.dev. skew.
Total     :         1     1.5118  1.5118  0.0000  1.5118  0.0000  0.0000

*** Histogram ***     * =  1
                      0         10        20        30        40        50        60
----------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
 1.490 =<Nd< 1.491   0|
 1.491 =<Nd< 1.492   0|
 1.492 =<Nd< 1.493   0|
 1.493 =<Nd< 1.494   0|
 1.494 =<Nd< 1.495   0|
 1.495 =<Nd< 1.496   0|
 1.496 =<Nd< 1.497   0|
 1.497 =<Nd< 1.498   0|
 1.498 =<Nd< 1.499   0|
 1.499 =<Nd< 1.500   0|
 1.500 =<Nd< 1.501   0|
 1.501 =<Nd< 1.502   0|
 1.502 =<Nd< 1.503   0|
 1.503 =<Nd< 1.504   0|
 1.504 =<Nd< 1.505   0|
 1.505 =<Nd< 1.506   0|
 1.506 =<Nd< 1.507   0|
 1.507 =<Nd< 1.508   0|
 1.508 =<Nd< 1.509   0|
 1.509 =<Nd< 1.510   0|
 1.510 =<Nd< 1.511   0|
 1.511 =<Nd< 1.512   1|*
 1.512 =<Nd< 1.513   0|
 1.513 =<Nd< 1.514   0|
 1.514 =<Nd< 1.515   0|
 1.515 =<Nd< 1.516   0|
 1.516 =<Nd< 1.517   0|
 1.517 =<Nd< 1.518   0|
 1.518 =<Nd< 1.519   0|
 1.519 =<Nd< 1.520   0|
 1.520 =<Nd< 1.521   0|
 1.521 =<Nd< 1.522   0|
 1.522 =<Nd< 1.523   0|
 1.523 =<Nd< 1.524   0|
 1.524 =<Nd< 1.525   0|
 1.525 =<Nd< 1.526   0|
 1.526 =<Nd< 1.527   0|
 1.527 =<Nd< 1.528   0|
 1.528 =<Nd< 1.529   0|
 1.529 =<Nd< 1.530   0|
----------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

tab.110-7　火山ガラス屈折率測定オリジナルデータシート（3）（4）

```
***  Original Data Sheet  ***                                  96/03/22
                                                               10:58:54

Series Name  : ﾀﾞｻﾞｲﾌｼ
Sample Name  :   ｼﾞｮｳ110ｼﾞｻﾝﾌﾟﾙ(3)
Analist      : Yamashita
Material     : VG
Immersion Oil: No.3.8  (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2


                  count   min.    max.    range   mean    st.dev. skew.
Total     :         0     0.0000  0.0000  0.0000  0.0000  0.0000  0.0000

*** Histogram ***     * =  1
                      0         10        20        30        40        50        60
----------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
 1.490 =<Nd< 1.491   0|
 1.491 =<Nd< 1.492   0|
 1.492 =<Nd< 1.493   0|
 1.493 =<Nd< 1.494   0|
 1.494 =<Nd< 1.495   0|
 1.495 =<Nd< 1.496   0|
 1.496 =<Nd< 1.497   0|
 1.497 =<Nd< 1.498   0|
 1.498 =<Nd< 1.499   0|
 1.499 =<Nd< 1.500   0|
 1.500 =<Nd< 1.501   0|
 1.501 =<Nd< 1.502   0|
 1.502 =<Nd< 1.503   0|
 1.503 =<Nd< 1.504   0|
 1.504 =<Nd< 1.505   0|
 1.505 =<Nd< 1.506   0|
 1.506 =<Nd< 1.507   0|
 1.507 =<Nd< 1.508   0|
 1.508 =<Nd< 1.509   0|
 1.509 =<Nd< 1.510   0|
 1.510 =<Nd< 1.511   0|
 1.511 =<Nd< 1.512   0|
 1.512 =<Nd< 1.513   0|
 1.513 =<Nd< 1.514   0|
 1.514 =<Nd< 1.515   0|
 1.515 =<Nd< 1.516   0|
 1.516 =<Nd< 1.517   0|
 1.517 =<Nd< 1.518   0|
 1.518 =<Nd< 1.519   0|
 1.519 =<Nd< 1.520   0|
 1.520 =<Nd< 1.521   0|
 1.521 =<Nd< 1.522   0|
 1.522 =<Nd< 1.523   0|
 1.523 =<Nd< 1.524   0|
 1.524 =<Nd< 1.525   0|
 1.525 =<Nd< 1.526   0|
 1.526 =<Nd< 1.527   0|
 1.527 =<Nd< 1.528   0|
 1.528 =<Nd< 1.529   0|
 1.529 =<Nd< 1.530   0|
----------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

```
***  Original Data Sheet  ***                                  96/03/22
                                                               10:59:11

Series Name  : ﾀﾞｻﾞｲﾌｼ
Sample Name  :   ｼﾞｮｳ110ｼﾞｻﾝﾌﾟﾙ(4)
Analist      : Yamashita
Material     : VG
Immersion Oil: No.3.8  (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2


                  count   min.    max.    range   mean    st.dev. skew.
Total     :         0     0.0000  0.0000  0.0000  0.0000  0.0000  0.0000

*** Histogram ***     * =  1
                      0         10        20        30        40        50        60
----------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
 1.490 =<Nd< 1.491   0|
 1.491 =<Nd< 1.492   0|
 1.492 =<Nd< 1.493   0|
 1.493 =<Nd< 1.494   0|
 1.494 =<Nd< 1.495   0|
 1.495 =<Nd< 1.496   0|
 1.496 =<Nd< 1.497   0|
 1.497 =<Nd< 1.498   0|
 1.498 =<Nd< 1.499   0|
 1.499 =<Nd< 1.500   0|
 1.500 =<Nd< 1.501   0|
 1.501 =<Nd< 1.502   0|
 1.502 =<Nd< 1.503   0|
 1.503 =<Nd< 1.504   0|
 1.504 =<Nd< 1.505   0|
 1.505 =<Nd< 1.506   0|
 1.506 =<Nd< 1.507   0|
 1.507 =<Nd< 1.508   0|
 1.508 =<Nd< 1.509   0|
 1.509 =<Nd< 1.510   0|
 1.510 =<Nd< 1.511   0|
 1.511 =<Nd< 1.512   0|
 1.512 =<Nd< 1.513   0|
 1.513 =<Nd< 1.514   0|
 1.514 =<Nd< 1.515   0|
 1.515 =<Nd< 1.516   0|
 1.516 =<Nd< 1.517   0|
 1.517 =<Nd< 1.518   0|
 1.518 =<Nd< 1.519   0|
 1.519 =<Nd< 1.520   0|
 1.520 =<Nd< 1.521   0|
 1.521 =<Nd< 1.522   0|
 1.522 =<Nd< 1.523   0|
 1.523 =<Nd< 1.524   0|
 1.524 =<Nd< 1.525   0|
 1.525 =<Nd< 1.526   0|
 1.526 =<Nd< 1.527   0|
 1.527 =<Nd< 1.528   0|
 1.528 =<Nd< 1.529   0|
 1.529 =<Nd< 1.530   0|
----------------------+---------+---------+---------+---------+---------+---------+
```

tab.110-8　土壌中火山灰抽出分析結果

通番	試料名	乾燥重量(g)	粒度組成(g) 砂粒分(mesh size) >60	～120	～250	粘土分 <250	鉱物・ガラス組成(%) 火山ガラス	重鉱物	軽鉱物	*1 主要重鉱物および備考	PO*2 含有(%)	*3 *4 主要火山ガラス型	色付ガラス有無
4	(4)黄褐色土	17.7	2.2	0.4	0.3	97.1	0.0	4.0	96.0	Opq主.Bi.Zr.Opx.Cpx.	—	火山ガラス含まず	—
3	(3)白褐色土	19.5	4.8	0.8	0.5	93.9	0.0	3.0	97.0	Opq主.Bi.Zr.Cpx.Opx.GHo.	—	火山ガラス含まず.β-Qz少量	—
2	(2)白褐色粘土	16.6	6.5	0.9	0.7	91.9	+0.0	6.0	94.0	Opq主.GHo.Bi.Opx.Cpx.BHo.	—	Hb.Cb.　β-Qz少量	—
1	(1)明朱色粘土	11.1	2.9	1.0	0.7	95.5	+0.0	1.0	99.0	Opq.Opx主.GHo.Cpx.Bi.	—	Hb.Cb.It.	+

*1　各鉱物とその略称は以下のように対応します.

Ol;カンラン石　Opx;斜方輝石　Cpx;単斜輝石　GHo;緑色角閃石　BHo;褐色角閃石　CZo;斜ユウレン石

Bi;黒雲母　Gar;ザクロ石　Zr ;ジルコン　Id ;イディングサイト　Opq;不透明鉱物　Ep ;緑レン石

*2　PO含有はプラント・オパールの含有量（%）を示します.

*3　火山ガラス型とその略称は吉川(1976)に従い以下のように対応します.

Ha.Hb; 扁平型（バブル・ウォール型）　)　Ca.Cb;中間型（軽石型）　Ta.Tb;多孔質型（軽石型. 繊維状型）

*4　なお、吉 川(1976)以外のガラス型について次の略称を用います。

SG;スコリア質ガラス　It ;不規則型

[屈折率値頻度分布]

(No.)	4	3	2	1
1.495 =<Nd< 1.496	0	0	0	0
1.496 =<Nd< 1.497	0	0	0	0
1.497 =<Nd< 1.498	0	0	0	0
1.498 =<Nd< 1.499	0	0	0	0
1.499 =<Nd< 1.500	0	0	0	0
1.500 =<Nd< 1.501	0	0	0	0
1.501 =<Nd< 1.502	0	0	0	0
1.502 =<Nd< 1.503	0	0	0	0
1.503 =<Nd< 1.504	0	0	0	0
1.504 =<Nd< 1.505	0	0	0	0
1.505 =<Nd< 1.506	0	0	0	1
1.506 =<Nd< 1.507	0	0	0	0
1.507 =<Nd< 1.508	0	0	0	0
1.508 =<Nd< 1.509	0	0	0	1
1.509 =<Nd< 1.510	0	0	0	0
1.510 =<Nd< 1.511	0	0	0	0
1.511 =<Nd< 1.512	0	0	1	1
1.512 =<Nd< 1.513	0	0	0	0
1.513 =<Nd< 1.514	0	0	0	1
1.514 =<Nd< 1.515	0	0	0	0

Ⅲ-5．第231次調査

１．調査に至る経緯

調査地は、太宰府市朱雀２丁目9-82、9-53で、般若寺塔跡の南隣接地にあたる。土地の東側および南側は３～５ｍ程度の急な崖となっており、寺域の南限は対象地内に収まることが予想されていた。対象地南西付近には礎石があったという話も伝えられており、地形的な要素とも合わせて、寺南門の礎石があった可能性が指摘されている。

平成15（2003）年４月14日、ここに専用住宅を建築するあたっての事前問い合わせが文化財課にあった。土地の東側および南側の崖には大きな擁壁を築くことも伝えられた。まずは般若寺関連遺跡が包蔵されている可能性が高いことを伝え、まずは確認調査を実施し地下の状況を把握する方向で協議を行った。

確認調査は平成15年８月７日に実施し、GL-110cmで遺構が検出された。確認した遺構には古代の掘立柱建物の一部とみられる平面プラン方形を呈した小穴もみられた。ここに般若寺関連の遺構が存在することも十分予想され、擁壁工事で削平される範囲の遺跡の記録保存が必要であること、般若寺寺域や寺院内部の状況把握も必要であること、そしてこれらを前提とした発掘調査等が必要となるだろうと地権者に伝えた。また古代大宰府を窺う上で重要な遺跡であり、可能な限り地下遺構保存を講ずるよう工事掘削範囲縮小等の協力を要請した。翌日、これまで般若寺跡の調査を行っている九州歴史資料館にも経緯・確認調査結果を説明を行った。その中で、今回の調査は太宰府市教育委員会で実施する方針が出された。

調査に際しては、今回寺域や寺域内部の確認を行うため、新築予定地を除く周辺を調査を実施することで協議を行い、遺構保存できる範囲はなるべく一部掘削や半裁等でとどめることにした。また対象地東側および南側の擁壁工事によって破壊される部分については、当時の法面が地山がカットされただけの自然面であり、数ｍ下には民家や市道が通っていることや、整地層が複数あり調査掘削が予想外に深くなる可能性もあったため、現場保全や防災の見地から工事時に立会を行うことにし、必要に応じて記録をとることになった。ただし法面天端（法頭）際までは本調査を行い、遺構の状況を確認した上で、工事関係者と最終的な工事掘削範囲を調整し、遺構保存ができるところは極力残していただくよう依頼した。このため調査中は関係者に何度も現地に足を運んでいただくことになった。

調査は、国庫補助を受け、平成15年10月27日より開始し、12月２日に終了した。調査は井上信正が担当した。開発対象面積は1,157.22㎡で、発掘調査面積は183.9㎡である。調査では、対象地東側の調査区をA区、南側（概ね東西方向の調査区）をB区、西側（概ね南北方向の調査区）をC区と設定した。

調査の結果、７世紀末頃の掘立柱建物が検出されたほか、般若寺塔跡の東脇を通るとみられる南北溝（231SD020）、この南北溝の南端から西に伸びる東西溝（231SD015）を検出した。南北溝（231SD020）の北延長上には、第84次調査等で検出された寺域北側を画すると想定されている東西走行の柵列遺構の東端が位置し、塔跡もこの中に含まれることから、この南北溝が般若寺寺域の東を画する可能性が想定された。また東西溝・南北溝とも現状では丘陵端部に位置することから、両溝が般若寺寺域の南東隅を画する区画溝の可能性があるとして、11月21日に報道発表を行った。

調査終了後、12月１日より工事掘削がはじまり、工事立会を随時行った。

南側の擁壁工事はほぼ予定通り行われた。ここでは地山面が予想外に高い位置にあることがわかり、古代でも地形傾斜はそれほど急激なものではなく、崖を呈しているのは後世の造成によるものと判明し

た。平成17年度には調査地の南西約60m前後の地点で大宰府条坊跡第249次調査が実施されたが、両調査の遺構面の比高差から、水平に対して約９度前後の傾斜があったことがわかる。

東側の擁壁工事については、最終的には法面天端（法頭）端部から約１m程度が掘削対象となった。ただ丘陵上に置いた重機から法面下場（法尻）を目視するため（視界確保のため）の掘削であったため、垂直に掘削するのではなく角度を持たせて掘削しており、遺構は予想以上に破壊を免れることができたと考える。この際、地山面は法面の高い位置で検出され、７世紀末に埋没した東西溝（231SD011）の東延長とみられる遺構も確認した。このことから丘陵は元々東側にもある程度延びており、７世紀末頃にはそこも含めて土地利用されていたことがわかった。

なお、調査・工事立会等終了後、地権者に調査報告を行い、地下の遺構保存についてあたらめて協力をお願いした。

２．層位等（tab.231-1、fig.231-3～5）

近隣の丘陵部は、約９万年前の阿蘇山噴火による火砕流（阿蘇４テフラ）が堆積しており、ほとんど浸食を受けずに火砕流堆積当時の堆積原面の姿を今日まである程度保存しているという（『太宰府市史環境資料編』）。この阿蘇４テフラについては、八女粘土と呼ばれる白色粘土層と、鳥栖ロームと呼ばれる赤褐色粘土がみられ、ここ般若寺丘陵も同様である。本調査では遺構保存を前提とした調査目的により、掘削が地山まで至った箇所は多くないが、確認できた部分では、大半は遺構・整地を剥ぐと白色～淡黄白色を帯びたローム層（八女粘土）が露出し、赤褐色粘土（鳥栖ローム）は調査区北西部（C区北側）にて薄く堆積しているのみであった。

こうしたローム層を地山（基盤層）とし、その上に複数の造成盛土・整地層が堆積しており、各層の間に、あるいは複数層を基盤とした状態で、遺構（遺構面）が展開している。

調査時には、遺構と堆積層との分別、および互いの関連や前後関係の把握が最も重要な作業となった。遺構と堆積層との分別については、堆積層が丘陵に沿って傾斜堆積していたことが大きな判断基準となった。また231SD020など検出時に堆積層かと見紛うものもあったが、遺構と認定したものについては平面プランが閉じており（あるいは閉じている可能性が高く）、埋土の傾斜や遺構底面も水平に近いこと等から判断した。整地層で水平堆積に近いものもあったが、その堆積状況から分別できたものもある。

次に、遺構面についてであるが、今回の調査は遺構保存が前提であり未掘部分も多い。しかも、ここは丘陵の頂上部と傾斜部の境にあたるため多くの層は傾斜堆積してお

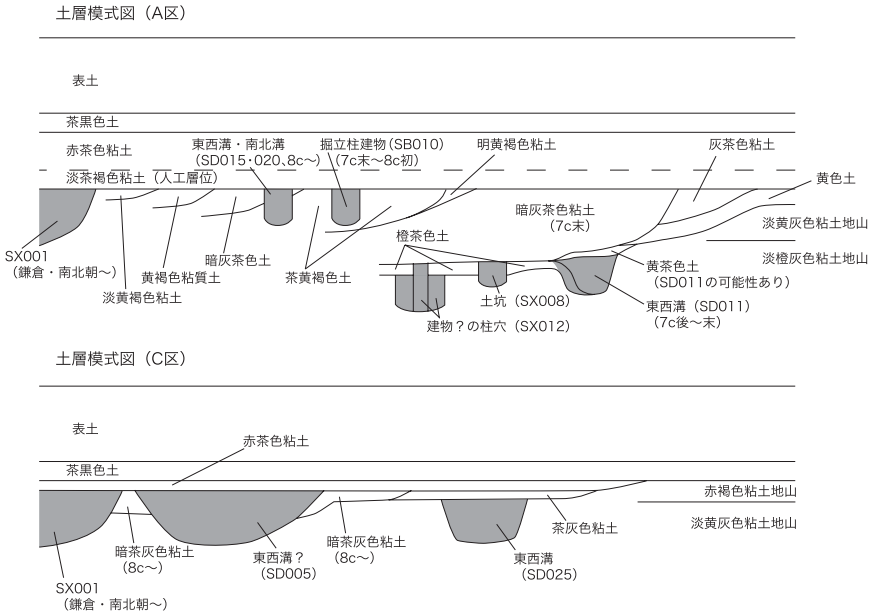


fig.231-1　大宰府条坊跡第231次調査　土層模式図

fig.231-2　大宰府条坊跡第231次調査　遺構全体図（1/200）

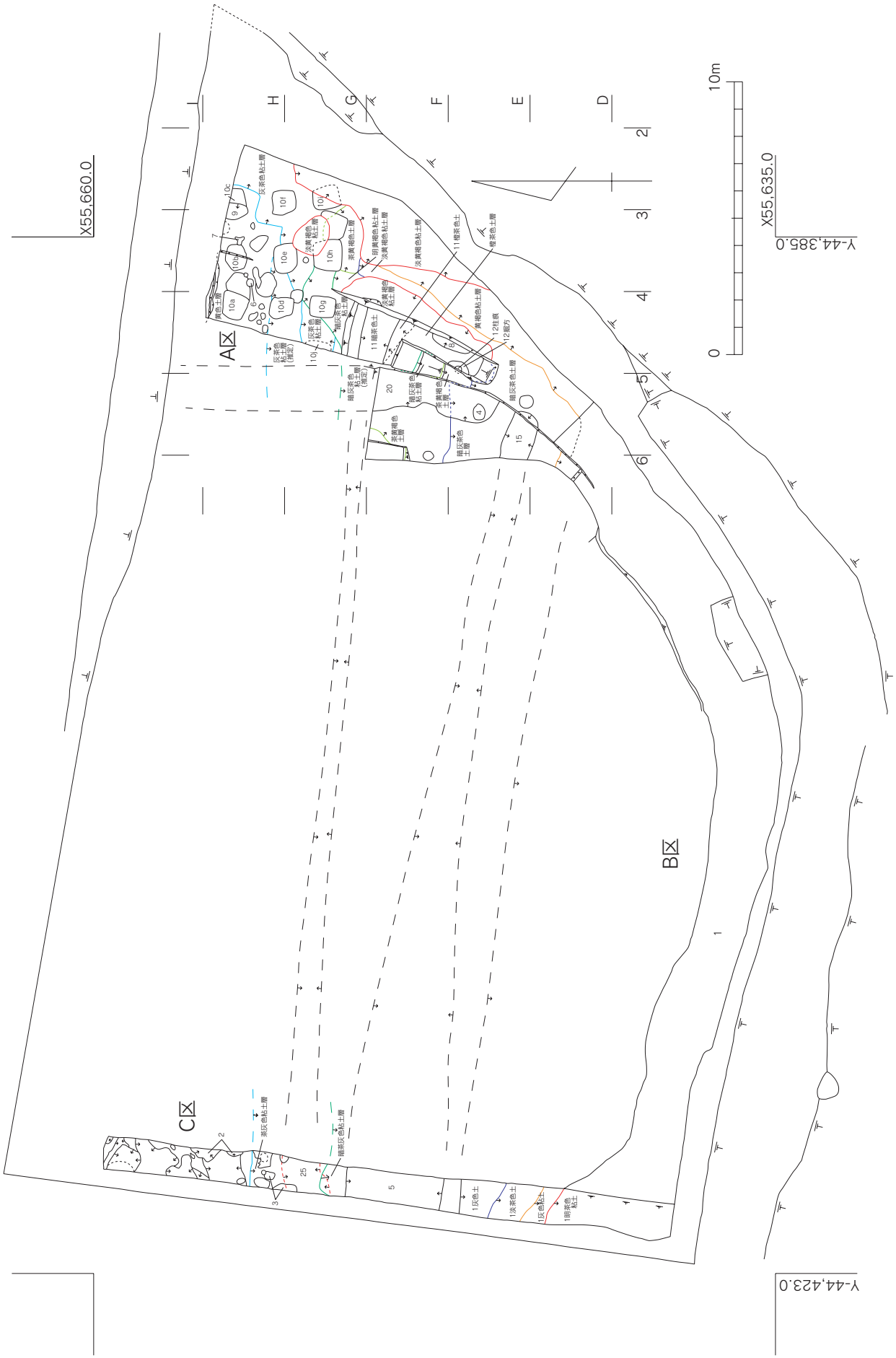


fig.231-3　大宰府条坊跡第231次調査　配置図（1/200）

tab.231-1　層群・遺構面対応表

土層群･遺構面	性格・時期	関連土層・遺構名（矢印は、古→新）		
		A区	B区	C区
表土層	現代造成土・表土	赤茶色粘土層→茶黒色土層→表土		
淡茶褐色粘土	遺構検出 面を覆う層として任意に設定した人工層位	淡茶褐色粘土層		
＜第1遺構面＞	平安後・鎌倉・南北朝～	SX001、SX003等		
第１層群	？	黄褐色粘質土層→淡黄褐色粘土層	―	―
＜第2遺構面＞	奈良～平安	SD015、SD020	―	(SD005)
第2層群	？	暗灰茶色土層	―	暗茶灰色粘土層
＜第3遺構面＞	7c末～8ｃ前半	SB010	―	―
第3層群	7c末	黄茶色土層→黄色土層→灰茶色粘土層→暗灰茶色粘土層→明黄褐色粘土層→茶黄褐色土層	―	茶灰色粘土層
＜第4遺構面＞	7c末	SX008、SD011(第4層群堆積後)、SX012(第4層群堆積後)	―	―
第4層群	7c後期～末	橙茶色土層	―	―
＜第5遺構面＞	7c後期～末	SD011（第4層群堆積前）、SX012掘方	―	SD025
第5層群	7c後期？～末？	灰褐色土層	―	―

り、時期差のある遺構・土層（造成土・整地土）が同じ遺構面上で検出される。こうした場合、報告の際、調査の段階で同じ面上に広がっていた遺構群を遺構面（調査面）として報告し、そこでわかったことを整理して時期変遷等を述べるという手法をとることも多いが、当調査の場合、調査面＝遺構面として報告すると各層・各遺構の関係の説明がかなり難しくなる。今回の調査では各層と各遺構との成立経緯・前後関係を捉えることが大変重要であり、そのためには、まず各層・各遺構との関係を明らかにし、そこで整理した層位関係を基にそれぞれのまとまりを土層群・遺構面として捉え、説明するのが合理的と考えた。遺構面認定については、遺構が展開する上下の堆積層群の把握、不整合面の存在等から検討した。

こうして検討した結果をまとめると、表土層以下で５つの遺構面と５つの土層群が捉えることができた。それぞれの層位（土層群）と遺構面の関係についてまとめたものをtab.231-1に示し、以下、その内容を述べる。

＜表土層・第１遺構面＞

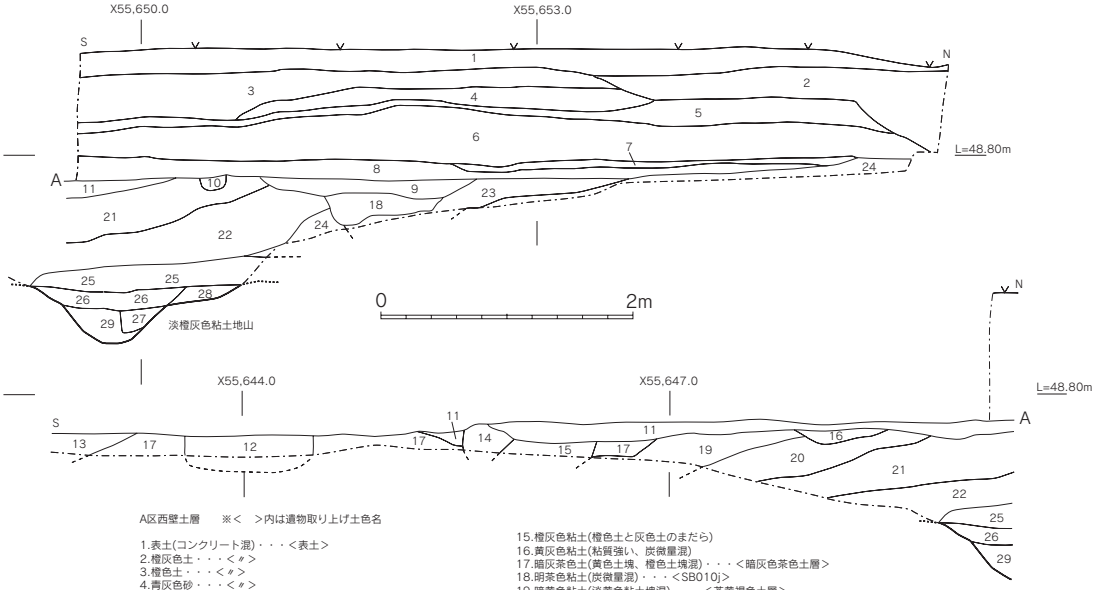
表土層の一部である赤茶色粘土層は、下層とは不整合で接しており、この赤茶色粘土層除去後に検出される面は遺構面として捉えられる（この遺構検出面を覆う層として任意に設定した淡茶褐色粘土層も、赤茶色粘土層と基本的に同一層）。赤茶色粘土層は、層下面がほぼ水平であることや出土遺物から、昭和期に重機等を使用して造成された際の造成土とみられる。

赤茶色粘土層（淡茶褐色粘土層）を除去すると、遺構や堆積層（造成土・整地土）が検出される。この不整合面上には、新しい時期の遺構・土層から古い時期の遺構・土層（A区第３遺構面のSB010やA区第３層群の黄色土層等）まで、時期差のある遺構・土層（造成土・整地土）が同時に検出されたが、前述のように、各層群と遺構群の関係で遺構面を捉えるため、ここでいう第１遺構面とは、淡黄褐色粘土層・黄褐色粘質土層（後述の第１層群）堆積より後で赤茶色粘土層堆積以前に形成された遺構が対象となる。厳密には遺構ではないものの造成土層の231SX001（A～C区、平安後期～鎌倉・南北朝期）をはじめとし、C区検出のSX003等が挙げられる。

＜第１層群・第２遺構面＞

A区中央部では、赤茶色粘土層（淡茶褐色粘土層）除去時に231SD015・020といった遺構群も確認した。これらが暗灰茶色土層（後述の第２層群）に切り込んでいることは確認できたが、淡黄褐色粘土層・黄褐色粘質土層（第１層群）とは切りあい関係にない。この第１層群からは奈良時代を最新とする遺物が出土しているため231SD015・020の基盤層となっていた可能性も想定できるが、埋土中に古い遺物のみ含まれることはよくあることであり、出土遺物だけではこれらの前後関係を確定できない。つまり第１遺構面の231SX001と231SD015・020との間に第１層群が挟まれることも念頭におく必要が

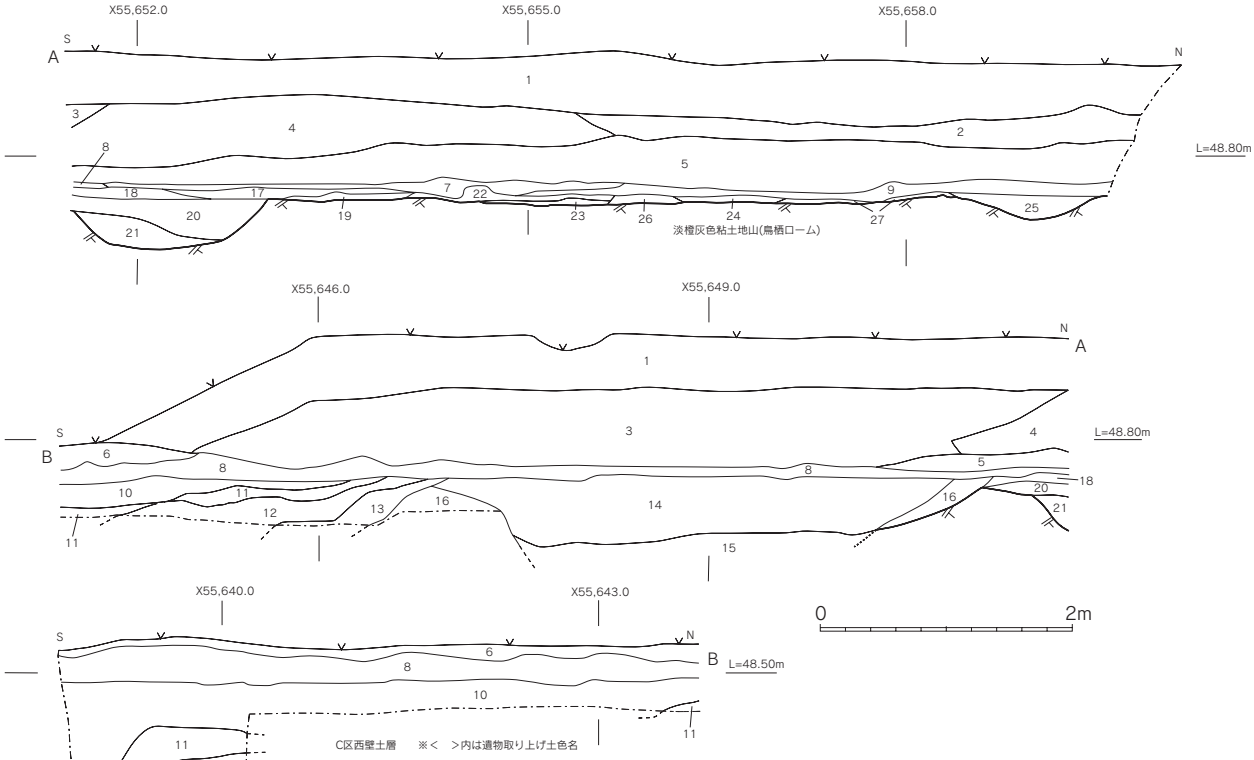
A区4～5地区ライン付近調査区西壁～中央トレンチ土層図



A区西壁土層　※＜　＞内は遺物取り上げ土色名

1.表土(コンクリート混)・・・＜表土＞
2.橙灰色土・・・＜〃＞
3.橙色土・・・＜〃＞
4.青灰色砂・・・＜〃＞
5.暗灰色土・・・＜〃＞
6.灰色土・・・＜〃＞
7.黒灰色土・・・＜茶黒色土＞
8.赤茶色粘土・・・＜赤茶色粘土＞
9.黒茶色粘土(11と同じ粘質強い、砂粒混)・・・＜SD020＞
10.暗茶色粘土(遺構、粘質強い、砂粒混)
11.黒茶色粘土(9と同じ、粘質強い、砂粒混)・・・＜SD020＞
12.暗茶灰色粘土(黄色土塊、橙色土塊多く混、炭微量混)・・・＜SD015＞
13.暗茶色粘土・・・＜黄褐色粘質土層と考える＞
14.暗黄色粘土(やや粘質強い)
15.橙灰色粘土(橙色土と灰色土のまだら)
16.黄灰色粘土(粘質強い、炭微量混)
17.暗灰茶色土(黄色土塊、橙色土塊混)・・・＜暗灰色茶色土層＞
18.明茶色粘土(炭微量混)・・・＜SB010j＞
19.暗黄色粘土(淡黄色粘土塊混)・・・＜茶黄褐色土層＞
20.明黄茶色粘土(黄色土塊、橙色土塊混、暗灰茶色粘土層の一部と考える)
21.黄茶色粘土(黄色土塊混、炭混、暗灰茶色粘土層の一部と考える)
22.暗灰茶色粘土(黄色土塊、橙色土塊混、炭混)・・・＜暗灰茶色粘土層＞
23.灰茶色粘土・・・＜灰茶色粘土＞
24.黄色土・・・＜黄色土層＞
25.暗茶褐色土(淡黄色土塊、橙灰色土塊多く混)・・・＜黄茶色土層＞
26.やや暗い暗灰色土・・・＜SD011暗茶色土＞
27.暗灰色土・・・＜SD011暗茶色土＞
28.暗茶色土＋淡黄色土＋淡橙灰色粘土地山・・・＜SD011暗茶色土＞
29.橙茶色土(橙茶色土層混入)・・・＜SD011橙茶色土＞

C区調査区西壁土層図



C区西壁土層　※＜　＞内は遺物取り上げ土色名

1.表土(コンクリート混)・・・＜表土＞
2.表土(真砂)・・・＜〃＞
3.〃(〃)・・・＜〃＞
4.〃(〃)・・・＜〃＞
5.灰色土・・・＜〃＞
6.黒灰色土・・・＜〃＞
7.茶黒色土(黄色土塊混)・・・＜茶黒色土層＞
8.暗茶色土(赤色土塊、真砂混)・・・＜〃＞
9.赤茶色粘土・・・＜赤茶色粘土層＞
10.明茶色粘土(赤色土塊、炭少量混)・・・＜SX001＞
11.灰色土・・・＜SX001＞
12.淡茶色土(炭少量混)・・・＜SX001＞
13.灰茶色土・・・＜SX001＞
14.暗灰色土(やや粘質)・・・＜SD005暗灰色土＞
15.黄灰色粘土(茶色土混)・・・＜SD005＞
16.黒茶色粘土(粘質強め)・・・＜暗茶灰色粘土層＞
17.黒茶色粘質土(たまり、砂少量混)・・・＜SX003＞
18.茶灰色粘土(19と同じ、粘質強い、炭混)・・・＜茶灰色粘土層＞
19.淡茶色粘土(18と同じ、粘質強い、)・・・＜〃＞
20.暗茶褐色粘土・・・＜SD025茶灰色粘土＞
21.明茶褐色粘土(遺物なし)・・・＜SD025＞
22.茶褐色粘質土(23と同じ遺構、粘質強い、炭混)
23.暗茶灰色土(22と同じ遺構、炭少量混)
24.明赤褐色土(遺構)
25.明茶色粘土(〃)
26.暗茶色土(遺構、やや粘質)
27.赤褐色土(遺構)

fig.231-4　大宰府条坊跡第231次調査　A区4～5ライン付近西壁土層図・C区西壁土層図（1/60）

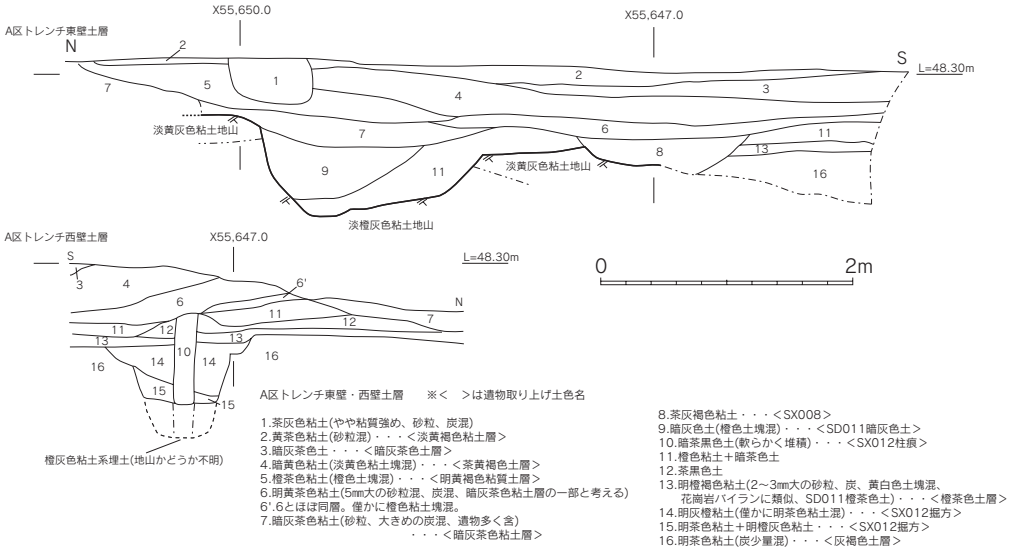


fig.231-5　大宰府条坊跡第231次調査　A区トレンチ東壁・西壁土層図（1/60）

あり、現時点では、231SX001と、231SD015・020と、第１層群とは、分けて考えることが妥当であろう。よって231SD015・020が展開する遺構面は第２遺構面となる。現状では第１層群と第２遺構面の前後関係は不明ということになるが、将来的には、この分け方が正しいのかあるいは第１層群が以下述べる第３層群に帰属し第２遺構面が第１遺構面に帰属する可能性はないのか、といったことを確認する必要があるだろう。

C区については、231SD005が第２遺構面に帰属される。基盤層は暗茶灰色粘土層（第２層群）である。遺構の項でも述べるように、231SD005と231SD015（A区）は共に東西延長上にあり、埋土も似ていることから、同一の溝（東西溝）である可能性もあるが、溝幅や深さの違いなどあり、同一視するにはもう少し情報がほしいところである。ただ、いずれも奈良時代から平安時代にかけて機能していた可能性が十分考えられる遺構であり、丘陵南端を東西に走行していることから、同一遺構ではなくとも寺域の南を画する遺構として性格を同じにすると考えてもよいだろう。

＜第２層群・第３遺構面＞

A区北端では、赤茶色粘土層（淡茶褐色粘土層）除去時に検出した際の最も古い遺構の一つである231SB010（掘立柱建物）を検出している。第２遺構面の231SD020とは切りあい関係にあり、231SB010の方が古いことが４～５地区ライン上の調査区西壁土層観察から窺える。ただ、堆積層（造成土・整地土）の層序を中心に各遺構（遺構面）の推移を捉えた場合、231SB010は茶黄褐色土層に直接切り込んでいることは確認できたが、231SD020等が切り込む上層の暗灰茶色土層に切り込んでいたかどうかについてはわからない。つまりSB010・SD020等は共に暗灰茶色土層を基盤層として展開していたのか、231SB010廃絶に伴い暗灰茶色土層が客土されたのか、といった前後関係については不明ということになる。

北隣の般若寺跡第４次調査では、それまであった掘立柱建物が奈良時代に廃絶し、整地の後に塔基壇が造営されている（『般若寺跡II』九州歴史資料館　昭和63年）。これと同様に、本調査区検出の231SB010（掘立柱建物）から231SD020（溝）への推移は、それまで展開していた掘立柱建物群から、塔造営・区画溝整備等の寺域整備への推移を示す一連のものである可能性がある。この推移を知る上で鍵となるであろう暗灰茶色土層の位置付けが検証できなかったことは惜しまれるが、こうした問題も含んでいることから暗灰茶色土層・SB010は上下の層群・遺構面とは分けて捉える必要があると判断し、

暗灰茶色土層を第２層群、SB010が展開する面を第３遺構面とした。

C区では、231SD005の基盤層として、暗茶灰色粘土層が堆積していることが確認された。A区の暗灰茶色土層（第２層群）と土質がよく似ており、後述の茶灰色粘土層（第３層群）の上に堆積していることから、暗茶灰色粘土層も第２層群と捉えている。この層は、231SD005の北肩に接するわずかな範囲に堆積している。堆積は、北側は薄く比較的水平だが、南側は急に深くなっている。急に深くなっているところが231SD005の当初の北肩だった可能性があり、この推定から231SD005掘削後すぐに暗茶灰色粘土層が敷かれ、溝北肩の一部を覆ったということも推測される。また、暗茶灰色粘土層の埋土中には奈良時代の縄目叩きの平瓦数枚が４段ほど重なった状態で埋まっていた（fig.231-12・13）。何らかの施設が存在したことを想定し慎重に調査を進めたが、今回は特に所見は得られなかった。

なお、A区の暗灰茶色土層・C区の暗茶灰色粘土層（いずれも第２層群）は、両層とも土質が類似していることを確認しており、同一層の可能性が高いとみている。また、いずれも寺域を画する遺構群と想定される231SD015（A区）・231SD005（C区）および231SD020（A区）の基盤層となっていること、上記のように231SD005の当初の掘削と暗茶灰色粘土層が敷かれた時期は近いとみられ両者の関連が密接であること等から、これら第２層群は奈良時代の寺域整備に関わる整地等の可能性は高いと考える。第２層群が区画溝の基盤をなしつつ、しかも広範囲で検出されることは、これが整地だったことを示唆するものといえよう。

C区の暗茶灰色粘土層の検出範囲は狭小であったため、C区で第３遺構面に帰属する遺構については不明である。

＜第３層群＞

A区では、231SB010の基盤となる土層を複数確認した。層中にはブロック状の土塊を含むものが多く、盛土造成土とみている。一様に北西から南東方向に傾斜して堆積しており、盛土の契機はほぼ同時と考えて差し支えないとみられる。A区北側では盛土は10～20cmしか残存していないが、これは231SB010の残存状況を勘案すると大きく削平を受けていると考えられる。ただ中央部付近では60～70cm程の厚さで残っている部分もある。全体を通してみると、いずれも７世紀末までの遺物を含んでおり供膳具・煮炊具など予想外に多い。最も土量が多い暗灰茶色粘土層は出土遺物も多い。第３層群下位にも遺構が展開していることから、７世紀末頃、付近での人為活動が活発だったことが窺われる。

こうした中、灰茶色粘土層・黄色土層は、粘質の細かい粒子で構成された良質土の印象を受けるため、整地層の可能性も考えられる。これらは231SB010付近に広がっており、両者の関連も想定されるところである。また、黄茶色土層については今回は造成土・整地土等として取り扱ったが、231SD011の北肩とほぼ重なるように検出されており、231SD011埋土の一部の可能性もある。なお、灰茶色粘土層については色の薄く灰色味を帯びており、それ以外の層と分別がしやすい。これはC区で検出した茶灰色粘土層も同様で、両層の土質は大変よく似ている。両層は同一層の可能性がきわめて高いとみている。

＜第４遺構面と第４層群（橙茶色土層）、そして第５遺構面＞

第３層群を除去すると231SX008、231SX012柱痕が検出される。これを第４遺構面とする。基盤層は第４層群の橙茶色土層までの層である。

橙茶色土層の土質は比較的良質との印象を受ける。この層は水平に近い堆積をしていること、遺構の項で述べるように231SD011・231SX012の設置に深く関わっていることから、整地層の可能性が高いと考えている。

橙茶色土層除去後の遺構面が第５遺構面で、231SD011・SX012の開削がこの面で行われている。いずれも７世紀後期～末頃のものである。

＜第５層群（灰褐色土層）＞

231SX012の掘方から基盤の観察をすると橙茶色土層の下には厚さ0.7～0.8mほど灰褐色土層が堆積していることが確認された（fig.231-5、16層）。これ以下の土層を第５層群とする。なお、灰褐色土層を少し掘削すると土師器片が出土したが、今回はこれ以上の調査は行っていないため、詳細は不明である。

３．遺構

掘立柱建物

231SB010（fig.231-6）

調査区北東端で検出した建物である。総柱建物とみられ、東西３間分、南北２間分を確認した。柱穴は、平面プランが隅丸方形を呈しており、柱痕は直径30cm以上ある。検出した柱痕間の長さは、南北3.38m、東西約5.5m前後となる。東側については調査後の工事立会の際に柱穴が想定される場所付近で確認したが、柱穴は見当たらなかった。北側に伸びていた可能性はあるが、現道路によって地山ごと削平を受けているため、確認は不能である。西側については、調査前の試掘の際、調査区から約3.5mほど西側にトレンチを入れており、そこで掘立柱建物柱穴とみられる遺構を確認している。試掘トレンチ内の具体的な柱穴の位置については正確な記録をとっていないため、本遺構に伴う柱穴かどうかは不明で、別の掘立柱建物柱穴の可能性も考えられるが、参考までに記した。遺構の基盤層は、直接的には茶黄褐色土層以下の層（第３層群）であることが確認でき、建築時期は７世紀末を遡らないことが言える。また廃絶時期はＡ区４～５ラインの調査区西壁土層観察から231SD020より古いことが確認されることや、柱痕から８世紀前半の遺物が出土していることから判断される。よって７世紀末～８世紀前半に機能した建物とみられる。

溝

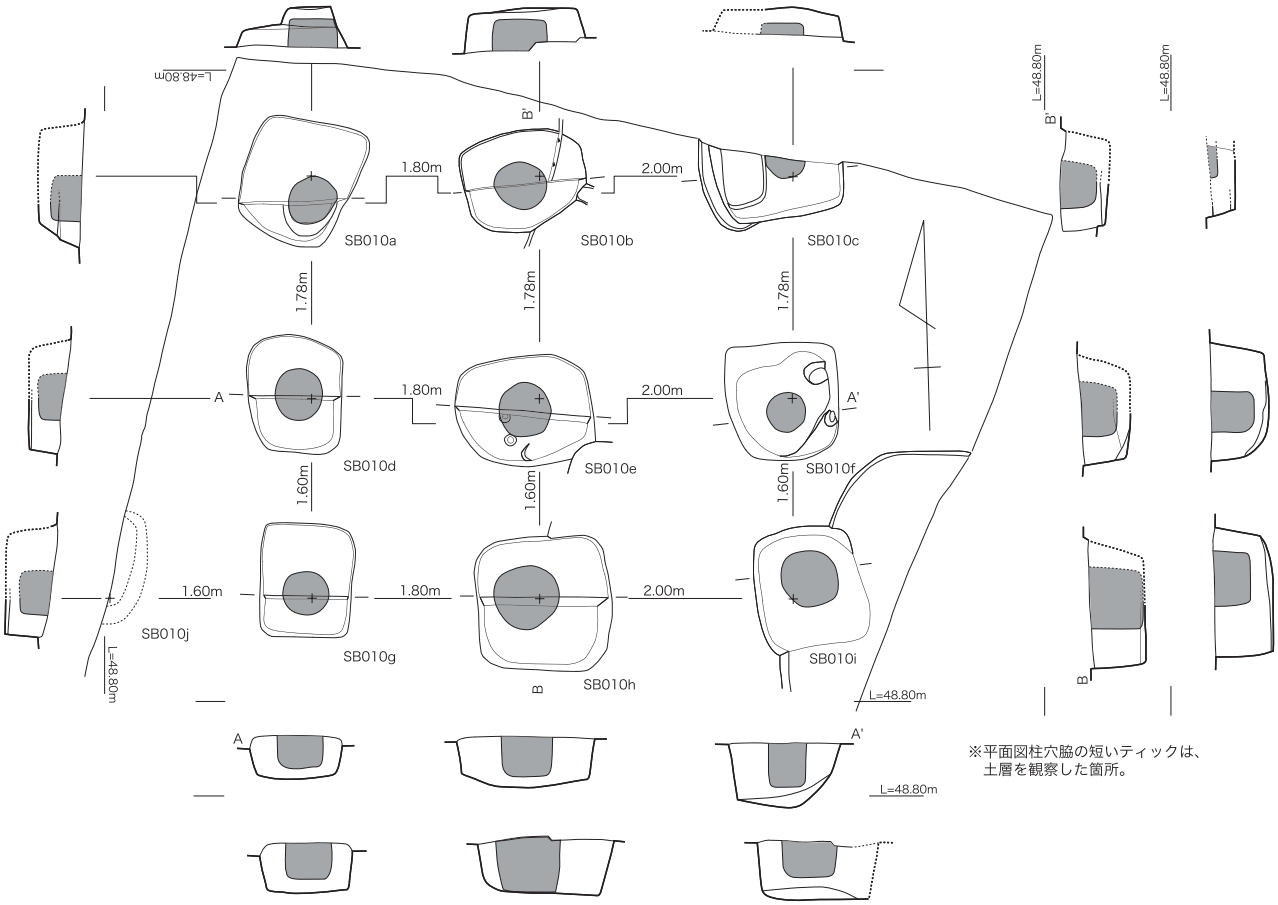
231SD005（fig.231-2・7）

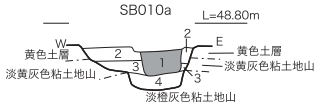
調査区西側のC区中央で検出した東西方向に走行する溝と想定している遺構である。幅約3.7mで、長さ約1.0m分を検出した。埋土は暗灰色土が厚く堆積する。確認できた範囲での基盤層は暗茶灰色粘土層（第２層群）以下の層である。調査時には最大約85cm程度掘り下げたが、予想外に深く、調査範囲が狭いこともあって、作業安全上それ以下の掘削は行わなかった。ただ調査後の宅地工事の影響を受ける深さまでは掘削したので、残存部分は遺構保存されていることになる。このように調査時の制約も多く、溝の性格や機能時期について十分な情報を得られたわけではないが、溝が機能していた時期については、基盤層の暗茶灰色土層から奈良時代の縄目瓦が出土していることや出土遺物が奈良時代～平安時代前期のものが最新とみられることから、奈良時代に機能し、平安時代前期までに埋没したと想定している。なお出土した当該期の遺物は細片のため図化できなかったが、縄目平瓦・格子目平瓦の写真を添付CD-ROMに掲載している。

231SD011（fig.231-2・4・5）

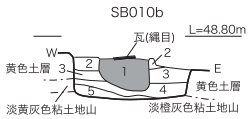
調査区東側のA区中央で検出した東西方向に走行する溝と想定している遺構である。幅約1.7mで、長さ約2.0m分を検出した。深さは遺構の西端で約0.5m（標高47.4m前後）、東端で0.8m程度（標高47.15m前後）を測り、途中に段差がみられる。遺構の基盤はローム層（地山）である。埋土は上から暗茶色土、橙茶色土の順に堆積している。

まず、最下位の橙茶色土について詳述する。暗茶色土を除去すると、この南肩～底には橙茶色土が堆積しており、これを除去すると231SD011が断面台形の溝であることが明らかになる。SD011の南肩

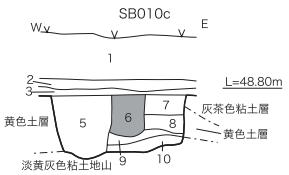




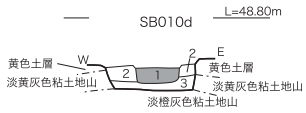
SB010a
1.暗茶灰色粘土（柱痕、炭微量混）
2.茶色粘土（やや粘質強い）
3.暗茶色粘土



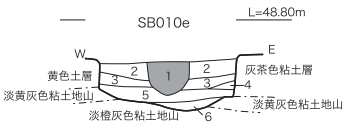
SB010b
1.灰茶色粘土（柱痕、やや粘質強い、炭砂粒少量混）
2.茶色粘土（やや粘質強い、砂粒少量混）
3.暗茶色粘土（砂粒少量混）
4.茶褐色粘土（炭微量混）
5.黄灰色粘土（地山の土混）



SB010c　　※＜　　＞内は遺物取り上げ土色名
1.真砂
2.灰色土
3.橙茶色粘土・・・＜赤茶色粘土層＞
4.暗茶黒色粘土（別の遺構）
5.茶灰褐色粘土（〃）
6.茶色粘土（柱痕、炭少量混）
7.淡茶色土
8.茶灰色粘土（砂粒微量混）
9.明茶色粘土
10.暗茶灰褐色粘土

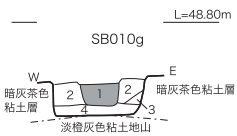


SB010d
1.茶褐色粘土（柱痕、やや粘質強い、炭微量混）
2.明茶褐色粘土（やや粘質強い、炭微量混）
3.暗茶灰色粘土（炭微量混）

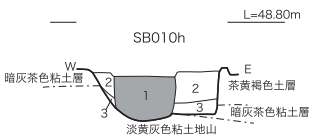


SB010e
1.茶灰色粘土（柱痕、やや粘質強い、炭微量混）
2.茶色粘土（やや粘質強い、炭微量混）
3.暗茶色粘土（炭微量混）
4.赤茶色粘土
5.黄茶灰色粘土（炭少量混）
6.黄褐色粘土（地山の土混）

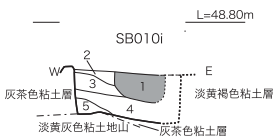
SB010f
1.茶褐色粘土（柱痕、粘質弱い、炭微量混）
2.明茶褐色粘土（粘質弱い、炭微量混）
3.茶黒色粘土
4.明茶黒色粘土（地山の土少量混）



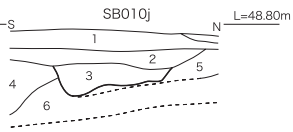
SB010g
1.暗褐色粘土（柱痕、細かい砂粒、炭混）
2.暗茶褐色粘土（砂粒炭混）
3.灰色粘土
4.暗灰色粘土（黄色土塊混）



SB010h
1.灰褐色粘土（柱痕、砂粒混）
2.明灰褐色粘土（炭少量混）
3.暗灰褐色粘土



SB010i
1.灰茶褐色粘土（柱痕、砂粒少量混）
2.明灰茶色粘土（砂粒少量混）
3.明灰茶褐色粘土（炭微量混）
4.暗灰茶色土（〃）
5.淡灰茶色土



SB010j　　※＜　　＞内は遺物取り上げ土色名
1.赤茶色粘土・・・＜赤茶色粘土＞
2.黒茶色粘土（SD020。粘質強い、砂粒混）
3.明茶色粘土（S-10j、炭微量混）
4.暗灰茶色粘土（黄色土塊、橙色土塊混、炭混）
・・・＜暗灰茶色粘土層＞
5.灰茶色粘土・・・＜灰茶色粘土層＞
6.黄色土・・・＜黄色土層＞

0　　2m

fig.231-6　231SB010実測図（1/60）

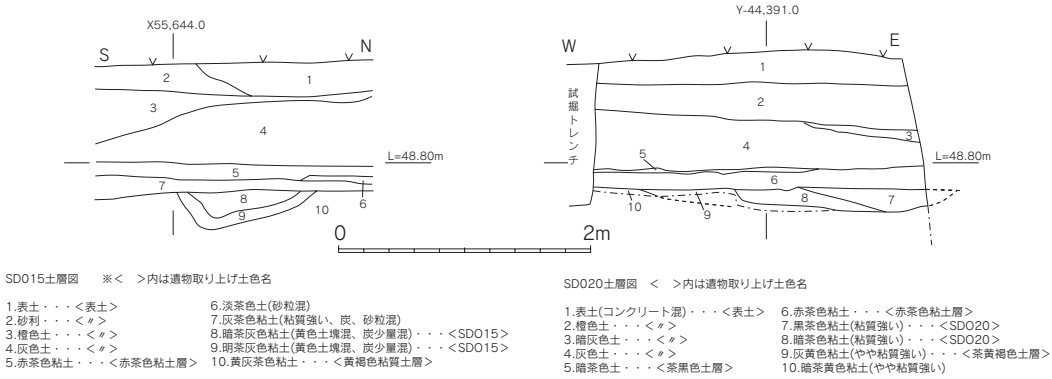


fig.231-7　231SD015・SD020土層図（1/60）

には橙茶色土層が堆積しているが、遺構内の橙茶色土埋土と同じ土質で差異はなく、しかも両者は接している。そこに切り合いなどは見られず、一連のものと捉えられる。また橙茶色土層が231SD011付近では約10cm程度の薄い厚さで堆積しているにもかかわらず、231SD011内には大量に堆積しており、橙茶色土層が後から流入したとするには説明には無理があること等から、溝内に堆積しているのは第４層群の橙茶色土層そのものとみるべきであろう。つまり本遺構検出範囲内では、橙茶色土層整地と同時に本遺構の南肩の一部および東側溝底の一部を埋めて規模を縮小させ、その後は、後に暗茶色土が堆積する部分のみが開口し、溝として機能していたことが窺える。

溝開削時期が橙茶色土層堆積直前（７世紀後半～末）であること、また遺構埋没開始は、暗茶色土に含まれる遺物や上層の黄茶色土層・暗灰茶色粘土層等の第３層群が７世紀末までの遺物を下限としていることから、本遺構は７世紀後半～末に機能したことが窺える。また、溝底で地山と橙茶色土層が直接接している状況をみると、溝の開削時期と橙茶色土層流入時期はあまり差がなかったことも想定の範囲に含めておく必要もあろう。

なお、調査区東外側の擁壁工事立会の際、本遺構の東延長の法面で遺構を確認した。遺構は0.4～0.5m前後の深さがあり、上端は標高47.50m前後で、底は標高47.11m程度であった。遺構の位置、形状、および埋土状況が類似することからこれも本遺構の一部とみられ、溝がさらに東に伸びていたことを窺うものとして捉えている。また、西延長上にはC区で検出した231SD025がある。覆われている造成土や断面形状の類似点より、両者は同一遺構の可能性が高い。

231SD015（fig.231-2・7）

調査区東側のA区南側で検出した概ね東西方向に走行する溝と想定している遺構である。幅約1.06mで、長さ約1.95m分を検出した。確認できた範囲での遺構の基盤層は暗灰茶色土層以下の層（第２層群）である。検出地点が調査後の宅地建設による遺構破壊から免れる場所であったため、調査は検出した範囲の西半分のみを行い、東半分は未掘とした。調査した範囲では、溝底は南側が深く最大0.28m程度を測るが、北側では深さ約0.1m前後となっている。埋土は暗茶灰褐色粘土である。ここから僅かに遺物が出土しているが、弥生～奈良時代とみられる遺物に混じって、平安時代頃の土師器供膳具とみられる細片が１点出土しており、最終埋没は平安時代に下るとみられる。溝開削時期については、①基盤層の暗灰茶色土層からの出土遺物はなかったが、この層と同一層の可能性が想定されるC区の暗茶灰色土層から奈良時代の縄目瓦が出土していること、②暗灰茶色土層下層の茶黄褐色土層から古代の供膳具・煮炊具と想定される破片が見つかっていること、③茶黄褐色土層より下位の整地層は７世紀末に遡ること、といった状況から、奈良時代を迎えた後に開削されたと推定している。

231SD020（fig.231-2・7）

調査区東側のA区南側で検出した南北方向に走行する溝である。検出長4.48m、検出幅0.95～1.55mである。中央のトレンチ設定の際、遺構プランを認識できなかったため、結果として溝の東肩は消失してしまった。ただ、北延長上の調査区西壁に残された東肩の位置から想定すると、10cm前後が消失したとみられる。検出時に溝東肩の遺構プランを認識できなかったことも踏まえると、消失範囲は上記想定内に収まると考えている。確認できた範囲での遺構の基盤層は暗灰茶色土層以下の層（第２層群）である。検出地点が調査後の宅地建設による遺構破壊から免れる場所であったため、調査は検出した範囲の南北端で行い、中央付近（約１ｍ）は未掘とした。溝底はほぼ水平で、深さは概ね５～６cmである。埋土は茶灰褐色粘土である。ここから僅かに遺物が出土しているが、弥生時代～奈良時代の可能性がある遺物に混じって、平安期に下る可能性のある土師器供膳具とみられる細片が１点出土しており、最終埋没は平安期に下るとみられる。溝開削時期については、SD015の開削時期の検討内容①②③が本遺構にも当てはまることから、奈良時代を迎えた後に開削されたと推定している。

231SD025（fig.231-2・4）

調査区西側のC区中央北寄りで検出した東西方向に走行する溝と想定している遺構である。茶灰色粘土層除去後に検出した。幅約1.6ｍで、検出長は約1.1ｍ分である。溝底はほぼ水平で、深さは0.3～0.35ｍほどである。遺構の基盤はローム層（地山）である。溝内には溝埋土を覆う茶灰色粘土層と同質の茶灰色粘土が堆積している。若干本遺構埋土の方が色が暗い様子が窺えるが、基本的な土質は同じと観察される。ここから、弥生土器のほか土師器と見られる細片が出土しているが、埋没時期決定について遺物から推察することは難しい。ただ、①本遺構を覆う茶灰色粘土層がA区の灰茶色粘土層と極めて類似すること、②本遺構の東延長上のA区では灰茶色粘土層下層の黄色土層・黄茶色土層を除去すると231SD011が検出されており、本遺構と上層の茶灰色粘土層との関係に類似していること、③切りあい関係・整地との関係から両遺構ともに調査区内では最古の遺構であり、埋土の状況から埋没も同様の時間推移を経たことが窺えること、といった状況から、231SD011と本遺構に密接な関連があると想定している。覆われている造成土や溝の断面形状の類似点より、両者は同一遺構の可能性が極めて高いとみている。

その他の遺構

231SX001（fig.231-2・4）

B区とした調査区南側では明茶色を呈する粘土層が広く堆積しており、東側のA区、西側のC区の南端にも及んでいる。そこでB区中央付近で一ヶ所、およびC区の南端にトレンチを入れ、状況を確認した。ただ予想外に厚く堆積しており、作業安全上、地山を確認するまでの深い掘削は行わなかったが、こうした状況から南側の段落ち部分を盛土整地している可能性が窺われた。そこで関連する層をSX001として捉えることとした。埋土の堆積順は、C区での調査で、上から明茶色粘土、灰色粘土、淡茶色土、灰茶色土の順であることが確認されている。明茶色粘土は調査区全体の遺構面を覆う赤茶色粘土層と類似しており、同一層の可能性がある。遺物については、近現代の磁器片をわずかに含むがこれは表土層から崩落するなどして混入したと考えられる。これを除くと平安後期の遺物が含まれる。これらの中には掘削部分の下位から出土したことを確認できたものもあり、これらは表土層からの混入ではない。全面的な調査ではないため確定的なことは述べづらいが、平安後期に多少の人為活動があったことを窺うことができよう。またこのほか、鎌倉～南北朝期の龍泉窯系青磁が１点出土している。近世遺物を除くとこれが造成土中の最新の遺物であるが、これ１点で造成時期を求める判断材料とするには、躊躇する。般若寺石塔の成立時期に近い遺物ではあるが、本報告書中でも当該時期の遺物がこれしか見つかっていないことを考慮すると、時期決定には慎重にならざるをえないだろう。

なお、対象地南側の擁壁工事に立会を行った際、明茶色系の粘土と地山ローム層との境を確認しており、その所見から厚さは2.3～2.5m前後より厚くはない程度だったとみられる。

231SX008（fig.231-2・5）

調査区東側のA区南側で検出した小穴または土坑とみられる遺構である。検出長1.48m、検出幅0.33m、深さ約0.1mである。暗灰茶色粘土層を中心とした造成土層群除去後に検出され、橙茶色土層（第４層群）を基盤層としている。埋土は暗茶色土である。上下層の造成土・整地土より、７世紀末の遺構と判断される。

231SX012（fig.231-2・5）

調査区東側のA区南側で検出した小穴である。検出長0.86m、深さ約0.8mで、中央には柱痕が残っており、建物または柵の柱穴とみられる。柱痕は径約15cmで、長さは少なくとも70㎝程度が残存していたが、木質は無く、暗茶黒色を呈した土が柔らかく積もっている状況であった。

fig.231-5に掲載するように、土層観察によると、柱穴掘り方を掘削し、柱を据え、穴を埋め戻した上に橙茶色土層（土層13、第４層群）が敷かれている。また柱痕は橙茶色土層およびさらに上層の茶黒色土（土層12、第４層群）を突き抜けており、建物建築後、橙茶色土層で整地し、さらに柱の周囲を茶黒色土で少し盛り上げるといった一連の造作があったことも想像される。なお橙茶色土層は231SD011の溝底にも流入しており、溝開削時期と流入時期の時間差はあまりなかったと想定できることから、231SD011開削・本遺構設置・橙茶色土層整地は、一連の造作だったと考えられる。

なお柱痕は、７世紀末の盛土造成土とみられる暗灰茶色粘土層（第３層群、土層６）によって切られている。こうした状況から、本遺構は７世紀後半～末に機能したことが窺える。

４．遺物（fig.231-8～13）

掘立柱建物出土遺物

231SB010柱痕出土遺物（fig.231-8）

須恵器

蓋c3（１・２）　１は口径14.6cm、残存高1.2cm、天井部径9.4cmを測る。天井部切り離しは回転ヘラ切り。つまみ接合に伴う回転ナデが観察されるため、つまみの存在が窺える。焼成は良好で、還元も良好。淡灰青色を呈す。SB010aより出土。２は口縁部の破片である。残存高2.3cmを測り、推定される口径は15cm前後である。焼成は良好で、還元も良好。淡灰青色を呈す。SB010a柱痕より出土。

坏c（３）　底部が残存する破片である。高台は欠損している。残存高0.8cmを測る。焼成は良好で、還元も良好。淡灰褐色を呈す。SB010h柱痕より出土。

土師器

坏（４）　口縁部が残存する破片である。残存高1.4cmを測る。磨耗により内外面とも調整不明だが、口縁端部内面に沈線が巡っていることや、胎土等の状況から、畿内系土師器とみられる。胎土は精良で、淡褐色で0.5mm大の砂粒を少し含む。焼成は良好で、橙褐色を呈す。SB010g柱痕より出土。

瓦類

平瓦（５）　瓦の左右側面のうち片側および前後側面の片側が残存する破片である。長さ16.0cm、幅16.2cmを測り、厚さは2.0cmである。凸面は縄目叩きを施し、凹面には布目痕と模骨痕が見られる。側面端部は瓦の反りの中心部に向ってヘラ切りされる。焼成は良好で、瓦質に仕上がる。淡灰白色を呈し、外面に灰黒色を呈す部分が観察される。SB010b柱痕より出土。

231SB010柱穴掘方出土遺物（fig.231-8）

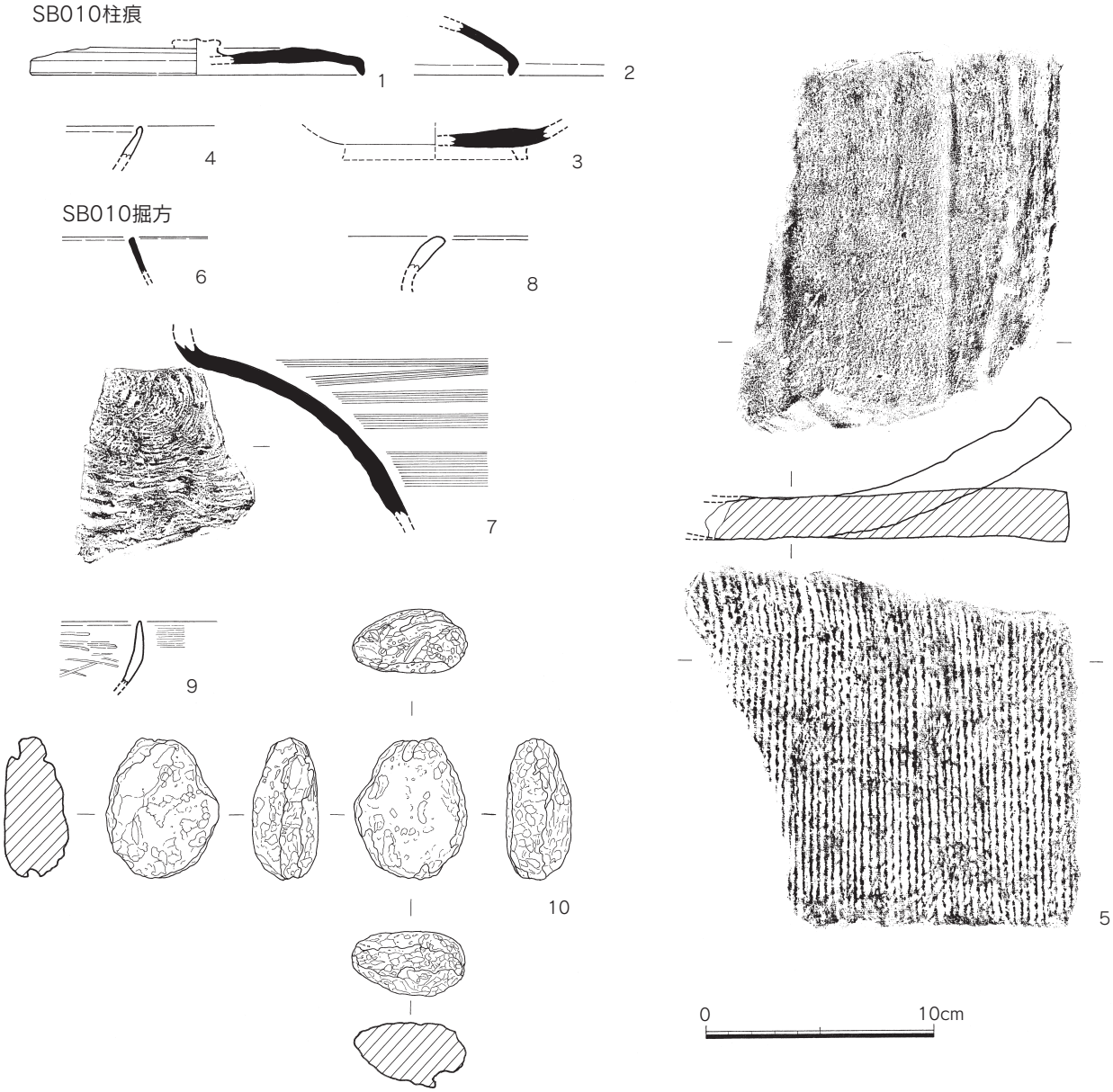


fig.231-8　231SB010出土遺物実測図（1/3）

須恵器

坏身（6）　古墳時代の須恵器坏身で、口縁部の破片である。器高1.3cmを測り、端部がわずかに凹んでいるのが観察される。焼成は良好で、還元も良好。淡灰色を呈す。SB010h掘方より出土。

甕（7）　頸部～胴部上半が残存する破片である。残存高7.6cmを測る。頸部は内外面とも回転ナデを施し、胴部内面は同心円文の当て具痕がみられ、胴部外面は水平方向の掻き目を施す。焼成は良好で、還元も良好。内面は暗赤褐色を呈し、外面は暗赤褐色～淡灰褐色を呈す。断面は淡赤灰色を呈す。SB010f掘方より出土。

土師器

甕（8）　口縁部が残存する破片である。残存高1.5cmを測る。磨耗により調整は不明。胎土に角閃石をわずかに含む。焼成は良好で、淡赤褐色を呈す。SB010h掘方より出土。

鉢×皿b（9）　口縁部が残存する破片である。残存高2.9cmを測る。体部と底部の境の器壁はやや肉厚となっており、口縁部および底部に向って器壁は薄くなっている。外面下半部および口縁端部は磨耗しているが、それ以外は内外面とも手持ちのヘラミガキ（ミガキc）を施していることが観察される。焼

成は良好で、暗灰褐色を呈す。SB010g掘方より出土。

石

黒曜石原石（10）　長さ6.2cm、幅4.9cm、厚さ2.8cm、重さ100.1gを測る。全面に灰黒色の表皮層が残っている。表皮層の下は黒色を呈す。掘立柱建物とは関係のない遺物とみられるが、周辺遺跡との比較・参考のために掲載した。SB010i掘方より出土。

溝出土遺物

231SD005暗灰色土出土遺物（fig.231-9）

弥生土器

壺（1）　底部が残存する破片である。残存高2.6cm、底径4.2cmを測る。内外面とも磨耗しているが、外面にミガキとみられる痕跡が観察される。焼成は良好で、内面は淡橙褐色を呈し、外面は淡褐黄色～淡灰黒色を呈す。畿内のV様式模倣とみられる。

土師器

高坏（2）　脚部が残存する破片である。残存高4.5cm、脚部底径8.5cmを測る。磨耗が進んでいるが、外面は工具によるナデを施している。焼成は良好で、橙褐色を呈す。

231SD011暗茶色土出土遺物（fig.231-9）

須恵器

蓋c1（3）　3は口径11.5cm、残存高2.9cm、天井部径9.4cmを測る。天井部は全面に回転ヘラ削りを施す。焼成は良好で、還元も良好。内面は淡青灰色～淡灰色を呈し、外面は暗青灰色を呈す。

蓋1（4～6）　いずれも口縁部が残存する破片である。4は残存高1.6cmを測る。内外面とも磨耗のため調整不明。焼成はあまく、還元はしておらず、淡褐橙色を呈す。5は残存高1.6cmを測り、推定される口径は約15cm前後である。内外面とも回転ナデがみられる。焼成は良好で、還元も良好。内面は暗青灰色～やや暗い青灰色を呈し、外面は淡青灰色～やや暗い青灰色を呈す。6は残存高1.6cmを測り、予想される口径は約12cm前後である。内外面とも磨耗のため調整不明。焼成は良好だが、還元は不良で、淡黄褐色を呈す。

坏（7・8）　いずれも口縁部が残存する破片である。7は残存高3.1cmを測り、口径は約14cm前後と推定される。焼成は良好で、還元は不良。淡灰褐色を呈す。8は残存高3.1cmを測り、口径は約14cm前後と推定される。体部と底部の境付近に回転ヘラ削りを施す。焼成は良好で、還元も良好。淡灰褐色を呈す。

甕（9）　胴部上半（肩部）が残存する破片である。残存高2.8cmを測る。内面は同心円文の当て具痕が観察され、外面は回転ナデを施す。焼成は良好で、還元は良好。淡灰褐色を呈す。なお自然釉が表面にかかっており、内面に暗緑灰色に発色するガラス質の釉の垂れがみられる。

土師器

甕（10・11）　いずれも口縁部～肩部が残存する破片である。10は口径17.7cm、残存高5.2cmを測る。口縁部は内外面ともにヨコナデを施し、胴部内面は手持ちのヘラ削りを施す。胴部外面は全体的に磨耗しているが、ナデ押さえの後に横方向のナデを行ったような痕跡が観察される。胎土には角閃石が含まれる。焼成は良好で、淡褐黄色を呈す。11は残存高4.7cmを測る。口縁部および胴部外面は磨耗により調整不明。胴部内面は横方向のナデを施しているように観察される。二次焼成を受けている。焼成は良好で、内面は褐黒色を、外面は淡赤褐色を呈す。

231SD015出土遺物

ここからは、平安時代のものとみられる淡黄茶色を呈した胎土を持つ土師器供膳具片が1点出土して

いるが、細片のため図化できなかった。添付CD-ROMに写真を掲載している。

231SD020出土遺物（fig.231-9）

ここから出土したもので最新の遺物として、平安時代のものとみられる淡黄茶色を呈した胎土を持つ土師器供膳具片が１点出土しているが、細片のため図化できなかった。添付CD-ROMに写真を掲載している。その他については以下に述べる。

土師器

坏（12）　口縁部が残存する破片である。残存高5.0cmを測り、口径は約20cm前後と推定される。全体的に磨耗しているが、口縁部内面にはヨコナデまたは回転ナデが施されていることが観察される。また体部内面にはミガキの可能性がある調整の痕跡が、体部外面にはナデ押さえを行った後にミガキを施したような痕跡が観察される。胎土には砂粒をやや多く含んでおり、角閃石の可能性がある鉱物も確認される。焼成は良好で、橙褐色を呈す。

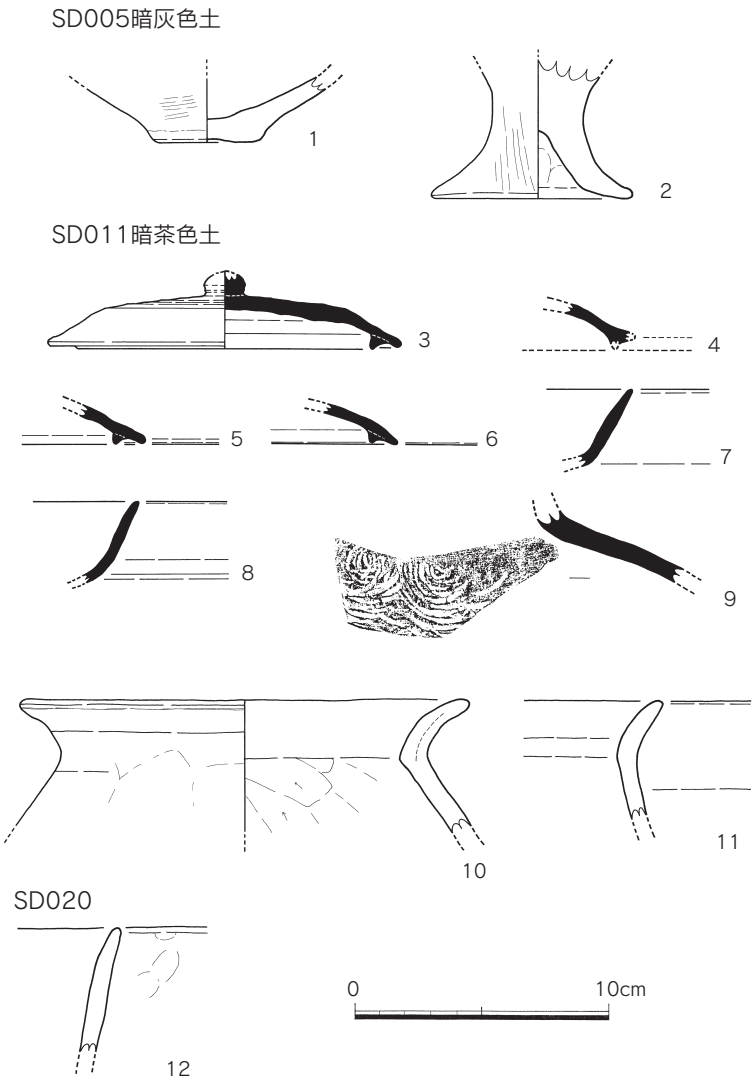


fig.231-9　大宰府条坊跡第231次調査　溝出土遺物実測図（1/3）

各層出土遺物

淡茶褐色粘土層出土遺物（fig.231-10）

瓦類

平瓦（１）　瓦の左右側面のうち片側および前後側面の片側が残存する破片である。残存長14.9cm、残存幅17.8cmで、厚さは2.2cmを測る。凸面は目の粗い縄目叩きを施し、凹面には布目痕と模骨痕が見られる。側面端部は側面端部は垂直方向に立っており、水平方向にヘラを動かして削りを行い仕上げとしたことが観察される。焼成は良好で、瓦質に仕上がり、淡褐灰色を呈す。

丸瓦（２）　残存長18.5cm、残存幅14.0cmを測る破片で、厚さは1.8cmを測る。磨耗が進んでいるが、凸面には縄目叩きを施し、凹面には布目痕が観察される。側面端部は磨耗しているが、比較的平坦であるためヘラ削りで仕上げた可能性がある。焼成は良好で、瓦質に仕上がり、黒灰色を呈す。

軒丸瓦（３）　残存長軸13.3cm、残存短軸7.0cmで、厚さは2.4cm前後を測る。端部は欠損している。焼成は良好で、瓦質に仕上がり、暗灰色を呈す。鴻臚館式の一種とみられる。

淡黄褐色粘土層出土遺物（fig.231-11）

須恵器

蓋３（１・２）　いずれも口縁部が残存する破片である。１は残存高2.2cmを測り、口径は概ね15cm

前後に復元される。天井部外面には回転ヘラ削りを施す。焼成は良好で、還元も良好。暗灰色を呈す。２は残存高1.3cmを測る。焼成は良好で、還元も良好。淡灰色を呈す。

壺（３）　胴部上半が残存する破片である。残存高6.3cmを測る。頸部は内外面とも回転ナデを施し、胴部内面は回転ナデを、胴部外面はヨコナデまたは掻き目とみられる粗い条痕が観察される。焼成は良好で、還元も良好。淡褐黄色を呈す。

甕（４）　口縁部が残存する破片である。口径17.6cm、残存高3.9cmを測る。内外面とも磨耗により

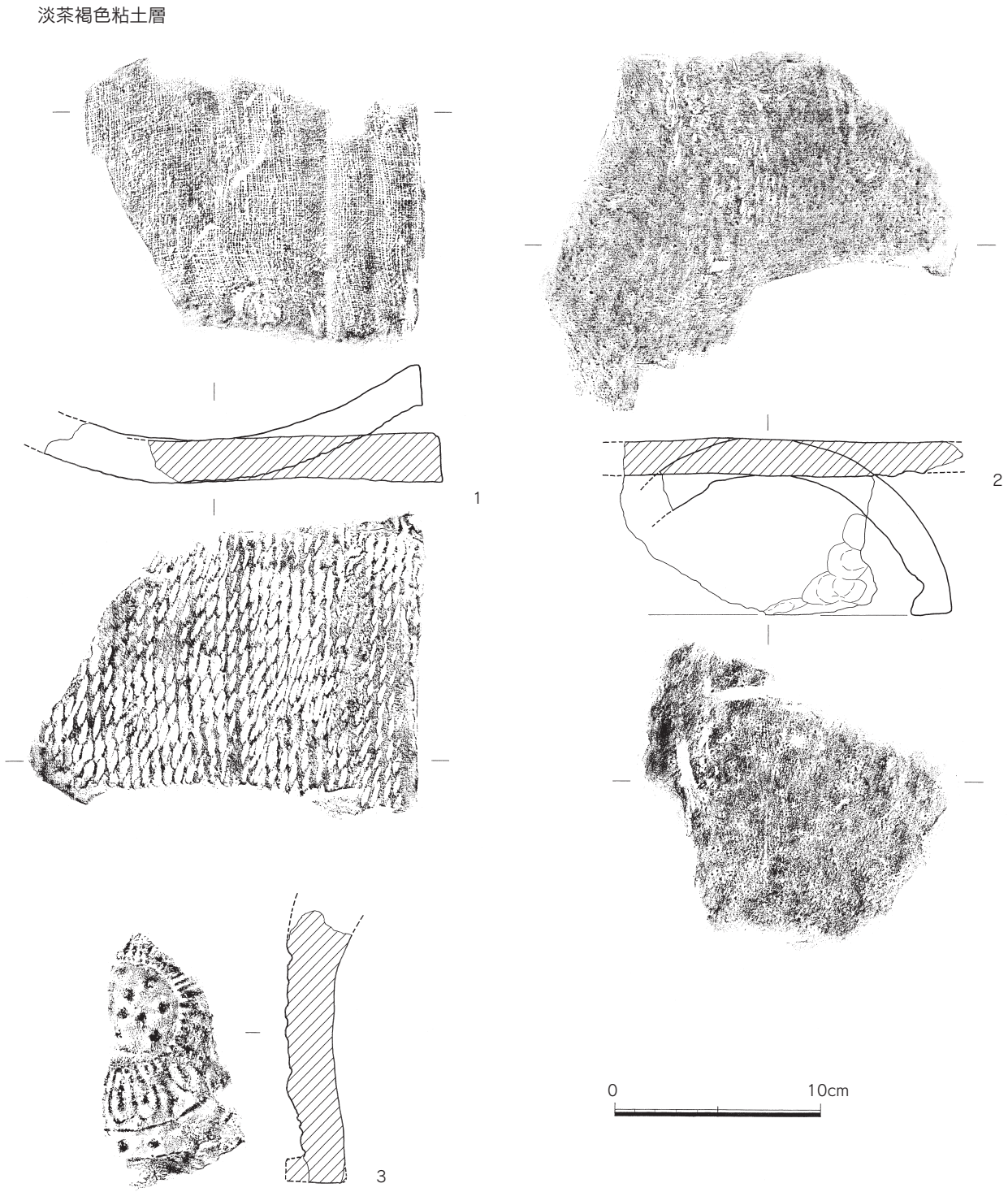


fig.231-10　大宰府条坊跡第231次調査　各層出土遺物実測図その１（1/3）

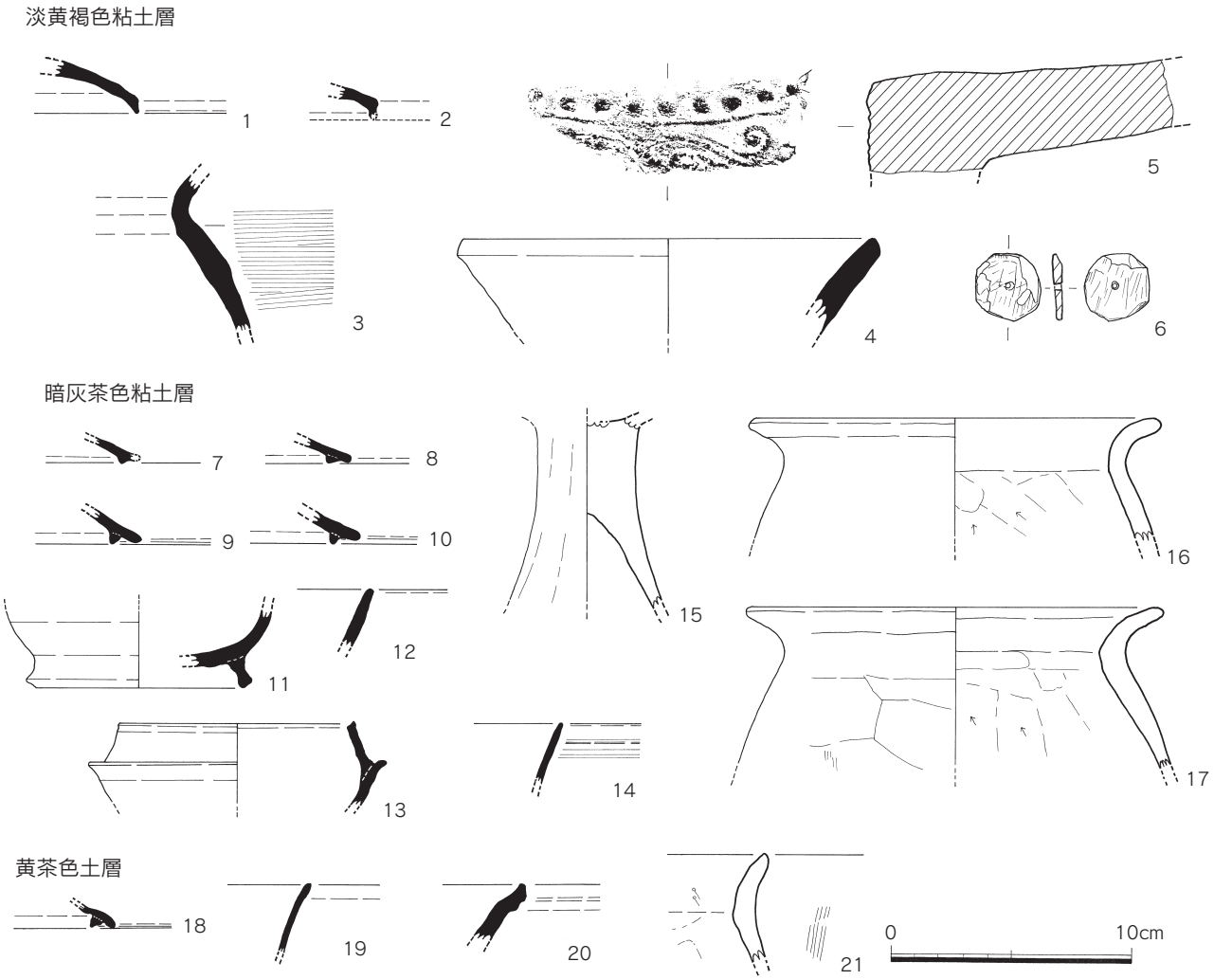


fig.231-11　大宰府条坊跡第231次調査　各層出土遺物実測図その２（1/3）

調整は不明。焼成はあまく、還元は不良。淡褐灰色を呈す。

瓦類

軒平瓦（５）　残存長12.7cm、残存幅18.0cmで、厚さは概ね3.5cmを測る。瓦当は偏行唐草文と珠文が確認される。焼成は良好だが、瓦質に仕上がる。灰黒色を呈す。

石製品

有孔円盤（６）　2.7×2.3cm、厚さ0.4cmを測る。滑石製で、削りによって円盤を作っている。中央部の孔は径0.2～0.25cmを測る。淡灰色を呈す。

暗灰茶色粘土層出土遺物

(fig.231-11)

須恵器

蓋１（７～10）　いずれも口縁部が残存する破片である。７は残存高1.0cmを測る。内外面とも磨耗により調整不明。焼成はあまく、還元は不良。淡褐黄色を呈す。８は残存高1.0cmを測る。内外面とも磨耗により調整不明。焼成はあまく、還元は不良。淡褐黄色を呈す。９は残存高1.3cmを測る。内外面とも磨耗している部分も多いが、回転ナデが観察されるところもある。焼成はややあまく、還元は良好。淡灰青色を呈す。10は残存高1.3cmを測る。内外面とも回転ナデを施す。焼成は良好で、還元も良好。

内外面とも淡灰黒色を呈し、断面は淡茶褐色を呈す。

坏c（11）　底部が残存する破片である。残存高3.2cm、高台径9.4cmを測る。底部切り離しはヘラ切り後ナデを施したとみられ、内面もナデを施す。焼成は良好で、還元も良好。淡灰褐色を呈す。

坏（12）　口縁部が残存する破片である。残存高2.3cmを測り、推定される口径は約13cm前後である。内外面とも回転ナデを施す。焼成は良好で、還元も良好。淡灰褐色を呈す。

坏身（13）　口縁部から体部にかけて残存する破片である。口径9.8cm、受け部径12.4cm、残存高3.3cmを測る。口縁端部はわずかながらもきちんと凹んでいる様子が観察される。焼成は良好で、還元も良好。淡灰褐色を呈す。

壺（14）　口縁部が残存する破片である。残存高2.4cmを測る。口縁部は多少歪んでいるものの推定される口径は約９cm前後である。焼成は良好で、還元も良好。淡灰白色～やや暗い灰黒色を呈す。

土師器

高坏（15）　脚部が残存する破片である。残存高7.6cmを測る。磨耗が進んでいるが、脚部外面にはナデ押さえを施した痕跡が窺える。焼成は良好で、明橙褐色を呈す。

甕（16・17）　いずれも口縁部が残存する破片で、口縁部と胴部の境は緩やかである。16は口径17.1cm、残存高4.9cmを測る。口縁部および胴部外面下部は磨耗による調整不明。胴部内面は手持ち削りを施し、頸部外面はナデ押さえの後、工具によるヨコナデを施しているのが観察される。胎土には角閃石が含まれ、雲母も見られる。焼

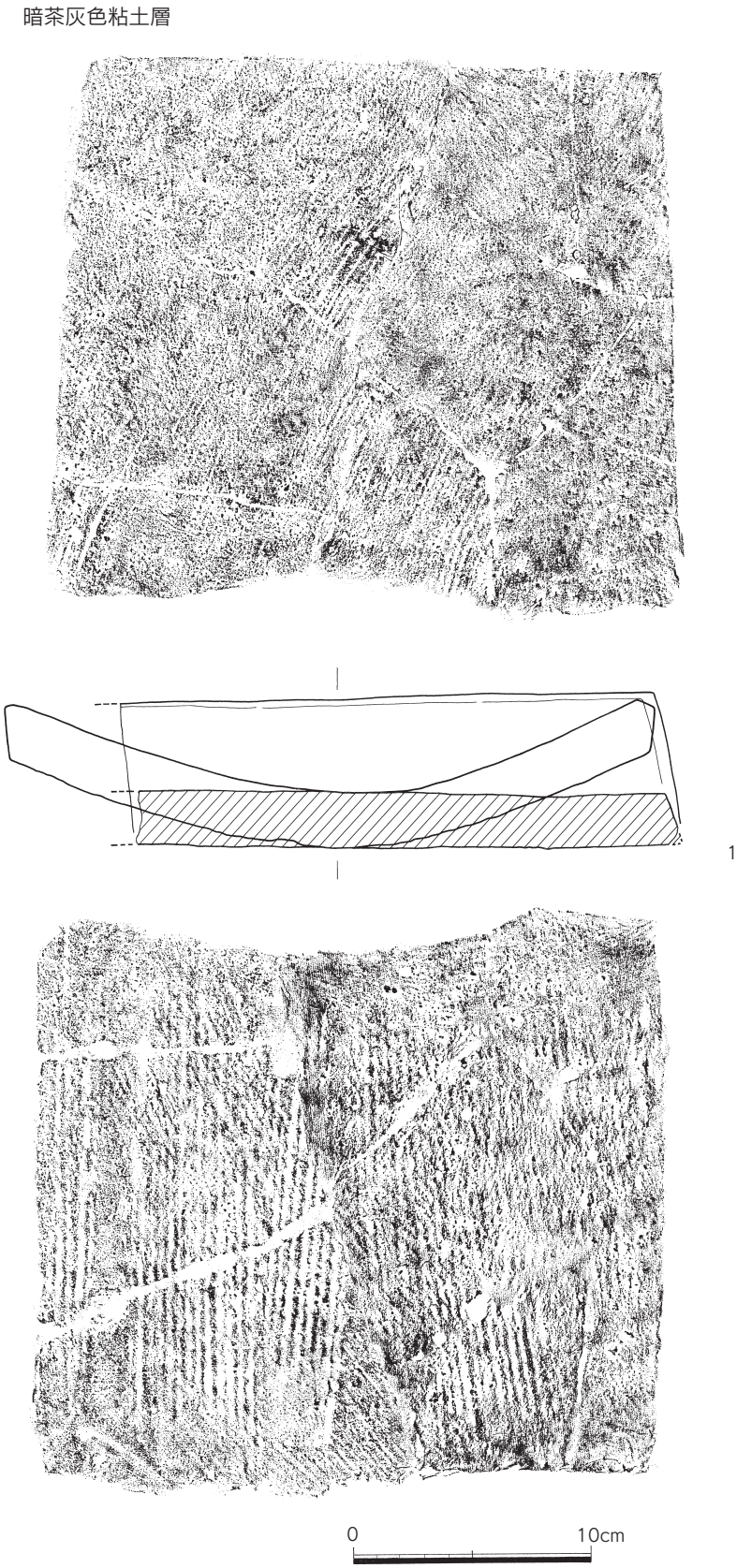


fig.231-12　大宰府条坊跡第231次調査　各層出土遺物実測図その３（1/3）

成は良好で、内面は淡橙褐色を、外面は橙褐色～淡褐黄色を呈し、断面は淡灰色を呈す。17は口径17.3cm、残存高6.6cmを測る。口縁部は内外面ともヨコナデを施す。胴部内面は手持ち削りを施し、肩部外面は工具によるナデを、胴部外面はハケ目がわずかに観察される。胎土には角閃石が含まれる。焼成は良好で、内外面とも淡褐黄色を呈し、断面は淡灰色を呈す。

黄茶色土層出土遺物（fig.231-11）

須恵器

蓋１（18）　口縁部が残存する破片である。残存高0.9cmを測る。内外面とも回転ナデを施す。焼成は良好で、還元も良好。内面は淡青灰色を呈し、外面はやや白い淡青灰色を呈す。

坏（19）　口縁部が残存する破片である。残存高2.7cmを測る。内外面とも回転ナデを施す。焼成は良好で、還元も良好。内面は淡灰褐色～淡灰黒色を呈し、外面は淡灰褐色～淡青灰色を呈す。

甕（20）　口縁部が残存する破片である。残存高2.3cmを測る。口径は約18cm前後と推定される。内外面とも回転ナデを施す。焼成は良好で、還元も良好。内面は淡灰青色を呈し、外面は暗灰黒色を呈し、断面は赤茶色を呈す。

土師器

甕（21）　口縁部が残存する破片である。残存高4.4cmを測る。口縁部と胴部の境は緩やかである。口縁部は内外面とも磨耗により調整不明。胴部内面は手持ち削りを施し、胴部外面はハケ目を施す。焼成は良好で、淡褐黄色を呈す。

暗茶灰色粘土層出土遺物（fig.231-12・13）

瓦類

平瓦（１・２）　１は瓦の左右両側面および前後側面の片方が残存する。残存長18.0cm、幅26.5cm、厚さ2.3cmを測る。凸面はやや粗めの縄目の叩きを施し、一部にナデたような形跡がみられる。凹面には布目痕と糸切りが見られる。側面端部は垂直方向に立っており、水平方向にヘラを動かして削りを行い仕上げとしたことが観察される。焼成は良好で、土師質に仕上がり、淡褐黄色を呈す。２は瓦の左右側面の片側および前後側面の片側が残存する。残存長20.5cm、残存幅15.3cm、厚さ1.9cmを測る。凸面はやや粗めの縄目の叩きを施し、凹面には布目痕と糸切りが見られる。側面端部は垂直方向に立っており、水平方向にヘラを動かして削りを行い仕上げとしたことが観察される。焼成は良好で、土師質に仕上がり、暗灰褐色を呈す。

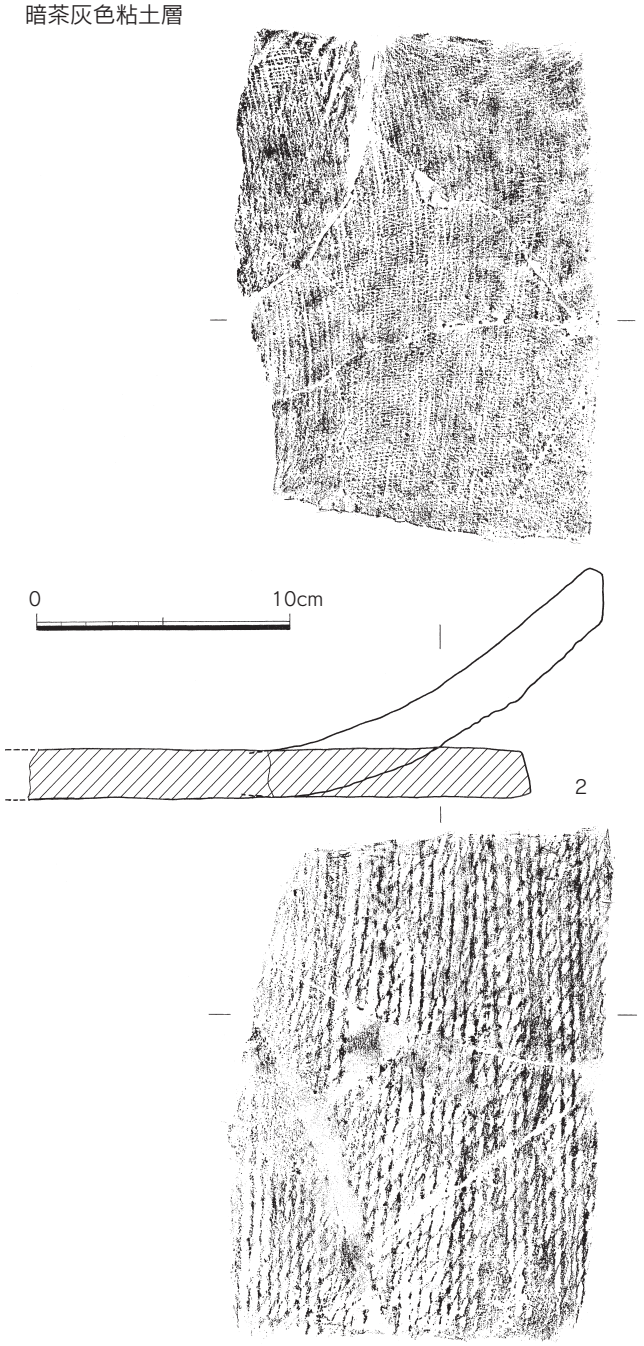


fig.231-13　大宰府条坊跡第231次調査　各層出土遺物実測図その４（1/3）

５．小結

ここは般若寺塔跡の南隣接地に位置し、地形および試掘結果より寺域を画する遺構が検出される可能性があった地点である。

今回は、専用住宅建設に伴う擁壁工事により遺構が影響を受けるとみられる部分の調査、および般若寺関連遺構の確認を目的とした調査を実施した。調査区は、建物建築位置を囲むように設定したが、排土を場内に置いたこともあり、対象地の東西南を細長いトレンチで囲むような形状となった。また遺構保存される部分が多かったため、掘削も一部しか及んでいないが、ここで明らかになった主だったことについて、時間を追って述べる。

A. 飛鳥時代

まず、７世紀後期～末頃に丘陵南端部に東西溝（231SD011・025（第５遺構面））が掘削される。東に対して若干南に振れつつ走行している。その頃、調査区東側は現在のような急な崖とはなってはいなかった可能性があり、溝も東に伸びていたようである。

この東西溝開削とほぼ同じ頃、調査区南東部の一部（A区南半部）では、東西溝の南に灰褐色土層（第５層群）で盛土または整地が行われており、この上に建物あるいは柵の柱穴とみられる小穴が開削されている（231SX012掘方（第４層群））。この柱穴に柱を据えて穴を埋めた後、柱の周りは橙茶色土層（第４層群）によって整地が行われる。整地は上述の東西溝（231SD011）まで及び、一部は溝の南肩から溝底までも埋めるものであった。このように橙茶色土層整地層と231SD011・231SX012の関係を分析すると、これらが造られた契機は一連のものとして捉えることができ、その結果、第４遺構面が形成されたということが窺える。

第４遺構面の東西溝・柱穴は７世紀末には廃絶し、その後盛土造成が行われた（第３層群）。その多くは丘陵際を盛土造成するためA区のみで検出された。この中にはC区まで類似する整地土が広がっているとみられるものがある。A区の灰茶色粘土層およびC区の茶灰色粘土層は、薄い茶色～灰色味を帯びたシルト～粘土質のもので、他の土質の混ざりも少なく、大変よく似ている。盛土造成土というよりも整地層の可能性が考えられ、両層は同一層の可能性が高いと考えている。この土質の整地層は、調査者の経験上、条坊内の第157次調査の茶灰色粘土層（『大宰府条坊跡21』所収。五条２丁目)、第168次調査の茶灰色粘土層（『大宰府条坊跡22』所収。朱雀３丁目)をはじめとし、大宰府条坊内の広範囲において確認される７世紀末前後の遺物を含む整地層によく似ている。これは、市内平野部の条坊推定範囲に広範囲に広がっている淡黄灰色を呈するシルト～粘質土の沖積層に由来するとみられ、これが条坊造成の際に使用されたと考えられる。このことは筆者の経験・感覚的、主観的な部分を含んでおり参考として述べるものであるが、大まかな遺構埋土土質と遺構時期の検証はこれまでの調査で何度も行っており、主観ながらも蓋然性は高いとみている。これはすなわち、客土の背景に７世紀末前後の大宰府造営・大宰府条坊造営と同じ契機があったことも考えられる。

これを前後する時期に総柱建物（231SB010）が建てられる。建築は飛鳥期の可能性が高く、その柱穴から縄目叩瓦が出土していることから、奈良期には廃絶したことが窺える。この約16m北では、巨大な掘方を持ち塔基壇造営に先行する掘立柱建物が検出されているが（般若寺跡第４次調査のSB010)、これもほぼ同時期の建物とみられる。ただ同時並存していたかどうかについては不明である。

B. 奈良時代以降

奈良時代に入ると、総柱建物（231SB010）は廃絶し、この後、231SD015・231SD005（東西溝）・231SD020（南北溝）が掘削される。これらとほぼ同時期に塔基壇が造られたとみられ、

231SD020はこの塔基壇と設計軸の振れが同じで、基壇の東脇に向かって走行していることからも、両者の関連が深いことが窺える（Ⅳ.まとめ　図８・９参照）。また231SD015は、231SD020の南端部付近から西に向かって伸びており、231SD005もその一部あるいは関連する遺構とみられる。こうしてみると検出した溝群は塔を含む寺院造営と一連のものと捉えられ、寺域を区画する溝（区画施設の一部の可能性あり）だったと想定される。

区画溝は、いずれも丘陵頂上平坦部の端部に位置するものと認識されたとみられる。南北溝の東側については、７世紀後期～末頃の東西溝（SD011）の存在から、平坦部が現状よりもう少し東側に延びていたことがわかったが、溝の南に堆積する７世紀末の造成土が南東方向に傾斜して堆積していることや、この東側は大きな谷地形となっていることから、その伸びはそれほど無かったことが想定される。現状とそれほど地形が変わっていないとすると、ここに南北溝が設けられたことは理解できる。

寺域の南・東を画する溝群に対応するように、丘陵平坦部の北端では寺域北辺を画するとみられる東西柵列等が大宰府条坊跡第63・84・96次調査で検出されている（以下、北辺柵列とする）。この北辺柵列の東端は231SD020（南北溝）の北延長上で途切れており、231SD020を含めた寺域東を画する遺構がここまで延びていたことも想定されなくはない。ただ、いくつかの疑問もある。231SD020の北延長ライン上では、過去、塔基壇の東側を調査した般若寺跡４次調査、大宰府条坊跡第84次調査が行われているが、そこでは南北に走行する遺構は検出されていない。またこのライン上に寺域東辺施設があったとすると塔基壇と近接しすぎている感も否めない（塔基壇東端から推定ラインまで約4.5m（小尺15尺））。遺構が検出されないことについては、開発造成による削平が著しく遺構が消失していることが指摘されているところであり、確かに、本調査区の231SD020も僅かに残る溝底を確認したにすぎない。こうした状況で確定できることは少ないが、現時点では、この溝が塔基壇脇を通り北辺柵列付近まで延びていたと考えるだけでなく、塔の南で地形に沿って調査区の北で東に折れ曲がっていたこともまだ想定しておく必要があるだろう。ただ、調査区と塔跡の間は道路によって削平され、すでに遺構は消失している。溝北延長上においても残された未調査部分は少なく、遺構が遺存していても削平も著しいことが予想されるが、今後の課題としたい。

ここで検出した両区画溝は、限られた範囲でしか調査できなかったが、いずれも平安時代の土師器供膳具とみられる細片が出土している。後世に遺物が混入した可能性も十分考えられるところであるが、九州歴史資料館による塔跡の調査成果では、塔は少なくとも９世紀中頃までは存続していたようで、付近では平安時代前期の遺物が出土しているという（『般若寺跡』昭和55年）。廃絶の契機が同じ可能性もあり、関連が注目される。

（井上信正）

＜参考文献＞
『般若寺跡－大宰府史跡　昭和54年度発掘調査概報別冊－』九州歴史資料館　昭和55年
『般若寺跡Ⅱ－大宰府史跡　昭和62年度発掘調査概報別冊－』九州歴史資料館　昭和63年
『太宰府市史　考古資料編』太宰府市　平成４年
『太宰府市史　環境資料編』太宰府市　平成13年
『大宰府条坊跡21』太宰府市教育委員会　2002年
『大宰府条坊跡22』太宰府市教育委員会　平成16年

tab.231-2　大宰府条坊跡第231次調査　遺構番号台帳（1）

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況 （古→新）	遺構間切合 （古→新）	時　期	地区番号
1	231SX001	造成埋土	S-1明茶色粘土と赤茶色粘土層は類似している	灰茶色土→淡茶色土(炭混)→灰色粘土→明茶色粘土(明赤色粘土塊多く含む)		鎌倉・南北朝～	C区
2		カクラン		表土最下位の灰色土と同質埋土			C区
3		小穴		灰赤褐色粘土埋土			C区
4		小穴		茶褐色土(黄色土塊わずかに含む)埋土	20→4		E5(A区)
5	231SD005	溝		暗灰色土埋土		奈良～	C区
6		小穴					H3
7		小穴			10b→7		H3
8	231SX008	小穴×土坑	暗灰茶色粘土層を中心とした層群除去後に検出された。橙茶色土層の上面で検出。	暗茶色土埋土		7c末頃	EF4 (トレンチ内)
9		小穴			10c→9		H2
10	231SB010	掘立柱建物	南北2間以上、東西3間以上の建物と見られる。	茶黄色褐色土層～黄色粘土層に切り込む		柱痕8c 初頭～前期。 掘り方 7c末～8c。	A区
11	231SD011	溝×土坑	S-11橙茶色土は「橙茶色土層」と同一層。黄茶色土層もS-11の可能性あり。S-25と同一遺構とみられる。	橙茶色土層→S-11暗茶色土→黄茶色土層		7c後期～末	F3～4
12	231SX012	小穴	橙茶色土層除去後に検出 遺物なし。			7c後期～末	E2
15	231SD015	溝	東西に走行	暗茶灰褐色粘土埋土		奈良・平安～	DE5(A区)
20	231SD020	溝	南北溝。土師器片	茶灰褐色粘土埋土		奈良・平安～	EF4～5(A区)
25	231SD025	溝×土坑	東西に走行。茶灰色粘土層除去後に検出。S-11につながるか	茶灰色粘土埋土		7c後期??	C区
茶黒色土層		表土	表土除去時にごく薄く広がっていた層				調査区全体
赤茶色 粘土層		表土	調査区全体に広がる層。赤茶色粘土、赤灰色粘土塊の混ざる層			昭和30～40年頃？	調査区全体
淡茶褐色 粘土層		人工層位	A区において赤茶色粘土除去後に検出された遺構を覆う人工層位。基本的に淡黄褐色粘土層に帰属				A区
淡黄褐色 粘土層		造成土	北から東～南東方向に向かって傾斜。調査面上では薄く堆積。一部S-10iを覆う。				A区
黄褐色 粘質土層		造成土	淡黄褐色粘土層より濃い黄色を呈す。淡黄褐色粘土層と同一層の可能性もあり				A区
暗灰茶色 土層		造成土	北から南～南東に向かって傾斜	埋土はc区の暗灰茶色粘土層に類似	暗灰茶色土層→15・20		A区
茶黄褐色 土層		造成土	淡黄色粘土塊が含まれる		茶黄褐色土層→10・15・20		A区
明黄褐色 粘質土層		造成土	G３地区で確認した黄色の層。ごく一部のみに堆積している可能性もある				A区(G3)

tab.231-2　大宰府条坊跡第231次調査　遺構番号台帳（2）

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
暗灰茶色粘土層		造成土	層は厚く遺物も多い。北から南～東の方向に向かって傾斜		暗灰茶色粘土層→10	7c後期	A区
暗茶灰色粘土層		造成土	この層除去後S-8等検出。A区の暗灰茶色土と同一層の可能性を考える		暗茶灰色粘土層→5	7c末、8c初頭か	C区
灰茶色粘土層		造成土	北から南～東に向かって傾斜		灰茶色粘土層→10		A区
茶灰色粘土層		造成土or整地層	暗茶灰色粘土の下位の層。ほぼ水平に堆積しており、整地層の可能性あり。A区の灰茶色粘土と同一層の可能性を考える		25→茶灰色粘土層		C区
黄色土層		造成土or整地層	この下は大半が淡黄灰色粘土地山。北から南に向かって傾斜		黄色土層→10		A区(Gライン以北)
黄茶色土層			S-11の最上層またはS-11を覆う整地層と見られる。	SX011の最終埋土の可能性あり	11→黄茶色土層		A区(F4付近)
橙茶色土層		整地層	ほぼ水平に堆積しており、整地層とみられる。SX012の掘り方を覆う。なおS-11橙茶色土と同一。				A区
灰褐色土層			この下位については不明		灰褐色土層→12→橙茶色土層		A区(E4)
淡黄灰色粘土地山		地山	淡橙灰色粘土地山の上に厚さ10cm前後の堆積が見られる				A区(GHライン)
淡橙灰色粘土地山		地山	鳥栖ローム層とみられる				A.C区
淡黄色土地山		地山	Ｂ区南側擁壁工事立会時に確認。淡黄色真砂土に黄色土塊が含まれている。				調査区南
表土		表土					調査区全体

tab.231-3　大宰府条坊跡第231次調査　土器計測表

※A；内底のナデ、B；は板状圧痕
※計測値の（　）は復元値。+は残存値。

S-5暗灰色土

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	高坏	231-9-2	R-001	—	4.5+	(8.0)			

S-10a

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	蓋c3　ヘラ	231-8-1	R-001	(14.6)	1.2+	(9.4)	○	×	

S-10a柱痕

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	蓋3　—	231-8-2	R-001	—	2.3+	—	—	—	

S-10f掘方

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	甕	231-8-7	R-001	—	7.6+	—			

S-10g柱痕

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏	231-8-4	R-001	—	1.4+	—			畿内系か

S-10g掘方

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	鉢×皿b	231-8-9	R-001	—	2.9+	—			

S-10h柱痕

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	坏c　ヘラ	231-8-3	R-001	—	0.8+	—	×	×	

S-10h掘方

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	坏身	231-8-6	R-002	—	1.3+	—			
土師器	甕	231-8-8	R-001	—	1.5	—			

S-11暗茶色土

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	蓋c1　ヘラ	231-9-3	R-001	(11.5)	2.9+	(9.4)	○	×	
須恵器	蓋1　—	231-9-5	R-002	—	1.6+	—	—	—	断面酸化焔焼成
須恵器	坏　—	231-9-8	R-003	—	3.1+	—	—	—	
須恵器	蓋1　—	231-9-6	R-004	—	1.6+	—	—	—	
須恵器	坏　—	231-9-7	R-005	—	3.1+	—	—	—	
須恵器	甕	231-9-9	R-006	—	2.8+	—			
須恵器	蓋1　—	231-9-4	R-008	—	1.6+	—	—	—	
土師器	甕	231-9-11	R-007	—	4.7+	—			
土師器	甕	231-9-10	R-009	(17.7)	5.2+	—			胎土に角閃石含む

S-20

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏	231-9-12	R-001	—	5.0+	—			胎土に角閃石含むか

淡黄褐色粘土層

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	蓋3　ヘラ	231-11-1	R-001	—	2.2+	—	○	—	
須恵器	壺	231-11-3	R-002	—	6.3+	—			
須恵器	蓋3	231-11-2	R-003	—	1.3+	—			
須恵器	甕	231-11-4	R-005	(17.6)	3.9+	—			

暗灰茶色粘土層

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	坏c　—	231-11-11	R-004	—	3.2+	(9.4)	○	—	
須恵器	坏	231-11-12	R-005	—	2.3+	—			
須恵器	壺	231-11-14	R-006	—	2.4+	—			
須恵器	蓋1　—	231-11-9	R-007	—	1.3+	—	—	—	
須恵器	蓋1　—	231-11-10	R-008	—	1.3+	—	—	—	断面酸化焔焼成
須恵器	坏身　—	231-11-13	R-009	(9.8)	3.3+	—	—	—	
須恵器	蓋1　—	231-11-8	R-010	—	1.0+	—	—	—	
須恵器	蓋1　—	231-11-7	R-011	—	1.0+	—	—	—	
土師器	甕a	231-11-17	R-001	(17.3)	6.6+				胎土に角閃石含む
土師器	甕a	231-11-16	R-002	(17.1)	4.9+				胎土に角閃石含む
土師器	高坏	231-11-15	R-003	—	7.6+	—			

黄茶色土層

器別	器種	図版番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	甕	231-11-20	R-001	—	2.3+	—			
須恵器	蓋1	231-11-18	R-002	—	0.9+	—			
須恵器	坏	231-11-19	R-003	—	2.7+	—			
土師器	甕a	231-11-21	R-004	—	4.4+	—			

tab.231-4　大宰府条坊跡第231次調査　出土遺物一覧表（1）

S-1明茶色粘土

須恵器	蓋3、坏、坏蓋、甕、供膳具
土師器	坏(イト)、坏a、坏a×小皿a(ヘラ)、坏×皿、坏×椀
	高坏×器台、器台か、供膳具、貯蔵具
須恵質土器	こね鉢(東播)
国産磁器	破片(近現代)
白磁	椀；II-1(1)、V-4(1)、破片(1)
	皿；1×(1)
龍泉窯系青磁	椀；II(1)、II-b(3)、III(1)
縄文土器	縄文土器?、深鉢か
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦、破片(格子)
金属製品	鉄滓
石製品	黒曜石片
その他	石炭

S-2

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	破片

S-3

土師器	破片
瓦類	破片

S-4

土師器	坏×鉢、破片
土製品	焼土塊

S-5暗灰色土

須恵器	坏、坏身、甕、破片
土師器	坏、高坏、甕、破片
弥生土器	壺
瓦類	平瓦(縄目・格子目)、丸瓦

S-6

瓦類	破片

S-7

土師器	甕
土製品	焼土塊

S-8

土師器	煮炊具(角閃石入)、破片

S-9

土師器	供膳具

S-10a

須恵器	蓋c3

S-10a柱痕

須恵器	蓋3、甕
土師器	破片

S-10b柱痕

須恵器	甕×壺
土師器	破片
瓦類	平瓦(縄目、凹面に模骨痕)

S-10b掘方

土師器	破片

S-10c

土師器	甕

S-10c掘方

土師器	破片
弥生土器	甕×壺
土製品	焼土塊?

S-10d柱痕

土師器	供膳具?、煮炊具?

tab.231-4　大宰府条坊跡第231次調査　出土遺物一覧表（2）

S-10d掘方

土製品	土器×焼土塊

S-10e

須恵器	破片(供膳具か)
土師器	甕か?、破片

S-10e柱痕

土師器	破片
弥生土器	甕×壺

S-10f柱痕

土師器	供膳具か?、破片
瓦類	瓦?破片

S-10f掘方

須恵器	甕
土師器	供膳具、煮炊具(角閃石入)、破片

S-10g柱痕

須恵器	甕×瓶
土師器	坏?(畿内産??)、甕、煮炊具?(角閃石入)、破片

S-10g掘方

須恵器	壺
土師器	皿b、甕、破片

S-10h柱痕

須恵器	坏c
土師器	破片

S-10h掘方

須恵器	坏身?、甕
土師器	甕、破片

S-10i柱痕

須恵器	坏、甕
土師器	煮炊具、破片

S-10i掘方

須恵器	甕
土師器	甕×壺、鉢?
石製品	黒曜石原石

S-11暗茶色土

須恵器	蓋1、蓋c1、坏、甕、甕×瓶
土師器	甕、甕(角閃石入)、供膳具

S-11橙茶色土

須恵器	破片(甕か?)
土師器	煮炊具

S-15

土師器	甕、供膳具、破片
土製品	焼土塊

S-20

土師器	椀×大坏、煮炊具、供膳具、破片
石製品	黒曜石片

S-25茶灰色粘土

土師器	破片
弥生土器	甕×壺(凸帯あり)

赤茶色粘土

須恵器	蓋1、坏、甕、破片
土師器	坏(奈良)、坏a(平安)(ヘラ)、供膳具、破片
龍泉窯系青磁	椀；椀I?(1)
	他器種；破片(1)
瓦類	平瓦(縄目)、破片
その他	タイル(1点のみ混入か)

淡茶褐色粘土

須恵器	坏、坏c(7c末)、甕
肥前系陶磁器	破片
瓦類	平瓦(格子)、平瓦(縄目、縄イト)、丸瓦(縄目)、軒丸瓦

淡黄褐色粘土　＜第1層群＞

須恵器	蓋1、蓋3、甕、壺
土師器	甕、甕(角閃石入)、供膳具、破片
弥生土器	器台、弥生土器?破片
瓦類	瓦?、軒平瓦
金属製品	鉄滓
石製品	黒曜石片、滑石製有孔円板

暗茶灰色粘土　＜第2層群＞

瓦類	平瓦(縄目、イト、一枚作り)

茶黄褐色土　＜第3層群＞

土師器	甕、供膳具
弥生土器	弥生土器?

暗灰茶色粘土　＜第3層群＞

須恵器	蓋1、坏、坏c、坏身、甕、供膳具
土師器	皿bか?、高坏、甕(角閃石入)、煮炊具
弥生土器	甕、甕×壺(後期)

灰茶色粘土　＜第3層群＞

土師器	破片

茶灰色粘土　＜第3層群＞

土師器	破片
弥生土器	破片(後期か?)

黄茶色土　＜第3層群＞

須恵器	蓋1、坏、甕
土師器	甕、破片

橙茶色土　＜第4層群＞

土師器	甕、供膳具

灰褐色土　＜第5層群＞

土師器	破片

表土

須恵器	小蓋3、蓋3、坏c、甕、破片
土師器	坏a(平安前～中か)、小皿(漆付か?)
	小皿a(イト)、甕
須恵質土器	鉢
国産陶器	鉢(現代か)、破片
国産磁器	蓋、小椀(近代)、椀(現代)、鉢(現代)、燭台か?
白磁	椀；Ⅳ(1)
越州窯系青磁	椀；破片(I類)(1)
	鉢他；越?破片(1)
龍泉窯系青磁	椀；II(1)
弥生土器	甕×壺か
瓦類	平瓦(格子)、丸瓦(縄目)、現代の燻瓦
石製品	碁石(白)
その他	タイル、スレート、レンガ、土製人形か? ガラス

Ⅲ-6. 般若寺跡第4-2次調査

１．調査に至る経緯

調査地は太宰府市朱雀２丁目（旧大字南字般若寺）9-33他3筆に位置する。昭和62（1987）年７月14日、般若寺塔跡の北東隣接地で共同住宅建築に先立つ事前協議が、当時の社会教育課文化財係にあった。ここは九州歴史資料館が行った般若寺跡第３次調査・第４次調査地内にあり、調査で検出された柱穴掘方の直径が２ｍ前後という巨大な掘立柱建物（以下、般4SB010）の北庇部分が未調査であったため、その確認の必要があると判断された。その後九州歴史資料館と協議した後、太宰府市教育委員会で遺構確認を目的とした立会調査を実施することになった。調査は昭和62（1987）年８月３日に実施し、山本信夫・狭川真一・緒方俊輔が行った。調査面積は42㎡である。調査では重機で遺構面を検出した後、遺構精査を行い、遺構検出状況の平面図（1/20）をとり、写真撮影を行った。調査区南壁面で半裁された状況で検出した柱穴の一つ（SB010E）については、土層図を作成した。

２．遺構

掘立柱建物

般4SB010（図４・５）

般若寺跡第３・４次調査で報告されている般4SB010に関わる柱穴９基（般4SB010A～I）を検出した。その配置から、般4SB010Iのみ身舎に関わる柱穴で、その他は庇に該当する。これにより、身舎は東西３間（通り芯間7.32ｍ）、庇は東西５間（通り芯間11.87ｍ）の東西北の三方向に庇を持つ建物ということが確定した。柱間につては北庇列のほぼ中央が若干広いようであるが、ほぼ等間隔で概ね8.2小尺程度を測る。条坊内の調査でも柱間が８尺を越える建物はほとんど見つかっておらず、かなり大型の建物であったことが窺える。

なお調査時の所見として、SB010B・010Dの柱痕には若干量の縄目瓦片が含まれており、主として柱痕の上方に多く含まれ、下層では検出されなかった、という記録が残る。

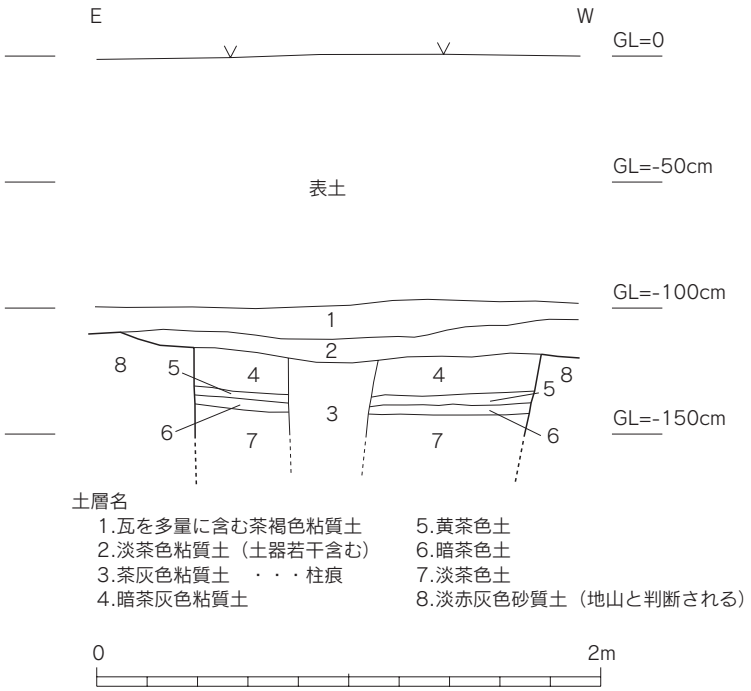


図４　般若寺跡第4-2次調査　般4SB010柱穴E 土層図（1/30）

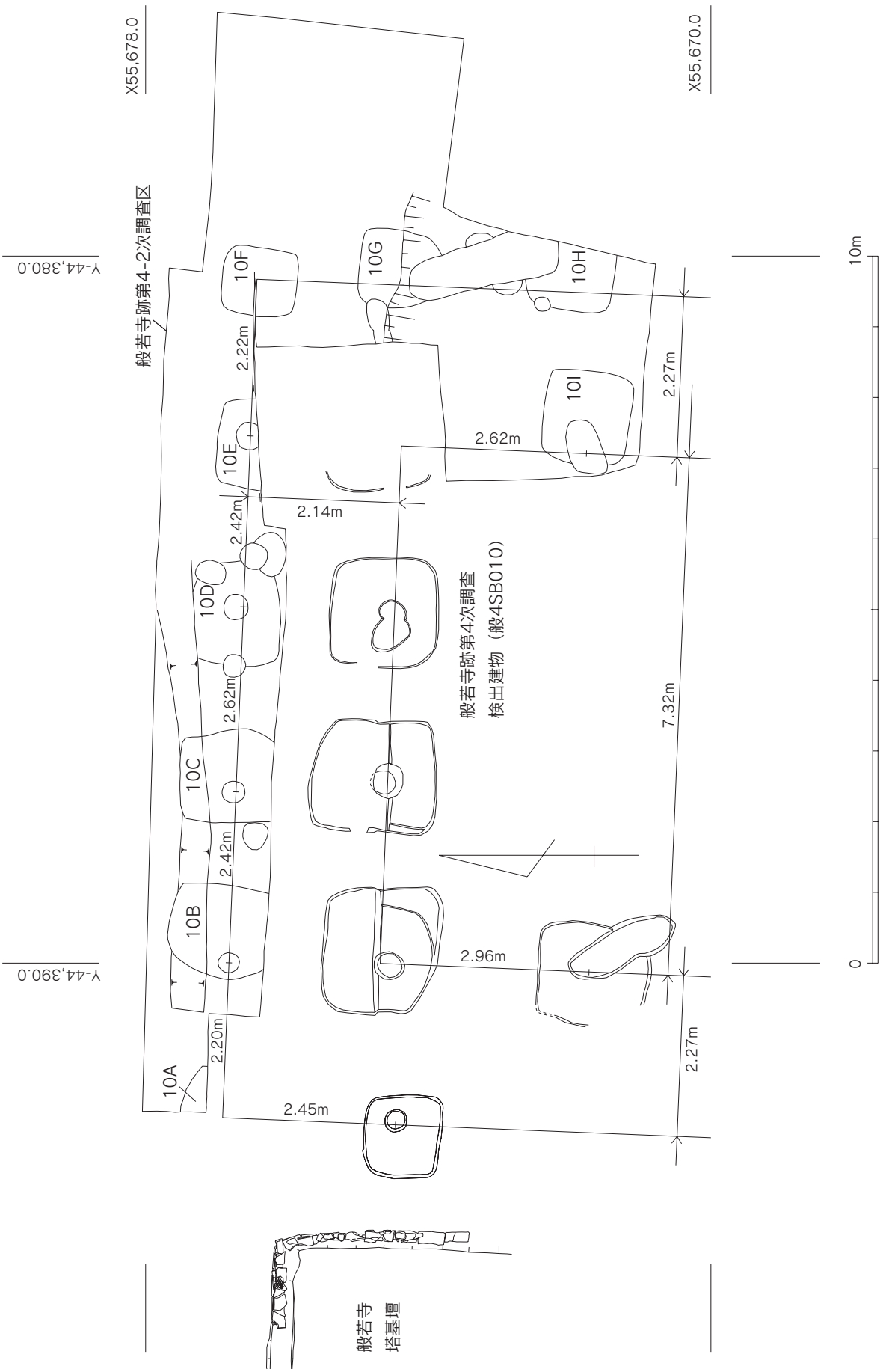


図５　般若寺跡第4-2次調査　遺構実測図（1/80）

Ⅲ-7．塔基壇西南出土の遺物

１．報告に至る経緯

当市の文化財収蔵庫に、昭和56（1981）年５月25日に、「立会　般若寺塔の西南」と記したラベルと共に、コンテナ１箱の遺物が収納されている。これについての当時の記録類はなく、また調査者も明確ではない。「塔の西南」とする位置を推定すると、塔南側の東西道路における何らかの工事立会が行われたものか、あるいは第231次調査地付近での工事立会によるものと想像される。

こうした状況ではあるが、般若寺に関連する遺物資料として、報告する。

２．出土遺物（図６）

須恵器

蓋１（１）　口縁端部の破片である。残存高1.3cmを測る。焼成は良好で、還元も良好。灰色を呈す。

土師器

坏a（２・３）　いずれも底部の破片である。２は残存高1.0cmを測る。底部切り離しはヘラ切りとみられる。焼成は良好で、橙灰色～暗茶褐色を呈す。３は残存高1.4cmを測る。底部切り離しはヘラ切り。焼成は良好で、橙灰色を呈す。

坏d×a（４）　底部の破片である。残存高0.8cm、底径10.6cmを測る。底部切り離しは回転ヘラケズリを施しているようにも見える。焼成は良好で、橙灰色を呈す。

青磁

小壺（５）　底部の破片である。残存高1.8cm。底径は4.9cm前後に復元できる。外面底部は丁寧にヘラケズリが施され、露胎している。胴部はやや緑がかった透明釉が薄く施される。内面は回転ナデが施され、露胎している。素地は精緻で、大宰府陶磁器分類の胎土分類B群の範疇である。

瓦類

平瓦（６～８）　６は、残存長15.6cm、残存幅13.1cm、厚さ2.5cmを測る。凸面は縄目叩きを施す。胎土は３mm以下の砂を多量含む。焼成はあまく、淡黄茶色を呈す。表面はかなり風化した印象を受ける。７は、残存長10.2cm、残存幅10.9cm、厚さ2.0cmを測る。凸面は縄目叩きを施す。胎土は１mm以下の砂をわずかに含む。焼成はややあまく、暗灰色～白灰色を呈す。８は、残存長8.0cm、残存幅

表２　般若寺跡塔の西南工事立会出土　土器計測表

※Ａ；内底のナデ、Ｂ；は板状圧痕
※計測値の（　）は復元値。+は残存値。
※遺物番号は、遺物実測番号

暗茶土

器　別	器　種		fig番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備　考
須　恵　器	蓋1		図6-1	R-004	—	0.8+	(10.6)	—	—	
土　師　器	坏a	ヘラ?	図6-2	R-003	—	1.4+	—	—	—	
	坏a	ヘラ	図6-3	R-002	—	1.0+	—	—	—	底部1/4残存
	坏d×a	—	図6-5	R-001	—	1.3+	—	—	—	底部1/4残存

表３　般若寺跡塔の西南工事立会　出土遺物一覧表

須　恵　器	蓋1、坏、甕
土　師　器	坏、坏a×d
青　磁（未分類）	壺；小壺?[B群]
瓦　類	平瓦（縄目、格子目）、丸瓦（片、格子目）
そ　の　他	鉄滓

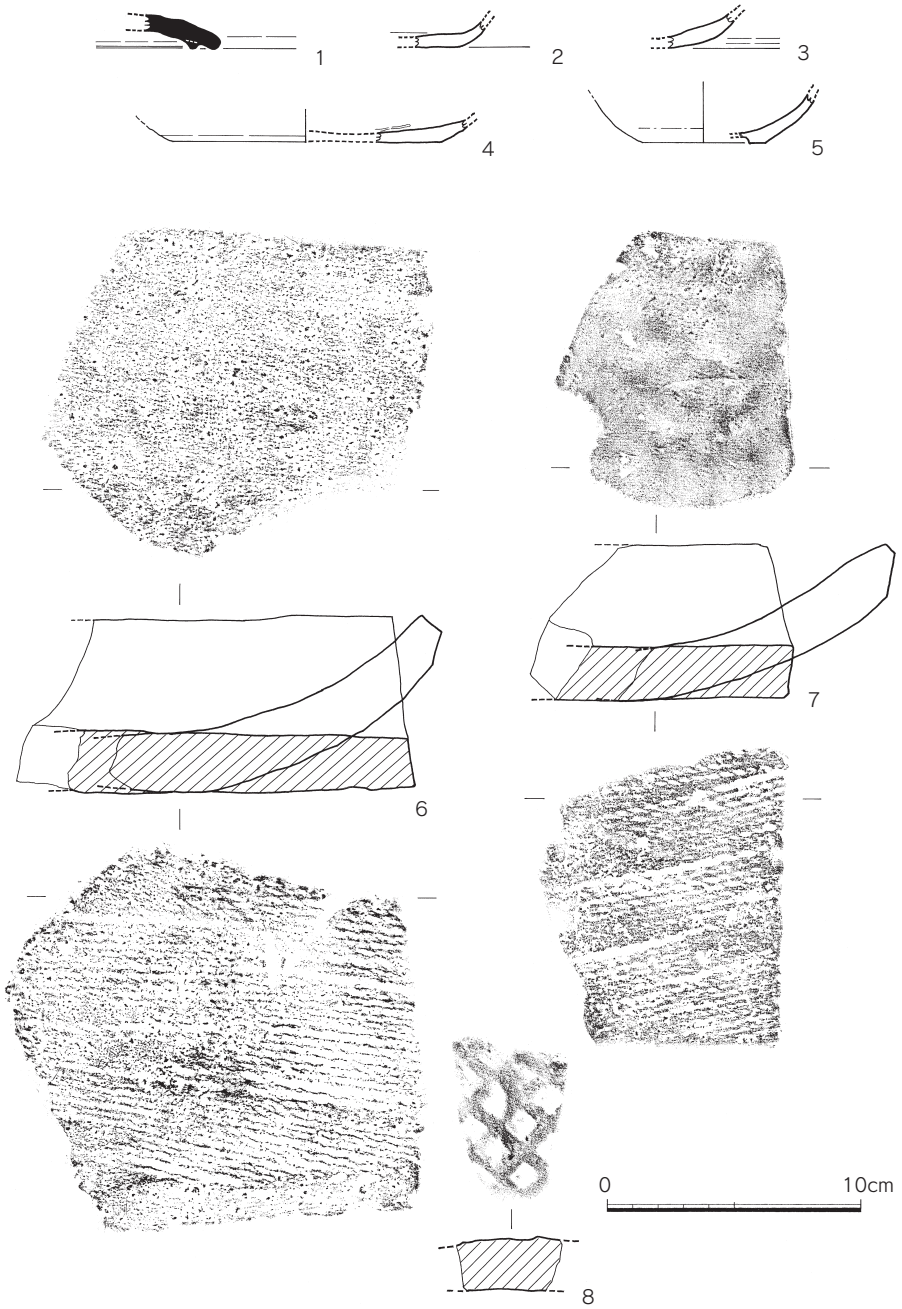


図６　塔基壇西南出土の遺物実測図（1/3）

4.9cm、厚さ2.0cmを測る。凸面は格子叩きを施す。胎土は精良。焼成はあまく、白灰色を呈す。

（井上信正）

Ⅳ．まとめ

般若寺跡については、九州歴史資料館から昭和55年と同63年に調査概報が刊行されているが、太宰府市教育委員会でも緊急調査や工事立会により情報収集を行ってきた。その成果をようやく今回公表することになり、般若寺の知見としては実に20年ぶりの考古学的情報の追加となった。

ただ、寺域と推定されている丘陵頂部平坦地は昭和30年代後半に大規模に造成されており、今回報告した地点でも大半で削平・撹乱され、遺構の残り具合が極めて悪い状況が窺える。こうしたこともあり、般若寺についての考古学からのアプローチが進展したとは言い難いものであるが、成果を概観してまとめとしたい。

ここでは、遺構の時期変遷や般若寺に伴うとみられる奈良期の区画遺構の検討、第84次調査で大量に出土した瓦の分析について述べる。

（1）遺構の変遷

a．飛鳥時代以前

第110次調査では阿蘇４テフラ（約８～９万年前）の分析を行っているが、ここ般若寺丘陵ではテフラ堆積以降とみられる土壌から黒曜石片や安山岩片など古い石製品関連遺物を出土することがある。そうした中、第231次調査区の北東隅で検出した掘立柱建物の柱穴（231SB010i掘方）からは黒曜石の原石が出土した。市内でもこのように黒曜石が原石のまま発見されることは珍しい。原石がこの地に持ち込まれた時期については不明であるが、テフラあるいはその後の堆積層に含まれていたものが掘立柱建物形成時に偶然掘方に混入したものであろう。丘陵上で旧石器あるいは縄文時代の遺跡が今後見つかる可能性を秘めている。

また、弥生～古墳時代の土器もごくわずかながら出土している。近隣の調査でまとまった遺跡を検出した例はほとんどなく、第235次調査（未報告）で検出した弥生前期の貯蔵穴とみられる遺構検出例や、第239次調査（『大宰府条坊跡28』所収）で出土した底部穿孔した弥生時代末～古墳時代初頭頃の二重口縁壺例、第249次調査（『大宰府条坊跡33』所収予定）で古墳後期の包含層検出例等が散見される程度である。総じてみると古墳時代以前の人の活動はほとんど窺うことができない。なお、本報告の第84次調査区でも弥生前期の貯蔵穴の可能性も指摘される土坑が検出されているが、遺物も十分になく時期判断はできていない。今後の課題として残る。

b．飛鳥時代

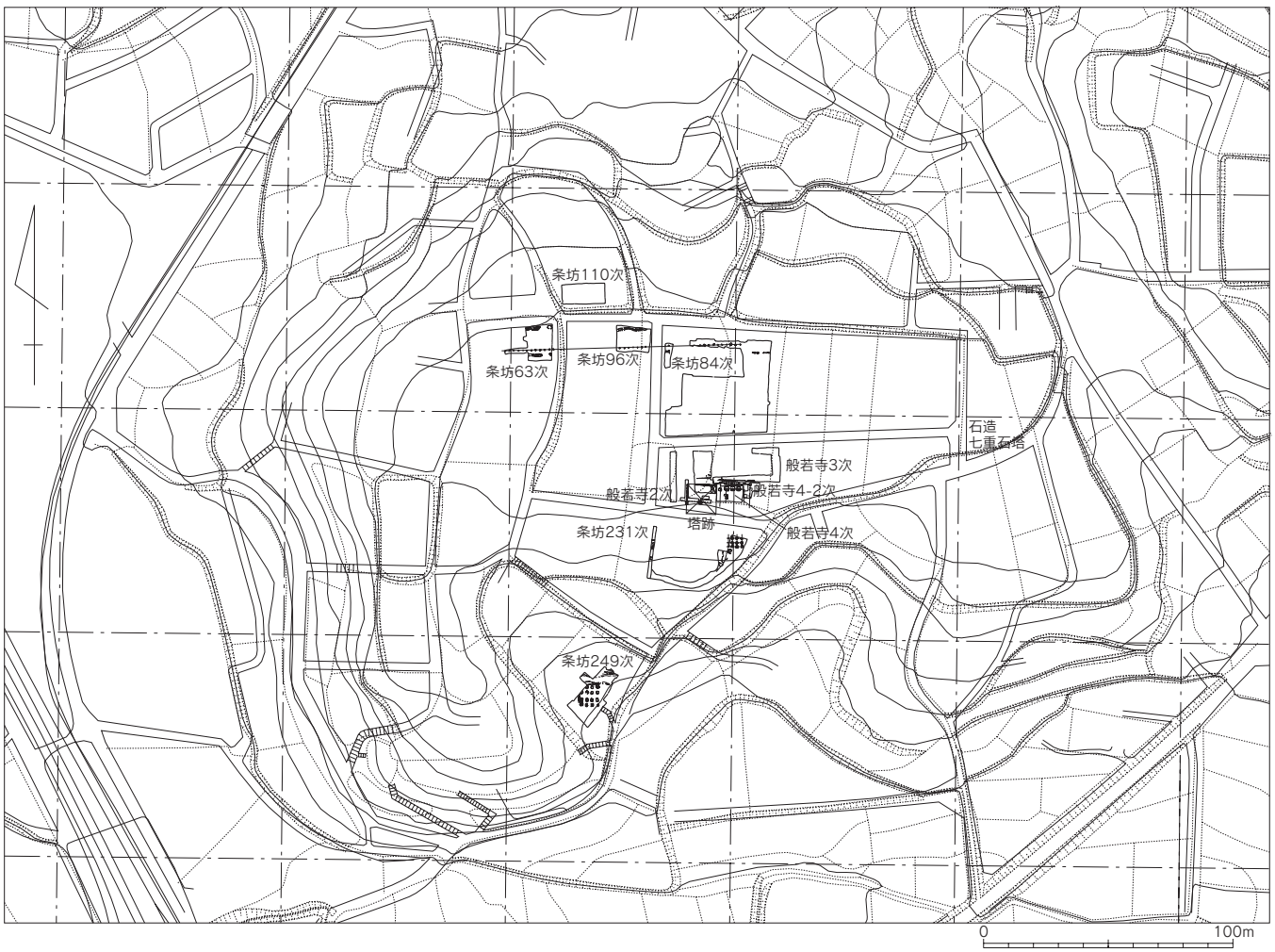
前述のように、古墳時代以前については人の活動をほとんど窺うことができないが、飛鳥時代になると一変する。ここでは般若寺跡第4-2次調査と条坊跡第231次調査所見を基に述べる。

まず、７世紀後期～末頃には丘陵南端部に東西溝（231SD011・025）が掘削される。その後、溝の南に掘立柱建物あるいは柵とみられる遺構の柱穴（231SX012）が作られる。土層観察によれば、その柱を据えた後、柱の周りを固めるように整地が施され、その整地の一部は、前述の東西溝（231SD011）を狭めるように溝南肩を覆っていた。これにより、東西溝とこの柱穴は同時併存していたことがわかるが、このように整地を伴い一体の土地利用が窺われることから、この柱穴（231SX012）は短期的な建造物ではなかったと考えられる。このことは、般若寺丘陵の土地利用が７世紀後期にはじまったことをあらためて窺うことができたと同時に、この時期の中でも画期がある可能性を含んでいる。今後資料の追加とともに時期区分についての検討が必要となるかもしれない。

なお231SX012については、掘立柱建物柱穴と想定することもできようが、円形を呈す柱掘方平面形、

表４　本報告の溝・柵等座標・方位一覧

遺　構　名	計測位置	座標値　（国土座標法第II系）		遺構の方向
		X座標	Y座標	
丘陵北辺柵列	63SA025西端任意点	55730.018	-44478.688	G.E.1°33′59″N
	84SA020h東端任意点	55732.495	-44388.102	
丘陵北辺北側東西溝	63SD010西端任意中点	55738.658	-44470.343	G.E.4°9′12″N
	63SD010東端任意中点	55739.060	-44464.807	
	96SD001西端任意中点	55738.292	-44433.340	G.E.2°0′23″N
	96SD001東端任意中点	55738.625	-44423.834	
	63SD010西端任意中点	55738.658	-44470.343	G.E.0°2′26″S
	96SD001東端任意中点	55738.625	-44423.834	
丘陵北辺南側東西溝	63SD025西端任意中点	55728.315	-44469.256	G.E.0°44′59″S
	63SD025東端任意中点	55728.251	-44464.365	
	63SD025西端任意中点	55728.315	-44469.256	G.E.1°27′28″N
	84次検出溝東端任意中点	55729.750	-44412.870	
84SA025	西端任意中点	55733.958	-44397.375	G.E.2°24′52″S
	東端任意中点	55733.788	-44393.343	
96SA020	西端任意中点	55736.993	-44433.198	G.E.1°12′08″N
	東端任意中点	55737.141	-44426.146	
231SD005・015	SD005西端任意中点	55649.048	-44420.380	G.E.9°46′30″S
	SD015東端任意中点	55644.132	-44391.845	
231SD011・025	SD025西端任意中点	55652.110	-44419.988	G.E.4°53′05″S
	SD011東端任意中点	55649.372	-44387.951	
231SD020	溝西肩北端任意点	55649.732	-44391.350	G.N.4°57′25″E
	溝西肩南端任意点	55645.489	-44391.718	
般4SB010北庇列	西端任意中点	55676.910	-44392.187	G.E.2°20′48″S
	東端任意中点	55676.424	-44380.327	



※ 道路は現在の道路。
一点鎖線は井上（2001)による復元案

図７　般若寺周辺調査と昭和23年地形図（道路は現在の道路。1/2,000）

掘方径が約80cm、柱痕径約15cm程度という状況が、丘陵北辺でみられる柵列柱穴の中にもみられることに注意を払う必要があると考える。後述するように丘陵北辺では柵列と溝とが平行しており、丘陵南辺も同様の溝・柵列があったことは想定されるところであり、検出した柱穴・溝がこれに該当する可能性は十分にある。北辺柵列柱穴出土遺物は柱痕と掘方を分けずに遺物を取り上げているため成立時期の判断が難しいが、意外に当期の遺物が多いことが注目される。丘陵頂上平坦部縁辺の区画施設の成立時期が７世紀代に遡る可能性も視野に入れた今後の調査を期待したい。

さて、７世紀末の内にはこの柱穴は廃され、丘陵南側にさらに平坦面を広げるための大規模な盛土造成が行われる。この造成土の中には７世紀後期～末の遺物が予想外に多く含まれており、その前代からの活動が活発だったことを窺うことができる。この造成の後、上に３×２間以上の規模をもつ倉庫と見られる総柱掘立柱建物（条231SB010）が建築される。この総柱建物は７世紀末に建築され、８世紀に入り般若寺塔基壇建築前に廃されたことが想定されるが、この建物の存廃経緯は、この北隣接地で行われた般若寺跡第４次調査・第4-2次調査で検出された大型掘立柱建物（以下、般4SB010）とほぼ一致するようである。この２つの建物は似たような柱筋で南北に位置している。同時併存していたかどうかは不明だが、般4SB010を身舎５間（庇７間）の四面庇南北建物と仮定し、条231SB010を南北２間と仮定すると、柱通り芯が最も近接する地点で約2.89m程度の数値が得られる。復元値の精度や建物屋根の軒の出具合をどの程度みるかによるだろうが、この幅は少し狭いような印象も受ける。建物の規模や同時併存については課題も多いが、このような大型の掘立柱建物群が塔基壇建築前に展開していたことが再確認されたことは特筆すべきであり、第231次調査で検出した造成土の中に７世紀後半の遺物が意外に多く含まれていることからも、丘陵上での活動が活発だったことが窺える。

c. 奈良時代

奈良時代になると、大型掘立柱建物群は廃絶し、整地を施した上に塔基壇が作られることが般若寺跡第４次調査で報告されている。この頃の遺構遺物は少ないながらも各調査区で検出されており、今回の報告では寺院活動に結びつく遺物はあまりないが、塔基壇が設置された時期に一致することから、寺院活動の最盛期だったと考える。

この時期に使用されていた遺構としては、丘陵端部に設けられた区画施設（柵・溝）が挙げられる。寺域の検討につながるものであり、北東南の状況について以下述べる。

＜丘陵北辺＞

今回最も注目されるのは、丘陵北辺の落ち際に、東西に走行する１条の柵列（以下、北辺柵列）とそれを挟んで平行する２条の溝（以下、北辺北側東西溝、北辺南側東西溝とする）が検出されたことである。

北辺柵列は、第63・84・96次の各調査区で検出された63SA025・84SA020・96SA010が該当する。東に対して北に1°34′程振れており、検出長は92.8mに及ぶ。西側には更に延長されることが十分予想されるが、東側については第84次調査区内で途切れている。柱間は、個別にみるとバラつきがあるようにみえるが、全体を通してみるとほぼ1.8m（６小尺＝５大尺）間隔で設置されており、規格性が窺える。

この柵列に平行する溝が、柵列の南北で確認されている。北辺北側東西溝は63SD010（ここでは63SX002も含む）・96SD001が該当する。北辺柵列とは、63SD010は約8.9m（30小尺=25大尺）、96SD001は約7.13m（24小尺＝20大尺）の距離がある。北辺南側東西溝は63SD020が該当する他、第84次調査区の西と東でその延長とみられる溝・土坑列をみることができる。北辺柵列とは、63SD020・第84次調査西側トレンチ内溝の両者で約2.1m前後（７小尺=5.8大尺）、第84次調査東側

土坑列で約3.4～3.7m前後（11～12小尺=９～10大尺）を測る。

なお、ここで掲載した計測値を全体的にみると、大尺で換算できるものが多いようにみえることを指摘しておきたい。ｂ.飛鳥時代の項で述べたように、柵列成立時期に関する問題として挙げておく。

＜丘陵東辺＞

北辺柵列東端が途切れる位置は、井上(2001）から導かれる大宰府条坊復元案の左郭５坊路推定ライン上に位置している。この北延長上では近年第235次調査・第239次調査（『大宰府条坊跡28』所収）の２ヶ所で南北道路を検出しており、さらに北延長上の御笠川北側の大宰府史跡第74・77次調査では、観世音寺と学校院との境界とみられる南北溝（SD205）と、その西岸に築地塀（SX2020）が併設されることが確認され、これが奈良時代から継続する観世音寺と学校院との境界の可能性が想定されている（『大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報』所収）。こうした状況からこの南北ライン上に条坊区画が存在したことはほぼ確定できる。第231次調査で検出した南北溝（231SD020）もこの南北ライン上に位置しており、丘陵南北端の区画施設が条坊区画の影響を受けていたことを窺うことができよう。

こうしたことから、ここが寺域の東端と考えられなくはないが、このライン上に寺域東辺施設があったとすると塔基壇と近接しすぎていることが気になるところではある（塔基壇東端から推定ラインまで約4.5m（小尺15尺））。またこれまでの塔基壇東側の調査でも、ライン上で条坊痕跡や寺域東辺施設は確認できていない。丘陵平坦部はさらに東に延びており、第84次調査区の北辺柵列東延長付近でも柵列に平行する土坑列（溝?）が検出されていることを考えると、寺域が東に広がっている可能性は未だあるといえるだろう。寺域東辺については今後の課題としたい。

＜丘陵南辺＞

丘陵平坦部の南端には、第231次調査で検出した東西溝（231SD005・015）が掘削される。前述のように飛鳥期にも東西溝（231SD011・025）が敷設されており、それが奈良期にも若干場所を変えつつ引き継がれたとみられる。231SD005・015を同一溝とする点や、北辺柵列・溝と平行してない点、また北辺のように柵を検出していない点等、疑問点は多いが、丘陵北辺同様、平坦部落ち際に区画溝が敷設されたという点は評価できよう。

なお近年、第231次調査区より丘陵を南に下った丘陵中腹で第249次調査が実施された。ここでは西から東に下る谷地形を何度も造成整地して土地利用している状況が見受けられ、奈良期とみられる東西溝２条も検出している。遺跡の内容や東西溝の評価は第249次調査報告に委ねるが、これも寺域を示す区画溝となる可能性も想定しておく必要はあると考える（『大宰府条坊跡33』所収予定）。

以上、丘陵端部の状況について述べた。寺域をほぼ確定できるのは北辺のみであり、その他についてはまだ課題が残っている。今後の検討課題としたい。尚、図７には『大宰府条坊Ⅴ』所収の昭和23年航空測量から作図した古地形図と今回の調査区を重ねた図面を掲載した。また図8～11には北辺柵列・塔基壇の２者の座標上の振れを基準として、それぞれ10小尺（2.97m）10大尺（3.564m）のメッシュを重ねてみた。今後の参考としていただければ幸いである。

d. 平安時代以降

九州歴史資料館による塔跡の調査では、塔は少なくとも９世紀中頃までは存続していたようで、付近では平安時代前期の遺物が出土しているという（『般若寺跡』九州歴史資料館）。第231次調査で検出した区画溝（231SD015・020）からは、胎土の状況から平安期の土師器供膳具とみられる細片が出土している（CD-ROM所収）。細片のため具体的な時期は不明であり、また混入の可能性もあるが、塔の廃絶契機と一致することも想定されることから関連が注目される。

平安時代前期以降の諸活動はほとんど窺うことができない。丘陵上の削平が進んでいる影響もあろう

が、わずかに平安期の遺構・遺物が散見される程度で、活発な活動があったとは言い難い状況にある。なお10世紀になると第63次調査区では木棺墓（63ST001）が作られている。前代まで条坊内に墳墓造営は行われておらず喪葬令の造墓規定が大宰府条坊にも適用されていたと考えられているが、この時期にはその意識が薄れていったことを示す資料の一つといえる。

また丘陵東側には鎌倉～南北朝期とされる石造七重塔があり、その頃まで寺院活動があったという見解がある。本報告では、当時の遺物として第231次調査区南辺の盛土造成土層（231SX001）に龍泉窯系青磁が１点出土したにすぎず、当時の活動を窺う資料は他にはない。こうした状況を見ると、寺院としての般若寺と石造七重塔との関連については、ここでは不明と言わざるを得ない。今後も引き続き慎重に検討される必要があろう。

＜参考文献＞
『般若寺跡－大宰府史跡　昭和54年度発掘調査概報別冊－』九州歴史資料館　昭和55年
『大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報』九州歴史資料館　昭和57年３月
『般若寺跡Ⅱ－大宰府史跡　昭和62年度発掘調査概報別冊－』九州歴史資料館　昭和63年
狭川真一「古代都市・大宰府の検討－墳基からのアプローチ」『古文化談叢23号』平成２年
『太宰府市史　考古資料編』太宰府市　平成４年
『太宰府市史　環境資料編』太宰府市　平成13年
小田富士雄「塔ノ原廃寺と般若寺問題」『筑紫野市史　資料編（上）考古資料』筑紫野市　平成13年
井上信正「大宰府の街区割りと街区成立についての予察」『条里制・古代都市研究通巻17号』平成13（2001）年
『大宰府条坊跡21』太宰府市教育委員会　平成14年（第157次調査他）
『大宰府条坊跡22』太宰府市教育委員会　平成16年（第168次調査）
『大宰府条坊跡28』太宰府市教育委員会　平成17年（第239次調査他）

（井上信正）

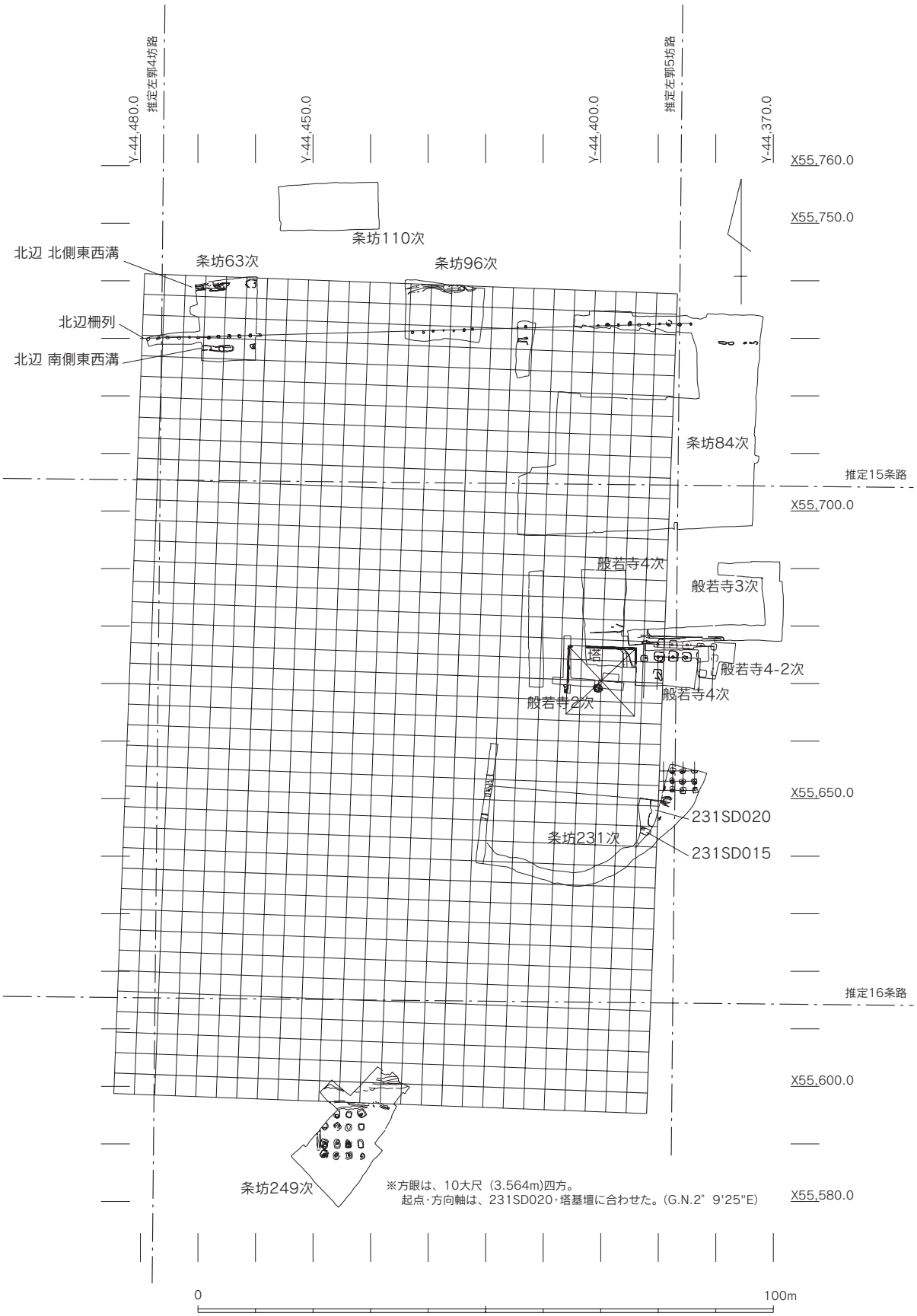


図８　般若寺周辺調査　接合図その１（1/1,000）

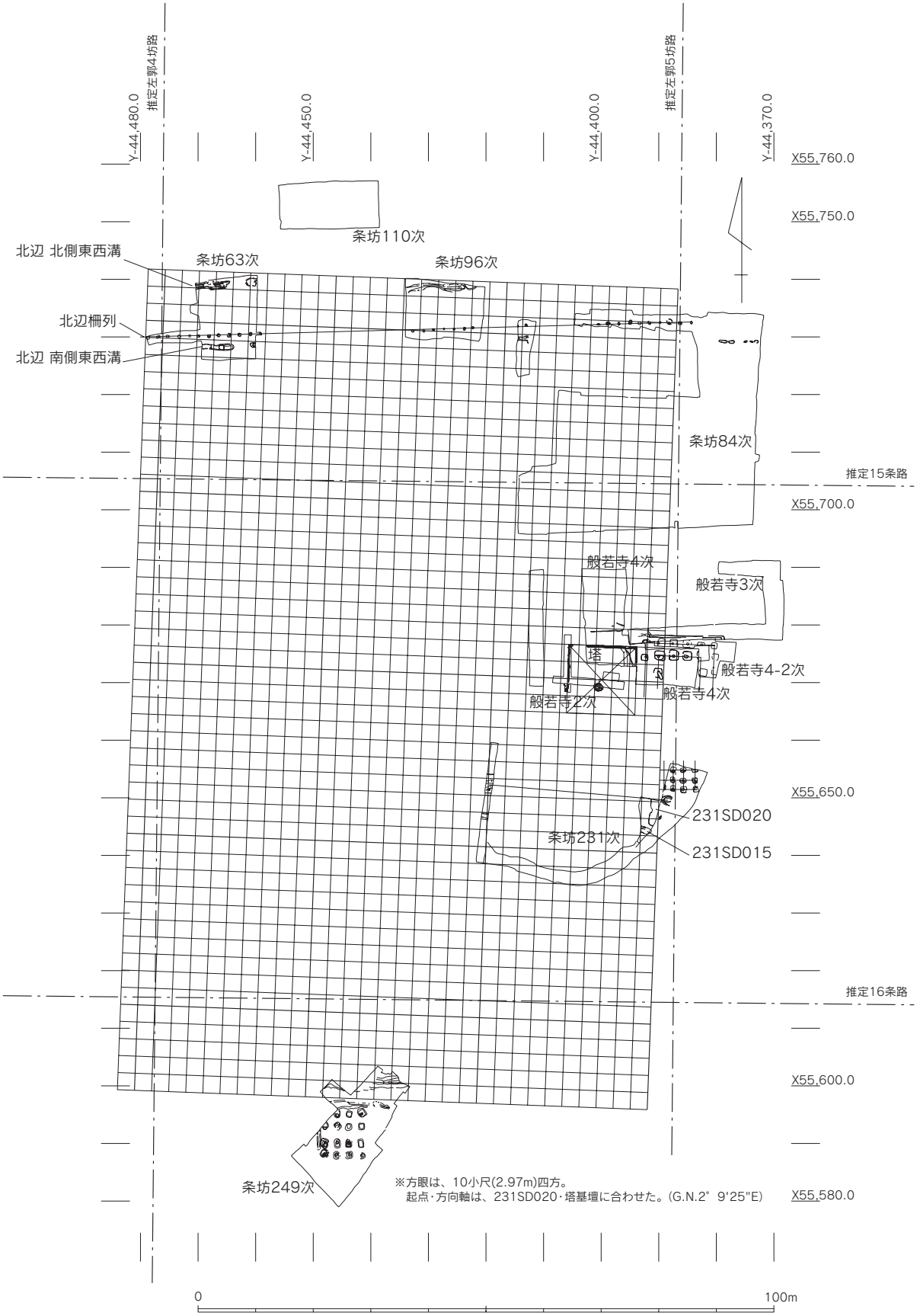


図９　般若寺周辺調査　接合図その２（1/1,000）

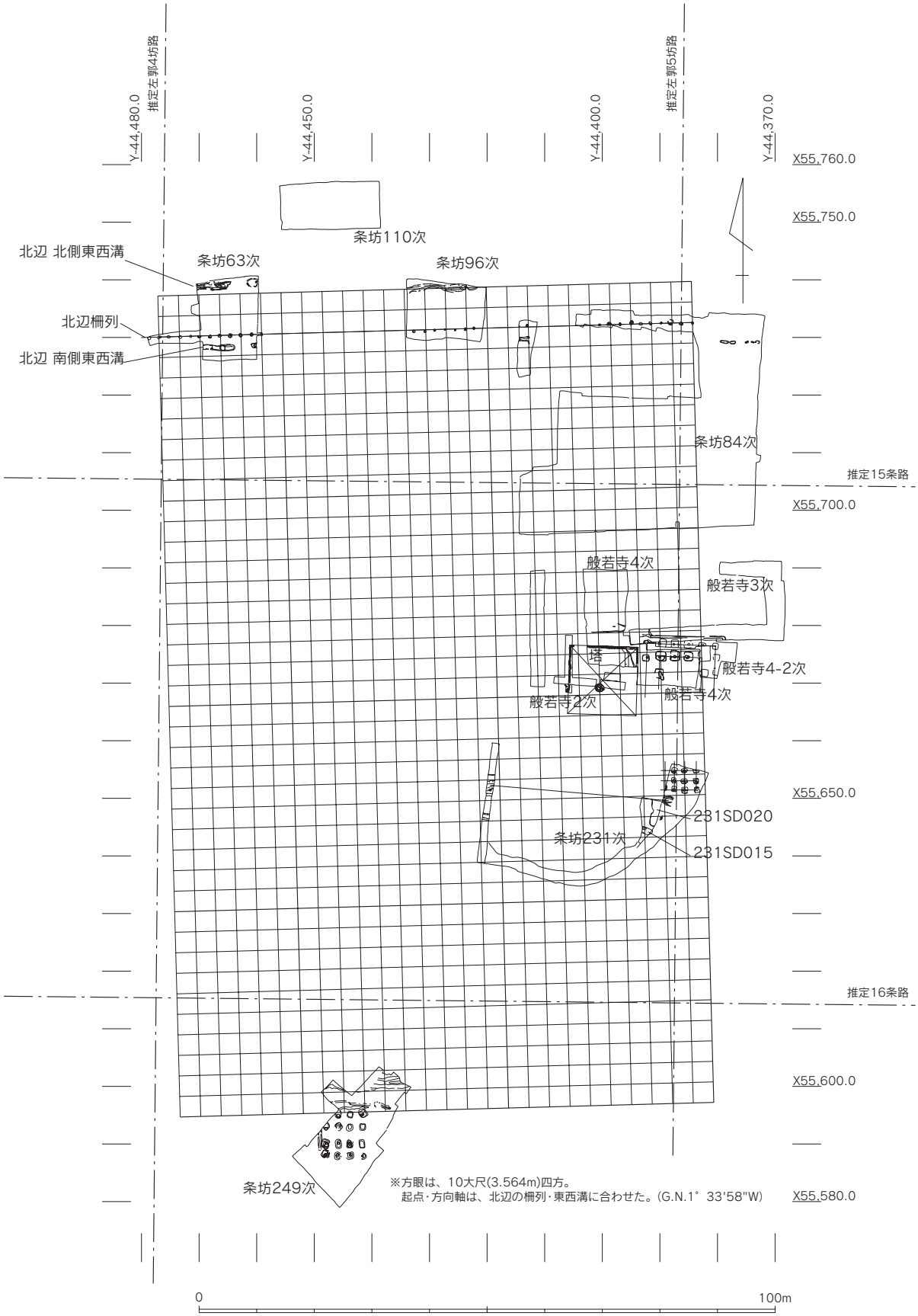


図10　般若寺周辺調査　接合図その３（1/1,000）

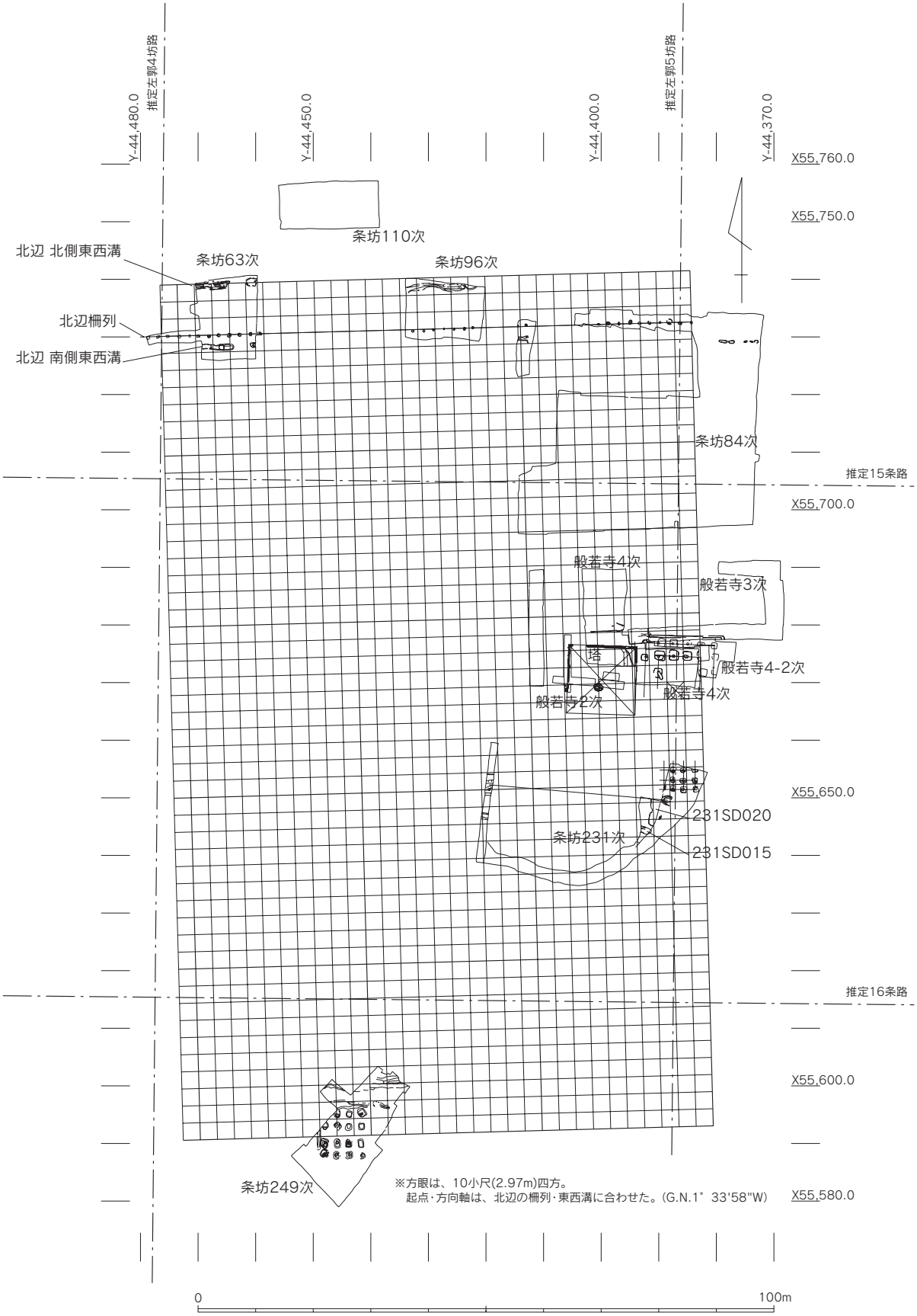


図11　般若寺周辺調査　接合図その４（1/1,000）

(2) 大宰府条坊跡第84次調査出土瓦の分析

a. はじめに

報告でも記述してきたように、大宰府条坊跡第84次調査地にて、瓦を多量に包含する土坑を数基確認した。出土箱数にして70箱近くを占め、その多くが破砕され土坑内に廃棄されたような状況で確認している。多量に出土した瓦の時間的位置については報告で記載してきたように、３時期が想定でき、空間的位置については塔の北側に掘られた土坑で、寺院諸施設が廃絶したことによる「片付け」が、土坑形成要因としては想像できる。

瓦自体、屋根に葺くことによる共時性は確保されるものではあるが、製作の同時性は定かでないことは、多くの先学の研究ならびに現在の建築物上の瓦から明らかなことである。したがって、ここでは土坑廃棄の同時性のみが保証された資料として、どのような瓦が「使用」されていたのかを検討するための素材を確認することが目的となる。

b. 分析の前提

資料自体の特性として、破片資料であること。焼成不良品が多く磨耗度合いが高いことが上げられる。このことから、分析時の属性抽出作業を満足できる資料状況にあるものは極めて限定されることになる。しかし、条坊跡84次調査での傾向が「般若寺」の傾向と近似する可能性を考慮した時、分析限界の大きさゆえに断念することは、今後の検討素材がさらに限定されることになると考え、あえて分析限界を抽出した上で分析を行い、「般若寺」が有する瓦の傾向を導き出し、大宰府のみならず空間的な比較をする上での一素材提供が必要という視点から分析を行った。

具体的な事項については、次項にて詳述する。

法量計測点については、狭川真一氏が提示した箇所を計測している（狭川、1998）。資料限界より全てを満足する数値を得ることが可能な資料は限られていた。また図化表記方針は、これまで刊行されている大宰府関係埋蔵文化財調査報告書で統一的な表記がなされていないこともあり、今次報告にあたっては、次頁に示した〈分類作業〉に表記した方針に基づき図化した。軒瓦に関しては、通常とられている図左側に瓦当を描写する表記をとったが、丸瓦・平瓦については左を軒側として、使用時のイメージをとった図化表記方法をとっている。製作時をイメージした図、平瓦であれば広端部を下に、玉縁丸瓦であれば本体側を下にした図で表記してもよかったが、レイアウトの簡便さから使用時のイメージでの図化を選択した。

c. 分析

瓦の分類については、多くの先学者等によって蓄積があり、表面のみを学ぶ筆者にとって、その評価にまで立ち入って検討する余力がない。したがって本稿では、狭川真一氏が井戸一括資料の評価を行った分析（狭川、1998）、ならびに狭川氏が範とした佐原真氏、大脇潔氏の業績にのり、分類を設定している（佐原、1972。大脇、1991）。

先にも述べたように、分析の対象とした４遺構（S-1、S-14、S-21、S-31）の未分類資料数は、箱数で70箱にのぼり、これらの資料を全て観察し分類を行った。分類のための基準は、下記の文献によって提示された諸分類にのっとり各資料を仕分けした。分類作業において、資料限界ゆえ十分な分類ができなかったものも多く、ここでの分類に如何なる意味があるのかいささか不安がある。しかし、結果を導き出すことで、何種類のものがあり、どのような特徴を有しているのかを導き出すことは、無意味と

も思えない。したがって、本稿では分類に対する評価というよりも、分類作業における分析限界を記述することに主眼をおくとともに、出土傾向を把握し今後の傾向比較の資料提示を行う。

【基準文献】
佐原真（1972）「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌　第58巻第２号』
石松好雄・高橋章(1978)「太宰府出土の瓦について(二)」『九州歴史資料館研究論集４』
大脇潔（1991）「研究ノート　丸瓦の製作技法」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所学報第49冊
狭川真一（1998）「B.68SE020出土の瓦について　－大宰府における平瓦一枚作りの普及－」『大宰府条坊跡X』
九州歴史資料館（2000）『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』

＜分類作業＞

分類の諸作業は、下記に列記した手順に沿って行っている。その際に資料限界から生じる分類限界については、分類作業工程内に記載している。

a）平瓦・丸瓦の分類

小破片化した資料については、判別が困難なものが存在する。これらは、「判断不能」として扱い、側面処理から判断できるものについては、両者に分類した。

b）凸面処理による分類

凸面処理には、大別して「縄叩き」「格子叩き」が存在し、これら判別できるものについては分別した。しかし叩き後の擦り消し、ないしは磨耗によって判断できない資料も存在しており、調整痕跡が観察できるにも関らず、叩き痕跡を確認できないものについては「擦消」として処理した。調整痕跡が全く確認できないものについては、「磨耗・不明」として取り扱っている。

c）側面残存の有無による分類

側面処理・形状による分類は、やはり資料残存状況に大きく左右され、分類視点としては大脇氏、狭川氏によって確立されているものの、資料に還元した場合、分別困難な資料が存在する。具体的には下記資料があたる。

・側面磨耗により、切り離し未調整であるのか、粗い調整がなされているのかが判断できない資料。分類では、丸瓦側面調整のaとbの区別がある。磨耗度が高く判断に窮する場合は、「×」記号を用い、両者の可能性があることを明示した。加えて製作時の「誤差」から生じたと考えられる一資料中の属性混在資料がある。具体的には、側面内において破断痕跡をとどめる箇所ととどめない箇所が混在している。分類としては、丸瓦側面処理a～cまで全てが混在していることになり、表記方法としては「a・b×c0」として記載している。破片処理による分類であることから、誤認、逸脱の可能性も否定できない。この点を含意した上での分類としてみていただきたい。

平瓦

側面による細分および凸面処理として観察できる縄叩き具痕跡の粗密を計測した。側面処理による細分は、大脇氏が行った細分を用いた（大脇、1991）。

側面形状

A：側面の傾斜角度が円弧の中心へ向かうもの。

B：垂直に切り落とされるもの。

表記上は、「桶巻き」「一枚」の各製作技法を意図した分類になり、字義をそのまま資料に適用することで解決しそうである。しかし実資料の分類へあたったとき、中間的な資料、端的に述べれば「曖昧」な資料が現存しており、これらの処理に窮した。この場合は凸面側からの観察で、側面が観察できるものをB、側面が凸面下に隠され観察できないものをAとして処理している。ここで問題な

のは、焼成による歪みによって瓦形状が成形時の状態を保持していない場合が想定できる。このような資料に関しては、明らかに歪み資料と判断できるもの以外は、どちらかに含み込んでしまっている。

側面調整法

１：未調整　２：平面的にきれいに削り調整するもの。

３：平面的に削り調整し、かつ凹面側を幅広に削るもの。

（３′：３の細分として凹面内側に面取りを行うもの。）

細分

ａ：面取りを行わないもの。　ｂ：凹面側　側縁の面取り。　ｃ：凸面側　側縁の面取り。

凸面処理

縄叩き

便宜的に３cmを単位として、縄条線の条数を数えることで分類を行った。３cmを基礎単位とする根拠は、狭川氏も述べるようにさして根拠があるわけではない（狭川、1998）。計測作業ならびに数量化の簡便さにある。

格子叩き

格子叩きについては、石松好雄氏・高橋章氏が行った分類を適用している。

（石松・高橋、1978）

丸瓦

平瓦同様に、側面による細分および凸面処理として観察できる縄叩き具痕跡の粗密を計測した。側面処理による細分は、大脇氏が提示した細分および、狭川氏が追加した分類を加えて実施した。

（大脇、1991。狭川、1998）

側面調整法

ａ手法：未処理　　ｂ手法：破面を浅く削り、破面凹部と分割截面が残存

ｃ手法：丁寧なヘラ削りを行うもの。

図12　平瓦縄目叩-側面処理相関の遺構内割合

	奈良期前半	平安前期	平安後期
	S-14【上・下層】	S-1・21	S-31【上・下層】
A・B'(5～8条)	137	48	18
A・B'(9～12条)	66	23	6
B（5～8条）	14	24	10
B（9～12条）	16	16	15
総破片数	233	111	49

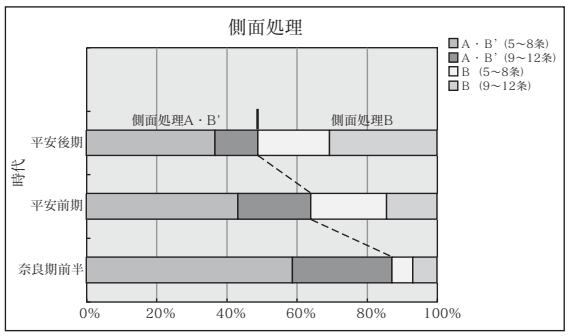


図13　平瓦縄目叩-側面処理相関の時間変遷

	SK014（下層）	SK014（上層）	SK001	SK021	SK031
A・B'(5～8条)	91	46	30	18	18
A・B'(9～12条)	50	16	19	4	6
B（5～8条）	13	1	9	15	10
B（9～12条）	15	1	13	3	15
総破片数	169	64	71	40	49

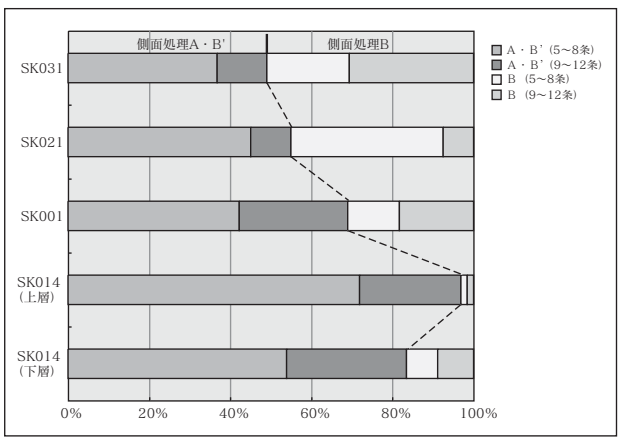


図14　丸瓦側面処理遺構内割合

	S-14（上層）	S-14（下層）	S-1	S-21	S-31
a0	12	33	8	4	13
b0			3	4	1
b1				1	
c0	27	72	46	12	14
c1	2	1		1	
c2	1				
c3	1	1			
a0×b0			3	1	
a0×c0	4	13			
b2×c2				1	
c		2			
計	47	122	60	24	28

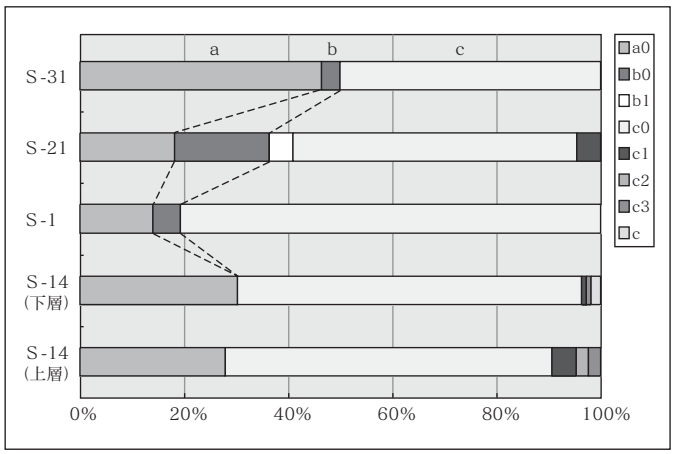
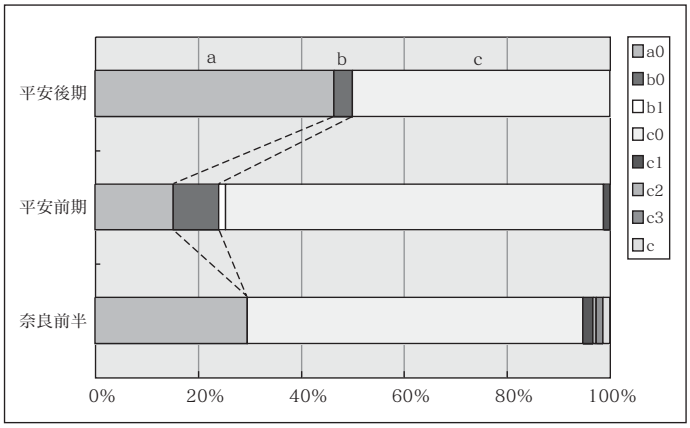


図15　丸瓦側面処理時期別傾向

	奈良前半	平安前期	平安後期
a0	45	12	13
b0		7	1
b1		1	
c0	99	58	14
c1	3	1	
c2	1		
c3	2		
c	2		
計	152	79	28



再調整技法

-0手法：未処理　　-1手法：凹面側を削る。

-2手法：凸面側を削る。　-3手法：両面を削る。

凸面処理については、その多くが擦り消しによって叩き痕跡を欠失おり、平瓦のように条線単位を計測することは困難であった。今回分析に供した瓦の多くにおいて、擦り消し痕跡が回転台上で行われたような、回転ナデ調整によるものが多く観察され、叩き痕跡が観察できる個体が少なかった。そのような中でも稀に計測できるものもあり、そのような個体については、条線数を計測した。

玉縁成形

玉縁を有するものについては、大脇氏が行った玉縁成形法による分類を使用している。ごく稀な資料として、行基丸瓦が少数出土している。

分析に供した資料中には、大脇氏が行った分類の中で、B及びC1類のみであった。両者の判断は、瓦断面の観察に基づき判断しており、観察が困難な場合は「判別不能」として処理した。

B手法：模骨の玉縁部に丈の短い粘土紐を巻きつけ、胴部を形成する粘土板を、その上に数cm重複させて巻きつける。

C手法：胴部と玉縁の一体型のもの。-1手法：玉縁部の屈曲が強いもの。貼り付ける粘土量が多い。-2手法：なで肩の新規の模骨、粘土量が少ない。

表５　災害関係年表

西暦		記　事	記載文献
703	大寶三	7月5日　災異現はれ、年穀不熟により、京畿及び大宰府管内の調の半及び天下の庸を免ず。 12月20日　大宰府、去秋大風により、年穀をそこなう由を、言上す	続日本紀 続日本紀
706	慶雲三	7月28日　大宰府、九国三島旱大風のため、年穀を損ぜる由を言上す、仍て使をして巡省せしめ、被災甚だしき者の調役を免ず	続日本紀
759	天平寶字三	8月29日　大宰府官舎及び百姓の家、大風により破壊す、	続日本紀
770	寶亀元	正月21日　大宰管内大風により、官舎及び百姓の舎一千三十餘を破壊す、仍て被損の百姓を賑給す、	続日本紀
		竹内理三（1964)『大宰府・太宰府天満宮史料　巻一』太宰府天満宮 宣化元(536)年～承和十四（847)年	
858	天安二	5月1日　大宰府管内に大暴風雨あり、官舎悉く破れ、肥後国菊池院の兵庫の鼓自ら鳴り、同城の不動倉十一宇焼く、	日本文徳天皇実録
860	貞観二	9月14日　大風に依り、観世音寺の造瓦屋破損す、	筑前観世音寺資材帳　延喜五年資材帳
871	貞観十三	8月13日　大風に依り、観世音寺五重塔等破損す、	筑前観世音寺資材帳　延喜五年資材帳
879	元慶三	9月　　大風に依り、観世音寺の厨等破損す、	筑前観世音寺資材帳　延喜五年資材帳
880	元慶四	8月8日　　大風により、観世音寺の大門等顛倒す	筑前観世音寺資材帳　延喜五年資材帳
		竹内理三（1966)『大宰府・太宰府天満宮史料　巻二』太宰府天満宮 嘉祥元(848)年～仁和四（888)年	
1028	長元元	4月10日　大宰府管内に大地震あり、豊前国弥勒寺講堂顛倒す、	小右記目録
		竹内理三（1969)『大宰府・太宰府天満宮史料　巻五』太宰府天満宮 治安元(1021)年～寛治七（1093)年	
1102	康和四	8月27日　大風により、観世音寺の金堂・戒壇・廻廊・大門等、筥崎八幡宮の濱殿・寶殿等、悉く顛倒す、	観世音寺古文書　宮寺録事抄
		竹内理三（1970)『大宰府・太宰府天満宮史料　巻六』太宰府天満宮 嘉保元(1094)年～久嘉二（1155)年	

d．時期の確認

分析に供した４遺構の帰属時期は、前項にて記した時期が埋没時期を示している。

今一度記述すると、下記のようになる。

84SK014【奈良期前半】→84SK021【平安前期前半】→84SK001【平安前期中頃】
→84SK031【平安後期】

では瓦を多量に投棄する行為・現象にはどのようなものが想定できるであろうか。瓦を多量に廃棄する現象として、建物倒壊、屋根破損などが想定できる。これらの現象を説明できる文献資料・考古資料がなく、現状では課題をせざるを得ない。特に多量の瓦を出土したS-14の埋没時期が帰属する奈良期前半については、下記の記事が「大風」記事として残されている。

大宝三（703）年七月五日条、　慶雲元（704）年十二月二十日条

慶雲三（706）年七月二八日条

上記の「大風」記事が等しく「瓦多量廃棄」の背景と考えるのは些か心許無く、現状で考古資料上から論証するには資料限界があるため明らかにし難い。参考程度に留めておきたい。また文献記録に残る「災害」記事について表５をご参照いただきたい。

e. 傾向

傾向把握は、分類単体ごとの破片数量法をとり、相互の比較によって分類単体の多寡を問う。なお重量法については、各分類単体の単位重量を確認しておく必要があるものの、良好な資料が多く得られている場合は、その平均値から導き出すことが可能となるが、数量が確保できていないものについては、その数値の信憑性が極めて低くなる。この点については、今後の課題としたい。加えて分類単体の細分化によって、重量法をとれるほどの資料数が確保できない場合もあり、破片数量法に頼らざるを得ない状況も生じている。これは分類設定に問題があるのか、資料数に問題があるのか検討を要することであり、般若寺以外の資料を分析することで解決すべき課題であろう。

破片数量法によって導き出された数量をtab.84-3で表記した。結果として下記の諸点が指摘できる。なお破片分類および数量化は、久味木理恵が行い中島が分類された全資料を再確認した情報を使用している。

【平瓦】

・時間経過とともに平瓦側面処理が、A→Bへ移行する。

・叩きの精粗と側面処理には相関性は観察できない。

【丸瓦】

・側面処理が、時間経過とともに切り離しのみのaから後処理を行うb・cへ移行するというものではなく、９世紀前半代にb・cが卓越するが、その後は粗製なaが卓越するようになるという大きな傾向が読み取れる。

f. 成果と課題

報告文中にも記してきたが、大脇氏の分類において側面処理が同一個体中に混在しているという資料が少数観察できた。瓦分析に疎い筆者としては、属性混在として処理してきている。側面再処理の結果であるのか、丁寧なヘラ切り離しの結果とすべきかは判断し難い側面が強い。「大勢に影響なければよい。」という程度の数量が、「属性混在資料」ということには違いないものの、この「属性混在資料」の有する意味が見えないだけに、歴史事象を見逃しているのではないかという不安が残る。資料限界ゆえに個体還元が行えなかったことも課題として残る。廃棄資料であることからくる破片化が進行しており、分類単体が個体へ換算できないほどしか確認できなかったことにある。この課題を認識しつつ破片数量法をとらざるを得なかった点は先の問題とも合わせて、導き出された結果にどれほどのことが明らかにできているのか大きな不安である。

資料の定量化に内在する分析限界は、食器の定量化を進めた際にも認識していたことである。繰り返しになるが、「全ては現場から」という言葉につきる。いわば現場での資料取り上げ時から個体認識を行い、可能な限り破片化を防止しつつ、定量化へ結び付けていくことが、意味ある分析結果を生み出す第一歩である。「遺物が多量に出土したので、定量化する。」という行為には、ある種「自己満足」的側面が強いことが再認識された。しかし前項で記した一定の傾向は読み取ることができたのではないかとも思う。今後同一時期と想定できる資料群との相対化を行い比較し、かつ時間的な相対化を行うことで、今回の分析結果の時空間的な位置が見えてくるものと考える。

今次調査での特筆すべき点は、老司Ⅱ式の範疇に入るものであるのか、新たな形式名を付与すべきかは、瓦研究の動向によらざるを得ないものの・84SK014出土瓦(fig.84-12 20)・84SK014上層出土瓦(fig.84-17 15)・84SK014下層出土瓦(fig.84-24 29)の三資料が、偏行唐草文が三条あり本文では未分類として記述してきた[1)]。丸瓦についても茶色土出土軒丸瓦（fig.84-36 3）が未分類としてあげ得る。

この個体については、「伝般若寺出土」として観世音寺に所蔵されているものと同一と考えられ、資料増加によって分類設定が必要となってくる（九州歴史資料館、1980）。

瓦胎土中に角閃石を多量に含むものが微量観察でき、大宰府の置かれた地質環境では大佐野地区に一部塩基性岩が分布している以外は、花崗岩地帯、いわば酸性岩地帯にあり、般若寺がのる般若寺丘陵も同様である。したがって、塩基性岩に多く含まれる角閃石を混入する瓦の出自を、技法も含めた属性分析によって導き出す努力が必要となってくる。なお角閃石を混入する瓦を出土した遺構は、下記のものになる。

・84SK001（２点）

平瓦　　、縄叩き（９条/3cm　側面処理不明）

瓦種別不明破片、縄叩き（８条/3cm　側面処理不明）

・84SK031（１点）

丸瓦　　、擦り消し（側面処理不明）

（中島恒次郎）

【註】

1）当該資料については、小田富士雄氏（福岡大学名誉教授　太宰府市文化財専門委員会委員）より老司Ⅱ式の範疇に入るものの、三条で偏行唐草文が描かれることから新規型式を設定すべきか検討が必要であるとのご教示を得ている。記して深甚の謝意を表します。

【引用文献】

小田富士雄（1967）「第７　塔原廃寺をめぐる諸問題」『塔原廃寺』福岡県教育委員会
九州歴史資料館（1980）『般若寺跡　－大宰府史跡　昭和54年度発掘調査概報別冊－』
高倉洋彰（1980）「Ⅵ般若寺をめぐる諸問題」『般若寺跡』九州歴史資料館
高倉洋彰（1988）「Ⅴ調査の成果」『般若寺跡Ⅱ』九州歴史資料館
大脇潔（1991）「研究ノート　丸瓦の製作技法」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所学報第49冊
中島恒次郎（1997）「七世紀の食器」『古代の土器研究　７世紀の土器』古代の土器研究会
狭川真一（1998）「B.68SE020出土の瓦について　－大宰府における平瓦一枚作りの普及－」『大宰府条坊跡Ⅹ』
小田富士雄（2001）「五　塔ノ原廃寺と般若寺問題」『筑紫野市史　資料編（上）考古資料』筑紫野市

表６　側面処理と縄目叩単位の相関（1）

	側面処理と縄叩単位 遺構名： 側面処理＼縄叩単位	S-1							
		5	6	7	8	9	10	11	
平瓦	A1a								
	A2a		6	4	3	3	2	4	
	A2b	1	7	3	6	7	2	1	49
	A2c		**30**				**19**		
	A2d								
	B2a		1	2	1	1			
	B2b			3	1	3	3	3	
	B3a				1	2		1	22
	B3b								
	B' 3b		**9**				**13**		
	B3c								
		39				32			71

太字数字：枠内合算

		破片数
丸瓦	a0	8
	a1	
	a2	
	a3	
	b0	3
	b1	
	b2	
	b3	
	c0	46
	c1	
	c2	
	c3	
	a×b0	3

※：丸瓦に関しては、叩き痕跡擦り消しのため、単位確認はできなかった。

	側面処理と縄叩単位 遺構名： 側面処理＼縄叩単位	S-14									
		5	6	7	8	9	10	11	12	13	
平瓦	A										
	A1a	1	8	2	3	1	2				
	A'2a		1	3	2	3	2	1			
	A2a										
	A2b	2	13	5	10	11	9	1			
	A2c		1		1	1					152
	A2d		**97**			1		**55**			
	B'2a		2		1	2	2				
	B2'b	1	3	3	3	1	3	1			
	B'3a	1	7	2	7	6	1		1		
	B'	1	6	2	6	3	2	1			
	B		4	3	8	5	4		1	1	
	B2a	1	**48**	2	3	7	2	**40**	1		88
	B2b		4	1	5	5	5	5	1		
	B3b	5	3	4	5	2			1		
		145				95					240

太字数字：枠内合算

		破片数
※ 丸瓦	a0	45
	a1	
	a2	
	a3	
	b0	
	b1	
	b2	
	b3	
	c0	103
	c1	2
	c2	
	c3	2
	a0×c0	0
	c	2

※：丸瓦に関しては、叩き痕跡擦り消しのため、単位確認はできなかった。

	側面処理と縄叩単位 遺構名： 側面処理＼縄叩単位	S-14（上層）								
		5	6	7	8	9	10	11	12	
平瓦	A1a									
	A2		2							
	A2a	1	2	3	1		1			
	A2b	6	11	6	3	2				
	A2c			1	1					
	A2d			**46**	1			**16**		
	A2b×A2d					1				62
	B'2a				1					
	B'2b					9	2			
	B'3a		2	1	1					
	B'3b									
	B'		3			1				
	B2a									
	B2b	1					1			
	B3a			**1**				**1**		2
	B3b									
	B3c									
		47				17				64

太字数字：枠内合算

		破片数
丸瓦	a0	12
	a1	
	a2	
	a3	
	b0	
	b1	
	b2	
	b3	
	c0	27
	c1	2
	c2	1
	c3	1
	a0×c0	4
	c	

※：丸瓦に関しては、叩き痕跡擦り消しのため、単位確認はできなかった。

	側面処理と縄叩単位 遺構名： 側面処理＼縄叩単位	S-14（下層）								
		5	6	7	8	9	10	11	12	
平瓦	A		5	2	5	6	2			
	A1a									
	A2		5		4	4	1			
	A2a	1		3	5	6	1	1		
	A2b	5	22	3	7	11	2	1		
	A2c			1	1		1			
	A2d			**91**		1		**50**		141
	A2b×A2d									
	B'2a				1	3	2	1		
	B'2b		3		2	1	2			
	B'3a		4	4		1				
	B'3b									
	B'	1	4	1	2	1	1	1		
	B			1	2					
	B2a		1		1	1				
	B2b	1	4		2	5	6			
	B3a		2	**13**	1		2	**15**		28
	B3b									
	B2c						1			
	B3c									
		104				65				169

太字数字：枠内合算

		破片数
丸瓦	a0	33
	a1	
	a2	
	a3	
	b0	
	b1	
	b2	
	b3	
	c0	72
	c1	1
	c2	
	c3	1
	c	2
	a0×c0	13

※：丸瓦に関しては、叩き痕跡擦り消しのため、単位確認はできなかった。

表７　側面処理と縄目叩単位の相関（2）

	側面処理と縄叩単位 遺構名： 側面処理＼縄叩単位	S-21								
		5	6	7	8	9	10	11	12	
平瓦	A	2	2				1			22
	A1a		1							
	A2									
	A2a		5	1	1					
	A2b		1	2	1					
	A2c									
	A2d			**18**				**4**		
	A2b×A2d									
	B'2a		1			1		1		
	B'2b		1				1			
	B'3a									
	B'3b									
	B'									
	B									18
	B2			1						
	B2a				2			1		
	B2b									
	B3a		1	1			1			
	B3b	1	1	**15**				**3**		
	B2c									
	B3c									
	B3				8					
	B2a×B2b					1				
		33				7				40

太字数字：枠内合算

		破片数
丸瓦	a0	4
	a1	
	a2	
	a3	
	b0	4
	b1	1
	b2	
	b3	
	c0	12
	c1	1
	c2	
	c3	
	c	
	a0×b0	1
	b2×c2	1

※：丸瓦に関しては、叩き痕跡擦り消しのため、単位確認はできなかった。

	側面処理と縄叩単位 遺構名： 側面処理＼縄叩単位	S-31下層						
		6	7	8	9	10	11	
平瓦	A1a							13
	A2a		3		1	1		
	A2b	2	**10**	4		**3**		
	A2c					1		
	A2d	1						
	B2a			1		1		12
	B2b			1	1			
	B3a	2	3			3		
	B3b		**7**			**5**		
	B3b′							
	B3c							
		17			8			25

太字数字：枠内合算

		破片数
丸瓦※	a0	2
	a1	
	a2	
	a3	
	b0	
	b1	
	b2	
	b3	
	c0	5
	c1	2
	c2	
	c3	
	a×b0	4

※：丸瓦に関しては、叩き痕跡擦り消しのため、単位確認はできなかった。

	側面処理と縄叩単位 遺構名： 側面処理＼縄叩単位	S-31								
		5	6	7	8	9	10	11	12	
平瓦	A1a									11
	A2a		3		1	2				
	A2b	2	1	1			1			
	A2c		**8**				**3**			
	A2d									
	B2a	1			2	1	2			13
	B2b					1	1	1	1	
	B3a					2		1		
	B3b		**3**				**10**			
	B′ 3b									
	B3c									
		11				13				24

太字数字：枠内合算

		破片数
丸瓦※	a0	13
	a1	
	a2	
	a3	
	b0	1
	b1	
	b2	
	b3	
	c0	14
	c1	
	c2	
	c3	
	a×b0	

※：丸瓦に関しては、叩き痕跡擦り消しのため、単位確認はできなかった。

写 真 図 版

・写真はこの他、付属のCD-ROMに300枚以上掲載しているのでご参照いただきたい。

般若寺跡遠景（昭和33年６月に小田富士雄氏撮影　南西から）

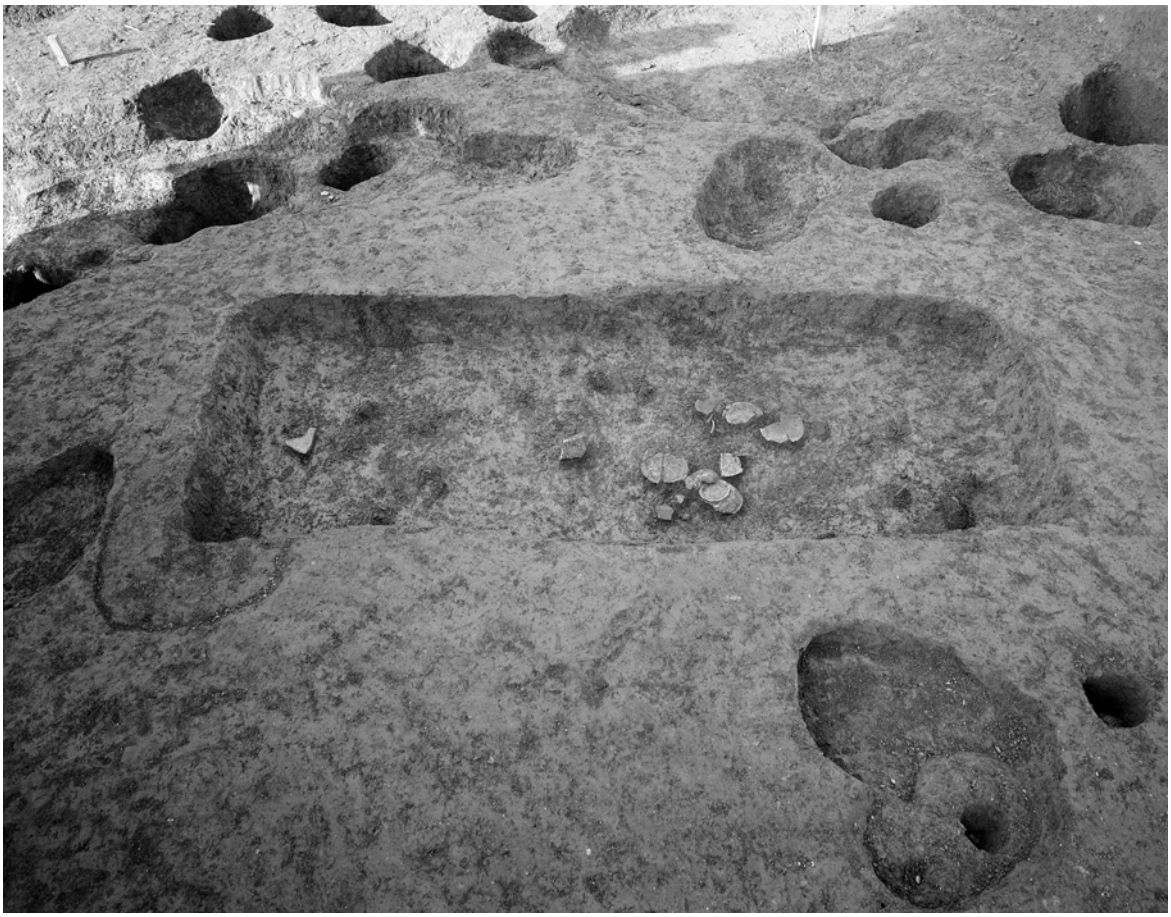
基壇状の高まり（左）と般若寺塔跡（右）（昭和33年６月に小田富士雄氏撮影　南東から）

塔心礎の旧状（昭和33年６月に小田富士雄氏撮影）

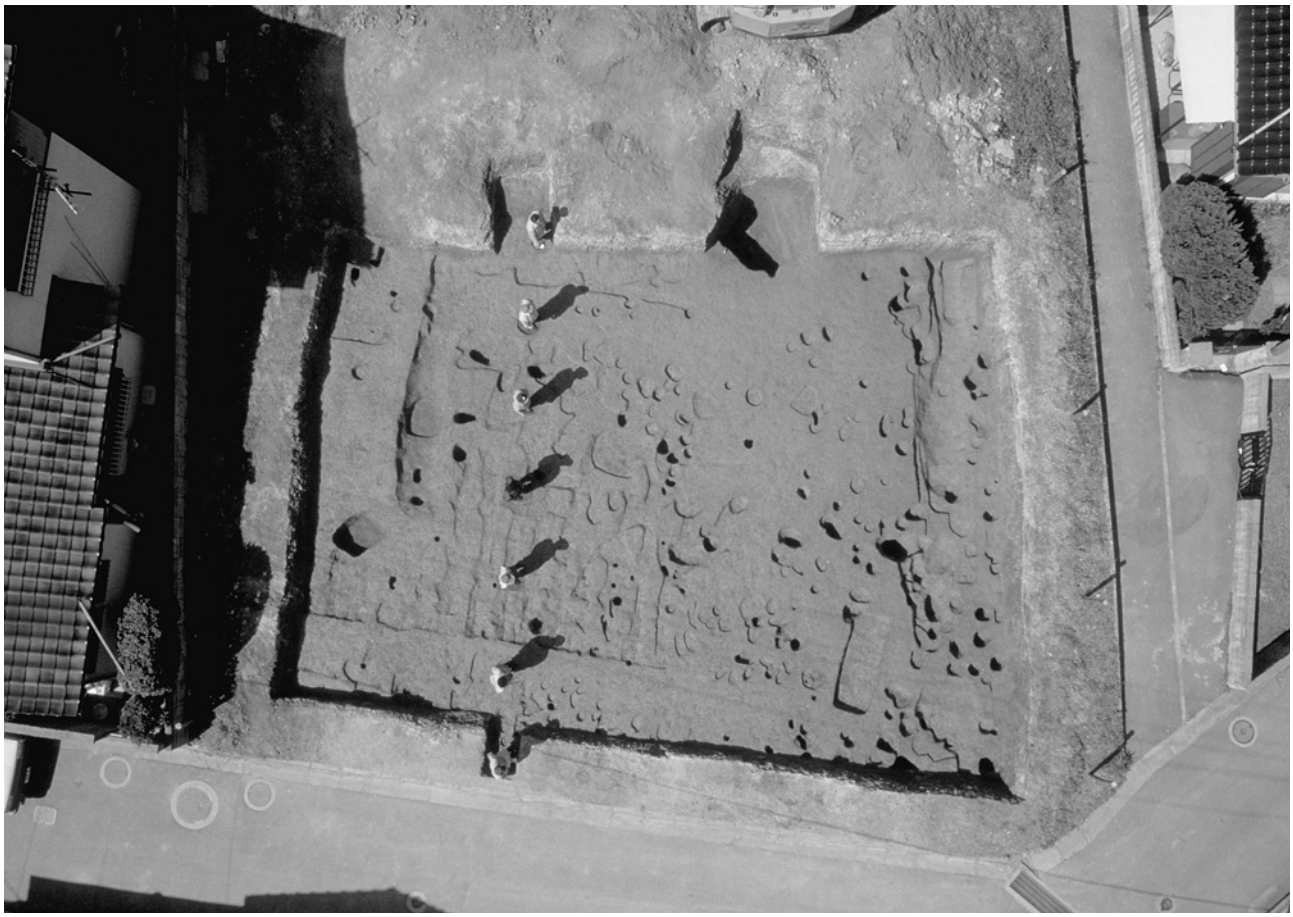
般若寺七重石塔（昭和33年６月に小田富士雄氏撮影）

大宰府条坊跡第63次調査　調査区遠景（西から）

大宰府条坊跡第63次調査　調査区全景（上が北）



63ST001遺物出土状況（南から）



63SA025確認状況（上が西　人が立っている箇所）

大宰府条坊跡第84次調査　調査前状況（昭和62年　西から）

大宰府条坊跡第84次調査　調査区遠景（南西から）

大宰府条坊跡第84次調査　調査区全景（上が北）

大宰府条坊跡第84次調査　北部調査区全景（東から）

大宰府条坊跡第96次調査　北側調査区全景（西から）

大宰府条坊跡第96次調査　南側調査区全景（西から）

大宰府条坊跡第110次調査　調査区全景（東から）

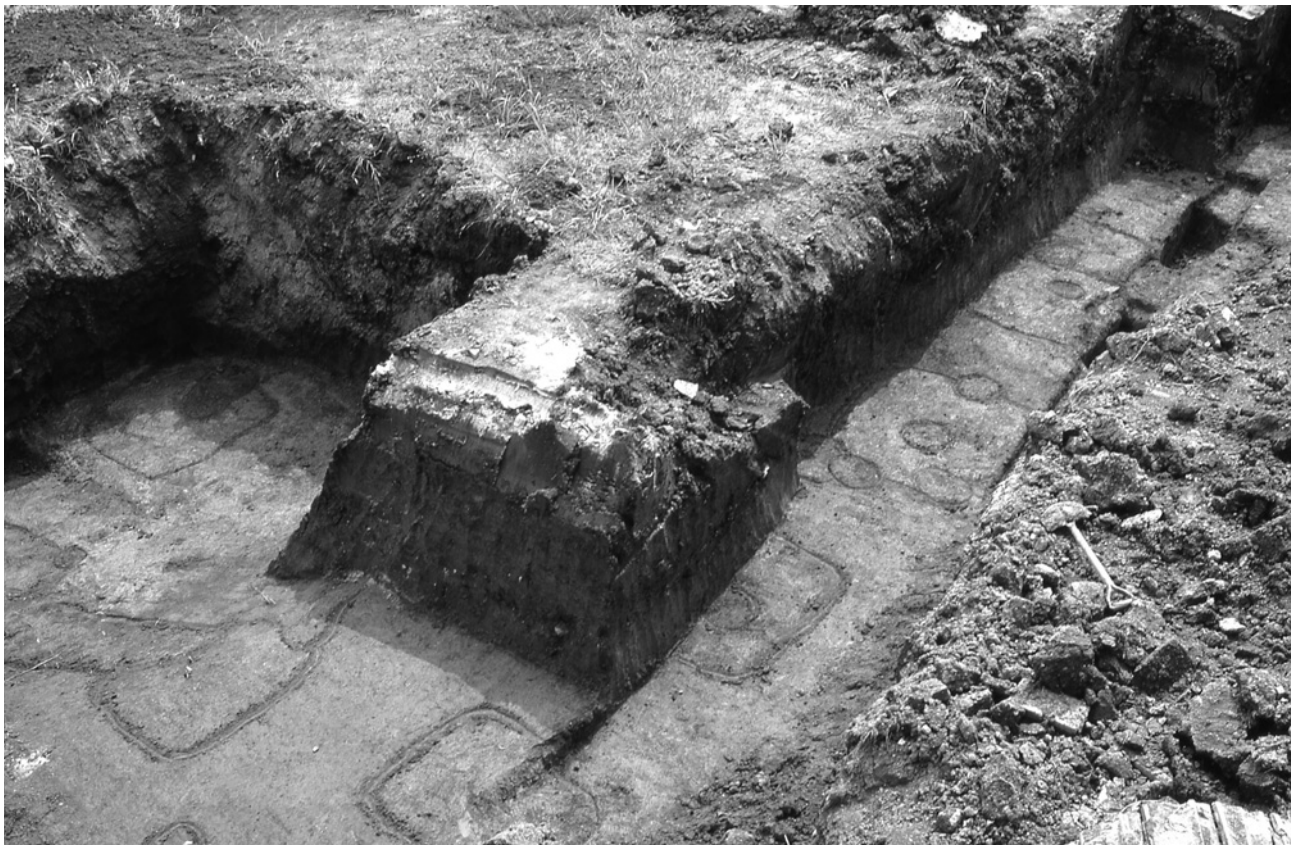
大宰府条坊跡第110次調査　北側落ち込み（東から）

大宰府条坊跡第231次調査　調査区全景（上が北）

231SD015・020 検出状況（南から撮影）

大宰府条坊跡第231次調査　C区全景（南から撮影）

大宰府条坊跡第231次調査　A区全景（上が北）



般若寺跡第4-2次調査　調査区全景（北東から）

般若寺跡第4-2次調査　般4SB010 北側庇（東から）

fig.63-5-9

fig.63-5-10

fig.63-5-11

fig.63-5-12

fig.63-5-14

fig.63-5-15

63ST001供献土器

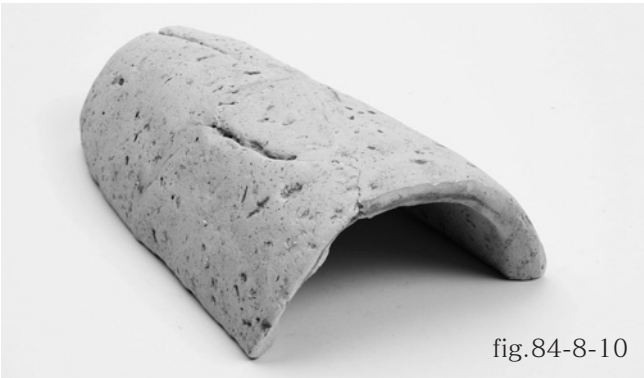


fig.84-8-10

84SK001出土瓦

fig.84-15-1

fig.84-15-4

fig.84-17-15

84SK014上層出土瓦

fig.84-21-2

fig.84-25-31

84SK014下層出土瓦

報　告　書　抄　録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと32
書　　名	大宰府条坊跡32
副　書　名	
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	第90集
編　著　者	井上信正　中島恒次郎　下高大輔　城戸康利　（株）京都フィッション・トラック
編 集 機 関	太宰府市教育委員会
所　在　地	福岡県太宰府市観世音寺１丁目１番１号
発行年月日	2007（平成19）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標(国土座標第II系) X	座標(国土座標第II系) Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
だざいふ 大宰府 じょうぼうあと 条坊跡 第63次調査	左郭13条4坊	だざいふし すざく 太宰府市朱雀 2ちょうめ 2丁目19外1筆	402214	210044-63	55734.000	-44463.000	19870304	19870331	160	共同住宅 建設
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	寺院	奈良・平安	丘陵北辺の 柵列・溝木棺墓		木棺墓 （63ST001出土遺物一括）		古代寺院般若寺北辺の調査			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標(国土座標第II系) X	座標(国土座標第II系) Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
だざいふ 大宰府 じょうぼうあと 条坊跡 第84次調査	左郭13･14条 4・5坊	だざいふし 太宰府市 すざく2ちょうめ 朱雀2丁目 9-5外1筆	402214	210044-84	55717.000	-44395.000	19890920	19891102	1104	共同住宅 建築
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	寺院	奈良～鎌倉	丘陵北辺の柵列 瓦廃棄土坑		瓦		古代寺院般若寺北辺の調査			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標(国土座標第II系) X	座標(国土座標第II系) Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
だざいふ 大宰府 じょうぼうあと 条坊跡 第96次調査	左郭13条4坊	だざいふし 太宰府市 すざく2ちょうめ 朱雀2丁目9-22	402214	210044-96	55737.000	-44427.000	19900612	19900707	132	共同住宅 建築
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	寺院	奈良	丘陵北辺の 柵列・溝				古代寺院般若寺北辺の調査			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標(国土座標第II系) X	座標(国土座標第II系) Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
だざいふ 大宰府 じょうぼうあと 条坊跡 第110次調査	左郭13条4坊	だざいふし 太宰府市 すざく2ちょうめ 朱雀2丁目28-2	402214	210044-110	55750.000	-44450.000	19910513	19910608	139	共同住宅 建築
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	寺院						古代寺院般若寺北辺の調査			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標(国土座標第II系) X	座標(国土座標第II系) Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
だざいふ 大宰府 じょうぼうあと 条坊跡 第231次調査	左郭14条 4・5坊	だざいふし 太宰府市 すざく2ちょうめ 朱雀2丁目 9-82、9-53	402214	210044-231	55645.000	-44390.000	20031027	20040119	183.9	専用住宅 建築
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	寺院	飛鳥～奈良	掘立柱建物1　溝2		整地層出土遺物等		古代寺院般若寺南辺の調査			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【鏡山復原案】	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標(国土座標第II系) X	座標(国土座標第II系) Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
はんにゃじあと 般若寺跡 第4-2次調査	左郭13条 4・5坊	だざいふし 太宰府市 すざく2ちょうめ 朱雀2丁目 9-33外3筆の一部	402214	210042-4-2	55677.000	-44385.000	19870803	19870803	42	共同住宅 建築
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	寺院	飛鳥～奈良	掘立柱建物1				般若寺塔基壇東側の立会調査			

太宰府市の文化財第90集

大宰府条坊跡32

—般若寺跡周辺の調査—

平成19(2007)年３月

編　集　太宰府市教育委員会
発　行　太宰府市観世音寺1-1-1

印　刷　（株）三光　福岡営業所
福岡市博多区山王1-14-4